

転生先はポケモン

サトミハツカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケモン最新作、ウルトラサンムーンを買いに行く途中で事故に遭い、死んでしまった主人公ユウキ。

目を覚ますと、ユウキはポケモンの世界に転生する事になり……「つてここアニポケ基準じゃねえかつ」

マサラタウン出身のユウキはどんな冒険を繰り広げるのか。

※アニポケのサンムーン編から始まります。

目次

転生しちやいましたタツベイ	1
アローラな日常編	
5 思ってたのと違くないシツブテ?	
スクールに入りますカタンク	13
28 歓迎会でサプライズルズキン	前編
歓迎会でサプライズルズキン	後編
34 出合いに再開イシズマイ	48
設定1*本編後推奨	62
66 意外な相手とエンカウントゲデマル	
海で釣りパニッククロバット	78
ショッピングでブーピッグ	96
卵を育てようウデツポウ	105
どくどくポイズンで大変ダストダス	121
設定2*本編後推奨	131
リーリエ、頑張っておさわリーリエ!	137
シチューに必須なピカチュウ?	148
恥ずかしい過去で家にコモル	

		169	カントーに向かってとんぼがえり	前
			編	
			カントーに向かってとんぼがえり	後
		200	編	
			未知との遭遇 ウルトラビースト編	
		217	こんな出会いはフシギダネ	
			シリアス展開は止めてくレントラー	
		231		
			トラウマを克服しようツロイド	
		243		
			やっぱりシリアス展開は嫌いダーテン	
グ		255		
			ウルトラホールに突ニューラ	
			乗り越えろ！ 災難マイナンヒトデマ	
			ン	
		285	ハッピーエンドで締めたイーブイ	
		298		
			さらば、また会う日まデオキシス	
		321		
			設定3*本編後推奨	
		328		
			大きな声でアローラな日常編	
			おまたせ、きのみジューズしかなかつ	
		336	たけどいいかな？	
			ガチムチパンプジンレスリング	
350				

ここがあの子のポケモンハウスね

365

アセロラさえいればいい。――

379

打ち上げ花火、皆と見るか？青色と見るか？――

397

進撃のポケモン――

409

ユウキの華麗なる一日――

424

行くしかない、あのビッグウェーブ

434

ビーチに――

434

アイナ・食堂く幸せのパンく――

444

輝け、かがやき様！編

闇の襲来――

461

再び……。――

479

転生しちゃいましたツベイ

今日はポケモンウルトラサンムーンの発売日。

早速買いに行こうと、家を飛び出した……はずなんだが。

「この真っ白い空間なんなんだ？」

周りを見ても何もない。壁も床も天井も、白で統一された密室。

ただポツンと真ん中に立たされている自分以外誰もいない。

「ふむ、白昼夢か」

この現実味のない事実を考える事を放棄し、そう結論を出す。

「いや、違うよ」

この夢から覚めようと意識を集中した時、何処からか声が響いた。

「これは白昼夢でもなんでもない、君は死んだから此処に居る。そしてこんにちは、私は神です」

……こんなふざけた夢を見るなんて、どうやら自分は疲れているらしい。まあ最近は新作に向けて寝る間も惜しみ、アルファサファイアで厳選作業をしていたからな、無理もない。

「だから違うって、ほら落ち着いて君が家を出た時にの事を思い出してごらん」

「そう言われても思い出せない、気づいたらいつの間にか此処に……」

響く声にそう伝えると、目の前に鏡の様なモノが現れた。

「仕方ないな……まあ、あの死に方だと覚えていないのも無理ないか」

目の前のモノに映像が流れる……これは家を出た直後の自分だ。

「家を出た君は、上から降って来る野球ボールに気づかずそのまま……」

映像の中の自分は後頭部にボールがぶつかり、倒れていく……え？

「それだけ？」

「うん、それだけ」

「え、いやこういうのは普通誰かに殺されたーとか、車に轢かれそうな子供を助けてとか、そういうもんじゃないの？」

なんかしようもない理由で死んで納得いかん。

「うーん、でも君の前に来た子は階段から足を滑らせてとか、その前に来た子はお餅を喉に詰まらせてとかだし、そういうの結構多いよ？」

……それらに比べたらマシ、なのか？ いや……でもなあ。

「んで、死んだ俺はなんで此処にいるの？ いや納得してる訳じゃなく単なる疑問で」

なんとか生き返らせてもらえないかな、サンムーンやってないからウルトラサンムー

ン凄く楽しみだったのに……。

「善行を積んだ人間にはご褒美ポイントが与えられるんです。そのポイントが溜まってるほど様々な特典が選べる……という訳でどうする？ あ、はいこれメニュー表」

輪廻転生とかそういうシステムだったのか……。

受け取った紙を見ると、来世の容姿や身体スペックなど書いてある。

「俺はどれくらいポイントがあるんだ？」

ざっと流し見たところ、ほぼ数千ポイントを使うのばかりだ。性別を指定するだけで千ポイント……高いのかどうかわからん。

「君はーえつと、十万あるみたいだね。すごいなあ、中々見ないよこんな多いの」

どうやら結構なポイントがあるらしい。だが、自分はそんなに善行をした覚えはないんだが。

「普通はどれくらいなんだ？」

「平均で五千前後かな」

少なっ！ 性別も選べないじゃないか。それで何が出来るか、手元の紙を見ると……人間に生まれる＝五千ポイントと書かれていた。

「ポイントが少ない奴はどうしようもないじゃないかっ!？」

「君の前の子はトカゲになったよ、その前はカマキリ」

「強制的に人外転生とか……」

善行積んでて良かった。

「それで？ 特典はどうするの？」

人間に生まれる事が出来る事に安堵しながら、自分のポイントで出来る事を探していると、この理不尽な死を帳消しに出来るモノを見つけた。

「これは、異世界転生」

転生先の指定に五万、その世界に合った特典に三万、前世の記憶、その他諸々で合計十万。

これで決まりだ。

「ポケモンの世界に転生、特典は持っているゲームソフトの手持ちポケモン」

「わかったよ、君は稀に見る善い行いをした人間だ。次の世界では幸せな人生を送れるように祈りを捧げよう」

新作ポケモンが出来なくなったのは少しの心残りだが、これからは現実にポケモンが居る世界で過ごせる。ボールで死んだ事実なんてどうでもいいくらい楽しみだ。

そして目の前が真っ暗になった。

アローラな日常編

思ってたのと違うなイシツブテ？

ポケットモンスター、縮めてポケモン。

この星の不思議な生き物、海に、山に……ってだらだと面倒くさいのはいいとして。俺、マサラタウンのユウキ！ 転生者だ。

そう、マサラ……ゲームの新しい地方、アローラに生まれると思っていたがまさかのアニポケで何を言ってるかわからねーと思うが俺もって、ネタに走るくらいにびっくりしたわ。でも純粋なアニポケって訳じゃないみたいでね、この数年間に色んな地方を旅したけどアニメでいたキャラの性格がゲームよりだったり、年齢が少し違ったりした。まあ一番びっくりしたのは……。

「ユウキ、まだ準備してるのか？ ママが待ってるから早く行こうぜ」
「ああ今行くよ、サトシ」

そう、アニメ主人公のサートシ君。俺はサトシの兄として生まれた。

なので、ホウエンにシンオウ、カロス地方では一緒に旅をする事になった。まあその話はまた別の機会に。

「カロスから帰ってきたばかりで旅行ってサトシは疲れてないのか?」

「何言ってるんだよ、新しい地方で新しいポケモン……くうっワクワクするぜ!」

カロスではもう少し大人びていた筈なんだが、ここ最近サトシは子供っぽくなってる気がする。アニメはカロスリーグの辺りまでしか見ていないからなあ、ここら辺でまた新地方お約束のリセットでもされたんだらうか?

「先に外で待ってる、行こうぜピカチュウ!」

「ピッピカピ!」

さて、転生して十数年。やっとウルトラサンムーンが始まる。

今までは特典と一緒に転生して来たポケモン達と冒険してきたが、新しいポケモンを仲間にするのもいいかもしれない。

「いざ、新天地!」

「いやッホー!」

「ピッピカピ!」

遠くでサトシ達がサメハダーに乗って、楽しそうにしている姿が見える。

「ユウキは行かないの?」

隣で優雅にのんびりしてる母さんに声を掛けられるが。

「あー、むうりいー」

「酷く酔ってるわねーもう、あんなにはしゃぐからよ」

アローラに向かう船で、楽しみすぎて手持ちポケモン達とじやれまくっていた。

そのせいなのか、滅茶苦茶気持ち悪い。

「うえっ……ちよつとあの岩場に行つて吐いてくる」

「気をつけてね」

母さんに言つて、岩場に向かう。

「ふう……少しスッキリしたな。ちよつと泳ぐか」

まだ時間もあるので、プカーつとたゆたう様に泳ぐ。

しばらく仰向けに浮かんでいると、頭に何かがぶつかる。

「いてっ、ん？ ラプラス？」

どうやら、気づかずに結構な距離を流されていたみたいだ。

「おや？ 釣れたのはポケモンではなく男の子ですか」

「ラプラスがしゃべった！」

なんと、このラプラスしゃべれるのか。

「この子じゃなく、こっちですよ」

声が聞こえたラプラスの背中を見ると、小柄な女の子が釣りざおを持って座っていた。

「なにしてるんだ？」

「見ての通り、釣りですよ。カイオーガを狙っていたら、貴方が釣れました」

「へっ!!? 此処ってカイオーガ釣れるのか!?!」

「釣れるわけないじゃないですか」

「コイツ……」

「貴方は何してるんですか? ここら辺はビーチから離れていて、危ないですよ」

「プカプカ浮いてたら、いつの間にか此処にな」

周りを見ると、さっきまで居たビーチがあんなに遠くに見える。いやっただけ流されてるんだよ。

「私はもう戻ろうと思ってるんですが、良かったら乗りますか?」

「お、助かるよ。そうだな名前言ってなかったな、ユウキって言うんだ。宜しく」

女の子の手を借りながら自己紹介をする。

「私はスイレンです、宜しくお願いします」

それからゆっくりと雑談をしながらビーチに戻ってきた。

「スイレン、ありがとうな」

「いえ、気にしないで下さい」

スイレンにお礼を言つて、母さん達の所に戻る。

「ただいま、サトシは？」

「着替えに行つたわよ。これからオーキド博士に頼まれてたお使いに行くからユウキも準備してらっしゃい」

「わかった」

買い物しながら目的地へと向かっていると、サトシが突然どこかに走り出す。

「どうしたんだ、あいつ。母さん、サトシがどっか行つたから追いかけるね」

「スクールの場所はわかる？」

わかると返事をしてサトシを追いかける。

「あいつ、本当に足早いなあ。マサラ人は恐ろしい」

なお、自分もその恐ろしいマサラスペックを持っているので、あまり文句はない。

追いついた頃には、森の中だった。

「あーいいたいた。おいサトシ、いきなりどっかいくな」

「ごめん、見たことないポケモンが居たからつい……あれ、向こうにいるのポケモンじゃないか!？」

数メートルほど離れた所に、ピンクのクマの着ぐるみのようなポケモンが此方に手を

振っていた。

「ははっ、アローラは面白いポケモンいるなあ」

俺たちもポケモンに手を振り返していると、その着ぐるみポケモンは突然周りの木をなぎ倒しながら、こっちに走ってくる。

「ちよ!!? なんかやべえ、逃げるぞ!」

「ああ、ピカチュウ乗れ!」

必死に逃げていると、いつの間にか着ぐるみポケモンは居なくなっていた。

「助かった……あれ? ユウキ、どこどこだ?」

どうやら、さっきよりも深い森に入ってしまったみたいだな。

「どうするかな、ん?」

上を見るとリザードンが飛んでいるのが見えた。

「サトシ、とりあえずあのリザードンを追いかけよう」

人が乗っているのが見えたから、ついていけば森から出られるかも。

リザードンを追いかけていると、森を抜けて広場みたいなところに出た。

「(ハハ)は……もしかして」

偶然に目的地に着いたのかと、考えていると。

「危ないっ！」

突然声が響き、顔を向けるとケンタロスの群れが突っ込んできた。

「うおっと、あぶねえ」

俺はなんとか回避できたが、サトシは激突したようだ。

「大丈夫ですか？」

「ん、俺は平気」

後ろから金髪の女の子が、心配そうに声を掛けてきた。

「ねえ、ここっでもしかしてポケモンスクール？」

「あっはい、そうですよ」

ふむ、やっぱり目的地の様だ。

「すみませーん、そっちの人も大丈夫ですか？」

向こうから、サトシ含めた数人がやってきた。

「平気だよ、むしろ何か邪魔したみたいでこちらこそごめん」

「ううん、気にしないで。でも、なんであんな所から出てきたの？」

説明しようと口を開き掛けたところに。

「あれ、もしかしてユウキですか？」

「ん？ スイレンか？」

意外な再会だった。

スクールに入りますカタंक

スイレンと意外な再会を果たした俺は、森に入った時の出来事を軽く説明した。

「なるほど、災難でしたね」

「まったくだ、サトシのせいで久々に肝が冷えた」

くどくどとスイレンに愚痴をこぼしていると、周りが此方を見ているのに気が付いた。

「えつと……スイレンのお友達ですか？」

金髪の女の子が周りを代表するかの様に聞いてくる。

「あー、自己紹介がおくれた。俺はユウキ、カントーから来たんだ。そっちは弟のサトシ、宜しく」

「んで、こっちが俺の相棒のピカチュウだ！」

「ピッカ！」

始めて会った子達に挨拶を交わしていく。

「ユウキは海で私が釣った男の子なんだよ」

「えっ！ 逆ナンとか、スイレンてば大胆！」

「いや、困ってた所を助けてもらっただけなんだが」

ほんとに逆ナンだったらウエルカムなんだけどね。

「なーんだ。あ、私はマオだよ!」

「わたくしは、リーリエと言います」

「宜しく、マオとリーリエ。それで俺達はここの校長に用があるんだけど、どこに行けばいいか教えてもらえないかな」

元気な女の子のマオに、金髪のお嬢様っぽいリーリエと握手をしながら目的の人物の場所を聞く。

「あ、なるほどー。おっけおっけついて来てー」

なにか納得した風のマオに手を引っ張られ、スイレンとリーリエにまた後で、と手を振られる。

「おーっ! すっげえ、ポケモンの化石だあ!」

かなり大きいポケモンの化石を見たサトシが、突如興奮して走り出す。

「ここはポケモンスクールだからね、ポケモンの事を学んだり、一緒に遊んだりするんだよ」

マオがこのスクールの事を説明してくれてるが、サトシは輝いた目で走り回っていて

聞いていない。

いや、少しは落ち着いて聞いてやれよ。

「あ、着いた。ここが校長室だよ」

マオの説明を聞きながらサトシを諫めて歩いていたら、いつの間にか着いた様だ。

「校長先生、新入生を連れてきました！」

「え？ いや、ちよ」

なんか勝手に新入生になつてるんですが。

俺とサトシが驚いていると、校長室のドアが開いた。

「あら、ユウキ達ちゃんと来れたのね」

最初に母さんが部屋から出てきて、その後ろから見た事のある顔が現れた。

「アローラ！ ユウキ、サトシ。ポケモンスクールへようこそ！ ロック」

うわ、オーキド博士と似てる。てか、似てるってレベルじゃねえな。

「私は、ナリヤ・オーキドだ。宜しくナツクラー」

随分と濃いキャラしてるな。博士の川柳といい勝負じゃない？

「校長先生はいつもポケモンギャグばかり言ってるの」

「人とポケモン、一緒に楽しく暮らすのがいちバンギラス！」

あまりの強烈なギャグに凍り付く俺達。

いや、ほんとキャラ濃いな。

「なーんだ、新入生じゃなかったのかー。勘違いしてごめんごめん」

校長室に入った俺達は、マオに此処に来た目的を話した。

「おーい、ユキナリ。卵は無事に届いたぞ」

「おー、ナリヤ。そうか、助かりましたよハナコさん」

「いいえー」

さて、目的も果たしたしどうするか。

「ねえ、新入生じゃなかったのは残念だけど、スクールを見学してく？」

いい機会だし、そうしようかな。サトシもなんかウズウズしてるし。

「そうだな、ポケモンスクールの中は初めてだし、見てみたいな」

「よっしゃあ！ 珍しいポケモンとかいるかなあー」

サトシと一緒に居ないと、マオに迷惑かかりそうだしな。アローラに来てからのサトシは本当に元気過ぎるし。

カロスの時のこいつはキリツツとして成長したなー、とか思ってたけど今は心なし顔が幼くなったというか、アホになったというか。

まあ気のせいかな。

「校長先生、ユウキ達にキャンパスを案内してもいいよね？」

「もちろんポリゴンヤブクロン！」

……アローラは暖かい筈なのに、この部屋は寒いなあ。

「はい、ここが私達の教室だよ」

ぐるっと観回ったけど、生徒は結構いるのに教室毎の机は少ないんだな。

「うおーっ！ 風が気持ちよくて、いい眺めだぜ！」

「このスクールの施設はさっきケンタロスが居た所とか、他にもあそこに見える水のフィールドとか、広がっていっぱいあるんだよ」

ジョウトやシンオウにもポケモンスクールはあったけど、こんなに広くないだろうなあ。

「やあ、三人ともアローラ」

海を見ていたら、後ろから半裸のおっさんに話掛けられた。

「あ、クワイ博士」

「博士？」

ポケモン研究の博士って、どこか変人ぽくないと務まらないのかな。

「スクールは楽しい所だ、今日は楽しんでくれよ。ユウキ、サトシ」

「はい」

「はいっ!」

話したところ、ククイ博士はただ半裸だけで、常識人のようだ。

川柳かましたり、卵にハアハアしたり、婚活に忙しい三十路だったり、他にも変人博士が多いからつい身構えてしまった。

「ん? なんだあれ」

なにやら、スクール入口が騒がしい。

「なんか揉め事っぽいから、ちょっと行ってくる」

「あ、待って私も」

教室を出る俺にマオがついて来て、サトシと博士も追いかけてくる。

「グダグダとうるせーな、俺達の邪魔しやがって」

「邪魔してるのは、お前たちの方だろう。スクールの入口にバイクで群がって、迷惑だ」
騒ぎの元に着くと、何やら不良集団と半裸の青年が揉めている。

てか、ほんとにこの島は半裸多いな。

「マオ、あの変な集団は?」

「あれは、スカル団っていうの。無茶な事を要求してきては、バトルしてくる嫌な奴ら

よ」

なるほど、アローラの敵組織はスカル団というのか。でもどうせ今回も、あのロケツトな三人組が何処かにいるんだろうなあ。

「はんつ、バトルで勝てたら見逃してやらんでもない」

「アニキの言うとおりっスカら！」

「そーだそーだ」

「……後悔するぞ」

どうやらバトルする様だ。

スカル団とやらが全員ポケモンを繰り出した。

「おいおい、三対一は卑怯だろう」

「まったくだぜ」

これは見逃せないな。俺とサトシは半裸の青年の元に歩く。

「ちよ、ちよつとユウキ、サトシ！ 危ないよお!？」

「おい、お前ら。卑怯な事はやめろ」

「そーだ！ 俺達も加勢するぜ！ えつと……」

青年の隣に並んだ俺達はモンスターボールを持ち、サトシが青年の名を聞く。

「カキだ。だが、助けはいらん」

青年、カキは俺達を一瞥してボールを投げる。

「バクガメア！」

「おーっ、カツケーエ！」

見たことないポケモンにサトシは目を輝かせる。

「まあそう言うなよ、丁度三対三だ。やるぞサトシ」

「ああ、ピカチュウ！ 君に決めた！」

「ピッカ！」

サトシは肩に乗ったピカチュウを前に出し、俺は。

「よし、行け。バクフーン」

「バクフアーン！」

最初の相棒である、バクフーンを選出した。

「なるほど……そのバクフーン、強いな。だが、無理はするなよ」

そう言ってカキは、自分のポケモンを前に出す。

「はっ！ 俺達が勝ったら、お前らのポケモンまとめて貰うぜ！」

「アニキの言うとおりにツスカら！」

「そーだそーだ」

……取り巻きは同じ事しか言えんのか。

スカル団は一人三匹ずつ、ポケモンを繰り出した。

「おい、お前ら！ どこまで卑怯なんだ！」

「ピッカ、ピカピ！」

まあ、どれだけ出しても結果は変わらんだろう。

「サトシ、まとめてやればいいだけだ」

「それもそうだな。よしピカチュウ、十万ボルト！」

サトシが戦い始め、俺も指示を出す。

「バクフーン、ふんか」

繰り出したふんかで、目の前のズバット三体を吹き飛ばす。

「なっ、一撃で!？」

俺は一人を瞬殺し、隣を見るとサトシの方も終わらせたみたいだ。

残りのカキの方を見ると、相手のポケモンが迫っていて、攻撃を受けそうになっていた。

「おい、大丈夫なのか？」

「問題ない」

そういうとカキはポケモンに指示を出した。

「今だ、バクガメス。後ろを向け」

指示通り、カキのポケモン。バクガメスは相手に背を向けて相手を受け止めた、その瞬間。

「うおっ!？」

バクガメスの背中の甲羅が爆発した。

「すっげえ、なんだ今の!？」

サトシが興奮した様子でカキに聞く。

「こいつの甲羅に触れると爆発する技、トラップシエルだ」

爆発で吹き飛んだ相手のポケモン達は、まだフラフラと立っている。

俺とサトシは手伝おうと指示を出す、カキが手で制して口を開く。

「いや、任せろ」

そう言って、腕を交差する。

「俺の全身全霊！ アーカラの山のごとく熱き炎となって燃えよ！」

カキは、何かセリフをしゃべりながらポーズを決めている。

「……なにやってんだ？」

「ダイナミックフルフレイム！」

カキの動きが止まった時、バクガメスが光に包まれて、強大な炎を繰り出した。

「ガメアア！」

バクガメスは相手のポケモン全てを吹き飛ばして、バトルの決着をつけた。

「くっそー、覚えてろよ!」

「アニキの言うとおリッスから!」

「そーだそーだ!」

勝負に負けたスカル団はスタコラサツサと逃げていく。

「すっげえ、なあカキさっきのはなんだ!?!」

「俺のバクフーンよりも、デカい炎だったな」

ホントにデカかった。なんなの? アローラのポケモンって皆あんなに強いのか?

「あれは、Z技と言う。一度しか出せない必殺技だ」

だよ。あんなのポンポン出してたら、俺のポケモン達はインフレについて行けないよ。

「Z技は、アローラに伝わる特別な技でね。島めぐりという儀式に参加し、ある試練を達成した者のみがZワザを使えるようになるんだ」

落ち着いた俺達の元に、博士たちがやって来る。

「ユウキ、サトシ! もう、いきなり飛び出すからびつくりしちゃったよ。でも二人とも強いんだね!」

「うんうん、メガトンパンチ級にいいバトルだったぜ!」

マオと博士が俺達を褒めるが……やっぱリクイ博士も変な所がありましたね。
なんだよメガトンパンチ級って。

「うん？ なあユウキ、あれってポケモンかな？」

サトシに声を掛けられ、指を指された方に視線を向けると。

「えーっと、なんだ？ あの黄色いの」

見た事ないポケモン？ だな。

「どうした？ ユウキ、サトシ」

「いや、なんか見た事のないポケモンが空を飛んでいたんですよ」

「あれは絶対ポケモンだよ！ こう、体が黄色くて大きいトサカがあつて」

博士にサトシが体を大きく振り、精一杯の説明をする。

「もしかして……カプ・コケコかもしれません」

「ああ、島の守り神。と伝えられるポケモンだな、二人とも見たのか？」

リーリエと博士が驚きの表情で聞いてくる。

「守り神、か……」

やっぱりそういう存在と会うと、ワクワクするなあ。

その日の夜、泊まっているホテルで夕食を食べていたら、嬉しそうな顔をした母さん

に聞かれた。

「二人とも、何かあったの？」

「ん、なんで？」

「だって元気に疲れているんだもの」

なんだ元気に疲れてるって。

「いや、実はさ」

サトシが興奮した様子で、今日の事を話そうとすると、何かの鳴き声が響き渡る。

「今の聞こえたか、サトシ」

「ああ……こつちからだ！」

「あ、こちら待て！」

「サトシ、ユウキ！」

またアイツは走り出して！

少し離れた所に、サトシの後ろ姿が見えた。

「おい、まだご飯を食べてる途中だろっ……て」

サトシの目の前には、カプ・コケコが浮かんでいた。

「これを俺に？」

カプ・コケコからサトシに、フワフワと何かが渡される。

「なあ、サトシ。それってカキが付けてたモノに似てないか？」

「やっぱりそうだよなあ、もしかして俺も乙技出せる様になるのかな!」

サトシはテンションが上がって、小躍りしているとカプ・コケコは俺の前にも浮かんでくる。

「コーツコ」

そして俺にも渡された、リングのモノ。

「俺にもくれるのか？」

カプ・コケコは問いに答える事なく、飛んでいく。

「おっ、ユウキも貰ったのか!」

サトシは嬉しそうにリングを付けながら、此方に見せてくる。

「ああ」

サトシのリングには黄色いクリスタルが埋め込まれている。

……俺のは窪みになってるんですが。いや、まあうん。別に気にしない。

そして、夜が明ける。

「ママ、ありがとう! この島に残るのをすぐに許してくれて」

「いいのよ、貴方達の母親なんだから」

俺とサトシは母さんに頼み込んで、アローラに残る事になった。

「でも、ククイ博士にご迷惑かけない様にね。ユウキ、しっかりと頼んだわよ」

そして、ククイ博士の家でお世話になる事になったのだ。

「わかつてるよ、母さん。ほら、サトシそろそろ時間」

「あぁーっ遅刻する！　じゃあママまた」

「行ってきます」

「いつてらっしゃい」

扉の向こうから、出来たばかりの友人達の声が聞こえてくる。

「みんなアローラ！　今日は新しい仲間達を紹介するぞ」

先に教室に入ったククイ博士と呼ばれて、俺とサトシは部屋に入る。

「アローラ」

「アローラ！」

今日からは、今までの旅とは違う新たな日々が始まる。

凄く楽しみだ。

歓迎会でサプライズルズキン 前編

ポケモンスクールに入った翌日、俺とサトシは疾走していた。

「うわーっ、遅刻遅刻！」

「サトシが中々起きなかつたせいだろう！」

俺達は、登校初日から遅刻の危機に晒されていた。

「こういう時のマサラスペックは便利だよなあ」

スクールの正門に到着し、自分たちの身体能力に感心していると、小さな破裂音が突如響いた。

「うわっ、なんだ？」

サトシが突然の事に驚いていると、そろそろとクラスメート達が此方に歩いてくる。

「ふふっ、アローラサプライズ！」

嬉しそうにそう言うマオを始め、皆の手にはクラッカーが握られていた。

「サプライズって、いったいこれは？」

驚いて尻もちをついた、サトシを引き起こすカキに疑問をぶつける。

「今日は、入学したお前らの歓迎会をしようとな」

「はいっ、ちなみに今のは最初のサプライズです。まだまだありますよー!」

そういうリリーエ。いやまあ嬉しいんだけど、言っちゃったらサプライズじゃなくな
い?

「二番目のサプライズはマーマネからです。こっちについて来て下さい」

スイレンはそう言うと、皆と一緒に歩き出す。

俺は彼女の隣に並び、軽い雑談をする。

「そういや、スイレン。俺達と同じクラスになったんだし、そんな固い喋り方だところっちは多少身構えちやうから、もう少し気楽にしてくれると嬉しいんだが」
そう言うと、スイレンは少し黙考し、此方に微笑みながら口を開く。

「もしかして口説いてるんですか?」

「違う」

何故そんな事になるか俺は分からないぞ。

「ふふっ、冗談ですよ。まだ会って少しだから、単に慣れなくて。でも……改めて宜しく
ね、ユウキ」

急に目の前に立ち、花が咲くような笑顔に見惚れていると、数歩先から声を掛けられ
た。

「ホイ着いた。二番目のサプライズは、僕とトゲデマルからの挑戦状だよ」

そう言う、身長低めなふっくらとした少年マーマネ。

同じクラスの彼から意気揚々に指を指され、サトシは輝いた目で尋ねる。

「もしかしてバトルか!? ポケモンバトルなのか!」

そんなサトシを横目に、目の前の積まれた風船を見る。

「バトルっても、この風船を割るとかそういうやつなんじゃないのか?」

俺がそう答えると、マオが口を尖らせて注意してくる。

「もうっ、ネタバレ禁止だよ!」

「マーマネの通り、僕とユウキとサトシで、先に風船を全部割ったチームが勝ちゲーム

! だよ」

「割る? 風船を……それなら簡単だぜっ」

サトシはバトルじゃないと知るとガツカリしていたが、面白そうだと思ったのか、早速ピカチュウと位置に走っていく。

「ほら、チームなんだからユウキもポケモンを」

マオに言われて、腰のモンスターボールに手を掛ける。

「やろうか、バクフーン」

「バクファア!」

投げたボールからは相棒のバクフーンが出てくる。

定位置に立った俺達三人を見て、マオはルールを説明する。

「風船の山を早く割った人が勝ちで、割るのはトレーナーでもポケモンの技でも問題ないよ」

なるほど、楽勝だな。

ルールを確認した俺達を見ると、マオは片手を振り上げて、合図を送る。

「それじゃ、はじめ！」

開始の瞬間に、バクフーンに指示を出す。

「バクフーン、れんごくだ！」

すると、バクフーンの背中が燃え上がり、放たれた技で目の前の風船の山が激しい炎に包まれる。

「やはり、凄いい炎だ。まるでアーカラの火山の様に」

後ろでカキ達が驚き、目を見開いていると、炎に包まれた風船が軽快な破裂音を出し、どんどん割れていく。

音が止まり、炎が静まる。

「お疲れさま」

バクフーンを労い、頭を撫でて言葉を掛ける。

「うわあ、十秒足らずでユウキの圧勝だね」

マオが圧倒的な結果に苦笑いで褒める。

「よっしゃあ！ 俺達も負けてられないぜ、ピカチュウ！」

気合の入った声で、サトシはピカチュウに技を指示する。

「ピカチュウ、十万ボルトだ！」

「ピカ、ピーカッチュ！」

繰り出された電撃は、空高く打ち上げられて、風船に迫る。

「そうはさせないよ、トゲデマル！」

ピカチュウの技を見たマーマネは、ニヤリと怪しい笑顔を浮かべて、トゲデマルをジャンプさせる。

すると、風船に迫っていた電撃は急に曲がって、トゲデマルに直撃した。

「いまだ、ビリビリチクチク！」

電撃を纏ったトゲデマルは、風船の山に体を回転させながら突っ込んでいく。

「なるほど、ひらいしんの特性か」

感心した俺の言葉に、マーマネは笑顔で頷き答える。

「そう、さらにトゲデマルは受けた電撃をそのまま技として放てるんだ」

攻撃手段を奪われたサトシは、驚愕で動きが止まっていた。

「はい、そこまで！ 風船割り勝負の結果はユウキが一位です！」

結局ピカチュウは、電気技ではなく、アイアンテールで全て割った。

「まあ、サトシ。今回はとくせいの相性が悪かったな」

「悔しいけど、次は負けないぜ！ なっ、ピカチュウ」

「ピカピー！」

次の勝負に燃えるサトシとピカチュウ。

「じゃあ、三番目のサプライズだね。私について来て」

そう言うスイレンについて行き、次の場所に向かう。

歓迎会でサブライズルズキン 後編

三番目のサブライズは、水辺のあるフィールドに連れてこられた。

「次は、私のアシマリと水泳勝負だよ」

スイレンは、抱えたアシマリを水中に放ちながら言う。

「よっし、頑張ろうぜピカチュウ！」

「ピカピー！」

サトシはピカチュウしか連れてないとはいえ、水ポケモンには多少厳しいんじゃないか？

「そういや、ユウキはバクフーンしか出してないけど、この勝負どうするの？」

マーマネが、炎ポケモンしか持ってないと思っっているのか、心配して聞いてくる。

「ああ、大丈夫。ちゃんと適任なのがいるよ」

俺はそう言っつて腰のボールに手を掛ける。

「行ってくれ、マリルリ」

「ルリユウ！」

俺はバクフーンだけじゃなくて、手持ち六体埋まっている。

まあ、そのうち三体は迂闊に出してやれないんだが。

「ユウキのマリルリ、後で触らせてくれない？」

「あ、ああ。構わないよ」

スイレンが心なし、目を輝かせて詰め寄って来て、驚いた。

水ポケモンが好きなんだなあ。

「じゃあ、ルールを説明しますね」

リーリエが軽く、ルールを述べていく。

要は、この百メートルの水路を早く泳ぎ切ったチームが勝ちの様だ。

「じゃあ、用意はいいですね？ ……スタートです！」

リーリエの合図と同時に、マリルリに指示を出す。

「マリルリ、ぶつちぎれ！」

サトシとスイレンも遅れずに指示を飛ばすが、すでにマリルリから数メートル以上離

されていた。

「うわ、はつやいなあ」

「ユウキのポケモンは、とても良く育てられているんだな」

マオ達は、あまりの速さに驚愕する。

「マリルリ、ゴールです！」

結果はマリルリがトップだったが、意外にも早くアシマリが追いついてきた。

「スイレンのアシマリは良く育てられているな。あんなに距離を縮められるなんて驚いたよ」

本当に俺のマリルリは優秀だと思っていたが、まだまだという事か。

そう本心から褒めると、スイレンは照れたように笑ってアシマリを抱えた。

「えへへ。あ、そうだ。マリルリ触らせて」

そう言つて、すでにマリルリを撫でているスイレンを横目にサトシの元に向かう。

「サトシ、ピカチュウ。お疲れ」

「ああ、また負けちまったぜー。でも、よくやったなピカチュウ」

「チャア」

負けても、へこたれずに次の勝負に燃える。それがサトシのいい所だな。

「じゃあ、次だな。グラウンドに行くぞ。俺に着いてこい」

どうやら次は、カキの様だ。

スイレンに、こねくり回されているマリルリをボールに戻して、カキの後を追う。

グラウンドに出ると、ケンタロスが三匹いた。

「俺のサブライズは、このケンタロスに乗ってレースの直接勝負だ」

おっと、これはいい勝負になりそうだな。

「おおつ、ケンタロスだ！ この勝負なら絶対負けないぜ！」

「カキも、牧場で普段乗ってるからそう簡単にいくかなあ？ じゃあ、合図出すよ」
ケンタロスに乗り、横並びで位置につく。

「よいい、ドン！」

マーマネの合図と同時に、三匹同時に走り出す。

「むっ、意外とやるな」

「へへっ、ケンタロスは捕まえた事があるからな」

そう、サトシはケンタロスを捕獲した事がある。

三十匹ほど。

さらにカロスでは、一緒に公式のケンタロスレースに出場した事もあるからな。

「だが、勝負はここからだ！」

「負けないぜ！」

カキとサトシが速度を上げる。

俺も負けじと、追いかける。

「うおおつ」

「まだまだあ！」

「負けるか！」

ゴール付近で、三匹ほぼ横並びで疾走する。

「ゴールッ！ これは……接戦すぎて、わからなかったよ」

マーマネが申し訳ないという顔で言う。

「なら、皆一位という事で良いだろう。二人とも、いい走りだった」

カキが晴れ晴れとした笑顔で、握手を求めながら言う。

「凄く楽しかったぜ！」

サトシが、握手を返しながら言った。

「俺もだ」

もう時間も昼時、サプライズはこの辺で終わりかな、と思っていると、ククイ博士が此方に歩いてきた。

「やあ、楽しんでるかい？ 五番目のサプライズは……僕とポケモンバトルだよ」

ここにきてのポケモンバトルだ。サトシのテンションが見るからに上がっていく。

「おっしやあ！ やつとバトルだぜ！」

サトシが、早速と言わんばかりにバトルフィールドに向かおうとすると、マオが呼び止める。

「その前に！ アイナ食堂の看板娘、マオちゃんが腕を振るつた料理でランチタイムだよー！」

もう昼時だもんな。サトシも言われて、腹を鳴らす。

そして、マオを先頭に、昼食を摂る場所に向かう。

「んぐつ、んめえ！」

サトシは、プレートに盛られたご飯を勢い良く、かつこんでいく。

「アイナ食堂はね、美味しくて大人気なんだよ」

そう言う、マーマネも美味しそうに食べていた。

「ふふつ、どう？ マオちゃん特製のアローラプレートは」

マオが作ったという、アローラ伝統の家庭料理は、ククイ博士の家で食べた料理より美味しく感じる。——いや、博士のも、もちろん美味しいけども。

「ああ、アローラに来てから、これほど美味しいと感じた料理はないよ。毎日作って欲しいくらいだ」

「えっ!？」

「これほどの美味さなら、毎日でも飽きないからな。」

「これは……」

「だ、大胆ですね」

「ふえ、毎日ってそういうっ!? え、嬉しいけど、でもでもっ」

ん？ 女性陣がなにやら、あたふたとしている。

「ユウキ、お前つて奴は……」

「これが天然フラグメーカー、僕は初めて見たよ」

「ユウキの言葉に、マオはまさにメロメロつてやつだね」

「これも、うんめえ！」

男性陣も、何か言っている。サトシはもう少し、落ち着いて食べような。

「ん？」

気のせいかな。今、何か聞こえたような。

「カプウーツ」

いや、これは！

「今の声はっ」

サトシも聞こえた様で、立ち上がって辺りを見回す。

「今の鳴き声は確かに――」

ベランダの方に顔を出すと、下から黒い影がひよっこりと出てきた。

「うわっ」

いきなり目の前に現れた、影の正体。それは、カプ・コケコだった。

「カ、カプ・コケコ!?!」

「守り神が、なんでここに？」

皆が驚いていると、立ち上がったサトシはカプ・コケコに話掛ける。

「驚いたぜ、でも良かった。お礼、まだ言えてなかったから」

サトシはそう言いながら、腕のリングを見せる。

「そういや、入学初日に皆からZリングの事を追及されたなあ。」

「カプウ？」

カプ・コケコは首を傾げて、サトシの周りをグルグルと浮かんで――。

「あっ!？」

なんと、サトシの帽子を啜えて飛んで行ってしまった。

「あ、まてっ」

「おい、サトシ！」

カプ・コケコを追いかけるサトシを、追いかける。

「ちよっ、二人とも待つて！」

後ろから皆も、慌てて追いかけてくる。

追いかけていると、サトシが急に足を止めた。

「もしかして、バトルしようってのか？」

そう言うサトシの前に、カプ・コケコが帽子を返しながら、返事をするように小さく鳴いた。

「おいおい、どうなってるんだ？」

俺がサトシに追いついて、少し後に皆も追いついて来た。

「バトル、するみたいだよ」

そう言うと、リーリエが乱れた息を整えながら、口を開く。

「ふう、私、本で読んだことがあります。カプ・コケコはとても好奇心旺盛なポケモンで、昔から島の人達にポケモンバトルやアローラ相撲を挑むことがあったと」

バトルはわかるが、相撲って……。

「わかった、やろうぜ。カプ・コケコ」

サトシがそう言うと、カプ・コケコは大きく鳴き、体から光が溢れだし、周囲を黄色い光の空間で包む。

確か、これは――。

「サトシ、エレキフィールドだ！」

「はい。この中では、電気タイプの技の効果が上がります！」

俺とリーリエが説明し、サトシに注意を呼びかける。

そして、同時にカプ・コケコが体に電撃を纏って突進する。

「ピカチュウ！ 避けてから、十万ボルトだつ」

指示通り、ギリギリで避けてから、電撃を飛ばす。

「カプウ？」

だが、直撃したはずの攻撃にビクともせず、相手は首を傾げるだけだ。

「なっ、効いてない!?!」

サトシが、ピカチュウの自慢の技がほとんど通じていないのに驚愕していると——いつの間にか、目の前にカプ・コケコが現れ、手を振り上げていた。

「っ!?!」

サトシは反射的に腕を目の前で交差させる。

「カプツ」

カプ・コケコは、サトシに危害を加えるのではなく。

腕のZリングに触れて、埋め込まれているクリスタルを光らせた。

「もしかして、使えって事か？」

カプ・コケコは、こくりと頷くと距離を取った。

「どうすればいいのか、さっぱりだけど……やってやろうぜ。ピカチュウ！」

「ピカピー！」

サトシとピカチュウは、気合を入れて構える。

すると、カプ・コケコがくねくねと動き出した。

サトシも、その動きをまねて動く、一際眩しい光がピカチュウを包んだ。

「これが、俺達の、全力、だああっ！」

サトシとピカチュウの動きがシンクロし、共に拳を前に突き出すと、激しい電撃がカプ・コケコを目掛けて、勢いよく飛んでいく。

カプ・コケコに直撃すると、辺り一帯が爆風に包まれる。

同時に、技を放ち切ったサトシのZリングを見ると、クリスタルが碎けるのが見えた。

「やった、のか？」

サトシがそう言うと、砂埃も収まった正面の視界から影が飛び出してきた。

——その影は、やはりカプ・コケコだった。

「カプウ、カツ」

カプ・コケコは、傷もあまりついてない様子で首を傾げて、そのまま何処かに飛んで行った。

「あつ、カプ・コケコツ！ うっ」

サトシが追いかけようとするが、躓いた。

「おい、大丈夫か？」

「なんか、凄く疲れた」

座り込んだ弟に肩を貸すが、どうやら乙技というのは、かなり体力を使う様だな。

「さっきのは、電気タイプ乙技。『スパークキングギガボルト』だな」

ククイ博士がそう説明する。なるほど、タイプ毎に乙技があるのか。

「クリスタル、砕けたか。まだ乙技を使うのは早いという事だ、試練だつて受けてないしな」

カキがそう言うと、サトシは顔を俯かせてしまった。

思い出すと、入学初日。リングの事を聞かれた時、カキは厳しい態度だったな。乙技は神聖なモノと言っていたし、中途半端は許さないのである。

だが、サトシは俯かせた顔を上げ、何かを決意した目で口を開いた。

「俺、島めぐりに挑戦する！ 島めぐりの試練を受けて乙クリスタルをゲットして、今度こそちゃんと乙ワザを出せるようになるよ」

それでこそ、サトシだ。

「ああ、俺も一緒に。あんな凄い技を見せられたら、な
すると、周りの皆が次々に喋る。

「いいね、それ！ 私、応援するよ」

「私も」

「わたくしもです」

「僕も」

「まさに、友情のアシスト。パワーだな」

そして、皆の視線が肌の焼けた半裸の青年に向かう。

「……協力しないと、言っていないだろ」

ツンデレかつ!?

「ありがとう、カキ！」

カキは、サトシの言葉に照れて顔を背ける。

そんな反応がおかしく、皆で声を出して笑った。

見上げると、もう空が赤く染まっていた。

今日は楽しかった。友人からのサプライズで胸をときめかせるのは久しぶりだ。

そう言えば、今日のお礼を言っていないかった。

「みんな」

帰り道、前を歩く友人達を振り向かせ、一言。

「今日はありがとう」

夕日に照らされて眩しかったせいか、ぎこちない笑顔になってしまった気がするが、まあいいだろう。

もう一度空を見上げ、夕日が綺麗だと改めて思った。
明日もいい日になりそうだ。

——なお、ユウキは知らない事だが。

あの時、笑顔を見た女性陣は何故か、胸がモンモンすると言っていた。

出合いに再開イシズマイ

ククイ博士の家で朝ごはんを食べていると、博士に声を掛けられた。

「そういえば、ユウキとサトシに見せたいモノがあるんだ」

博士はそう言って、赤いボディの機械を手渡してくる。

「これは？」

サトシが疑問を顔に出しながら聞くと、博士は歩きながら答える。

「それはポケモン図鑑さ。起動させるから、着いておいで」

そう言う博士に俺達は着いて行き、地下へと降りる。

地下へ降りると、ポケモンに関する書物や、大きいモニターなどが置いてあった。

「さて、起動させるにはっ」と

博士はキーボードを叩いて、モニターを見ながら操作していく。

「よし……」

数分経った後、博士が一言漏らすと、天井の蛍光灯が点滅した。

「な、なんだ!？」

俺とサトシが驚いている間にも、どんどん電気が地下室に溢れだしていく。

そして、一際電気が漏れ出しているコンセントからナニかが飛び出してくる。

「キキキツ」

コイツは……。

「博士、なんでロトムが？」

そう、地下室に現れたのはポケモン。ロトムだった。

「その凶鑑の完成に欠かせない存在なんだよ。まあ、見ててご覧」

ロトムは暫く、地下室の中を物色する様に飛び回る。

そして、サトシが持っている凶鑑を発見すると、それ目掛けて突っ込み、するりの中に入った。

「あれ、ロトムが入っちゃったよ？」

サトシが凶鑑を掲げると、突然凶鑑が持ち手を離れ、浮かぶ。

「ピ、ピピピ。起動プログラム中……終了。アローラ。ユーザーユウキ、サトシ」

「凶鑑が浮いて、喋った！」

「ロトム凶鑑には多くの言語が内蔵され、人間とコミュニケーションを図れるようプログラムミングされているロト」

サトシがキラキラとした目で、ロトムと話す。

「す、すげー！」

「すげー？ 意味不明。意味不明」

「サトシは、君の性能が素晴らしいって感心したのさ」

「理解したロト。『すげー』は素晴らしいの意味。つまり、ロトム図鑑は素晴らしい」

学習機能付きとは、高性能だな。すげー。

「これから、よロトしく。ロト」

ロトムは挨拶をしながら、ピカチュウや博士のイワンコの写真を撮っていく。

「なんで、写真を撮ってるんだ？」

俺がそう聞くと、ロトムはパシャパシャとシャッター音を鳴らしながら答える。

「出会ったポケモンのデータを図鑑に保存するためロト。ロトム図鑑は、ポケモンに出会うごとにデータがアップデートされていく自己学習型ポケモン図鑑ロト」

なるほど、今回のポケモン図鑑は高性能だな。

「よくわかんないけど、やっぱりすげー！」

おい、サトシ。お前、今まで散々図鑑を使ってきただろう。

「今の僕はただのロトムではなく、ロトム図鑑。正確には、ロトムポケテックスフォルム」

「ロトムぽけで、デラッ？」

おい、サトシ。お前、知能指数落ちすぎじゃないか？

「まあ、いいや。ピカチュウのこと、図鑑でどう説明されてるのか聞かせてほしいな」
サトシがそう聞くと、ロトムはグルグルと飛びながら解説する。

「ピカチュウ……ねずみポケモン。尻尾を立てて周りの気配を感じ取る」
そして、ピカチュウの背後に浮かび――。

「むやみに尻尾を引つ張ると、噛みつく」

ピカチュウの尻尾を引つ張った。

……あ、ヤバい。

「あばばばば」

ピカチュウが機嫌を損ねて、俺達に電撃を浴びせる。

「噛みつくじゃなくて、電撃だったロトツ！」

今回の図鑑は、中々に大変そうだ……。

「私、マオ。よろしくね、ロトム！」

スクールに登校した俺達は、皆にロトム図鑑を紹介した。

「一体、どんな風にプログラミングされてるのかなー。今度キミを解析させてよ、ロトム」

ドライバーをチラつかせながら、マーマネがロトムと話していると、校長先生がやつ

て来る。

「おー、君がロトム図鑑か。よろしコダツク、アーボツクー！」

「よろしコダツク、アーボツク？ 意味不明。意味不明」

ロトムが困惑していると、マオが助け船をだす。

「気にしないで。校長先生はポケモンギャグが大好きなの」

「ポケモン、ギャグ……」

ロトムが何やら、考え込んでいると、校長先生が話掛けた。

「どうだい、ロトム。図鑑の中は居心地いいかい？」

「い……いいかいカイリユーウデツポウ！ まあマーイーカ、ありがとうパー！」

おい、ロトム。

「おおー！ ロトムとは気が合いソクナノ！」

ロトムと校長先生が、ポケモンギャグで話し合う。

なんだこれ。

「よろしくチート！」

「ありがとうパー！」

……なんだこれ。

今日の授業は、フィールドワーク。サトシにとっては新しい仲間をゲット出来るチャンスだ。

「そろそろ、野生のポケモンに出会いそうな予感がする！」

「この辺の野生ポケモン出現率は、約八十%ロト！」

サトシとロトムが会話をしながら森を歩いていると、少し進んだ所にポケモンが佇んでいた。

「ん、あれ？ ピカチュウ？」

まるで、ピカチュウの様な姿をしているポケモン。

だが、よく見ると顔などが違う気がする。

「いえ、あの子はミミッキユですね。本で読んだ事があります、タイプは……」

リーリエが目の前のポケモンの説明をしようとするが。

「待つロト！ 僕にお任せロト」

凶鑑の役割を持つ、ロトムが解説を引き継ぐ。

「ミミッキユ……ばけのかわポケモン。ゴースト・フェアリータイプ。ピカチュウそっくりのボロきれを被っていること以外は、正体不明の謎多きポケモン。中身を見ようとした学者はショック死したと言われている」

怖っ！ 滅茶苦茶怖いポケモンだな。

「よし、ピカチュウ！ ミミツキユをゲットするぜ！」

マジか、ゲットしちゃうのか。

サトシはピカチュウに技を指示をする。

「アイアンテールだっ！」

繰り出された技は、ミミツキユに命中した、が。

「ケ、ケケツ」

直撃したはずなのに、ミミツキユはビクともししていない。

「なっ、鋼タイプのは効果抜群なはずなのに、まったく効いてないのか!？」

驚いて、ロトムにもう一度ミミツキユのタイプを聞こうとするが。

「ピピツ、わかったロト！ ミミツキユの特性、ばけのかわロト。ばけのかわは、どんな攻撃でも一度は無効化するロト！」

なにそのチート。

ピカチュウの攻撃を防いだミミツキユは、素早い動きで接近し、ピカチュウにじゃれつく攻撃を繰り出した。

「くっ、接近戦は危険だ。ピカチュウ、エレキボール！」

ピカチュウは尻尾の先端から電気の球体を生成し、相手に放つ。

「ケケツ！」

だが、ミミツキユはシャドーボールを放ち、相殺する。

「なら次はっ——」

サトシは次の技を指示しようと口を開いた、その時。

『ちよつと待ちな!』

何処からか声が響き、正面に人影が現れる。

「な、なんだお前たちは!？」

カキ達、アローラ組はそう疑問を口にする。

「なんだ、お前たちはと聞かれたら。聞かせてあげよう我らが名」

……ああ、あいつら、やっぱり来てたのか。

「花顔柳腰・羞月閉花、儂きこの世に咲く一輪の悪の花、ムサシ!」

「飛竜乗雲・英姿颯爽、切なきこの世に一矢報いる悪の使徒、コジロウ!」

「一蓮托生・連帯責任、親しき仲にも小判輝く悪の星、ニヤースでニヤース!」

『ロケット団、参上!』

「ニヤのニヤ!」

「ソオーナンスツ!」

また、前口上が変わってるなあ。

派手な登場をしたロケット団に、アローラ組はポカンとしている。

「ロケット団? ……データにないロト」

「ふふん。ロケット団というのは、世界で超有名な悪の組織だ」

「そんな事も知らないニヤンて、困った凶鑑なのニヤー」

ロトムの疑問に、嘲笑しながら答えるロケット団。

だがロトムは気にせず、喋ったニヤースに興味深々と近づいて行く。

「ロトつ、喋るニヤース。新種ロト!?!」

ニヤースの周りを飛びながら、写真を撮っていくロトム。

「ニヤー、鬱陶しいニヤー!」

いまだに警戒心を抱いていないアローラ組に、俺とサトシは注意を呼び掛ける。

「ロトム、戻ってこい。そいつらは悪党だぞ」

「ああ、あいつらは人のポケモンを奪う、悪い奴らなんだ!」

ポケモンを奪う。それを聞いた皆は、抱いているポケモンを守るように構えた。

「人のポケモンを取るの、泥棒なんだぞ!」

マーマネがそう言うが、ロケット団は、挑発する様に言葉を返す。

「べーっだ! 褒め言葉ですよん。てゆうかミミッキュはあたらしが先に捕まえようと思っただんだから!」

「おい、ロケット団。毎回毎回としつこいぞ」

「ここで会ったが、百年目よ。ジャリブラザーズ」

俺もサトシの横に立ち、腰のボールに手を掛けて構える。

「おミャーラの強さは知っているニャ。だが真剣勝負、今日こそ負けないニャ！」

ニャースはそう言い、ピカチュウ目掛けて、みだれひつかきを繰り出す。

「ピカチュウ、迎え撃て！」

迫るニャースに、電気の球体を放つ。

「いきニャリ、エレキボール!？」

そのまま、ニャースに技が直撃する――。

「ケケツ」

と、思いきや。横からシャドーボールが割り込み、ニャースは事なきを得る。

「ニャー、ミミツキュ。助かったニャ」

「ケ、ケケケツ！」

ニャースとミミツキュは何やら、会話をしている。

「ふむふむ。ニャツ！ ミミツキュが、ニャー達に手を貸すと言っているニャー！」

いくら野生ポケモンといっても、面倒くさい事になったな。

「ミミツキュはピカチュウを憎んでいるらしいニャ。……ミミツキュは、好き好んでピカチュウの姿をしてるわけじゃないのニャ。その姿こそがミミツキュ最大の憎しみら

しいのニャ」

ニャースがなにやら、震えながらミミツキユの言葉を翻訳する。
にしても。ミミツキユって、本当に怖いポケモンだなあ。

「よくわからないけど、好都合みたいね。ミミツキユ！ なにか技を出して！」
ロケット団は勝機を感じているのか、小躍りしながら高笑いをしている。

このまま見ているだけじゃ、まずい気がするので俺も手伝う事にした。

「行け、バンギラス！」

俺が、今出せる最高戦力。バンギラスを呼び出す。

「ガアーツ！」

出てきたポケモンを見たロケット団は、動きが止まり狼狽え始めた。

「や、やばいぜっ、ジャリブラザーのバンギラスが出てきやがった！ 俺達のポケモンは本部に置いて来ちまったし……どうしよう」

「ちよつと！ ニャース、ソーナンス！ なんとかしなさいよっ」

ロケット団が、あたふたとしている内に指示を出す。

「バンギラス、ストーンエッジだっ」

指示を聞いたバンギラスが、地面を思いっきり踏みつける。

すると、踏みつけた少し正面の場所から、尖った岩が突き出る。岩は、ロケット団に

向かって勢いよく向かっていく。

「も、もう退場なのー!?」

どんとんと、突き出ていく岩がとうとうロケット団に直撃する――はずだったが。

「クウーッ!」

ロケット団に迫った岩を、突如現れたポケモンに破壊された。

「あの、ポケモンは確か……」

サトシと森で会ったヤバイポケモンだ。

「邪魔をするのなら、少し痛い目を見てもらうぞ! バンギラス、かみくだくだ!」

そしてバンギラスは、クマの着ぐるみの様なポケモンに向かって技を繰り出す。

「ガアーツ!」

「キューツ!」

だが、相手のポケモンは技を防ぎ、バンギラスと取っ組み合う。

……いやいや、俺のバンギラスと張り合えるなんて……こいつは野生のポケモンじゃないのか?

「な、なんか知らないけど、あたし達助かったの?」

「おいおい、あのバンギラスと互角っほいぞ!」

「この隙にジャリボーイのピカチュウを頂くニヤ!」

まずいな……。

この均衡を崩す為に、次の指示を出そうとしたが。

「キュッ！」

突然、バンギラスと取っ組み合っていたポケモンが後退して、距離を取った。

「ちよつと、あいつを抑えてなさいよっ……へ？」

「あつ、ムサシ……へ？」

そして着ぐるみのポケモンはロケット団二人を抱えて、何処かに走り去る。

「ニャ!? ミミツキュ、今は仲間を助けるのが先ニャー！」

そしてニャース達も連れ去られてしまった二人を追い掛けて行く。

『な、なにこの感じー!?!』

なんか、よくわからない内に危機は去った様だ。

「あのポケモン、一体なんだ？」

俺が疑問を口にすると、ロトムが解説してくれた。

「ピピツ、キテルグマ。ごうわんポケモン。ノーマル・かくとうタイプ。フレンドリーに腕を振るが、それは警戒の仕草、迂闊に近寄っては行けない。圧倒的な力を持ち、非常に危険」

「非常に危険……」

しかし、強力なポケモンだったな。明日からもっと特訓する事にしよう。
バンギラスを労い、ボールに戻しながらそう決意する。

「結局、あいつらは何だったんだろいうな」

「ポケモン、ゲット出来なかったね」

途中で邪魔が入り、ゲット出来なかった事を皆が残念がる。

「でも、アローラ地方には他にも沢山ポケモンがいますよ！」

「うん、チャンスはまだまだあるよ」

リーリエとスイレンがそう言うと、サトシも帽子をかぶり直し、元気な声で宣言する。
「だよな！ よーし、ピカチュウ！ どんどん見つけるぞっ」

そして、サトシとピカチュウは森の中へ走って行った。

今日は、新たな出会いにあまり嬉しくない再開で疲れたな。

アローラにもあんなに強いポケモンが居る事も分かったし、ますます楽しみだ。

設定1 *本編後推奨

現在出たユウキの手持ちポケモン一覧

・バクフーン

技構成

ふんか

れんごく

・マリルリ

技構成

・バンギラス

技構成

ストーンエッジ

かみくだく

・*****

・*****

・*****

ユウキが転生特典として持ってきたポケモン達。

転生してから、特典らしきモノがなかったため、首を傾げていたが、十歳の誕生日に自室の机の引き出しにボールとして入っていた。

おまけ。

転生してきて十年目、やっと旅に出れる。

「特典がなかったらどうしようかと思っただよ」

オーキド博士からポケモンを貰えるイベントは、当てがあるとか言っただけで断っちゃったからな。

下手したら、生身で野生ポケモンゲットするところだったぜ。

「さて、出てこい。*****」

お、おお……カッコイイ。最後に手持ちに入れといて良かった。

マスターボールから出てきた、その巨体に登って背中に跨る。

初めてボールからポケモンを出したのと、今までゲームのデータだった俺のポケモンが、今こうして目の前に居る事で感動が押し寄せ、気分が高揚してくる。

「漸くだ。行こう、****！ 空高くっ」

後の事を考えずに、そのまま飛び上がって旅に出る。

「すごいな、あつという間にこんな高く……マサラタウンがもうあんなに小さい」

「豆粒の様な大きさになった地元を見下ろし、このままジョウトやホウエンまで飛び回ろうかな。」

いや、まずはカントーを見て行こう。

「うーん、快適な空の旅だ。そういや、もう一体に空を飛べるポケモンがいたな」

そして、腰のボールを取り出し呼び出した。

「出てこい、****！」

出てきたポケモンは、俺の姿を見つけると、嬉しそうに体をすり寄せてきた。

「よしよし。実際に見たら可愛いなあ、お前」

そのポケモンは可愛いと言われると、俺の頬に激しく頭を擦り付ける。

「ん？」

その様子を見ている俺を乗せてくれているポケモンは、此方を羨ましそうに頭を振り

向かせる。

「ああ、ごめんよ。よしよし」

跨っている場所、背中を撫でると嬉しそうな声を出す。

「*****、*****。このまま暫く空を散歩しようか」

二匹が賛成するように鳴くと、少し速度を下げてゆったりと空の旅を楽しむ。

マサラタウンが見えなくなり、ニビシテイ、ハナダシテイと、どんどん景色が流れる。

そして、一通り見て回った俺はトキワに戻り、歩いて旅を開始した。

「な、なんだ、あのポケモン!?!」

「つべーマジ、ツべー」

「しゃ、写真!」

後日、新聞に載り騒ぎになったためユウキは反省し、自重した。

意外な相手とエンカウトゲデマル

先ほどのロケット団襲撃から、一時間ほど経った。

「ポケモン、出てこないねー」

マオがそう愚痴ると、ロトムが辺りをサーチする。

「この辺でポケモンが出現する確率は……九十%ロト！」

ロトムの探索結果が出た、その時。

「キシキシッ」

目の前にポケモンが地面から出てきた。

「あつ、このポケモン前に追いかけてたやつだ！」

サトシが見た事ある様な反応をした。

「そういや、初めて森に入った時にサトシが何か追いかけてたな。このポケモンだったのかな？」

「ピピツ、アゴジムシ。ようちゆうポケモン。むしタイプロト！」

目の前のポケモンを解説するロトム。

「むしポケモンかー、よしっ。ピカチュウ、捕まえよう！」

サトシは、ピカチュウと共に前に出てバトルを開始する。

「ピカチュウ、十万ボルトだっ」

放たれた電撃が、アゴジムシに直撃し、動きを止める。

「今だっ。モンスターボール！」

サトシは、ダメージを負って動けないアゴジムシにボールを投げた。

「どうだ……」

一回、二回。揺れるモンスターボールに、皆が固唾を飲んで見守る。

「キシッ……」

三回目の揺れの直後、ボールからアゴジムシが飛び出してしまった。

「ああ、惜しい。もうちよつとだったのに！」

出てきたアゴジムシは、地面に潜ってしまった。

「まだこの辺にいるロト！」

ロトムが、サトシに注意を呼び掛けた瞬間。

「きやあつ！」

リリーエに飛び掛かる影が見えた。

確か、リリーエはポケモンに触る事が出来なかった筈。

「危ないっ」

俺は咄嗟にリーリエを此方に引き寄せた。

「おわわっ」

「きやつ」

幸い、リーリエに怪我はなかったが、まだアゴジムシは地面に潜りながら俺達を狙っている。

「くっ、ピカチュウ。狙いを定めて、出てきた瞬間にアイアンテールだ！」

指示通り、ピカチュウは地面を見渡して構える。

「キシシッ」

だが、アゴジムシはピカチュウの真後ろに出てきて、いとをはいた。

咄嗟に距離を取るが、そのいとはピカチュウの足に絡みつき、避けようと跳んだ体を地面に叩きつける。

「ピ、ピカピ……」

その攻撃で目を回して、倒れるピカチュウ。

相手を倒したと確認したアゴジムシは、地面に潜って気配を消した。おそらく逃げたのだろう。

「ピカチュウ！俺、ポケモンセンターに行ってくるっ」

サトシはピカチュウを抱えて、この場から離れる。

「俺達も行くかうか」

「うんっ……と、その前に」

サトシを追いかけようと発言したが、マオは何故かジト目で見てくる。

「あのう……」

あ、やべ。

「ご、ごめん。リーリエっ」

リーリエを抱き寄せたままなのを忘れていた。

「いえ、助けてもらったので。……先程はありがとうございました」

よほど恥ずかしかったのか、顔を林檎のように赤くして、お礼を言う彼女。

「ユウキって、えっちな男の子だったんだね。気をつけなきゃ」

マオはまだジトツとした目で見てくるし……。

「ふふっ」

スイレンは何故か、笑顔で見てくる。目は笑っていないが。

「お、おい。早くサトシ追いかけてようぜ！」

カキの一言で、この何故か冷たい空間を脱する。

「そ、そうだな」

俺は慌ててそう言い、駆け足で出口に向かう。

ちなみにマーマネは、不穏な電波を感じて先に行ったのか、もう居なかった。

ピカチュウの回復が終わり、授業も終了した放課後、俺とサトシはアイナ食堂に来ていた。

「しかし、今日は惜しかったなサトシ」

「ああ、でも諦めきれないぜ。今からまた森に行こうかなー」

テーブルに項垂れながら、言葉をこぼすサトシ。

「まあまあ、今からポケモンを見つけるのは大変だし、この特製パインジュースでも飲んで落ち着いて」

マオが、注文した飲み物を持ってきて、サトシを宥める。

「ええー、でもなあ。ロトム、何処かい場所ない？」

サトシが諦めきれないのか、ロトムに頼る。

「ピピツ。ポケモンスクール裏の森、ただいまポケモン出現率九十%を超えているロト」

ロトムが結果を出すと、マオが俺の隣に座りながら喋る。

「あつ、いいかもね。私がアマカジに出会ったのも、その場所だし」

アマカジは、マオがいつも抱き歩いてるポケモンだ。

「アマカジ……フルーツポケモン。くさタイプ。おいしそうな香りが体から漏れだして

いる。この香りに誘われ本物のフルーツと間違う鳥ポケモンも多い」

ロトムがそう解説していると、空からアマカジ目掛けてナニかが飛んでくる。

「アンマツ！」

アマカジが突如飛んできた存在を、頭の帯を使って弾き飛ばす。

「ん、ポケモンか？」

飛んでいった方を見ると、鳥ポケモンが転がっていた。

「ピピッ。モクロー……くさばねポケモン。くさ・ひこうタイプ。一切音をたてず飛行し敵に急接近。気づかぬ間に強烈な蹴りを浴びせる」

ロトムが解説している間にも、モクローはまたアマカジに向かっていく。

「相手に気づかれてるし、蹴りもそんなに鋭くないぞ……」

めつちやアマカジに返り討ちにされてるよ。

「うーん。お腹が空いてるのかな？」

マオはそう言っつて、キッチンから果物の盛り合わせを持って来る。

するとモクローは、持ってきた果物に齧り付いた。

サトシは食事をしているモクローに近づくと、モンスターボールを持って話掛けた。

「なあ、モクロー。お前の事ゲットしていい？」

モクローは聞こえていないのか、ガツガツと果物を食べていた。

しかし、突然何かを思い出した様な表情をしたモクローは、最後に残った大きめの果物を足で掴むと、そのまま飛んで行った。

「あ、待ってくれ！」

サトシは追いかけるつもりなのか、慌ててリュックを持ち、支度をする。

「ゲツトするロト？」

「ああ、行くぞ！」

サトシはロトムと一緒に飛び出して行った。

「あつ、サトシ！ あれ、ユウキは行かないの？」

マオも行くつもりなのか、エプロンを脱ぎながら聞いてくる。

「おう、俺はちよつとやる事があるからな。サトシの事頼んだ」

マオは、わかったと言って、サトシを追いかけて行った。

サトシ達と別行動をとった俺は、森の中で修行をしていた。

「マリルリ、アクアジェット。バンギラスは、りゅうのまいをしながら避けてみる」

マリルリがアクアジェットでバンギラスに突っ込む。

しかし、バンギラスはりゅうのまいを維持したまま避ける。

攻撃を避けられたマリルリは、そのまま旋回して再度突っ込んでいく。

三回ほど、りゆうのまいを積めたのを確認して二匹に制止を掛ける。

「よし、こんなものか。お前ら、お疲れ」

マリルリとバンギラスを労って、博士から分けて貰ったポケマメを食べさせる。

「美味しいか? ……これ、ポフレみたいにもも食えるのかな?」

味が気になり、食べてみようかと悩んでいると、俺達の前にポケモンが現れる。

「っ!? カプ・コケコ」

突然現れた守り神は、俺の周囲を飛び回る。

マリルリとバンギラスは、警戒していつでも技を出せるようにしていた。

「カプツ。カプー」

カプ・コケコは俺の真後ろに立って、腰のボールを一つ取った。

「っ!? 何をするんだ、返せっ」

しかし、カプ・コケコは盗る気はないのか、素直に俺に返す。

「なにがしたいんだ?」

そう聞くと、カプ・コケコは少し離れて、エレキフィールドを発動させた。

「まさか、こいつと戦いたいのか?」

そうだ。と言うように、カプ・コケコは構えた。

なるほど。思い出せば、サトシとピカチュウを気にかけていたし、強そうな電気タイ

プのポケモンと戦いたいのかな。

そういう事ならば、いいだろう。

俺は、手に持っているスピードボールを投げた。

「行け、ライコウ！」

「ライガーッ！」

迂闊に出せないポケモンだから、いい機会だ。

「まずは、めいそうだ」

場に出たライコウは、目を閉じて集中する。

「カプツ」

だが、そこにカプ・コケコが電気を纏い、突進してくる。

「っ、避けるっ。そこからシャドーボールだ！」

カプ・コケコの攻撃をギリギリで避けたライコウは、黒い球体を生成して放つ。

シャドーボールは直撃し、カプ・コケコの動きを止める。

「今の内に、もう一度めいそうだっ」

ライコウは目を閉じ、めいそうをする。

カプ・コケコの動きを逃さないように観察すると、力を溜めている動作を始めた。

「なんだ？」

どんな技が来るか警戒をしていると、カプ・コケコは翼を広げて、かなりの速さで突っ込んで来る。

「ブレイブバードか！ ライコウ、避けろっ！」

ライコウは回避行動をとるが、相手の方が早かったのか、攻撃が当たってしまう。

「ラーイ……」

結構なダメージを貰ってしまったようだ。

まだ戦闘続行できるが、早々に決着をつけねば。

カプ・コケコは、挑発するように飛び、体に電気を纏う。

「いいだろう。どっちの電撃が強いのか、勝負だ！」

ライコウは俺の意思が伝わったのか、電気を体から溢れさせる。

「十万ボルト！」

「カプウツ！」

両者の電気技がぶつかり合い、森全体が光に包まれる――。

「ただいまー」

俺が家に帰ると、サトシは既に帰宅していた。

「あ、ユウキ。紹介するぜ！」

そう言つてサトシは、リュックの中身を見せてくる。

「クルウ……クルウ」

中には、先程のモクローが眠っていた。

「もしかして、ゲット出来たのか？」

「ああつ、実はな……」

サトシはモクローをゲットした時の出来事を語つてくれた。

「んで、モクローは仲間になつてくれたんだ。あ、そういやユウキは何をしてたんだ？」

サトシは首を傾げて聞いてくる。

「ん、実はな。これをカプ・コケコにな」

俺は、腕のZリングを見せる。そこには紺碧色のようなクリスタルがはめ込まれていた。た。

「すげーっ。そのZクリスタルはどうしたんだ？」

……最後にぶつかり合い、光が収まった後、カプ・コケコは居なくなっていた。

周囲を見渡すと、カプ・コケコが居た場所には、このZクリスタルが落ちていた。

今日のバトルの報酬だろうか？

今日の事をサトシに話していると、キッチンで晩御飯を作っている博士が、話に加わってくる。

「それは、ドラゴンZだな。でも確か、そのクリスタルは別の島にあるはずなんだが……
守り神が渡すくらいだ、何か意味があるのだろう」

ドラゴンZか……。アローラに来てから、ドラゴンタイプのポケモンは誰にも見られてない筈なんだが。

まあ、博士の言う通り、何か意味があるのだろう。

いつかドラゴンのZ技を使う日を楽しみにしながら、食器を並べてご飯の準備をしていく……。

海で釣りパニッククロバット

「サトシ、まだかー？」

「んぐぐつ、はむはむつ」

イワンコとじゃれながら、朝食を急いで食べているサトシに声を掛ける。

「げほつ、もう少し待ってくれー」

今日もサトシは寝坊して、遅刻しそうになっていた。

チラッと時計を見ると、今から登校しなければ間に合わない時間になっていた。

「あー、悪い。先に行ってるぞ」

俺は鞆を持って、家を出る。

「えつ、待ってくれよー！」

後ろから呼び止める声を無視して、駆け足でスクールに向かう。

海沿いを歩いていると、砂浜でスイレンとアシマリが何やら特訓をしているのが見えた。

「おーい、スイレン！」

挨拶をしようと、片手をあげて軽く手を振る。

スイレンは此方に気づくと、アシマリを抱えて歩いてくる。

「おはよう、ユウキ」

「おはよ。悪い、なんか邪魔したか？」

技の特訓らしき事をしている最中に呼んでしまったのに若干の罪悪感を感じていると、スイレンは微笑みながら首を横に振る。

「ううん。そろそろ行かないと遅刻しちゃう所だったから、助かった。一緒に行こう？」
スイレンの誘いを快諾し、一緒に登校する。

今日最後の授業が終わると、ククイ博士は明日の予定を話し出す。

「さて、明日は課外授業。海のポケモンとの触れ合いがテーマだ」

博士は、釣り竿を取り出しながら説明する。

「そのための釣り竿。そして、海といえはスイレン。明日はスイレンに特別講師を頼んでいる。宜しくな、スイレン」

スイレンは、多少緊張した様子で立ち上がる。

「は、はい。頑張ります」

「そーいや、初めて会った時も釣りをしてたな」

俺がそーいうと、笑顔で答える。

「うん、海のポケモン。というか、水ポケモンが好きだし」

しかし、釣りとなればポケモンに触る事になる。

同じ事を思ったのか、マーマネはポケモンを触れない彼女に尋ねる。

「明日は大丈夫なの？ リーリエ」

だが、彼女は自信満々に言葉を返す。

「心配ありません。きちんと対策を用意してあります！」

余裕な様子を見せる彼女に、スイレンはアシマリを抱えて近づく。

「良かった。明日は安心だね」

その時、抱えてるアシマリがスイレンの腕を抜け出して、リーリエの膝の上に乗る。

「アウツ、アウツ」

居心地が良いのか、アシマリは嬉しそうに手を叩いて鳴く。

「ここから、ダメだよ」

リーリエの隣の席に座っている俺は、慌ててアシマリを抱き上げ、スイレンの腕の中に返す。

「あ、リーリエツ、ごめん。大丈夫？」

スイレンが心配して声を掛けるも、リーリエは真っ白に燃え尽きた様子で口を開く。

「だ、だいじょうぶです。もんだいありません」

本日に明日は大丈夫だろうか？ 心配だ。

「じゃあ皆、明日は釣り竿を忘れないようにな」

だが困った、釣り竿は持っていない。

サトシも同様なので、博士に聞いた。

「博士、俺とサトシは持つてないよ」

ククイ博士は少し黙考すると、思い出した様に答える。

「たしか、地下の研究室にあったぞ。だが、一本しか無かったかな？」

一本しか無いのに困っていると、スイレンが挙手して話す。

「なら、貸してあげる。家に沢山あるから」

俺は、スイレンのありがたい提案を受け入れる事にした。

「助かるよ。サトシ、釣り竿どっち借りる？」

「うーん。俺は家にあるやつでいいや」

そういう訳で、俺はスイレンの家に行く事になった。

スイレンと一緒に下校していると、寄り道をしたと言ってきたので彼女について行き、道草を食う。

暫く歩いていると、砂浜に出た。

「ここは今朝、スイレンがいた場所か」

「うん、ここで毎朝特訓してるんだ」

すると、スイレンの腕の中に居たアシマリは砂浜に降りた。

「アウツー！」

アシマリは、鼻の先から水の風船をどんどん生成していく。

「もしかして、この技の練習を？」

「うん、バルーン。大きく出来るようにしたいんだ。それにここ、アシマリと出会ったと

こなんだよ」

スイレンはアシマリと出会った時の事を語ってくれた。

昔、スイレンが釣りをしていた所に、砂浜でスカル団にいじめられているアシマリを見かけたそうだ。

アシマリを助けて、ポケモンセンターに連れて行き、様子を見続けていたら仲良くなつて、スイレンのポケモンになった。

「へえ。いい主人に会えて良かったな、アシマリ」

俺がアシマリに向けて言うと、同意するように鳴いた。

「いつか、大きなバルーンの中に私が入って海の中、どこまでも……どこまでも……それが私の夢なんだ」

「いつか、出来るといいな」

そう言うと、スイレンは少し顔を俯かせる。

「でも、最近上手くいなくて……。それに、そんな大きさのバルーンなんて凶鑑とかで見た事ないから、自信がなくなつてきちゃつて……」

そんな弱音を吐いたスイレン。

先程、夢を語ってくれた顔とは反対に沈んだ表情。

そんな顔を見ると、胸が痛む。

「やってみなきや、わからない」

「え？」

ポツリと。溢した言葉に反応し、此方を見るスイレン。

「論理的とか、理屈とか……そんなの抜きに、やらなきやわからないよ。出来ないからつて、諦める理由にはならない」

やってみなくちやわからない。

これは昔、サトシに言われた事だ。

元々、そんな根性論は好きじゃなかった。

だけど、サトシはいつもそう言つて、結果を出してきた。

そんなサトシを見ていたら、俺もそんな言葉を言うようになっていた。

「やらなきや、わからない……。うん、そうだね！」

スイレンは、言葉を反復する様にアシマリと向き合う。

「アシマリツ、バルーンツ！」

指示を受けたアシマリは、鼻先からバルーンを作り出す。

「まだ、もつともつと大きくなつ」

アシマリは苦しそうな顔をするが、バルーンはどんどん大きくなっていく。

やがて、作り出された水の風船は、人が入れる大きさになっていた。

「す、すごいよアシマリツ！ よし、このまま——」

アシマリのバルーンを、その大きさのまま浮かそうとしたが、割れてしまい辺りは水浸しになる。

俺とスイレンは、アシマリの傍に居たため水を被り、びしょ濡れになってしまった。

「ふふっ」

「ははっ」

そんなお互いの姿を見ると、笑いが込み上がってくる。

「夢の達成は近そうだな」

俺がそう言うと、スイレンは無邪気な笑顔で言葉を返した。

「うんっ。その時は、ユウキも入れてあげるっ」

そういえば、スイレンの笑顔に見惚れるのはこれで二度目だったな。俺はそんな事を考えていた。

「ただいま」

「お邪魔します」

スイレンの家に着いた俺は、挨拶をして家にお邪魔する。

すると、奥の方からスイレンそっくりの小さな双子が出てきた。

「だれだれ!？」

「おにいさん、だれー?」

突然の勢いに戸惑っていると、スイレンが助け舟を出してくれた。

「もう、いきなり飛びついちゃダメだよ。ユウキ、紹介するね。ホウとスイ、妹達だよ」

なるほど、激似だな。

「スイレンそっくりな可愛い子達だな」

俺が妹二人を撫でながら言うと、この子達は爆弾を落とした。

「わかったつ。おねえちゃんのボーイフレンド?」

「ボーイフレンドツ、ボーイフレンドツ」

たしか、彼氏って意味だっけ?

「いや、違うよ」

「そう」

ん？ 言葉が被ってしまつて聞こえなかった。

「ごめんスイレン、今なんか言った？」

「……なんでもない」

……だつたらその目をやめてください。

「ちがうの？」

「ほんとにほんと？」

「ああ、本当だよ」

俺がそう言うのと、スイレンは何故か不機嫌な様子で俺の袖を引っ張る。

「釣り竿はこっち。来て」

今日来た目的を思い出し、釣り竿を貸してもらつた後、妹達含めてスイレンと軽く雑談して帰つた。

そして、次の日。

「……対策つてそれか？」

宇宙服の様な奇抜な格好をしている、リーリエに聞く。

「はいっ。これを着ていればライドポケモンに乗れ、さらに釣り上げたポケモンにも触

れます！」

「カツコイイ！」

マーマネのセンスがわからん。

「よしつ。みんな準備できたな。今日はスイレンが先生だ、スイレン」

ククイ博士がそう言うのと、スイレンは緊張した様子で前に出てきた。

「で、では。みなさん、釣り竿を持ってライドポケモンに乗ってください」

各々はラプラスに乗り、海を進んで行く。

暫く進んで行くと、先頭にいたスイレンが突然止まり、此方に振り返る。

「着いた。海のポケモンには浅いとこで暮らすもの、深いとこで暮らすもの色々い

るの。この場所、両方のポケモンが交わる不思議ポイントなんだ」

そして、驚きの事を言う。

「ここなら、カイオーガだつて釣れちゃう」

いやいや……。

「カイオーガ!?!」

サトシは信じ込んでいるみたいだ。

「もうっ、スイレン。からかつちやダメだよ」

マオが突っ込むと、スイレンは小さく舌を出して笑う。

「てへっ。それじゃあ皆、釣り竿を用意して。そしてルアーを思いっきり海に投げ込む！ コツは、浮きに反応があったらそのタイミングで……一気に巻き上げるっ」

スイレンは説明しながら、ポケモンを見事に釣り上げた。

「釣れたら、ポケモンフーズをあげてスキンシップ」

釣れたママンボウや、ラブカスと触れ合っているスイレンは、まるで海の女神のようだ。

「よーっし。俺達もやるぜ！」

サトシ達も釣りを始めた。

暫く釣り糸を垂らしていると、俺の竿が反応する。

「おっと、サニーゴか。よしよし」

リリースして、ポケモンフーズをあげながらサトシ達を見てみると。

「おっし、今だっ！ ……あー」

「タイミングが早すぎるロト」

「まだかなー。あつ、……あれ」

「タイミングが遅すぎるロト」

『いちいち、煩いっ！』

皆、苦戦しているみたいだ。

「釣れないね、カキ」

「マーマネ、勘違いするな。俺はほのおタイプの使い手。みずタイプとは相性がよくないんだ」

それは言い訳っていうんだよ、カキ君。

「来ましたっ!」

声が出たリーリエの方を慌てて見ると、釣り竿を引つ張り格闘していた。

釣り糸の先を見ると、水面から巨大な影が飛び出す。

「なっ、ミロカロス!」

リーリエが戦っていたのは、うつくしいポケモンのミロカロスだった。

「耐えてくれっ、すぐそっちに行く」

俺はラプラスを移動させて、リーリエの後ろに跳び移った。

「くっ」

リーリエの後ろから竿を一緒に支えて、ミロカロスを釣り上げようとするが、不意に体が宙に浮いた。

「っ?! リーリエ、竿を離すんだっ」

「は、はいっ」

戸惑うリーリエから竿を奪うように取った瞬間、俺はミロカロスに引つ張られて海上

に落とされた。

「ぶはっ。ああー、ごめん。糸が切れて逃げられたみたいだ」

「いえ、大丈夫ですか？」

リーリエに謝るが、気にしていないと言って、ラプラスに乗るために手を貸してくれる。

その後、スポットを移動しながら釣りをしていると、砂浜に居る博士に呼びかけられた。

「おーいっ。そろそろ休憩にしようぜー」

お腹も空いたため、ラプラスを海岸に休憩させる。

「うーん、釣れなかったなあ。午後は大物を狙うぞー」

皆と会話をしながら、立てたバラソルの元に歩いていると。

後ろから、ラプラス達の鳴き声が響き渡る。

振り向くと、空の気球から吊るされている網の中に、俺達が乗っていたラプラスが捕まっていた。

「な、なんだ!?!」

『なんだかんだと聞かれたらー!』

気球の中から、お馴染みの奴らが出てくる。

「でたな、ロケット団！」

「ちよつとつ！ 登場シーン邪魔しないでよ！」

「うるせえつ。前口上を書くの面倒くさいんだ！ これからは省略しろつ！」

「ニヤ、ニヤにを言っているニヤ？」

おっと、つい何処かの電波を受信してしまった。

「こほん。ラプラス達を離せ！」

俺がそう言うのと、ロケット団は網の中を見て、訝しんだ。

「あれ、ちよつと。ライドポケモンの他にザコが入ってるわよ」

網の中には、ラプラスやサニーゴも捕まっていた。

「……ザコ？」

背筋が凍るような声が後ろからした。

振り向くと、スイレンが顔を険しくしながらロケット団を睨んでいた。

「あいつら、許さない……」

スイレンの激変に驚いていると、サトシが行動を始める。

「ピカチュウ、アイアンテールで網を壊すんだつ！」

ピカチュウはロトムを足場にして跳んだ。

そして、網は破壊された。が、落ちていくラプラスの真下には鋭い岩が突き出ている

のが見えた。

「スイレンツ、バルーンでっ！」

俺が最後まで言わなくても、理解してくれた様ですぐにアシマリに指示を出す。

「アシマリツ、バルーンツ！ 凄く大きいのをっ」

瞬時に作られていくバルーンは前に見た時よりも倍以上に大きい。

「今っ。ラプラス達を包んで！」

大きさを維持したまま水の風船は飛んでいき、落とされていくポケモン達を包む。

「すごい、大きい……」

マオ達は初めて見るバルーンの大きさに驚愕している。

「くっ、なら直接捕まえるてやる！」

ロケット団はいつの間にか、砂浜に降りていて、此方に向かって来る。

「ピカチュウ！」

「アシマリ！」

皆もポケモンを前に出し、俺も腰のボールに手を掛けた時、海の向こうからポケモンが走って来る。

「キューツ！」

水上を走って来たのは、キテルグマだった。

「ちよ、ちよつとつ。あたし達まだ――」

「くそつ、またか――」

「ニヤニヤ――」

ロケット団は、キテルグマに抱えられて去って行った。

『なにこれな感じーっ』

「さっきのバルーン凄かったな!」

「あんなバルーン、記録に無いロト。データをアップロードロト!」

皆がスイレンとアシマリを褒めていると、博士が推測を語る。

「スイレンのポケモンたちを助けたいという思いが、アシマリの殻を破ることになったんだろう。最高じゃないか!」

なるほど。スイレンの夢が叶うのは、本当に近いな。

「なあなあ、さっきのもう一回やってくれよ!」

サトシが、スイレンとアシマリにそうせがむ。

「うんっ、アシマリ!」

アシマリは鼻先からバルーンを出し、サトシに向けて包んでいく。

「おおっ」

水の風船に包まれたサトシは、その状態で少し宙に浮く。

「あ たつ」

しかし浮いた瞬間に割れて、落とされたサトシは砂浜に尻餅をついた。

「あ、ふふつ。ごめん」

「アウアウツ」

スイレンとアシマリは、小さく舌を出して笑った。

……まあ、夢はいつか叶うさ。

スイレンといつか、バルーンの中で一緒に海の中で散歩するのを楽しみに、皆と笑い合う。

ショッピングでブーピッグ

今日は休日。なので、俺は時間を気にせず惰眠を貪っていた、のだが……。

「おい、弟よ。これはどういう状況だ？」

「いや、これは……」

家の中が騒がしかったので、起きて顔を洗おうと洗面所に向かったら――。

「床はビショビショだし、洗濯機は壊れてるし……なにやった？」

「わざとじゃないんだ！ シーツとか汚れちゃったから……」

話を聞くと、ククイ博士は用事で家を出ている様だ。

「ふーん、なるほど。後で謝っとけよ。さてっと」

博士が居ないので、俺達のご飯を作ろうとキッチンに向かう。

「あ、まって！」

「ん、なんだー？ ……サトシ」

何を作ろうと考えながら冷蔵庫を開けると、食材が何も無く、空っぽだった。

「お腹空いたから、料理したんだけど……」

台所を見ると、物体Xが捨てられていた。

「お前、料理出来なかっただろが」

「うん。でも入ってた物をそのまま食べようと思ったたら、ロトムが料理しろって」

元凶であるらしい、ポケモン図鑑を責める様に見詰めると。

「僕の言う通りにやれば失敗はないロト。……サトシを除いて」

「どうやら、サトシの行動が予想外すぎたらしい。」

「仕方ない。買い物に行こう」

今日は一日中、だからなら過ぎす予定だったのになあ。

不本意ながら、俺達は買い物に出かけた。

「えっと、食料はシヨツピングモールか」

肉などを買うため、目的地に向かってしていると。

「あれ、もしかして」

サトシが突然走り出すと、その先にはマーマネがいた。

「アローラ、マーマネも買い物か？」

マーマネに声を掛けると、遠慮がちに答えた。

「ほ、僕はアイスとか」

「アイス!? 俺も食べたいっ」

サトシはアイスと聞いて、俺を期待の眼差しで見ってくる。

「はあ……。じゃあ俺は買い物済ませちゃうから、行ってきな」

「よっしやーっ。行こうぜマーマネー！」

俺からお金を受け取ったサトシは、マーマネと一緒に走って行った。

「さて、行くか」

二人を見送った後、食材売り場に向かう。

「あとは、野菜に……。ついでに調味料を」

「あれ、ユウキ？」

買い物カートに商品を詰め込んでいると、後ろから声を掛けられた。

「ん、マオか」

「アローラ！ ユウキも買い物？」

マオは俺だと分かる、買い物袋を持って近づいてくる。

「ああ。マオもか？」

「うん。お店のお使いでね」

その後もマオと雑談をしながら買い物済ませて、会計を終わらせる。

「ねえ、まだ時間ある？」

そろそろサトシと合流しようと考えていたら、マオが可愛く首を傾げて訪ねてくる。

「そうだな、サトシはマーマネと一緒に居るから大丈夫だ」

荷物もそんなに多くないので、マオに付き合う事にする。

「やったつ。じゃあ、一緒にパンケーキを食べに行こつか」

俺の了承を聞くと、嬉しそうにする彼女。

可愛い。

「こつちだよつ」

マオに手を引かれて、お店に向かう。

その時――。

シヨップिंगモール内に、けたたましいサイレンの音が鳴る。

「な、なに!?!」

マオや周りの客が驚いていると、幾つものシャッターが下りて、店内に閉じ込められた。

さらに主電源が落とされたのか、灯りが消えて真っ暗になる。

「なにかあったのかな……」

マオが不安そうにして、掴んでいた俺の手を強く握った。

「大丈夫だよ」

「ユウキ……」

しっかりとマオの手を握り返し、安心させる。

「あれっ。アマカジ?」

マオが自分の周りを不思議そうに見る。

「アマカジッ!? どうしよう、ユウキ。アマカジが」

さつきまで一緒に居たアマカジが居ない。

「どうやら先程のサイレンに驚いて、何処かに行ってしまったみたいだ。

「暗いし危ないから、マオは此処に居て。俺が探しに行ってくるよ」

暗闇の中でむやみに歩くと危ないので、手を離してマオを此処に待機させる。

「待って、私も行く」

説得しようと振り向くが、マオは何を言っても聞かない様な目をしていた。

「離れるなよ……」

俺は呆れながら、手を差し出す。

「うんっ」

暗い店内の中、アマカジを探して歩き出す。

「あれ? ねえ、あそこ見て」

マオが指さした方を見ると、扉が開いていた。

「変な所でセキユリテイ低いな」

言いながら中を見ると、上へと続く階段があつた。
「登ってみようよ」

そう言うマオに手を引っ張られて、階段を登っていく
暫く歩いていると、屋上に出た。

「ユウキツ」

「ジャリブラザー!?!」

屋上にはサトシにマーマネ。

さらに、ロケット団が居た。

「アマカジッ！ 良かった、探したんだよー」

マオは、漸く見つけたアマカジを抱きしめた。

「サトシ、これはどういう状況なんだ？」

「さつきピカチュウとはぐれちゃって、探して此処に来たんだ。そしたら、あいつらが
なるほど、俺達と似たような状況だったのか。」

「けっ。邪魔が入ったからって関係ないわ！」

ロケット団のムサシは、ミミックユに指示を出す。

「ミミックユツ、シャドーボール！」

ピカチュウに向かって放たれるシャドーボール。

「くつ、まだやるのかお前らー！」

「もう一度、トケデマルのびりびりちくちくでっ！」

サトシとマーマネはポケモン達に指示を出す。

俺も、バクフーンを出そうとするが――。

「キュウウー」

『げっ』

夕日をバックにして、此方を見るポケモンが居た。

「また、この展開ニヤ」

そのポケモン――キテルグマは、ロケット団の方に飛び降り、彼らを抱きかかえて跳んでいく。

『なにこの感じー』

……最近バトルしてないなあ、俺。

「ところで、なんでマオが？」

ショッピングモールを出た俺達は、帰り道を歩いていた。

サトシは、なぜ俺とマオが一緒に居たのか疑問の様で、聞いてくる。

「買い物途中で会ってな、その後にパンケーキでも食べないかと誘われたんだけど、急

にシャツターが閉まったから」

「なるほどー。せっかくのデートが残念だったねーマオ」

「マーマネはデートだと思って、マオを茶化す。」

「そんなんじゃない、と思うけど。もし、そうだったら嬉しいなあなんて思ったり……」

「パンケーキ!? 俺も食いたいっ」

「サトシが変な所に食いついて来て、マオの言葉が後半聞き取れなかった。」

「……行って来たらしいと思うよ、今から」

「マ、マオ?」

「マオがサトシを心なし睨んで、口を開いた。」

「あ、いたいた。おーいっ」

「そこに、駆け足でククイ博士がやって来る。」

「書置きで買物に行くつてあつたから、探したぞー」

「すると、サトシはバツが悪そうに博士の前に出る。」

「博士、ごめんなさい。俺、冷蔵庫のモノとか……」

「だが、ククイ博士は気にしていないという風にしなから喋る。」

「分かってるさ。丁度いい、今日はアイナ食堂でディナーにしよう。皆も一緒にね」

「よっしやーっ。俺、ポテト大盛りっ」

「僕はミックスグリル」

「こちらこちら。サトシは少し遠慮しろって」

俺は調子に乗っているサトシを諫めながら、マオの方を向く。

「今日は何も食べてないから、早くマオの手料理が食べたいよ。楽しみにしてるね」
そう言うマオは、さっきまで不機嫌そうな顔から笑顔に変わった。

「うんっ。マオちゃんのスペシャル料理をお楽しみにっ」

俺とマオは自然と手を繋ぎ、皆と一緒に歩いた。

卵を育てようウデツポウ

午前の授業が終わり、昼休み。

皆のポケモン達は教室ではしゃいでいた。

「トケデマルはピカチュウが好きなんだなあ」

先程からトケデマルは、ピカチュウにくっついて遊んでいる。

どんどんヒートアップする、トケデマル。

すると体を丸めて、教室中を転がり回った。

「ひっ！」

此方に行ったり来たりして、リーリエに当たりそうになる。

トケデマルは本棚に当たり、止まるが、リーリエの動きも止まっていた。

「ごめん、リーリエ。大丈夫？」

動きがぎこちないながらも言葉を返すリーリエ。

「へ、平気です」

そんなリーリエにサトシは疑問を口に出す。

「そっかー、リーリエはポケモン触れないんだっけ。なんでなんだ？」

それを聞いたリーリエは、ハツとなりながら身嗜みを整えながら答える。

「さ、触れます。論理的結論として、わたくしがその気になれば……触れる、はずです！」
自信満々に答えるリーリエに、スイレンが突っ込む。

「でも、触ってる所を見た事ない」

「うっ……」

その言葉に、しよんぼりしてしまいうリーリエ。

しよんぼりリーリエ。なんか可愛い言葉が出来た。

「まあ、そのうち触れるようになるって」

皆が励ましの言葉を掛けていると、ククイ博士が教室に入ってきて来る。

「みんな。午後は校長先生の特別授業だよ」

博士はそう言って、俺達を校長室に連れて行く。

……ポケモンギャグ講座とかじゃないよな？

だがそれは杞憂に終わり、校長先生の机の上に卵が置いてあった。

「おお。待ってたタマンタ、マンタイン！」

「お、卵が二つある」

サトシも卵に気づき、声をあげた。

「うむ、サトシ君達が持ってきた卵がこつち。そしてこつちが、先日ラナキラマウンテン

で発見された卵だ」

「マーマネが発見された卵を見て、校長に聞く。

「なんの卵か、解析は済んでるんですか？」

「それは、後のお楽しみだよ。そこでだ、片方どちらかを君達が育てる、というのはどうかかな？」

博士も乗るように、俺達に説明する。

「ああ、ポケモンを卵から育てる。というのは勉強になるからね」

「皆でお世話をすればいいのですね」

「そうだ。卵の様子を毎日記録する、簡単だろう？」

「そうそう、ソーナンス！ という訳でどちらにする？」

校長先生に言われ、皆は卵を見比べる。

「うーん、どっちがいいかなあ」

マオが迷っていると、リーリエに振る。

「ねえ、リーリエはどっちがいいと思う？」

「え、わたくしですか。それなら、こちらがいいと思います」

リーリエが選んだのは先日発見された、白い卵。

「この模様がお花みたいで可愛らしいので……」

「え、そんな理由？」

「マーマネが突っ込むが、マオとスイレンの女子組は賛成の声を上げる。」

「あ、本当だ。いいかもねっ」

「うん、可愛い」

「育てる卵が決まり、それぞれどんなポケモンが生まれるか想像しながら、教室に戻る。」

「なんのポケモンなんだろうなあ」

「さあ……。だが、強い奴がいいな」

「教室で卵に触りながら会話をしていると、マオが閃いた様に声を掛ける。」

「あつ。ねえ、リーリエ。卵なら大丈夫じゃない？ ほら、触ってみたら？ 温かいよ」

「そ、そうですよね」

「リーリエは恐る恐る、手を伸ばしていく。」

「指が卵に触れるあと、数センチ――。」

「キヤアーツ」

「卵が急に揺れて、リーリエは驚き飛び上がる。」

「ご、ごめんリーリエ」

「唆したマオが謝ると、リーリエは落ち込みながら首を横に振る。」

「いえ……。卵も触れないなんて、わたくしは……。うう」

リーリエが出した、どんよりとした空気を変えるため、マーマネはロトムに声を掛けた。

「ねえ。卵の中をスキャンとか出来ないの？」

「そんな機能はないロト」

そこでスイレンは、思い出した様に口を開いた。

「あつ。夜どうするの？」

スイレンの言葉に、皆がハッとする。

「そうだよね、教室に置いて行く訳にはいかないし……」

「誰かが家に持っていくしかないな」

カキの提案に、サトシが挙手して答える。

「はいはいっ。じゃあ俺がっ」

だがこれはリーリエにとって、いい機会だと思うのでサトシの提案は却下させてもらおう。

「いや、リーリエが良いと思う。卵の世話をしながら少しずつポケモンに慣れていけばいい」

「うんっ、いいと思う。どうかなリーリエ」

マオが賛成し、リーリエに聞いてみる。

「わ、わたくしは……」

迷っているリーリエに、俺は励ましの言葉を掛ける。

「大丈夫。なにかあつて困つたら、俺達も手伝うから」

「ユウキ……。はいつ、頑張ります！ わたくしもスクールの生徒なんですからつ、できますー！」

そう言つて、鼻息荒く頑張る決意するリーリエ

頑張るリーリエ。頑張りリーリエ。

また可愛い言葉ができてしまった。

そして、全ての授業が終わり、それぞれ帰り支度を始める。

窓の外から鋭く光る二つの三日月のような目が、卵を狙っているのを誰も気づかずに、皆は教室を出る。

「ごめんつ。私、お店の手伝いをしなきゃいけないんだつた。ユウキ、後はお願ひね」

放課後、リーリエはまだ卵を触れないので他の誰かが運ぶ必要があつた。

そこで、言い出しつぺである俺がリーリエの家まで送り届ける事になつた。

「ああ、任せろ。ちゃんと届ける」

そしてマオは、手を振りながら去つて行つた。

「ところで、リーリエの家って何処にあるんだ？」

「少し遠いのですが、迎えが来るので大丈夫ですよ」

リーリエがそう言ったタイミングで、道の向こうから黒塗りの車が走って来る。

その車はリーリエの前で停まると、中から人が出てきて後ろのドアを開けた。

「リーリエお嬢様、お迎えに参りました」

初めて会った時からお嬢様っぽいと思っていたが、本物だったのか……。

「さて、行きましよう。ユウキ」

リーリエは、黒塗りの車を前に何とも言えない緊張感を覚えている俺に声を掛けた。

「あ、ああ」

後部座席に乗り、リーリエの隣に座る。

そして車は道路を走り、窓からはアローラの景色が横からどんどんと、流れ行く。

リーリエと他愛ない雑談を交わしていたら、車が停まった。

「着きました」

リーリエの後に続いて降りると、大きな屋敷が目の前に広がる。

「お、大きいな……」

「そうでしょうか？」

そこに、モノクルを付けて燕尾服を着た初老の男性が現れた。

「いらつしやいませ。当屋敷の執事をしております、ジエイムズと申します」

ジエイムズさんとの挨拶をそこそこに、屋敷内に案内される。

「ん？」

「どうしました、ユウキ？」

「いや、何でもない」

今、車の下からナニか出てきた感じがしたんだが……。

気のせいみたいだ。

屋敷の中に入ると、エントランスが広がっていた。

「これは、一人になると迷いそうな広さだな……」

なんとなく溢した言葉にリーリエは反応した。

「実は恥ずかしながら、寝ぼけて迷ってしまう事があるんです。あつ、わたくしの部屋は

こつちです」

赤くなった顔を誤魔化すように、部屋へと急ぐリーリエについて行く。

「ここです」

扉を潜ると、ポケモンの人形や難しそうな本が並べられている空間があった。

「なんか、イメーヅ通りって感じだな」

「そうですか？　なんか恥ずかしいです。あつ、卵は此方に」

奥にある、指定されたソファーに卵を抱えて歩く。

「あつ。ちよつと待つてくださいい！」

リーリエはストップを掛けて、本を一冊手に取りながら独り言を話し始めた。

「やつぱり……もう少し柔らかい方が……。これで良しつ。ユウキ、お願いします」

クツシオンを敷き詰めた所に、卵を乗せる。

すると、卵が僅かに動いた。

「気に入ったみたいだな。さすがリーリエ」

「えへへ」

ふと、ソファアの横の机に写真立てがあるのが目に入った。

「これ、もしかして……」

その疑問にジエイムズさんが答えた。

「はい。小さな時のリーリエお嬢様と奥様に、お坊ちやまです」

写っていたのは、リーリエの家族だった。

だが、この写真のリーリエはポケモンを抱いている。

「小さな頃のお嬢様は、ポケモンと戯れるのが好きだったのです」

なんと、小さい頃はポケモンに触れていたようだ。

「それが、どうして今は？」

リーリエは、少し落ち込み答える。

「分からないのです……」

悪い事を聞いたかな。と思っていたら、メイドさんが部屋に入ってきた。

「失礼いたします。紅茶とお菓子をお持ちしました」

運ばれてきたお菓子を並べて、俺達はティータイムに入った。

暫くお茶を楽しんでいたら、俺はあることを思いつき、提案した。

「なあ、少し練習してみないか？」

俺は、言いながらマリルリを呼び出す。

「ルリュッ！」

出てきたマリルリは俺の膝に乗ると、テーブルの上にあるお菓子を見つけて頬張りだす。

「ポケモンに触れるように、ちよつとずつ」

俺の提案にリーリエは少し悩むと、ぎこちなく首を縦に振る。

「はいっ。やってみます」

そして、恐る恐る手を伸ばすリーリエ。

膝の上に座るマリルリは、お菓子に夢中で動かない。

そのまま行けると思っただが……。

「ルリツ？」

指が触れそうになる直前に気配に気づいたのか、片耳がピクツと動く。

「ヒヤアアーツ！」

その些細な動きで、リーリエは驚き立つ。

「あー、ダメか。ごめん。ん、あれは」

窓の外を見ると、ポケモンが近づいていた。

「バタフリーか」

「あつ、はい。この時間になると、たまにやって来るんです」

リーリエはそう言いながら、机の引き出しを開けてポケモンフーズを取り出す。

「いっぱいあるけど、これもしかしてポケモンごとに違うの？」

「はい、それぞれ好みがありますから。一番合うものをあげているんです」

ポケモンフーズを皿に盛りつけると、バタフリーは美味しそうに食べる。

「凄いなあ。まるでポケモンブリーダーみたいだ」

「そうでしょうか？ あつ、お庭の方にもポケモン達が来ていますよ」

ほんのりと、赤くなつた頬を隠したリーリエが指さした方を見ると、沢山のポケモンが遊んでいた。

「おおっ。ポケモンパークだな」

集まったポケモン達を眺めていたら、端の方に整えられた地面が見えた。

「あれは、もしかして。バトルフィールド?」

「はい。毎日我々が手入れをしているので、今すぐでも使えますよ」

俺の疑問に、ジエイムズさんが答える。

「せっかくだから、バトルをしていっただらどうでしょう」

リーリエがそう言うが、相手が居ない。

「僭越ながら、この私がお相手いたしましたでしょう」

なんと、ジエイムズさんが名乗りをあげた。

「じゃあ、せっかくだし。お願いします」

俺とジエイムズさんはバトルフィールドに向かう。

「んじゃあ、マリルリ。君に決めたっ」

俺は、丁度ボールから出ていたマリルリを前に出す。

「そこらはマリルリですか。では、こちらは――」

ジエイムズさんは、ボールを投げてポケモンを呼び出す。

「行くのです、オドリドリッ」

出てきたのは、黄色い鳥ポケモン。

「オドリドリは、アローラ地方の島々特有の花の蜜によってタイプが変わるのです。そしてこれはぱちぱちスタイル」

ジェイムズさんの説明に合わせて、オドリドリは自分の羽毛を擦り合わせる。

「なんか、ぱちぱちしてる……。電気タイプか、油断するなよ。マリルリ」

俺の言葉に、マリルリは気合を入れる。

「お二人ともーっ、頑張ってくださいあーい！」

リリーエは自室から応援してくれている。

「では、行きますぞっ。めざめるダンスっ」

オドリドリは先程の様に羽毛を擦り合わせ、電気を発生させた。

そして羽根の先から、電撃を飛ばしてくる。

「マリルリッ、避ける」

ギリギリで避けたマリルリに指示を出す。

「距離を取って、ほらだいこだ！」

「させません、おうふくビンタッ」

オドリドリは、離れている所ではらだいをしているマリルリに向かって行く。

「アクアジェットで後ろに回り込めっ！」

オドリドリの攻撃が当たる直前、マリルリに指示を出す。

マリルリはアクアジェットで旋回し、ピッタリと後ろに付く。

「今だっ。すてみタックルッ」

「マリユッ！」

オドリドリに強烈な攻撃が当たる。

「なんですとっ!?!」

オドリドリは、ふらふらとして今にも倒れそうだ。

「ふふっ。久しぶりに燃えるバトルです。オドリドリッ、ふらふらダンス」

「させないっ。マリルリ、とどめのアクアジェット——」

「キヤアーツ！」

バトルの決着が付きそうなその時、叫び声が屋敷中に響き渡った。

「っ、リーリエ!? 行くぞ、マリルリ！」

助けを呼ぶように叫んだのはリーリエだった。

リーリエの部屋に、俺はマリルリを連れて駆けていく。

「どうしたっ、リーリエ！」

部屋に着き目に入った光景は、リーリエが卵の前で、腕を広げてポケモンから守っている姿だった。

「あれは、ヤトウモリっ。なぜお嬢様の部屋に」

一歩遅れて部屋に入ったポケモンの名を、ジェイムズさんは口にした。
「絶対に渡しませんっ」

リーリエが目の前のヤトウモリを強く睨み、卵を守る。

「ヤトー。ヤッツ！」

しかしヤトウモリは、リーリエを嘲笑う様に鳴き、リーリエの後ろの卵に向かって跳び込んだ。

「ダメーッ！」

「マリルリッ、アクアジェットだ！」

「ルリユーツ！」

ギリギリの所で技が当たり、ヤトウモリを窓の外に吹っ飛ばす。

「ヤ、ヤトツ」

「マリユーツ」

庭に叩きつけられたヤトウモリは、マリルリに凄まれて逃げていく。

「リーリエ、大丈夫か——って」

リーリエの安否を確かめるため、彼女の方に振り向いたら、驚く事になった。

「お、お嬢様。卵を……」

「へ？」

ジエイムズさんに言われ、リーリエは卵を確かめる。

卵は、リーリエの腕の中で抱かれていた。

「わ、わたくし。必死で。あ、温かい……」

リーリエは咄嗟の行動で一步前進したみたいだ。

「良かったじゃないか！」

「マリーユ！」

祝福の言葉を掛けると、マリルリも嬉しそうにリーリエに向かう。

「ヒイツ」

「マ、マリユ……」

どうやらポケモンそのものは、まだダメみたいだ。

「でも、卵に触れたんだ。大きな一步に間違いないよ」

「はいっ。わたくし、嬉しいです！」

リーリエは本当に嬉しそうだ。

この卵が生まれた時、リーリエは触れ合ったり出来るだろうか？

いや、きつと出来る。ポケモンの事を良く知る彼女だ。

仲良く遊んでいる所が想像できる。

リーリエの笑顔を見て、俺はそんな事を思った。

どくどくポイズンで大変ダストダス

アローラに来てから、数週間が過ぎた。

ここ最近、いろいろな事があつたなあ。

サトシがハラさんの大試練を突破したり、カキの牧場に手伝いに行ったり。

「ユウキもこつちにおいでよーっ！」

思い耽っていたら、マオに呼ばれた。

「おう！ リーリエも行こうぜ」

「わ、わたくしは卵が……」

「そんな似合つてる水着を着てるのに、遊ばないのは勿体無いつて」

「へ、あ、ありがとうございます」

なにやら動揺しているリーリエを引っ張り、マオ達の元に向かう。

「じゃ、博士。卵をお願いします」

「はいよ」

今日は、課外授業で海に来ていた。

「それっ」

海に入ると、マオに水をかけられる。

「それそれっ」

「うわっぷっ。お返しだっ！」

水を手で掬い、マオとリーリエに掛けた。

「きやつ。それならこっちは、スイレン！」

「任せて。アシマリ、宜しく」

スイレンはアシマリと協力して、水を被せてくる。

「ちよ、げほっ。ずるいだろ。ならこっちも」

ポケモンにはポケモンで。

「マリルリ、こっちに来るんだ！」

砂浜でバクフーンと遊んでいたマリルリを呼び、戦力を増強させる。

「よしっ。俺達もやるぞピカチュウ！」

「僕は、作ったこのプロスター型の水鉄砲で！」

少し離れて遊んでいた、サトシ達も参加してくる。

「カキも来いよー！」

カキも呼び、クラスメート全員で水を掛けあう。

たまには、こういう学生らしい青春も悪くない。

「よし。じゃあ、そろそろ授業を始めるぞ」

午前中は海で遊びまくり、昼食を食べ終えた頃、ククイ博士は皆に号令を掛けて集合させた。

「今回は、野生のポケモンの観察だ。それぞれターゲットを見つけて、レポートを書くように」

『はいっ』

博士の説明が終わり、皆はそれぞれ別の場所に向かう。

「そーいや、さっきのヒドイデみたいなポケモンがいるかもな。一応バッグを持っていこう」

午前中、サトシは海で泳いでる時に襲われたのだ。

博士は、強力な毒を持っているヒドイデというポケモンだと答えた。

なので、一応襲われてしまった時の為に道具が詰まっているバッグを持って、ポケモンを探しに行く。

「おお。ヒトデマンにシエルダー、なんか懐かしいポケモンばっかだな」

他にもヤドンなど、カントーでよく見るポケモンが沢山いた。

「おっ、あれはサニーゴか。よし、決まり」

少し離れた岩場にサニーゴの群れがいたので、観察するために近づく。

「そういや、サニーゴをこんなにしつくりと見た事なかったな」

観察しながらレポートを書いていると、新たな発見などがあった。

「ふーん。体に生えてる枝の数とか違うんだなあ。お、あいつほとんどの枝が折れてる」

そのまま観察を続けていると、近くの水面からスイレンが浮き上がって来た。

「ぶはっ。あれ、ユウキ」

「おう、調子はどうだ？」

進捗を聞かれたスイレンは、岩場を登って俺の横に座りながら答えた。

「こっちは、チョンチーとか色々。あ、ユウキはあのサニーゴを？」

「ああ。じつくり観察していると、気づいた事がいっぱいあったよ」

そう答えるとスイレンは、俺の手元に視線を落とし、レポートを見る。

「おー。見てもいい？」

もう書き終えた所なので、レポート用紙をスイレンに渡す。

横を見ると、アシマリが暇そうにバルーンを膨らまして遊んでいた。

「アシマリ、こっちおいで」

レポートを読んでいるスイレンに代わり、アシマリと遊ぶ。

「気のせいかな、バルーン頑丈になってないか？」

「アウツ、アウツ」

同意する様に鳴くアシマリ。

そうか、特訓頑張ってるもんな。

「あれ？ サニーゴがいなくなってる」

スイレンはレポートを読み終わったのか、顔を上げて周りを見る。

「本当だな。まあ、もう書き終えたし。行こうか」

レポートを受け取り、スイレンと一緒に砂浜に戻ろうと――。

「ツ!? スイレンツ」

スイレンの後ろからポケモンが跳んできたのが見えた。

「えっ？ ヒドイデッ――!？」

スイレンが振り向いた時には、もう顔に当たりそうになっていた。

「くそっ」

俺は咄嗟にスイレンを引っ張り、位置を変えた。

顔の前で交差させた腕に、鋭い痛みが走る。

「ユウキツ」

……スイレンの声が遠く聞こえる。

それに何故か、俺は地面に横たわっていた。

「アシマリツ、ヒドイデを！」

どうやら俺は、毒を受けてしまったようだ。

「スイ、レン……。カバ、ンを」

声も掠れて、上手く発声できない。

瞼も重くなってきた。

俺の目に最後に映ったのは、スイレンが涙を流している顔だった。

「うん……？」

目を覚ますと、最初に写ったのは不安そうなスイレンの顔だった。

「あ、よかった……。どくけし使っても具合悪そうだったから」

どうやら、カバンの中に入ってたどくけしを使ってくれたみたいだ。

「すまん。迷惑かけたな」

スイレンの膝から起きて謝ると、スイレンは激しく首を横に振る。

「違っ、それは私の方で……」

先ほどの事で落ち込んでしまったスイレンに、言葉を掛けようとするが、違和感に気づいた。

「あれ、なんで砂浜に？ どうやって……」

さっきの岩場は少し離れている。今いるのは、集合地点の砂浜だ。

スイレンでは俺を運ぶ事は出来ないし、アシマリが手伝っても……。

「えっと、実は――」

考え込んでいると、スイレンが言いにくそうに口を開こうとするが、やめて左を指さした。

首を傾げて、示された方を見ると。

「へ、なっ！」

少し離れた方で、あるポケモンが皆と遊んでいた。

そのポケモンは、俺が驚きの声をあげると、此方に飛んでくる。

「フウーンッ！」

俺の前に来ると、嬉しそうに体を擦り付けてくる。

「なっ、ラティアスッ!?! なんて、ボールから」

俺の手持ちである、ラティアスが勝手にモンスターボールから出てきていた。

戸惑いながらもラティアスを撫でていると、俺が起きたのに気づき、皆も此方にやって来る。

「お、ユウキ。目が覚めたか。驚いたぞ、ここで皆を待っていたら、そのラティアスがユ

ウキを乗せて来たんだから」

博士がそう言うのと、スイレンも頷き答える。

「うん。ユウキが気を失ってすぐに、ユウキのカバンに入ってたボールが揺れて、中からその子が出てきたの」

なるほど。こいつは俺の手持ちの中でも、一番心配性なやつだからな。

「ありがとうな。ラティアス」

感謝を伝えながら撫でると、ラティアスは気持ち良さそうに目を細める。

「ねえ。ラティアスって伝説のポケモンなんだよね？」

マオが疑問を口にするのと、博士が答えた。

「ああ、むげんポケモンのラティアス。遠い都では、ラティオスと並んで守り神と呼ばれている伝説のポケモンだ」

その説明で思い出すのは、今ここにいるラティアスとは別個体であるポケモン。

サトシも思い出したのか、ラティアスを撫でながらポツリと言葉を溢す。

「あいつも元気でやつてるかなあ……」

博士の解説を聞いた皆は、ラティアスを撫でながら感想を口々に話す。

「わたくし本で見た事はありますが、本物を初めて見ました」

「伝説のポケモンだもんねー」

「炎タイプじゃないのか？」

「エスパー・ドラゴンタイプ。ロト」

「伝説のポケモン……解析してもいい？」

皆、中々見れないポケモンにテンションを上げている。

「ね、ユウキ……」

ふと、スイレンに袖を引つ張られた。

「今日はホントにごめんね」

どうやら、まだ先程の事を気にしている様だ。

「だから、気にしなくていいよ。それよりスイレンに怪我無くて、本当に良かった」

スイレンの頭を撫でながらそう言うと、頬を桜色に染めて微笑んだ。

「うん……。ありがとう」

「うおっ!？」

頭を撫でている手が急に動いたと思ったら、ラティアスが自分の頭に俺の手を乗せていた。

「ははっ。私を撫でろっ、てところかな？」

博士がそう茶化す。そうだった、こいつは手持ち唯一のメスポケモンで、少し嫉妬しやすいんだった。

「まったく。体も楽になったし、遊ぼうか」

すると、スイレレンがぼそぼそと喋ってから、賛成した。

「むう、もう少し撫でて欲しかった……。うんっ、じゃあ皆でビーチバレーしよっか」

スイレレンの提案で、アシマリがバルーンを出して皆に飛ばしていく。

「よーしっ。それっ！」

今日は思わぬハプニングで、ラティアスが晒されてしまった。

だが、隠していたのは厄介な奴に目をつけられると面倒だからだ。

その点、皆なら大丈夫だろう。幸い今日は他に人が居なかったし。

「フウーン」

おっと、考え込みすぎたみたいだ。

今は、みんなと楽しもう。

ラティアスにバルーンを返し、遊ぶために思考を切り替えた。

設定2*本編後推奨

現在出たユウキの手持ちポケモン一覧

・バクフーン

技構成

ふんか

れんごく

・マリルリ

技構成

アクアジェット

はらだいこ

すてみタツクル

・バンギラス

技構成

ストーンエッジ

かみくだく

りゆうのまい

・ライコウ

技構成

十万ボルト

シャドーボール

めいそう

・ラティアス

技構成

ユウキは基本、バクフーン・マリルリ・バンギラスの三体を呼び出す。

残りの三体は、緊急事態やユウキが認めたトレーナーとのバトルなど、場に出る機会は少ない。

だが、旅に出始めの頃は転生したばかりで調子に乗っていたので公式戦などでバンバン出していた。

なので、カントー・ジョウト・ホウエンでは色々な意味での有名トレーナー。

おまけ

「ん、準備完了。行こっか、***」

声を掛けられたポケモンは、小さく唸って体を低くする。

背中に乗ると、体を浮き上がらせて空に飛ぶ。

今は夜中。人に見られる心配はない。

「あー、次の地方からは大人しくしよう……」

星空の中、俺は独り言を溢す。

「よく考えたら、ライコウとかラティアスとかお前は滅多に会えないポケモンだもんなあ」

俺を乗せているポケモンも同意する様に鳴いた。

今回と前回、旅をした地方では俺の名前が有名になってしまった。

調子に乗っていたとはいえ、公式戦でこいつら出したのは考えなしすぎた……。

「次からは、お前らはあまり出せないわ。すまん」

そう言うのと、腰に付けているモンスターボールから、ラティアスが出てきた。

ラティアスは、それは納得いかないと言うように、俺の服を掴んで引っ張る。

「いやホントすまん。その代わり遊ぶ時間はもっと増やすから」

だがラティアスは、もう一声。という風にして俺の顔をじつと見る。

「……。わかったよ、何か好きな物買ってやるって」

それはお気に召したようで、ボールの中に戻っていく。

「まったく、わがままな奴め。ん？」

一息ついたところに、今回の旅で貰ったポケナビが鳴った。

「エントリーコール？ えっと……」

確認すると、成り行きで一緒に旅をした、眼鏡の少年からの着信だった。

「おう、こんな夜中になんの用だー？」

「この時間は、もう寝ているはずだと思っていたら――。」

「今何処にいるの!？」

電話に出たのは、女の子の声だった。

「げっ、なんで」

「それはこっちのセリフ！ 何も言わないで行っちゃうなんて、信じられないかもっ！」

眼鏡の少年の姉である、赤いバンダナの女の子は電話越しに怒鳴る。

「シンオウ地方に行くのは明日って言ってたかも！」

今回、夜逃げのような形になってしまったのは、やはりまずかったか。

「いや、ほら。俺のせいでお前らに迷惑かけられないっていうか」

名前と顔が、今回旅をした地方で有名になってしまったため、どこを行っても取材班が構えているのだ。

だから、夜にこつそりと出発したのだが。

「言い訳は聞きたくないかも！ ……最後に顔を合わせたかったかも」

「すまん……」

それしか言えない……。

電話の向こうでため息が聞こえた後に、相手は俺に質問する。

「次は、シンオウ地方で旅するんだよね？」

「ああ」

そして、スピーカーから大声が響いた。

「私もいくかも！」

「うおっ!? ……え？」

「今すぐに行きたいけど、やりたい事があるから……でも終わったら、すぐ行くから！」

ふむ。この子はトップコーデイネーターになるのが夢だった筈。

シンオウにもポケモンコンテストがあるし、それ目当てかな？

「そうか、頑張れよ」

応援の言葉を伝えるが、相手は何故か拗ねた声を出した。

「……なんか、勘違いしてない？ まあ、いつか。じゃあ、待っててね」

「おう、また会えるの楽しみにしてる」

「うん……またねっ」

そこで通話は切られた。

電話をしてる内に、目的の地方が見えてくる。

さて、どんなポケモン達がいるのかな。

そんな事を思いながら、シンオウ地方に降りていく。

リーリエ、頑張っておさわりーリエ！

ある日の放課後、教室で突然リーリエの声が響いた。

「た、大変です！ シロンがっ」

声を聞いた皆は、リーリエの周りに集まる。

「シロンって何だ？ —— って、卵が光ってるっ」

カキが聞いた事ない言葉に疑問を口にするが、それよりも卵が光って動いてる事に驚きを表す。

「えっと。白くて、よくコロココロンと動くのでそう呼んでいるんです」

リーリエが疑問に答えた時、卵にひびが入る。

「う、生まれるぞ」

皆が固唾を呑みながら、見守る。

そして、卵がさらに激しく光り輝き、殻が破れる。

『やった、生まれたーっ！』

生まれてきたのは、白い姿のロコンだった。

声を揃えて、祝福をする。

「シロン……。良かった、無事に生まれて」

リーリエが嬉しそうに声を弾ませて喜ぶ。

撫でようと、リーリエの手が伸びるが――。

「リーリエ、もしかして」

スイレンに聞かれたリーリエは、顔を暗くして手を自分の胸に置く。

「そんな、卵の時は触れたのに……」

マオが驚いていると、教室に新たな声が割り込む。

「み、みんなーっ。これを見てクレツファイ！」

校長が光っている卵を抱えて、ククイ博士と飛び込んできた。

カントーから持ってきた卵が、今まさに生まれようとしていた。

卵を机に置いた時、眩しく光って、殻を破る。

そして生まれてきたのは、ロコン。

しかし、こちらのロコンは赤い姿のよく知る方だ。

「こっちは知ってるロコンだけど、白い方はアローラの姿なのかな？」

俺がそう聞くと、マーマネが答えた。

「そうだよ。でも、僕達からしたら赤いロコンが珍しいんだよ」

「ロコン。アローラの姿……。きつねポケモン。こおりタイプ。」

マイナス五十度の息を吐き、あらゆるものを凍りつかせる」
ロトムが突然解説を始めた。

「そしてこちらは、ほのおタイプ。六本のシツポは育つごとに毛並みがよくなり美しくなる」

「炎タイプか！ いいなっ」

カキは赤いロコンを前にテンションを上げる。

「こんっ」

そんなカキに、ロコンは火を吹いた。

「ふっ。熱いな、お前」

その火を正面から受けたカキは、爽やかに笑う。

いや、髪が焦げてるぞ。大丈夫か、お前。

「よろしくな、ロコン！」

そして、サトシはアローラのロコンに声を掛けた。

「ココンッ」

サトシは、ロコンから吹き出される粉雪を受けた。

「ぎ、寒い……」

そんな白いロコンの周りに、他のポケモン達が集まる。

赤いロコンを始め、集まったポケモンは白いロコン、シロンと仲良く遊ぼうと声を掛けるが。

「コーンツ」

シロンはそっぽを向いてしまった。

「シロン、こいつらはお前と友達になりたいってさ」

そう言ってみるが、またしてもそっぽを向く。

「しかし、このロコン達はどうするんだ?」

カキがそう疑問を口にする、校長が答えた。

「そのまま君たちが育てる。というのはどうだろう」

校長はそう言っ、赤いロコンを抱える。

「私がこの子を。君たちがその子を」

「誰かがゲットするって事ですか?」

マーマネが首を傾げながら聞く。

「それなら、決まってるな」

俺がそう言っていると、マオや他の皆も同意する。

「うん、そうだねっ」

「ああ、今まで卵の面倒を見てきたんだからな」

全員が、リーリエを見た。

「え、わたくし……。触れもしないのに」

リーリエは不安そうに、シロンを見詰める。

「パートナーになつてくれる？ シロン……」

「コンコンツ」

シロンはリーリエの前に来て、嬉しそうに尻尾を振つて鳴いた。

「シロンもリーリエが良いみたいだな」

「さ、リーリエ。これを」

博士はリーリエにモンスターボールを手渡す。

「……はいっ。いくわよ、シロンツ。モンスターボール！」

リーリエは気合を入れて、ボールを投げるが――。

「いでっ」

上に飛んで、俺の頭に落ちた。

「……ユウキ、ゲットですっ」

「リーリエ。ちゃんとやらなきゃだめだよ」

スイレンの白い目がリーリエに突き刺さっている間に、転がり落ちたモンスターボールにシロンが触れる。

「あっ」

誰かが声を漏らした時、シロンがボールに吸い込まれて、揺れが収まった。

「……シロン、ゲットですっ」

リーリエは嬉しそうにボールを拾い、シロンを出した。

「コンッ」

出てきたシロンを撫でようとするが、やはりリーリエの手は止まってしまふ。

「やつぱり、まだ……。どうしたら皆さんのようにポケモンと上手く付き合えるのでしょうか」

リーリエの目線は下のまま、ポツリと言葉を溢した。

「まあ、ポケモンと人との関係はいろいろある。ポケモンとどんなふうに関わりたいのか、それは自分自身で見つけていくしかないんだ。リーリエにも、それはきつと見つけれられる筈だよ」

「自分自身で……」

元気づけるようにその声を掛けるが、リーリエはシロンを見詰めたまま動かない。

「俺は決まってる！ ポケモンマスターになる事だっ」

「いや、サトシには聞いてないよ」

そう突っ込むと、皆が笑いながら言う。

「ははっ。サトシらしいな」

「だつろー？」

下校時間になり、皆は帰路につく。

「あれ、リーリエ。迎え来てるよ」

スクールの正門に、黒塗りの車が停まっていた。

「あつ、はい。すみません、今日は歩いて帰ろうかと」

「かしこまりました」

リーリエが運転手にそう言っていると、車は走って行った。

「どうして車に乗らなかつたんだ？」

そう聞くと、リーリエはシロンを見ながら答える。

「今日は、この子と歩いて帰ろうと思うんです。卵の時はずっと一緒でしたが、今のこの子はまだ知らない事だらけなので……。知るための時間を作ろうかと」

「うんっ。いいんじゃないかな！ 頑張つてねリーリエ」

マオはそう言つて、リーリエを送り出す。

「はいっ。では、ごきげんよう！」

リーリエは片手を上げて、シロンと共に歩き出した。

「おう、また明日なー」

俺もそう言つて、先に帰ったサトシを追いかけようとして――。

「行くよつ、ユウキ!」

「ぐへっ。行くつて何処につ!？」

マオに襟を掴まれ、引つ張られる。

「リーリエの後をついて行くのっ」

「へ、なんで。ちよつ、分かったから、歩くから、引つ張らないで」

仕方なくマオと共に、リーリエの後ろをこつそりつついて行く。

「マオは、本当にリーリエが心配なんだな」

「あんなにポケモンが好きなんだもん。リーリエにもポケモンと楽しく過ごしてほしいじゃない」

「ま、そうだな」

俺も、ポケモン達とふれあうのが好きだし。

「つて、ユウキ!」

「ん? あつ」

いつの間にか、リーリエ達を見失ってしまった。

「どこ行つたんだろう。仕方ない」

周りを確認して、モンスターボールを取り出す。

「ラティアス」

声を掛けると、ボールの中からラティアスが出てくる。

「リーリエ達を探してくれ」

ラティアスは頷くと、体をステルス状にして飛び立っていった。

「よし、俺達はこつちを探そう」

マオと共に、ラティアスと別の方向を探に行く。

数分後、透明になっているラティアスに手を引っ張られる。

「お、見つかったのか?」

そのまま引っ張られて行くと、女の子向けのアクセサリーショップの前に着いた。

「お前なあ。はあ、今度買ってやるから、今は――」

「キヤアアーツ!」

駄々をこねているラティアスを諫めていると、女の子の叫び声が響いた。

「今のって!」

「ああ、こつちからだっ」

今のは、リーリエの声だ。何かあったのかと、焦って声が聞こえた方に走り出す。

路地裏を抜けると、目の前には壁があって行き止まりだった。

「おかしいな、確かにこの辺から……」

「ユウキツ、上!」

マオに言われて上を見ると、リーリエが落ちてきた。

「——っ!? ラティアス、サイコキネシスッ」

落下してくるリーリエを、強力な念力で宙に浮かせてから抱きとめる。

「げっ、ジャリブラザー」

壁の上から声が聞こえたと思ったら、ロケット団がいた。

「お前ら、またなんかやったのか」

「へんっ、やるってーの? ミミツキュ、やっちゃってー!」

ロケット団のムサシがミミツキュに指示を出す、一向に動かない。

「だから、ミミツキュはピカチュウが居ないとやる気が出ないニャ……」

行動を起こさないロケット団に対して、リーリエは立ち上がりシロンに指示を出す。

「シロン、あの人達にこなゆきよっ!」

シロンはこなゆきを出して、ロケット団を氷漬けにする。

「クウーッ!」

そこに、キテルグマが現れてロケット団を担いで退場していった。

『なにこのかんじー』

「なあ、いつの間に触れるようになったんだ？」

「え、本当だ！ リーリエ、シロンに触れてるっ」

落ち着いた頃にリーリエをふと見ると、シロンを抱きかかえていた。

「えっと、はい。シロンを助けたいと飛びだしたら、いつの間にか抱き締めていて……」

「まあ、良かったじゃないか」

「はいっ！」

リーリエは嬉しそうにシロンに頬擦りする。

どうやら、卵の時と同じように必死なうちに克服したようだ。

「フウーン」

周りに人が居ないので、ラティアスは姿を現して先程リーリエを受け止めた時に落ちた帽子を拾い、リーリエの頭に被せる。

「ひっ！」

「あ、すまん」

……どうやら、まだシロン以外はダメみたいだ。

シチューに必須なピカチュウ?

今日は、マオに新メニューを作ると言われてアイナ食堂に集まっていた。

「どんなのが出るんだろうなあ」

サトシが涎を垂らしながら穂杖をついていると、奥のキッチンからマオが出てくる。

「みんなーっ。今日は新メニューの試食会に来てくれてありがとう！ もうすぐ出来るから、待っててねっ」

再びマオがキッチンに引っ込むと、目の前から腹の音が鳴る。

「うーん、待ちきれないよー。お昼抜いて来たから、早く食べたい」

マーマネがお腹を押さえながら言った。

暫く待っていると、店内に美味しそうな匂いが漂ってくる。

ふと、ポケモン達が遊んでいる所を見ると、ピカチュウが居ないのが見える。

「あれ、サトシ。ピカチュウは？」

「ん、さつきマオが連れてった」

「どうやら、ピカチュウの手伝いが必要で連れていったみたいだが……」。

何か嫌な予感がすると、思った瞬間――。

キッチンから激しい電気が放たれた。

「な、なんだ!？」

突然の事に皆が驚き立ち上がると、マオが手に料理を持って出て来る。

「お待たせー」

「あの、大丈夫ですか？」

マオは電撃を浴びたのか、所々焦げていた。

リーリエがマオの姿を見て、心配そうに聞く。

「えへへ、大丈夫だよ」

マオはそう言って、テーブルに料理を並べていく。

「じゃーん! 幻のアローラシチューだよっ」

「美味そうだな」

『いただきます!』

手を合わせた後に、皆が一齐にシチューを口に運ぶ。

……なるほど、これは。

『ビビビビビビッ!』

シチューを食べた者は体が痙攣し、テーブルに倒れ伏せる。

「どう? ビックリした? 美味しい?」

マオが期待の眼差しで聞いてくる。

「この料理は、一体……」

カキが、満身創痍でマオに問いただす。

「ピリツとした後味がたまらないでしょー？ それこそが幻のアローラシチューの特徴なんだって！」

「これは、ピリツとはなく……」

「ビリビリだよね……」

「ま、まるでピカチュウの電撃をくらったみたいだ……」

サトシが苦笑いで顔を上げてそう言うと、ピカチュウが反応して此方を向いた。

「ピカ？」

……。

「なあ、マオ。まさか」

嫌な予感が当たったと思い、マオに聞く。

「そうっ。ピカチュウの十万ボルトを加えてみましたー！」

だからこんなに痺れたのか……。

「えへへ。でも、ちよつと刺激が強すぎたかな？」

ちよつとどころじゃないと思います。

「あの、そもそも幻のアローラシチューとは？」

リーリエが電気で乱れた髪を整えながら、マオに質問する。

「えっとね――」

マオが口を開いた時、お店の扉が開いて人が入って来る。

「やあ、みんな。いらっしやい」

「あ、マオパパ」

スイレンは此方にやって来る人物、マオのお父さんに先ほどの質問をした。

「マオパパ、幻のアローラシチューって？」

マオのお父さんは知っている様で、顎に手を当てながら答える。

「なんだい急に？ えっとね、昔はお祭りや式典がある度に作られていたんだが……時
代と共に忘れ去られてしまっただけ」

「それで、幻……」

「知ってた？」

スイレンがカキやマーマネに聞くが、皆は首を横に振る。

「それなら、マオはどうやってこのシチューを作ったのですか？」

リーリエはマオに何処で知ったのかと問いかける。

「実はね、シチューのレシピをお兄ちゃんが送ってくれたの」

マオは、手に持っているノートを見せながら答える。

「兄がいたのか」

ぼつりと言うと、マオは頷いた。

「うん。今は料理修行の旅に出ててね、旅先で見つけた古い文献にアローラシチューの作り方が載ってたんだって」

料理修行の旅……。何故か、伝説の厨具を探す旅に出た兄の姿を想像してしまった……。

「それでね、レシピによるとシチューを完成させるには、やまぶきの蜜が必要みたいなんだ。それがピリツとした後味を残す大切な材料なんだって！」

すると、リーリエが何かに気づいたように口を開いた。

「やまぶきの蜜……。確か、今は時季外れで入手は難しいのでは？」

「うん、だからピカチュウに頼んで……」

「だからって何故、代用に十万ボルトツ。わからん、まったく分からない。ホワイ!? 理解に苦しむ」

カキが頭を押さえてそう言うと、マオは落ち込みながら食器を片す。

「あーあ。どうにか完成させて、アイナ食堂の看板メニューにしたかったんだけどなー」
ふむ……。

「んぐつ。まあ刺激は多少強いが、それはビリビリくるスパイシーな味で一部の人にはウケるんじゃないか？」

「あ、ユウキもそう思う？ この刺激がたまらないよねー」

俺に続いて、マーマネもこの料理を褒める。

「え、本当に!？」

「うーん、スパイシー？」

マオが嬉しそうにし、スイレン達は奇怪な目で俺とマーマネを見ていた。

「よし。みんな、お腹空いてるだろう？ 今から代わりの料理を作ろう」

マオのお父さんが、キッチンから顔を出して腕を捲りながら言う。

「いいんですか？」

カキが嬉しそうに、顔を上げた。

「ああ、楽しみにしてくれ」

『やったー』

シチューを一口で断念した皆が喜んだ。

『ご馳走様でした!』

マオパパの料理に舌鼓を打った皆は、それぞれ帰路につく。

「ほらロトム、帰るぞ」

「ちよつと待つロト、今アイナ食堂の料理を図鑑にアップロードを……」

ロトムを待っているせいで、サトシに置いて行かれてしまった。

てか、料理のデータとか図鑑にいるか？

「ユウキ、今日はありがとね」

椅子に座って待っていたら、マオが話掛けてきた。

「いや、こつちこそな。そういや、やまぶきの蜜が時季外れってどういう事なんだ？」

ロトムはまだ動きそうにないので、暇つぶしに聞いてみる。

「えつとー……」

マオは何やら口ごもっている、マオのお父さんがキッチンから出てきた。

「マオに代わって説明しよう。やまぶきの蜜は、ある限られた時季にしかとれない。例

外を除いてね」

「例外!？」

マオは驚くが、お父さんは肩を竦めて笑う。

「たしかね。昔、じいさんが言ってた事だから」

「えー。超ザックリしてる……」

ふむ、例外か……。

落ち込んだマオに、ある提案を試してみる。

「なあ。明日休みだし、探しに行ってみないか？」

「え、でも」

「どうしても食べたいんだ。(マオの手料理)好きだし、きつと最高に美味しいのが出来ると思うんだ。マオ、(幻のシチューを) 凄く食べたい」

「ふえっ、いき、いきなり何を!？」

言葉が少し抜けてしまった気がするが、きつと伝わっただろう。

いきなり料理の腕を褒められて照れてるのか、顔を赤くしているし。

「んんっ。分かった、明日、探してみよっか」

そこに、ロトムがやる事を終えて来た。

「お待たせロトト。ん？ マオの顔が赤いロト、まるで恋す——」

「そ、そうだ！ ロトムも明日付き合ってよ！ じゃ、また明日ねっ」

何か言おうとしたロトムを、マオは掴んで俺に押し付ける。

そして、俺達は店の外に押し出された。

次の日。

「ねー、ユウキ。お父さんの説明、かなりザックリしてたし……やみくもに探しても見つ

かるかどうか」

不安そうなマオに、今日一緒にについて来たロトムが得意げに喋った。

「ふっふふのふー。こんな時こそ僕の出番ロトー。なんと、データによると……オドリドリはやまぶきのミツが好物ロト。だからオドリドリを見つければ」

「追いかけて探せばいいのか」

「でも、今から探しても見つかる確率は八パーセントロト」

あまり現実的ではない数値に、マオは顔を暗くする。

「なに、八パーセントもあるんだ。きつと見つかる」

マオもその気になったのか、気合を入れる。

「うんっ、そうだね！ 絶対見つけるんだからっ」

そして、俺達は森中を歩き回った。

マオを肩に乗せて、木の上を確かめたり……。

「居たか？」

「ううん。……重くない？」

洞穴の中を覗いたり……。

「気をつけろよー」

「うん」。キヤーツ、ゴルバッドが襲ってきたーっ！

そして……。

「探し始めてから、五時間が経過した口ト」

少し疲れ、野原に腰かけて休憩する。

「見つからないな……」

「うん。でも、諦めないっ。絶対に、やまぶきの蜜を手に入れるんだから。幻の料理を、アイナ食堂の看板メニューにするために！」

マオは、鼻息荒くそう宣言する。

「燃えてるな……。でも、なんでそんなに看板メニューに拘るんだ？ 今だって美味しい料理は、いっぱいあるだろう？」

するとマオは、アマカジを片手に微笑む。

「私の夢はね、アイナ食堂をアローラーの食堂にすることなの！ 看板メニューでお店を知ってもらって、お父さんの料理を沢山の人に食べてもらいたいんだっ！」

「アローラーか、凄いな」

「完成したら、まずはユウキに食べて欲しいな」

マオは、はにかんだ笑顔でそう言った。

「おうっ。絶対に見つけ——。あっ」

マオに抱かれているアマカジを見て、閃いた。

てか、なんで気づかなかったんだ俺。

「どうしたの? ユウキ」

マオが、途中で言葉が途切れた俺を不思議そうに見る。

「いや、オドリドリが見つかるかもしれないと思ってな」

「どういう事ロト?」

「どうやって?!」

ロトムとマオは、テンションを上げて聞いてくる。

「アマカジだよ。あまいかおりを出せるだろう? それで野生のポケモンをおびき寄せれば……」

「なるほどっ、いいかも!」

そしてマオは、アマカジを背の高い岩に乗せて、指示を出した。

「アマカジ、あまいかおりをだして!」

「アンマツ!」

体を回転させながら、広範囲にかおりを出していくアマカジ。

すると、一分と経たないうちに鳥ポケモンなどが集まって来る。

「よし、オドリドリを探そう」

俺達は辺りを見渡して、目的のポケモンを探す。

「うーん、虫ポケモンが多いなあ」

集まりすぎて、中々大変になって来た。

「あ、二人ともあそこロトツ！」

何故か、ペリッパーに喰われてるロトムがアマカジを指さす。

「マジカツ、マジカツ！」

アマカジを見ると、オドリドリに啄まれていた。

「オドリドリ!？」

俺とマオが声を揃えて驚くと、あまいかおりが止まり、野生ポケモン達は森に帰っていく。

オドリドリも正気に戻ったのか、飛んで行ってしまった。

「あつ、追いかけよう！」

「うんっ」

俺達は、離されないように疾走する。

だが、オドリドリは此方を一瞥すると、スピードを上げた。

「このままじゃ……。アマカジ、お願いっ」

「アンマツ」

そこで、マオは走りながらもアマカジにかおりを出させた。

「ドリツ?」

すると、オドリドリは引き寄せられるようにアマカジに飛んでいく。

「よしっ」

だが、アマカジはあまいかおりを止めると、また飛んで行ってしまった。

「あ、アマカジッ、お願いッ」

「アンマツ」

再び、オドリドリは飛んでくる。

あまいかおりを止めれば、また飛んで行く。

そしてまた……。

……無限ループって怖い。

そんな事を繰り返しながら暫らく走っていると、アマカジが枯れた様子でマオの元に落ちていく。

「アマカジ……こんなになるまで、ありがとね」

「後は、俺達に任せてくれ」

オドリドリを見ると、洞窟の中に入って行くのが見えた。

「あそこかっ!」

追いかけて、洞窟を抜けると……。

「これ、もしかして」

マオが驚いた様子で、言葉を溢した。

洞窟を抜けた先にあつたのは、山吹色の花が辺り一面に咲いている光景だった。

「間違いない口ト。あれは、やまぶきの蜜が取れる花口ト」

「ホントに見つけられた……」

「良かったな、マオ」

「うんっ！」

喜んでいるマオは、早速やまぶきの蜜を採ろうと花に近づくと。

俺も、花を近くで見るとためマオについて行くと――。

突然、足元から網で掬い上げられて、俺とマオは捕まってしまった。

「なんだ!？」

「なんだ!？」と、言われたら」

「聞かせてあげよう、我らの名を」

「花顔柳腰・羞月閉花、儂きこの世に咲く一輪の悪の花、ムサシ！」

「飛竜乗雲・英姿颯爽、切なきこの世に一矢報いる悪の使徒、コジロウ！」

「一蓮托生・連帯責任、親しき仲にも小判輝く悪の星、ニヤースでニヤース！」

『ロケット団、参上!』

名乗り口上を聞くの、久しぶりだなー。

いや、そんな事思ってる場合じゃないな。

「作戦成功なのニャ」

「やまぶきの蜜は、私達が全て頂いて行くわ!」

「ニャース、ちやつちやとやってくれ」

ロケット団のニャースは、掃除機のようなものを持って花に近づく。

「この万能お宝吸引マシンで、ばつちり全部吸引取るニャ」

そして、そのマシンにどんどん花が吸引取られていく。

「や、やめて! せつかく見つけたのにつ」

「へへーん。そこで指を咥えてみてな」

「くそつ。どうにかこの網を……」

脱出するために、腰に付いているモンスターボールを取ろうとするが、網に絡まって腕が動かない。

「そうだ、アマカジッ!」

必死に腕を動かしていると、突然マオが叫んだ。

下を見ると、アマカジがあまいかおりを出して、ニャースの動きを止めていた。

「おい、ニャース。顔がだらしないぞー」

「そうよ、しつかりなさい。ペルシアンに負けてもいいの?」

「はニャ!? ぜ、全然大したことないニャ」

だが、すぐ正気に戻って再び花を吸い取っていく。

「ア、アンマーッ!」

大したことないと言われて怒ったのかアマカジは、あまいかおりを激しく出した。

そして、突如アマカジが光に包まれる。

光が収まった時、そこにアマカジの姿は無く――。

「アマーイッ!」

可愛らしいポケモンが立っていた。

「アマカジがっ」

「進化した!」

俺とマオが驚いていると、一緒に網の中にいたロトムが解説を始めた。

「アママイコ……フルーツポケモン。くさタイプ。身を守る為、ヘタが発達。硬いヘタから繰り出される往復ビンタはかなりの威力」

なるほど。下では早速ニャースが、ビンタの威力で泣かされていた。

「アンマイッ」

アママイコは跳び上がって、網を破壊してくれた。

「よし、これならー!」

ボールを取りだし、ポケモンを呼び出す。

「バクフーン、きあいだまだっ!」

力を溜めたバクフーンは、ニヤースに向かって攻撃を放った。

「ニヤー!?!」

ニヤースが吹っ飛ばされると同時に、花を吸っていたマシンが破壊される。

「アママイコ、往復ビンタッ」

硬い頭のヘタで、ロケット団は頬を何度も打たれる。

「て、撤退よー」

のそのそと逃げていくロケット団に追い打ちを掛けようと、バクフーンに技を指示する。

「もう一度、きあいだまで奴らを吹き飛ばせ!」

そして、渾身の力が放たれて――。

「クウツ!」

キテルグマに攻撃を塞がれる。まあ、予想はしてたが。

『なにこのかんじー!』

やはり、ロケット団はキテルグマに抱えられて去って行った。

「お待たせつ。今度こそ、幻のアローラシチューだよ！」

俺達は、再びアイナ食堂に集まっていた。

「アマイツ」

アママイコが運んでくるシチューは、凄く美味しそうだ。

「進化して、お手伝いが楽しそうですね」

リーリエ達は、アママイコを見て微笑んでいる。

「さて……じゃあ」

カキがスプーンを握り締めて、固唾を呑む。

『いただきますつ』

……これは。

「ど、どうかな……っ？」

マオが不安そうな顔つきで感想を聞く。

シチューを一口食べて黙ってしまった俺達は、一斉に顔を上げて――。

『美味しいっ！』

それを聞いたマオは、喜びを表して腕を上突き出した。

「やったーっ！」

「どんどんシチューを口に運んでいく皆は、食べながら感想を言っていく。

「ピリツとする後味がいいですね」

「うん、幻の美味しさ」

俺達、男性陣はあつという間に平らげて……。

『おかわりっ』

「これは美味しいぞー！」

「まあ、僕はこの前のもいいと思うけどね」

マオは皿を回収しながら、嬉しそうに口を開いた。

「みんな、ありがとう！ これも、一緒に探しに行ってくれたユウキにロトム、アママイ

コのおかげだよ！」

ああ、本当に苦労して探した甲斐がある。

「グウー……」

感動に浸っていたら、目の前のマーマネからお腹の音が鳴った。

「マーマネ……」

苦笑いでマーマネを見ると、慌てて弁解する。

「だ、だってっ！ これを食べるのは今日で最後だと思っただけ……寂しくて」

寂しくて腹が鳴るってなんだ。

「マーマネったら……」

「普通、寂しくてお腹が鳴る？」

女性陣が白い目でマーマネを見ていると、おかわりを持ってきたマオが笑顔を浮かべて。

「安心して、看板メニューにはならなかったけど、期間限定で残す事にしたから」

「やったー！」

マーマネの食い気に、皆は呆れる。

そして、試食会が終わり、皆はそれぞれ帰って行く。

「今日はありがとう。美味しかったよ、マオ」

別れ際、マオに今日のお礼を伝える。

「ううん、こつちがありがとうだよ」

「それじゃ、またな」

「あ、待ってっ」

帰ろうとすると、マオは俺の腕を掴んで止める。

「……ねえ。また、必要な素材とかあったら一緒に探してくれる？」

何故かそんな事を聞いて来た。

「当たり前だろう？ マオが困っているなら、すぐに助けるさ」

思っている事を言うと、掴んでいた手が離された。

「うんっ。ありがとう！」

夕日のせいかな、赤くなっている顔で微笑む彼女だった。

恥ずかしい過去で家にコモル―

早朝、家の前の砂浜でサトシはバトルの特訓をしていた。

「モクロー、木の葉ー。イワンコは岩落としだっ」

木の葉と岩落としがぶつかり、砂が吹き荒れる。

視界が晴れた時、モクローの姿は消えてイワンコは戸惑った。

モクローは羽音を立てずに、イワンコの後ろを取って体当たりを浴びせる。

強烈な足を使った体当たりには、イワンコは倒れ伏せた。

「イワンコ、お疲れ。休憩しててくれ。次、ニャビー出てくれ」

サトシに声を掛けられて、ニャビーはモクローの前に立つ。

そういや、サトシの手持ちポケモン増えたなあ。

イワンコは、凄く懐いてそのまま仲間に。ニャビーは色々あったけど、最後にはサトシを認めたからついて来た。

「あれ、モクロー？ ……寝てる!? 仕方ないなあ。ピカチュウ、代わりに頼む」

その後も、時間ギリギリまで特訓は続いた。

「サトシー、そろそろ時間だ」

スクールに遅れる可能性があるので、まだ続けているサトシを呼ぶ。

「わかったつ。よし、全員ナイスファイトだったぜ！」

そして、スクールで午前の授業を終えて昼休み。

皆とお昼ご飯を食べていた時、マーマネが思い出した様に口を開いた。

「あつ。ねえ知ってる？ 最近この島にすつごく強いポケモントレーナーが出没してるらしいよ！」

マーマネがそんな事を言うと、マオも弁当箱を片付けながら答える。

「あー、知ってる。この前、お客さんが噂してた……謎のルガルガン使いだよね。真夜中の姿を連れ歩いてるみたい」

すると、サトシが興味を持ったのか、立ち上がる。

「おおっ！ ルガルガンかー、バトルしてみたいなー」

授業が終わり、その日の放課後。帰り道にある広場で、人が沢山集まっていた。

「ん、なんだ？」

サトシも気になるのか、中心に近づく。

そこでは、トレーナー同士がバトルをしていた。

「カメックス、ロケット頭突き！」

「……ルガルガン、カウンター」

戦っているルガルガンは、自分より二倍以上あるカメックスの体を吹っ飛ばした。

「なあ、サトシ。あいつが噂のルガルガン使いじゃないか? ……サトシ?」

反応が無く、横を向くがサトシは居なかった。

周りを見ると、ルガルガンのトレーナーに話掛けていた。

「なあつ。俺、マサラタウンのサトシ! 今のバトル、カツコよかつたぜつ。次は俺とバトルを――」

「お兄様!」

ん? お兄様?

サトシの挑戦を遮って来たのは、リーリエだった。

「噂のルガルガン使いは、お兄様だったのですね!」

「え、ええ!」

サトシは口を大きく開けて、仰天していた。

「リーリエ……ポケモンに触れるようになったのか?」

リーリエの兄はルガルガンを戻した後、リーリエの腕に抱かれているシロンを見て、僅かに驚いている様子だ。

「はい。シロンつていいいます。ほら、シロン。グラジオお兄様よ」

「コーン?」

「グラジオ様。シロンはリーリエ様がタマゴのときからお世話をなさり、初めてゲットしたポケモンでございます」

リーリエの後ろから、嬉しそうなジエイムズさんがやって来る。

「……そうか、大切にしろよ」

だが、リーリエの兄。グラジオは、それだけ言うのと連れていたブラッキーと去って行く。

「あつ。グラジオ様！ 久しぶりにお戻りになったのですから、是非ご一緒にお屋敷へ

「遠慮しておくよ、ジエイムズ。……じゃあな、リーリエ」

一度リーリエ達に振り向くと、また歩き出そうとするが。

「あ、まって！ バトルしてくれないか!？」

サトシが慌ててグラジオを呼び止めた。

だが、グラジオは無視をして去って行く。

「俺、ポケモンマスターを目指してるんだつ。だから、アローラの強いトレーナーとバトルしたくて……」

それでもサトシは諦めないのか、グラジオの横で歩きながら話す。

「おい、サトシ。そんな無理に頼んでも応えてくれないだろう……」

これ以上はグラジオの迷惑になると思い、サトシを呼び止める。
「えー、でもお」

まだ駄々をこねるサトシだが、グラジオは俺達を一瞥すると、視線が腕に落ちた。

「それは、Zリングか」

「ああ、カプ・コケコから貰ったんだ」

「なに……!? カプ・コケコからだど?」

グラジオはポツリと言って、歩みを止めた。

そこにリーリエが追ってきて、グラジオに話し出す。

「サトシは、カプ・コケコとバトルした事があるんです」

「バトルだど!?!」

「サトシの兄である、ユウキも凄く強いトレーナーですよ。ぜひ戦ってみたらどうでしょう? 家にはバトルフィールドもありますし」

……リーリエちゃん。兄を家に連れて行きたいのは分かるけど、俺を話に出さなくても。
「考えておこう」

だが、グラジオはそう言って去ってしまった。

「俺達、ククイ博士の家にいるからっ、待ってるぜー!」

サトシは、そんなグラジオの背中に手を振った。

その後、帰ろうとしたらリーリエに引きとめられ……。

せつかくなので。と、リーリエに言われて俺達は家にお邪魔していた。

「お兄様は、半年ほど前に家を出たのです。修行をしてくると、突然……」

「ポケモンバトルの腕を磨きながら、人生やこれからのこといろいろ考えてみたい……そんなふうにおっしゃっていたそうで」

リーリエとジェイムズさんは、グラジオの事を話してくれる。

「でも、今日会ったお兄様は……。なんだか、わたくしの知っているグラジオお兄様と別人の感じがして」

リーリエは憂いた顔で、紅茶を飲みながらそう言った。

「……ついこの間のような気がいたします。グラジオ様がイーブイを連れ帰ったあの日のことが」

そこでジェイムズさんは、開いたカップに紅茶を注ぎながら口を開く。

「まだ幼いお坊ちやまが、傷だらけのイーブイを抱きしめて、私に必死に助けを乞うたのを……」

その話を聞いて、確信した。

「グラジオは優しいままだと思うよ」

そう答えると、リーリエはキョトンとした顔で首を傾げた。

「グラジオはブラツキーを連れていた。きつと、その時のイーブイなんだろう。リーリエもブラツキーの進化条件は知っているよね？」

「確か……。トレーナーに懐いていないと進化は――」

そこまで言うとりーリエはハツとなり、嬉しそうに顔を綻ばせた。

「はい……。きつと、お兄様はお優しいグラジオお兄様のままですなっ」

「んがっ!？」

夜。気持ちよく寝ていたら、腹にナニか乗って来た。

「ん、ピカチュウ?」

俺に乗って来たピカチュウは、天井を指し示す。

「ピ、ピカピツ」

上を見ると、口に何か啜えているブラツキーが天窓を叩いていた。

ブラツキーは啜えていたモノを放すと、紙がヒラヒラと落ちて来る。

「あん? なになに……。『五時まで海岸で待つ。バトルをしたいなら、時間までに来い』ああ、グラジオか」

サトシ宛ての手紙だと思い、サトシを起こす。

「おい、サトシ。おい……。ダメか、ピカチユウ」

中々起きないので、ピカチユウを頼る。

「ピカツ。ピーカーヂユウツ！」

「うわーっ!? な、なんだっ!?」

跳び起きたサトシに、手紙を見せる。

「え、なに? ……よっしやー!」

「バカ、静かにしろ。博士が起きるだろう」

「ご、ごめん」

サトシは、そそくさと準備をして玄関に向かう。

「あれ、ユウキは行かないの?」

再びソファアに寝ころんだ俺に、サトシは不思議そうに首を稼げる。

「眠い。面倒くさい。つか、それサトシへの手紙だろ」

「そ、そっか」

俺は寝起きが悪い。それを知っているサトシは、さっさと家を出た。

さて、おやすみ。

「あれ、ユウキ。今サトシの声が聞こえたんだけど、何かあったか?」

「……。サトシなら、リーリエの兄から呼び出しを受けてバトルしに行った」

目を閉じた瞬間に、ククイ博士が起きて来た。

「ああ、夕飯の時に言っていた件か。でもこんな時間からかー。ユウキ、様子を見に行つてくれるか？」

「……わかった」

渋々、俺は家を出る。

砂浜を歩いていると、人影が見えてくる。

近づいて行くと、声が聞こえてきた。グラジオとサトシだ。

「どうやら、今からバトル開始みたいだ。俺は、この距離のまま観戦する事にする。」

「それじゃ、早速。行け、イワンコッ！」

サトシがイワンコを出した後、グラジオはボールを構えた。

「出でよ……紅き眼差し。ルガルガンツ」

「ま、まさか……。グラジオの奴っ！」

俺はこの時、逃げ出したい気分だった。

「ふっ。カプ・コケコとバトルしたお前の腕、試させてもらう」

そう言つて、グラジオは、翳すように右手を、顔に当てる。

「間違いないっ。奴は！ 中二病だっ。」

「前世での俺の記憶が蘇ってくる。」

俺はグラジオを見ているだけで、そこら辺を転がり回りたい気分だった。

正直、もう帰りたいかった。

「イワンコ、岩落とした！」

「かみくだくっ」

過去への羞恥に悶えている間にも、バトルがどんどん進んで行く。

「ルガルガンツ、ストーンエッジだ」

激しい攻撃が繰り返されて、つい其方に目を向ける。

それと同時に、イワンコとルガルガンに網が降りかかるのが見えた。

突然の事に驚き、目を凝らすと、ロケット団の仕業みたいだった。

……ちようどいい。

俺はサトシ達の元へ走りながら、バンギラスを呼び出す。

「うえっ、ジャリブラザー!?!」

何か喚いているロケット団を無視して、Zリングを着けている反対の腕を捲り、バン

ギラスの横に立つ。

「久しぶりにやるぞっ。バンギラス！」

バンギラスは俺を一瞥して、頷く。

「その力を以て、過去との決別をっ。バンギラス、メガシンカ！」

腕のメガバングルが光り輝き、バンギラスの力を増幅させる。

そして、光に包まれたバンギラスが姿を現す。

「メガバンギラス、かみ砕け！」

元々巨大なバンギラスが、メガシンカでもう一回り程大きくなり、その巨体で大地を揺らした。

かみくだく攻撃で、ルガルガン達を捕らえている網を破壊する。

「ちよ、せつかく捕まえたのにつ」

「うるせえつ、俺は今機嫌が悪いんだ！ 飛んでけつ、ストーンエッジ！」

眠気と羞恥心に襲われている俺は、もうお家に帰りたい一心だった。

『ヤなかん——』

メガバンギラスの攻撃で吹っ飛んだロケット団は、空中でキテルグマに回収されていった。

『やっぱりー』

「サトシの兄の、ユウキと言ったか」

バンギラスを戻して、さっさとこの場を離脱しようとしたが、グラジオ君に話掛けられてしまった。

「うっげ。……こほん。ああ、リーリエの兄のグラジオだろう？　こうして話すのは初めてだな」

今すぐに踵を返したかったが、無視する訳にもいかない。

俺は、平常心を保ち、にこやかに話す。

「俺は、強くなるために修行をしている。ユウキ、俺とバトルをしてくれないか？」

……面倒になってきたな。

「いや、ほら。サトシとの勝負があるだろう？　俺は、また機会があればという事で

……」

それとなく逃げるが。

「勿論サトシとの勝負も続ける。その後に頼む。さっきのメガシンカ、お前は強いと感じた。特にあのセリフが」

バンギラスを見て、じゃないの？

なに？　メガシンカの前口上で強そうって。

……勢いでセリフ言っちゃったが。あれ、まさに中二ツ――。

取まった筈の羞恥心が蘇る。

「え、ああ、そう？　いや、でも」

「お兄様――！」

どう逃げようか、考えていると。こんな時間なのに遠くからリーリエが走ってくる。

「リーリエ？ 何故ここに。勝負はまた今度だな、サトシ」

「おう、また今度な！」

「お前のイワンコの目は、俺のルガルガンに似ている。きつと強くなるだろうよっし、助かった。さすが困った時のリーリエだつ。」

「ユウキ、次に会うのを楽しみにしている」

あつ。完全に目をつけられた。

「……ああ。またな」

それを聞いたグラジオは、満足そうにブラッキーと去って行った。

「はあ、はあ。あれ、お兄様は？」

息を切らせたリーリエは、グラジオが居ないのを不審に思う。

「グラジオなら、もうあそこ」

指さした方には、グラジオの姿がもう豆粒の様に小さくなっていた。

「もうっ。今日こそ屋敷に寄ってもらおうと思っていたのに」

もう遠くに見える兄の姿を見たリーリエは、頬を膨らませて愚痴る。

博士の家に戻ったら、もういつもの起床時間になっていた。

「おう、お帰り。どうだった？」

リビングでコーヒーを啜っている博士が出迎えてくれる。

「グレンジオとのバトル、熱くて最高の気分だったぜっ」

「過去の傷を塩水に漬けられた気分だった」

「ユウキは何があつたんだ？」

博士は口元を引き攣らせて、再びコーヒーを啜る。

はあ……。羞恥で火照つたこの体を冷まそう。

俺は、トボトボと風呂場に向かった……。

カントーに向かつてとんぼがえり 前編

いつも通りの朝。ポケモンスクールの教室。

「けど、長い時間が経った気がするな。」

皆の手持ちポケモンを期間限定で交換して、その結果リーリエが少しだけピカチュウに触る事が出来たり、サトシのルガルガンが新種らしい黄昏の姿に進化したりなど、色々あった。

「今日も楽しい授業が始めると思ったら、自然と顔が緩んでくるな。」

「始業時間になり、ククイ博士とナリヤ校長が教室に入ってくる。」

『アローラ!』

皆で挨拶をすると、校長が前に出てきて大きく両手を挙げた。

「アローラ! えーこの度、ポケモンスクール開校二十周年を祝して特別な課外授業を行うことになったん……ダンゴロ! ガントル! ギガイアス!」

「特別な課外授業!」

サトシが目を輝かせて、勢いよく席を立つ。

「行き先は、カントー地方だっ」

ククイ博士がそう言うのと、サトシはあからさまにガツカリと頭を項垂れさせた。

「なんだー、カントーかあ。はあ」

いや、そんなガツカリするなつての。俺達の地元だし、あの誇り高きカントーの戦闘民族、マサラ人だろ。

「私の従兄弟、オーキド博士の研究所を訪ねてカントーのポケモンをたつぷり見てもらいたいんだ」

「そして、カントーでの特別ゲストを呼んであるよ」

校長と博士の言葉に、サトシだけでなく皆の気分が上がっているみたいだ。

『面白そうっ』

そして、俺達はマサラタウンへと飛び立つ。

マサラタウンの空港に着き、広い場所で全員が集まるまで待っていた。

「リーリエ、まだかなあ」

マオがそうぼやくが、確かにまだ来ない。

「いつの間にか、はぐれたのか？ ちょっと探してくる」

来た道に戻ろうとするが、少し離れた所にリーリエはシロンを抱えて男性に何度も頭を下げていた。

「あれ？ あつ——」

しかし、その男性は知っていた顔なのでサトシは短く息を漏らした。

「タケシーツ」

そう、一時期だけ一緒に旅をした仲間だった。

サトシはタケシに向かって走りだすと、タケシも気付いたのか、手を大きく広げて走る。

しかし——。

「美しい！ なんとお美しいキャビンアテンダントさん！ この果てしない空で、僕と……恋の逃飛行をしませんか？」

サトシではなく、近くを通った女性に飛びついた。

なんだ、いつも通りか。

「リーリエ、タケシと何かあつたのか？」

タケシは年上のお姉さんしか口説かないが、一応、念のために聞こう。

「知り合いの方ですか？ あの人は、具合の悪いシロンを看てくれたんです」

ああ、なるほど。タケシは今、ドクター見習いだっけか。

まだお姉さんを口説いているタケシに声を掛けようとするが、

「つたく！ わざわざ空港まで迎えに来てあげたらこのありさまなんだから！」

「あだだっ」

タケシの耳を引つ張って止める女性が現れた。

「カスミツ」

サトシが嬉しそうに声を上げるが、俺の胃は悲鳴を上げていた。

「まったく。あんたはいつもいつも、……うん？ ユウキ？」

「ああ、カスミ……、久し、ぶりだな」

「気まずさで顔が引きつってしまおうが、久しぶりの再会だ。笑顔を見せようじゃあないか。」

「ユウキ、変顔してどうしたんだ？」

サトシは少し黙ってようか。

「ええ、久しぶりね。所で、あの事は考えてくれた？」

「いや、それは、お断りしたはず、だろう？」

今すぐにアローラに戻りたいっ。

細かい事は省くが、昔一緒に旅をしていた頃に、ハナダジムでカスミの姉達と一悶着あった。

その結果、何故かカスミと一緒にジムを運営しろなんて、三姉妹から意味の分からない要求を突き出されたんだ。

カスミも満更でもなさそうな態度してないで、止めて欲しい。

「そう。まあ、姉さん達が嫌いから早く決めてよ」

「おおん………んんっ、紹介するよ。タケシとカスミだ」

話を逸らす為に二人をアローラ組の前に立たせる。

「ああっ、カントーを一緒に旅した仲間だっ」

いぞサトシ。そのまま有耶無耶に、

「初めまして、世界の美少女でハナダジムのジムリーダー、カスミよ」

ふう。変な空気が戻った。

「そして、ユウキはマイステディよ」

あれ？ 空気がいきなり冷えたな。

「ははっ、カスミ。俺に対して、ポケモン出す時の決め台詞を言うなよー。俺はポケモンじゃないぞー」

流れ出る冷や汗を必死に拭いながらアローラ組を見ると、

『ユウキ………？』

フリーザーが出す吹雪よりも冷えた空間があった。

「いや、ほらっ、サトシが良く『君に決めたっ』とか言ってるだろう？ 同じく別に深い意味は無いと思うぞっ」

「いや、俺はちやんと——んぐっ」

ちよつと黙ろうか、弟よ。

というか、何でこんな弁明しなきゃいけないの？

「ご、ごほんっ。そして俺は、ポケモンブリーダーにしてポケモンドクター研修生。さらに、ニビジムの元ジムリーダーのタケシです。どうぞよろしく」

すかさずタケシが、地割れでこの空気を瀕死にさせる。

流石タケシ、その鋼の肉体とメンタルで躊躇無くこの場を切り刻むなんてっ、そこにシビれる憧れるう。

「なあ、特別ゲストってもしかして二人なの？」

サトシがそう聞くと、博士が苦笑いで答える。

「ま、まあ、その辺は研究所に着いてからな。オーキド博士を待たせてるしね」

俺達は、博士の後に続いて研究所に向かう。

だけど、後ろから繰り出す女性陣の睨み付ける攻撃に俺はメンタルを削られる。

いや、もう蛇にらみだわ。

研究所に着き、オーキド博士に挨拶を済ませた後は、アローラとカントーで姿が違うポケモンを見る事になった。

「うわー、カントーのナツシーは小さいなあ」

「おいマオツ。ダ、ダグトリオの毛が無い、ぞつ」

「カキ、カントーのはツルツルなんだよ。あつ、ベトベトン久し、ぶ、り」

タケシは、ベトベトンに吞まれてるサトシを懐かしそうに見ると、モンスターボールを取り出す。

「最後はコイツだな」

ボールから出たのはガラガラで、

「おつ、アローラのガラガラなら俺が」

カキもガラガラを出す、二体のガラガラがお互いを見ると額をぶつけ合った。

「ちよつ、喧嘩は駄目だぞつ」

「落ち着けつ」

カキとタケシはガラガラ達を抑えるが、喧嘩は収まらない。

「ピー、ピカチュウ」

ガラガラ達の間割り込み、宥めるピカチュウ。

『ガラツ、ガラガラアツ』

しかし、吹き飛ばされるピカチユウ。

あつ、コレはマズいですねえ。

「ピッ、ピカチユーツ」

『あばばばばば』

カントーの、ガラガラ以外、電撃、があ……。

「この痺れる感じ、久しぶりねー」

カスミは真つ黒な姿で懐かしむが、スイレンとカキが突然叫びだした。

「アスマリが居ないっ」

「俺のガラガラもだっ」

辺りを見るが、近くには居ないみたいだ。

「二手に分けて探そうか」

そう言つて、俺達は男子と女子グループに分かれてアスマリ達を探しに出る。

わざわざ男女に分けたが、個人的な事情ではない。

本当だ。

「ガラガラー、何処だーっ」

俺達は、不自然な岩場を登りながらガラガラを探していた。

「うーん、見つからないなあ。よし、ここは僕の作った――」

その時、足下の岩場が膨らみ上がり、目の前に巨大な影が現れた。

「イイツワーツ」

『なっ、イワーク!?!』

「出てこい、マリルリツ」

俺はマリルリを呼び出して、タケシと共にカキ達の前に立つ。

「落ち着けっ、何もせず、大人しくしていれば大丈夫だ」

タケシの言うとおりに何もせず、身を強張らせていると、イワークは俺達に背を向けてこの場から移動を始めた。

『ふう………』

ほっと一息をついた瞬間――。

「ガアラガラーツ」

何処からかカキのガラガラが現れて、イワークにホネこんぼうを繰り出した。……
はっ?

「タケシ、こういう場合はどうすれば?」

カキが恐る恐るイワークを見ると、タケシはゆっくりとイワークに背中を見せて、

「逃ーげるんだよおーっ」

『やっぱりかーっ』

迫り来るイワークから全力疾走で逃げるっ。

「はあ、はあ。もう大丈夫みたいだな」

あれから三十分程走ったぞ。

「あれ、あつちもアシマリを見つけたみたいだな」

カキの目線を辿ると、女子達が仲良く話していた。

ふむ。どうやら、あの凍える吹雪はもう起きないみたいだな。良かった良かった。

「ユウキ。何で満足げな顔をしているが分かんが、きつとそれは間違いだ」

タケシが変な事を言っているが、聞き流す事にしよう。

「あつ、そつちもガラガラ見つけたんだねっ」

スイレン達と合流して、研究所に戻ろうとした時――。

『あつ』

ボールから出していたポケモン達が、降ってきた網に捕らわれてしまった。

「なんだ!?!」

「なんだかんだと聞かれたら」

「答えてあげるが世の情け」

「こいつらもカントーに来てたのかよ。」

「世界の破壊を防ぐため」

「世界の平和を守るため」

「おつ、この口上はカントー版じゃないか。」

「愛と真実の悪を貫く」

「ラブリーチャーミーな敵役」

そこで、巨大なニヤース型のロボットが森を掻き分けて姿を現した。

「ムサシッ」

「コジロウツ」

この際にポケモンを出して攻撃したいが、懐かしい口上なので最後まで聞いてやろう。

「銀河を駆けるロケット団の二人には」

「ホワイトホール、白い明日が待ってるぜ」

「あ、ニヤーンてニヤッ」

前口上が終わった後、呆れを滲ませた声音でカスミとタケシがため息を吐いた。

「あんた達、まだこんな事やってるの?」

「早くポケモン達を返せ。吹き飛ばされたくないだろう?」

そう言われたロケット団は声を荒げる。

「うるっさいわねえ。元祖ジャリガールにジャリボーイ二号っ」

「今度こそお前らのポケモンを頂くっ」

ロケット団は網を引っ張って、俺達のポケモンを回収するが、そうはさせない。

「出てこい、バクフーンッ」

「ルガルガン、キミに決めたッ」

俺とサトシでニヤースロボを攻撃するが、

「噴火しろっ」

「ルガルガンは岩落としだっ」

「甘いニヤッ。ニヤニヤニヤニヤニヤッ」

ニヤースロボは、素早い打撃で攻撃を跳ね返してくる。

「俺達もやるぞっ。来い、クロバット」

「ええ、出番よ。マイステディッ」

タケシのクロバットとカスミのヒトデマンか、頼もしいな。

「ヒトデマン、バブル光線っ」

「クロバット、超音波だっ」

タケシ達も加わり、ロボットが崩れていく。

「ええいつ、まだよつ。ミミツキュツ」

ロボットからロケット団が出てくると、ムサシがミミツキュを出した。

「カスミ、タケシ。あのミミツキュは以上に強い。気をつけてくれ」

二人に忠告するが、空からナニか降ってくるのに気付いた。

地面に降り立ったそのナニかは、

「きゅー」

体に謎の機械を取り付けた、キテルグマでした。

『え?』

ロケット団を含めた、俺達全員が頭にハテナを浮かべていると、キテルグマはロケット団を抱えて空に飛び立った。

『なんでカントーまでえツ!』

ロケット団の叫びが空に消えた後、一件落着かと思われた。

「相変わらず、変な奴らねー。あれ?」

カスミが瓦礫の山と化したニャースロボを見て、何か気付いたみたいだ。

目線を辿ると、瓦礫の中からポケモンが這い出てきた。

「プリユツ」

え、こいつは――。

『可愛いーっ』

アローラ組の女子達が盛り上がるが、ソイツは駄目だ。

「……あのマイクを持つてるプリンって」

「マズいつ」

「皆っ、そのプリンの歌を聴いたら駄目よっ」

カントー組は別の意味で盛り上がる。

俺は巻き添えを食らわれない様にこっそりと――。

「プー、プリュー。プープリー」

あつ――。

目を覚ますと、最初に目にしたのは化け物だった。

「お、ユウキ。起きたか」

「今回の落書きは酷いな、タケシ」

そう、あのプリンは歌の途中で寝ると、機嫌を悪くして顔に落書きをするんだ。

眠らせてくるのは、あつちなのに理不尽だ。

「それより、ユウキの顔はハートマークで埋め尽くされてるわよ」

カスミの指摘に思わずため息を吐く。

あのプリン、何故か知らないが俺にはハートマークしか書かないから不思議だ。首を傾げていると、今度はカスミがため息を吐いた。

「ユウキも相変わらずね」

理解出来ない俺は、さらに首を傾げるだけだった。

研究所に戻った俺達は、母さん達の計らいで歓迎会を開いていた。

「ああ、カキつ、それ僕のお肉だよっ」

「焼き肉は戦争なんだ、マーマネ」

そこで、今まで姿が見えてなかったロトムが帰ってきた。

「ロトム、何処行つてたんだ？」

サトシがそう聞くと、ロトムは悔しそうに辺りを飛び回る。

『ロト、カントー凶鑑コンプリートしに行つてたロト』

その時、離れた所にある木々の間からポケモンらしき影がチラリと見えた気がした。

『うーん、あと一体なのに見つかからないロト』

そのポケモンらしき影が飛び上がり、

「ミューウ」

「……いや、まさかな。確かめに行きたいけど、

「ね、ユウキつ、コレはマオちゃん焼いたお肉だよっ」

「ユウキ、このスープ作るのに私も手伝った」

「わたくしは本で見たので、この完璧に味付けされた――」

アローラ組の女の子にどんどん料理を盛られていたので動けない。

「もう、貴女たち。ユウキが困ってるから落ち着きなさい」

カスミツ、意外な助けだけど、助かつ――。

「だから、この美少女カスミちゃんを持つてきたコツチを食べなさい」

ああつ、絶望したつ。

あられが降るこの状況をどうかしようと思案していると、サトシ達と話してる母さんの会話が聞こえてくる。

「それでね、サトシの部屋つてば散らかってるのよー、見てく?」

「ちよつ、ママツ」

カキ達にサトシの部屋を見せるつもりか、ご愁傷様だな。

『ユウキの部屋もありますよね?』

あれ? 目の前居た女子達がいっつの間にか母さんの方へ。

「え、ええ」

『お邪魔します』

「待て、お前らっ」

勝手に部屋に入ろうとする女子達を止めていると、博士が手を叩いて注目を集める。
「ほらほら、明日の予定を発表するぞー」

博士の呼びかけでなんとか収まり、元の場所に戻る。

「明日は朝から電光石火でハナダジムに行つて、ジム戦だ」

ハナダジム？

あつ、急にお腹が痛くなってきたな。

カントーに向かつてとんぼがえり 後編

今日はハナダジムでジム戦体験だ。

バスで向かっている時に、ハナダの美人三姉妹は旅行に行っていると聞いて、俺の胃
痛の負担は減った。

ジムに着くと、クイ博士はカスミ達を俺達の前に立たせたる。

「改めて、ハナダジムのジムリーダーで水ポケモンの使い手、カスミ。そして、ニビジムの元ジムリーダーで、岩タイプの使い手のタケシだ」

『よろしく!』

カスミ達は懐からあるモノを取り出した。

「カントーのトレーナーは、ジムを巡ってジムリーダーとバトルする。そのバトルに勝つと、ジムバッジが貰えるんだ」

カスミとタケシが見せたのは、ジムバッジ。

「ハナダジムは、このブルーバッジ」

「そしてこれが、ニビジムの勝利の証、グレーバッジだ」

ああ、懐かしいな。カントーのバッジはシンプルでいい。

「サトシとユウキは、バッジを全部集めたのか?」

カキの疑問に、サトシはドヤ顔を浮かべて胸を張る。

「まあね。八個全部ゲットだぜっ」

しかし、サトシの言葉にカスミとタケシは苦笑を漏らしてからかう。

「ユウキはともかく。サトシの場合、あたし達のはお情けバッジだけどねー」

「確かに、そんな事もあったなあ」

心当たりがあつたのか、サトシは後ずさり、笑つて誤魔化する。

「あ、あはは。あつ、バッジを全部集めると、ポケモンリーグに挑戦出来るんだぜっ」

「ポケモンリーグ?」

マオの疑問に、サトシは調子を取り戻して、得意げに語る。

「ああつ。強いトレーナーが集まる、ポケモンバトルの大会だよ」

「というか、皆はユウキが各地方リーグの優勝者って事は知らないの?」

カスミの指摘に、アローラ組は仰天する。

「え、ユウキつてもしかして有名人?」

「わたくし、知りませんでした」

スイレン達が知らないのも無理は無い。隠しているからな。

「有名人だな。色々な意味で」

あああつ、止めろタケシ。調子に乗っていた俺の黒歴史が。

「そーねー、一体で無双したり、伝説のポケモンを出したり」

「んんっ。カスミ、それよりジム戦の体験を始めようか」

これ以上、俺の羞恥心が刺激されないように話しをすり替える。

なお、伝説のポケモンを出した事に後悔は無い。

俺のポリシーに反するが、相手がダークライで害悪コンボしてきたからな。決して、それで弟を黽つた事をキレた訳では無い。

「それじゃ、まずは誰からやろつか」

『はいっ』

待ちきれないのか、全員が手を挙げる。

「あー、待って待って。じゃあ、こうしよつか」

広いフィールドに、四人の女子が降り立つ。

「ジムリーダーとは言え、三対一なんて大丈夫かなあ」

マオが心配するのは、スイレン、リーリエと共にカスミと戦うこの状況。

だが、カスミは余裕を崩さない。

「あんまり舐めないでね。あたし、強いから。ねっ、ユウキ」

えっ、なんで俺に振るの？

『へえ、じゃあ遠慮無く』

えっ、急にアローラ女子達が豹変したんだけど。怖い。

「誰が真のヒロインか教えてあげるっ」

カスミはコダックを出して、手招きをする。

「アママイコ、マジカルリーフっ」

「アシマリ、バブル光線っ」

「シロン、こなゆきっ」

『三位一体っ』

ええ、バトル経験少ない筈なのに、なにこのコンビネーション。

コダックは技をもろに受けて吹き飛ぶが、戦闘不能に至らずに体制を立て直す。

「コダック、水鉄砲よっ」

勢いよく発射される水鉄砲だが、

「アシマリ、バルーンで受け止めてっ」

前に出たアシマリは、バルーンで水鉄砲を包み込む。

「へえ、面白いじゃない。それからどうするのかしら」

「こうだよ。アシマリ、コダックに飛ばして！」

バルーンにぶつかったコダックは、中に閉じ込められてしまった。

「シロン、こなゆきで凍らせてっ」

「そこでマジカルリーフ！」

表面が凍ったバルーンを、アママイコの攻撃で砕き割る。

いや、ホントになんでこんな息ぴったりなんだよ。

「コダッ、コー」

頭から地面に落ちたコダックは、辺りを転げ回る。

「勝負はここからよ。そうでしょう、コダックッ」

カスミの発破に、コダックは目を怪しく光らせて応える。

「ねんりきよっ」

ああ、あの状態のコダックが出たら勝負は決まったか。

コダックのねんりきで、宙に浮かされたアシマリ達は必死に抵抗するが、身動きが取れない。

「勝負あり、かな」

審判のタケシが判定を下し、この勝負はカスミの勝利で終わった。

「三対一だったのに、負けてしまいましたね」

「でも貴女たち、バトルセンスあるわよ」

リーリエ達は悔しそうにするが、カスミは健闘を称える。

「それじゃあ次は、俺達だな」

今度はタケシとの勝負。

「やるのは、俺とカキとマーマネだな」

サトシはルガルガンを出して準備する。

「遠慮はいらなくて、来いっ」

イシツブテを場に出したタケシは、腕を組んで構えた。

「それじゃ、早速。トケデマル、びりびりちくちくっ」

イシツブテに攻撃が当たるが、ビクともしない。

「なんでっ、どうしてっ。イシツブテはいわ・でんきタイプ、電気技は効くはずだよ!」

「マーマネ、それはアローラのイシツブテだ。カントーのは、いわ・じめんタイプで効か

ないぞっ」

サトシがそう言う。……えっ、サトシ? サトシがタイプ相性を覚えてるだ

とっ!?

衝撃な事実を目を見開いている俺を置いて、勝負は続く。

「なら、バクガメス、ドラゴンテールだっ」

バクガメスが縦回転で勢いよくイシツブテに接触する。

「イシツブテ、コッチも回れ、ジャイロボールだっ」

横回転し始めたイシツブテとバクガメスがぶつかる。

「ジャイロボールって、攻撃技だよな？」

マーマネは、自分の知らない戦法に苦笑いする。

「どこぞのチャレンジャーを参考にしたんだ」

ああ、サトシな。分かるよ、うちの弟は型破りだからな。

「？ ルガルガン、かみつくだっ」

自分の事だと思っていないサトシは、ルガルガンに指示を出して続行する。

「かたくなるっ」

イシツブテにかみついたルガルガンは、堅くなった体に返り討ちにされて、涙目でサトシの元に戻る。

「あー、勝負ありかしら？」

審判のカスミが判定を下す。

あくまでジム体験なので、ここで終了。タケシの勝利で終わった。

「ところで、ユウキはやらないの？」

マオが首を傾げて効いてくるが、俺はやるつもりは無い。

「そーねー、あたしも久々にバトルしたいと思ってたのよ」
「もちろん、俺もだ」

カスミとタケシが、挑発するようにモンスターボールを突き出してくる。
「ユウキ、ジム戦というモノを見せてやってくれないか？」

ククイ博士がそう言うが、確かにアローラにジム戦は無いからな。

「わかった。対戦形式は？」

渋々ながらも了承すると、カスミはジムのフィールドを変形させた。

「あたしとタケシで、二対二のダブルバトルよっ」

岩だらけだったフィールドに水が注ぎ込まれて、水と地面が半々になる。

「ダブルスはいいが、流石にジムリーダーークラス二人を相手にするのはな．．．．．」

頭を掻きながらぼやくと、サトシが割り込んでくる。

「じゃあ、俺も出るぜっ。へへっ、このダブルバトル久しぶりだなあ」

確かに、一緒に旅をしてた以来か。

「よし、行くぞっ。ハガネール！」

「出番よ、ギャラドスッ」

タケシ達がポケモンを出すのが、あの選出は本気だな。

「それなら、出てこい。ラティアス」

「フウーンッ」

久しぶりにバトルの出番が来たので、ラティアスの気分は高揚しているみたいだ。
「あら、いいの？ その子だして」

カスミ達は、俺が手持ちをあまり明かさないと知っているのだから聞いてくるが、

「まあ、ここに居る皆知ってるし。何よりもカスミ達を相手に手加減は出来ないんだ」

「ああ、本気で勝ちに行くぜっ。ピカチュウッ」

準備が整った所で、審判のククイ博士が手を振りかざす。

「では、始めっ」

開始の合図が出た瞬間に、ポケモン達に指示を出す。

「ラティアス、目覚めるパワーだっ」

「ピカチュウ、十万ボルトっ」

球状のエネルギーと迸る電撃が、相手のポケモンに向かうが――。

「ハガネール、ジャイロボールで目覚めるパワーを弾き飛ばせっ」

「ギャラドスはハイドロポンプで十万ボルトを相殺よっ」

やっぱり簡単には行かないか。

「ラティアスの目覚めるパワーは、炎だったか。危ない危ない」

「電気技は水で防ぐってね」

『理解不能、理解不能口ト』

相性を無視した戦法に、ロトムはオーバーヒートする。

「さて、小手調べは終わり。本気でやりましょうか」

「ああ。石の様に堅い男を見せてやる」

カスミは髪飾りに触り、タケシは服を脱いでキーストーンを取り出す。

『メガシンカッ』

その時、フィールドが光に包まれて、圧迫感が押し寄せる。

「メガギャラドスとメガハガネール。迫力が凄いな」

「ユウキ、俺達も負けていられないぜっ」

俺にもメガシンカさせろって事なんだろうが、嫌だなあ。

「フーンッ」

ラティアスも催促してくるが……。コイツ、台詞を言わないと何故かメガシンカしてくれないんだよな。

しかも、その決め台詞は悶絶して俺が死ぬ。

「何をボサツとしてるんだ？ いわなだれっ」

「っ、サイコキネシスで止めろ！」

メガハガネールがフィールドの岩を壊してくるが、サイコキネシスで破片を宙に浮か

せて受け止める。

「悩んでる暇は、無い、かあ」

本心ではまだ駄々を捏ねている俺を押し殺して、勝つために決断する。つしや、オラツ。やんぞオラツ。

「愛しき竜よ。美しき姿で、愛を示せつ。メガシンカツ」

ああああッ、おおんッ、くっころおつ。

「フウウウツ」

俺の羞恥心がダイナミックフルフレイムしているのを無視して、ラティアスは歓喜の鳴き声を上げながら姿を変化させる。

「はっ、殺気!」

観客席の方から物騒な視線が突き刺さるが、勝負中なので振り向けないっ。

「もう、一番のライバルはやっぱりラティアスなのかしら。ムカつくから、とりあえずハイドロポンプで」

「ムカつくってなんだよっ。上に飛んで避けろっ」

メガラティアスは上に飛び、メガギャラドスの空いた隙にサトシがピカチュウにエレキボールを指示するが、

「させないっ、ジャイロボールッ」

メガハガネールが、メガギャラドスを庇って電気の球を弾き飛ばす。くそつ、どうやって戦況を動かすか。

「ギャラドス、水を使って暴風よっ」

カスミの指示で、水のフィールドが盛り上がり、竜巻が此方に迫ってくる。

「マズいつ、ラティアスツ、サイコキネシスで抑えろー」

しかし、暴風で出来た竜巻は一つでは無く、次々と迫る。

「隙ありよっ。ピカチュウを閉じ込めてっ」

全てカバー出来ず、ピカチュウが竜巻の中に捕らわれてしまった。

「今までのチャレンジャーで、この暴風を突破したのは居ないんだから」

カスミが勝利を確信したのか、得意げに笑う。

「へへっ。いい事聞いたぜ。なら、俺が一人目だなっ」

だが、サトシは諦めるどころか、尚更燃えてるみたいだ。

「ピカチュウー、聞こえてるかー?」

何かは知らんが、サトシには作戦があるみたいだ。

「ならっ、俺は援護に回ろう」

しかし、絶好のチャンスを相手は逃すはずも無く。

「サトシの事だ、きつと何かある。ここで仕留めるぞ、ハガネールツ、あの中にストーン

エッジー！」

竜巻のしたから岩を突き刺す気か。

「させない、ラティアス、流星群だっ」

降り注ぐ流星で、ピカチュウへの進路を塞ぐ。

「ピカチュウツ、電気を足場にして電光石火で駆け上がれっ」

サトシの作戦に、思わず苦笑してしまう。

「ホント型破りだな。フオローは任せろ」

そろそろ決着に持っていこうと、ラティアスに指示を出す。

「サイコキネシスで水を浮かべろっ」

指示通りに、掬い上げられた水は宙に浮かぶ。

「ラティアス、竜巻の上に行けッ」

丁度、竜巻から出てきたピカチュウをラティアスは背に乗せて飛ぶ。

「サイコキネシスを解除だっ」

宙で固定された水は、大量の雨として降り注ぐ。

「決めろ、サトシ」

「ああつ。行くぜ、コレが俺達のゼンリョクだあつ」

ラティアスに乗り、フィールドの上でZ技を発動させる。

「ギャラドスはともかく、ハガネールは……はっ」

タケシが余裕を出しているが、直ぐに何かに気付く。

「タケシ。ハガネール、びしょ濡れだな？」

そう、さっきのサイコネシスでハガネールはピカチュウに倒される事は決まっていた。

『スパーキングギガボルト！』

上から叩きつける様に繰り出された電撃の塊が相手のポケモン達に当たり、衝撃で煙が立ち込む。

「まったく。懐かしい事をするな」

タケシが苦笑すると、煙が晴れてフィールド内が露わになる。

「メガハガネール、メガギャラドス。共に戦闘不能、よって勝者はユウキ、サトシ！」

ククイ博士の判定が下り、激戦の幕が下りた。

「はあ。今回も、あたし達の負けね」

「また電気技で負けるとは思わなかったがな」

俺は直接見ていないが、昔サトシが今の様な戦法でタケシに勝った事を聞いて、ティンと来た。

「フーンツ、フーンツ」

「ああ、お疲れ様。ラティアス」

褒めてと言わんばかりに、体を擦り付けて来るラティアスを撫でていると、
「また殺気!？」

今度は振り向くと、アローラの女子組が居た。

『ユウキ』

ひっ。何でこの子達の目に光が無いのっ。

「ま、まあまあ。今日のバトルで色々と感じたかな?」

タケシが割り込んで来てくれて、空気が戻る。

「この体験をアローラに戻っても忘れない様にな」

ククイ博士が最後に締めて、帰る為に空港に向かう。

「カスミ、バトルでは負けただけど、コッチは負けないからねっ」

「私が見事釣り上げるから」

「わたくしも譲りませんよ」

なにやら女子達が話しているが、近づいてはいけないと俺の感が告げている。

「最後に勝つのは、このお転婆人魚のカスミちゃんだから」

まだ飛行機に乗らないのかなー、早くお空に行きたいなー。なんて思っていると、タケ

シが肩を組んで来て小声で話してくる。

「ユウキ、相変わらずみたいだが、お姉さん属性にもフラグ立たせてないだろうなつ。そしてたら許さんぞつ」

「いや、フラグで。なに言うてんの」

血涙を流しているタケシを振りほどいて離れる。

「カスミ、タケシ。今度はアローラに来てくれよつ」

サトシが二人にそう言うと、カスミ達は大きく頷いた。

「もちろん行くわよ」

「アローラに居るお姉さん達が俺を待っているからなつ」

暴走するタケシの耳をカスミが引つ張り、

「まったく。それより、ユウキ。忘れ物よ」

おん？ いや、荷物は全部は持ったし――。

「はい、ハナダジムの合鍵。いつでも待ってるからなつ」

その時、カントーに来てから何回も経験した凍える空気が漂う。

恐る恐る、後ろを向くと、

「あつ……」

カントーでの特別課外授業は終わった。

懐かしい仲間と再会し、熱いバトルを味わう事が出来て良かった。

感傷的になって、久しぶりに他の仲間達に会いたいと思っただけれど、暫くはいいかなって。

飛行機の中で瀕死になっている俺は、そう感じた。

未知との遭遇 ウルトラビースト編

こんな出会いはフシギダネ

あちこちでペリッパーやエアームドの群れが気持ちよく飛び回る、気持ちの良い朝。

今日はスクールを休んで、とある場所に来ていた。

「まったく。こんな所に何があるってんだ」

降り立ったのは、変わった模様がある遺跡だった。

実は夜中に、アローラではまだ一度も出していないポケモンが入っているボールが暴れ出した。

ただ事では無いと思ったから、ボールが反応する方へラティアスに乗って飛び出して来たんだが、

「別に何も無いじゃないか」

ボールの震えも止まってるし、骨折り損か？

それより、帰りどうしよう。夜だったからラティアスの透明化は目立たなかったが、

もう昼近くで明るい。俺に透明化は適用されないから目立つんだよなあ。

「この島って船出てるのかな。最悪は泳ぐか………ん？」

帰りの事を考えて憂鬱になっていた時、遺跡の上の方から何か違和感を感じた。

長い階段を登った先には祭壇があるだけで、気のせいだと思つた瞬間――。

「うおっ、え。空間が割れてる!？」

突然、祭壇の真ん中に亀裂が入り徐々に広くなつていく。

そして、ブラックホールの様な穴が出来上がった。

「なんだ、これ。もしかして、コレの事だったのか?」

穴が現れた時に、また揺れ出したボールに聞くと、同意しているのか、出てこようと

する。

「ちよまつ、タンマツ。お前はマズいつ、落ち着け!」

出てこないよう必死に抑えてると、目の前の不思議空間に異変が起きる。

「これ以上何があるんだ、勘弁してくれよ」

後ずさり、念のためにバンギラスが入ったボールを構える。

緊張で背中に冷や汗が溜まるのを感じる。

ゴクリと、固唾を飲み込んだ時に――。

「えっ、何か出てきた………。ポケモン、か?」

出てきたポケモンらしき生き物は、宇宙に輝く銀河みたいに綺麗な模様をしていた。

「コシユー、コシユー」

「寝てるのか？」

まったく動かず、寝息を立てているポケモンを持ち上げると、パチリと空いた目と視線が合う。

「……………」

「……………」

無言の時間が続いてどうすればいいか分からん。

「コ」

「コ?」

おつ、鳴いた。しかし、コイツはいつたい、

「コツシユーツ!」

「うわあーっ!?!」

い、いきなり至近距離で叫ばれたせいで耳が……………。

「落ち着け、落ち着けて。おー、よしよし」

くそつ、なんで正体不明のポケモンをあやしてんだ俺。

ポケマメを食べさせて、泣いて暴れるポケモンをなんとか落ち着かせたが、まだ不安そうに周りを見ていた。

「それで、お前は何処から来た。なんで何も無い所から現れた？」

「コー……」

色々と質問をするが、首を振るばかり。

「んー、どうするかな。とりあえず帰りたいんだよね？」

「コッ」

元氣よく頷くので、このポケモンが出てきた所を指さすが、

「お前が出てきた不思議空間はもう消えてるんだよね」

そう、このポケモンが現れた瞬間、穴は閉じて元通りになったのだ。

「コー、コシユ……」

帰りの手段を失ったポケモンは、また泣きそうになってしまう。

「待て待て、泣くな。俺が必ず帰してやるから、安心しろ」

泣かれるとあやすのが大変なので勘弁だ。

帰すと聞いたポケモンは涙を引っ込めるが、不安の表情は変わらない。

「今はまだ手段が分からないから、時間は掛かるかもしれない。だけど、帰すと約束するよ」

「コー、コシユツ」

安心したのか、ポケモンは笑顔になり、すり寄ってくる。

「短い付き合いかもしれんが、宜しくな。えっと」

「そーいや、なんてポケモンなんだ？ ロトム図鑑でアローラ地方に居るポケモンは一

通り見たが、載ってなかったよな。

「じゃあ、

「こすも」

「コ？」

「お前の名前が分からないから、とりあえず付けた名前だ」

「こすもと呼ばれて首を傾げるが、自分の事だと分かる俺の周りを嬉しそうに飛び回る。」

「じゃあ、こすもはリュックに入ってくれな」

背負っていたリュックサックを前に出すと、こすもはスツポリと入り、寝息を立て始めた。

「よく寝る奴だな」

「さつきまで泣き喚いてたくせに、今は顔を緩ませて寝顔を晒してるこすもに苦笑を漏らす。」

「さて、帰るか。．．．．．どうやって？」

「はー、やっと帰れた」

結局、マリルリに掴まって海を泳いで帰った。

もう夕方近い。スクールも終わってる頃だろう。

「潮風でベトベトだ．．．．．ん？」

ククイ博士の家の前には、乗り物が停まっていた。

「車はリーリエが来ているんだろうけど、あのへりは何だ？」

見慣れないヘリコプターを横目に家に入ると、

「もうっ、止めて下さいってばっ」

「んもうっ、照れちゃってー。可愛いわねっ」

中には予想通りリーリエが居たが、見慣れない人達も居て、その中の一人はリーリエそっくりの女性だった。

「ククイ博士、ただいま。んで、どういう状況？」

「おかえり、ユウキ。書き置き読んだけど、急に出て行ったから心配したぞ」

一応、出る前にスクールを休む理由を書いて置いたが、予想以上に帰りが遅れたため心配させてしまったみたいだ。

「あー、ごめんなさい」

博士に謝っていると、背後にリーリエが回って来た。

「いい加減にしてくださいっ、お母様！」

お母様って、この人が？

目の前に居るリーリエそっくりの女性は、俺を使って隠れるリーリエを見ると、雷を食らった様子を眼を開く。

「ついこの間まで赤ちゃんだったのに……」

「そうですっ。わたくしはもう立派なレディなのですっ」

えっと、本当にどういう状況だ。

「紹介しよう。この人はリーリエのお母さん、ルザミーネさん。エーテル財団の代表だ」

「初めまして、ユウキです」

キャラの濃そうなルザミーネさんに挨拶すると、俺の事を頭から足下まで舐め回す様に見てくる。

「ええ、知っているわ。所で、リーリエとはどういう関係なのかしら？」

知ってる？ アローラでは目立つ様な事をしてないぞ。

「わたくしとユウキは——んぐつ？」

変な事を言われる気がして、慌ててリーリエの口を塞ぐ。

「同じスクールで仲良くさせてもらってます」

そう言い、リーリエの口を解放するが、

「もうっ、ユウキは大胆ですね。ですが偶にはこういう強引な感じも悪くないです。次は口で……」

小さい声で何かボソボソと呟き、顔を恍惚とさせるリーリエ。

リーリエって、いつからこんな……」

「ああ、私の赤ちゃんか……でも、ユウキ君なら……」

ルザミーネさんも、リーリエと一緒に小さく何かを言っている。本当に親子なんだなあ。

「ごほんっ。そしてエーテル財団の研究に参加しているバーネット博士だ」

「アローラー！ よろしくね」

バーネット博士と挨拶を交わしていると、ルザミーネさんが復活して、他の二人を紹介する。

「この人達は、財団の職員よ」

「ビツケです。ポケモン保護活動を担当しています、宜しくねー」

「研究部門チーフを担当しています、ザオボーです」

ビツケさんとはもかく、ザオボーと名乗った男は何か信用出来な感じがするな。

「それで、サトシ君。ほしぐもちゃんに会わせてくれるかしら？」

ザオボーに怪訝な目線を送っていると、ルザミーネさんはサトシに何かを頼んだ。ほしぐもつてなんだ？

「あつ、はい」

サトシが背負っているリュックを開けると、こすもと同じポケモンが眠っていた。

「あれ、こすもじゃん」

「こすもっ？」

サトシが聞き返してくるが、ああそっか。サトシはほしぐもつて名付けたのか。

「いや、俺も出会ったんだよ。ほら」

俺もリュックを開けて、こすもを皆に見せる。

『え』

ん？ 皆が口を開けて、間抜けな感じになってるぞ。

「えっと。みんな、どうし——」

『二体目えっ!?!』

あああつ、二回目えつ。

本日二度目の、鼓膜破壊だった。

場所は移り、地下の研究室。

「日輪の祭壇ですって？ 私達が行った時は何も反応無かったのに」

出会った経緯を話すと、ルザミーネさん達は興味深そうに、こすもを見る。

「でもでもつまさか、ほしぐもが二体も居たなんてな」

サトシも見ていると、こすもは急にサトシに体当たりを繰り返した。

「サトシ。コイツはこすもって名前を付けたんだ」

「コツシユツ」

こすもも同意する様に鳴いて頷く。

「そ、そつかあ。宜しくなこすも」

サトシがほしぐもを抱いて、こすもと遊び初めた傍で、バーネット博士がパソコンを弄って話し出す。

「やはり、その子達はウルトラビーストみたいね」

『ウルトラビースト？』

俺とサトシが揃って首を傾げていると、リーリエが得意げな表情で説明を始めた。

「はるか昔、異世界から来た不思議な生き物と、アローラの守り神との間に激しい戦いが繰り返された……。そして、その異世界の不思議な生き物をウルトラビーストと呼ぶんです」

説明が終わると、ふんすつ、とドヤ顔を見せるリーリエ。

ルザミーネさんは、そんなリーリエを抱きしめて、

「よく勉強してるわねえつ。流石、私の赤ちゃんよつ」

「だからつ、わたくしはもう赤ちゃんじゃ……。もうつ、恥ずかしいからユウキの前でだけは止めて下さいっ」

親子のじゃれ合いを無視して、俺達は話を続ける。

「こすも達は本当にウルトラビーストなんですか？」

「異世界やウルトラビーストと関係の深い物質に、ウルトラオーラというものがあります。我々の研究所では常にそのオーラの数値を計測しているのですが……。ビツケ君」

俺の疑問に答えたザオボーは、ビツケさんにモニターを映させた。

「ゆうべ、ポニ島にある日輪の祭壇辺りで異常に高い数値のウルトラオーラが計測されたんです」

「うーん、そのオーラの正体がこすもつて事か？ いや、ほしぐもの事もあるし……」

「あーつ、ここだつ」

モニターに移った日輪の祭壇を見ると、サトシは大きく声を上げた。

「サトシ、近くで叫ぶのは勘弁してくれつて」

苦言を呈するが、サトシは聞いていないみたいだ。

「昨日見た夢、俺ここにいたんだっ。それで、ソルガレオとルナアールが空から現れたんだ。で、そのあとつほしぐもが光の中から……」

「ソルガレオにルナアール……。ルザミーネっ」

サトシの話に、バーネット博士達に緊張が走る。

「伝説として語られるウルトラビースト……。サトシ君、ユウキ君。ほしぐもちやん達を私達エーテル財団に預けてくれないかしら？」

ルザミーネさんは俺達にそう言うが、サトシの顔を見ると、答えは決まっているみたいだ。もちろん、俺も。

「俺は約束したんです。ほしぐもの世話をするって、ソルガレオとルナアールに。だからこいつの世話を俺がします！」

「ユウキ君は？」

「こすもは、俺が面倒見ますよ。元の世界に帰すって約束しましたから」

俺達の答えを聞いたザオボーは、不機嫌な顔で前に出てくる。

「あのねえ。ウルトラビーストは君たち子供には荷が重すぎるんですよ」

「ザオボーッ」

ルザミーネさんはザオボーの言葉を遮ると、今度はリーリエが不機嫌な顔で俺達の前

に出た。

「ユウキとサトシはカプ・コケコからZリングとZクリスタルを貰ったとしても強いトレーナーなんですよッ」

俺は後から貰ったけどね。いや、別に根に持ってないよ。

「カプ・コケコって島の守り神の……」

それを聞いたビツケさん達は、驚いた表情で俺達を見てくる。

「ですが、ウルトラビーストを連れていては、何者かに狙われるかもしれません。……：そうになったら、大事な研究材料が」

それでも納得していないザオボー。後半聞こえなかったが、不穏な感じがするな。そこで、ルザミーネさんが口を挟む。

「私は代表の仕事で色んな所に行くから知ってるけれど、ユウキ君はポケモンリーグ優勝の実力を持つてるから心配ないわよ？ ユウキ君、サトシ君。貴方たちを信じるわ」

「そんな、ルザミーネ代表っ」

「貴方たちがウルトラビーストに出会った事に何か意味があるかもしれない。それを、私も知りたいの。でも、困った事があつたら連絡してね」

『はいっ』

良かった、分かってくれたみたいだ。

一通り話が付いたところで、腕の中のコすもを見ると、いつの間にか眠っていたみたいだ。

「ところで、ユウキ君。私の赤ちゃんとはどこまでいったのかしら？」

「もうっ、お母様っ」

「そうだ、意味が分からない事を言う母親に何か言っちゃれ。」

「わたくしとユウキはここまでシたので、赤ちゃんではありません」

なに言ってるの？

暴走して変な事をルザミーネさんに語り出すリーリエを止めて、早く風呂入りたいたい、海水でベタベタな俺はため息を吐いた。

シリアス展開は止めてくレントラー

最近は何んな事が起きている。なので、少し日記を付けようと思う。

まずは、こすもの事だ。スクールの皆は、ほしぐものは知っていたみたいだが、二体目の出現に驚いていた。

こすもは、ほしぐもと違って大人しめだ。だけど、お腹が空いたらテレポートをするのは止めて欲しい。この前はテンカラットヒルから落ちて死にかけてた。

そこでグラジオと偶然出会ったが、こすもを見ると表情を険しくさせた。話を聞くと、グラジオとリーリエは小さい頃にウルトラビーストに襲われたらしい。

リーリエは覚えていないが、その時の恐怖を無意識の底に刻みつけられてトラウマとなっているから、ポケモンに触れなくなっただろう。

グラジオにバトルを申し込まれたが、それとなく断った。

だってグラジオ君と居ると、昔の自分を見ているみたいでゾワゾワするんだ。

でも、シルヴァデイってポケモンは強そうに見えるな。

いつかは戦ってみたい。

それとテレポートはもうイヤなので、ポケマメを切らさないように気をつけよう。

そして、昨日は皆でエーテル財団を見学してきた。

ルザミーネさんがスクールでのリーリエの様子を知りたいらしくて招待してくれたみたいだ。

でも、俺との仲の良さを詳しく聞くのは止めて欲しかった。

何故かリーリエは赤い顔でモジモジしたり、俺の方をチラチラと見てくるだけだ。

マオとスイレンは俺を睨んでくるし……。

その後、ルザミーネさんは仕事が忙しいらしく出て行ってしまった。

リーリエはどこか不満そうだ。

恐らく、寂しいんだろう。母親がいつも忙しくて構ってもらえず、顔を合わせてもきちんと自分を見てももらえない。

いつもしつかり……、うん。しつかりしてるし真面目な優等、生……。

この頃はちよつと変な事を言ってるが、それはきつと寂しさや不満が溜まっているからだろうな。

なのでリーリエの頭を撫でていたら、マオとスイレンに頬を引つ張られた。なんで？

他にも、見学中にメタモンが逃げだしたと思つたらヌオーに変身して隠れたり――。

「ん？ どうした、こすも」

「コッシユッ」

日記を書いている途中で、こすもが目の前に現れた。

多分、お腹が空いたんだらう。

「はいはい、マメな。ちよつと待つてなー」

確か此処に………。あれ？

「あれれー、おつかしーぞー」

昨日買ってきたばかりなのに、もう空になっている。

「さて、こすも。落ち着け、やめ――」

ポケマメが無い事に気付いたこすもは、俺の顔にへばりついて技を発動させた。

恐る恐る目を開けると、

「あら、ユウキ君じゃない」

目の前にはルザミーネさんがいた。

下着姿で。

「これから寝るところだったのだけれど、どうしたのかしら？」

今、俺がやるべき事は、

「ごめんなさいっ。いや本当わざとじゃないんですう」

土下座だよな。

「あらあら、いいのよ。でもリーリエには言っとくわね」

「勘弁してください」

何故か俺が瀕死になる未来が見えた。

するとルザミーネさんは、口元を抑えて笑い出す。

「大丈夫、冗談よ」

「はあ……」

着替えてるルザミーネさんを見ないように背を向くと、写真が立て掛けられているのに気付いた。

「寝室、写真だらけですね」

ネグリジエを着たルザミーネさんはベッドに腰掛けると、写真立てを一つ手に取る。

「ええ。いつも一緒に居られないから、せめてね」

……そっか。一緒に居たいと思ってるのはリーリエだけじゃないんだな。

「それなら、もつとリーリエの事を見てあげて下さい。リーリエも貴女と話したいと思ってるんです」

しかし、ルザミーネさんは苦笑を洩らす。

「これでも企業の代表だから、時間がね。それに研究しないと。ウルトラビーストの事

を――」

ルザミーネさんの目線は手に持っている写真立てにある筈なのに、瞳の奥は別のモノを見ていて、

「知りたいから」

その表情はリーリエの母親では無く、一人の研究者としての利己的な顔だった。

「ところで、一緒に寝る？」

「お邪魔しました」

さて、また日記を書こうか。

昨日の夜は思わぬ事が起きたが、忘れよう。

ほしぐものレポートは考えてた場所に飛んでいくが、こすもは違うよな？ ……

違うよね。

最近、ほしぐもとこすもの定期検診にバーネット博士が家に来る。今も下のリビングでほしぐも達を見ているが、ククイ博士の方もチラチラと見ている。

あれは、恋する目だ。間違い無い。

俺はそういう目線は敏感だから、すぐに気付く。

あれ？　なんか急に寒気が………。

そういえば、今日はお泊まり会をするって言ってたつけ。

そろそろ来る時間――。

『アローラー!』

来たみたいだ。さて、出迎えるか。

丁度家に居たバーネット博士も加えて、お泊まり会は始まった。

「ロフトがあるじゃん、僕そこで寝たいっ」

「俺とサトシの部屋だが、別にいいぞ」

「マーマネが寝る場所を指定すると、他の皆も手を挙げる。」

「わたくしもそこがいいです」

『私達も』

「さっきまで興味無さげだったのに、急になんだ？」

「じゃあ、勝負して決めようかっ」

「サトシが勝負内容を考えてると、ほしぐもがテレポートして現れる。」

「あつ。じゃあ、ほしぐもを探すゲームをしよう」

「サトシの提案で、またテレポートで消えたほしぐもを探し始める皆だが、

「こつちがユウキの布団かな」

「間違いない。ユウキの匂いが微かに」

「わたくしの論理的結論に基づいた結果……」

女子達は何を探してるんだろう。

結果は女子達の勝利で、寢床を取られてしまった。

「ユウキは自分の布団で寝て良いよ？」

「いや、リビングのソファで結構です」

スイレンの誘いを丁寧に断りして、晩ご飯の準備に向かう。

「あつ、手伝うよー」

「わ、わたくしもっ」

マオの手は有り難いが、

「その、リーリエは、料理出来るの？」

すると不服そうに頬を膨らましたリーリエが顔を近づけてくる。

「出来ませすっ。……前にお母様から教わりました」

少し自信無く言うので不安だが、任せてみるか。

予想に反して、リーリエは意外と上手かった。

「まあ。指を切りそうになったりで、心臓に悪かったが」

「えへへ。ニャビーの手にするのを忘れてました」

恥ずかしそうに笑うリーリエだが、徐々に表情が曇っていく。

「忘れてました………。昔の事だったので」

「リーリエ………」

ルザミーネさんがリーリエの事を大事に思っている事を言おうか迷っていると、

「ああつ、ゴンベがつ」

マオが突然叫びだし、注目を集める。

「ゴンベ………。もうつ。私のポケモンがごめんなさいね、直ぐに食材を買ってくるわ」

「僕も行こう」

バーネット博士とククイ博士が買い物に出るが、マーマネの腹の音が響き渡る。

「うう、我慢できないよお」

「じゃあバトルで気を紛らわそうぜっ」

流石サトシ。困った時はバトルってか。

晩ご飯を食べ終えて、皆が寝静まった頃。

「ん、誰か外に出たのか？」

玄関のドアが閉まる音が聞こえて、気になったので確かめると、砂浜の方にリーリエが座ってるのが見えた。

「眠れないのか？」

「ユウキ・・・・・・・・はい」

隣に腰掛けると、俺に気付いたリーリエは顔を上げるが、また海の方に視線を向ける。

「今朝、お母様と口論になってしまいました。モヤモヤしてるんです」

膝を抱えるリーリエは溜め息を吐いた。

「はあ、お母様はいつも自分の都合ばかり。いつからこうなっちゃったのかな」

やはり、言うべきか。

「ルザミーネさんは忙しい身だけど、あの人なりにリーリエの事を大切に思ってるよ」

「そんな、事」

いまいち信じ切れないリーリエは、砂浜を見つめる。

「あの人の寝室は、家族の写真で埋まっていた。ルザミーネさんも一緒に居たいけど、難しいからせて写真でもって」

それを聞いたリーリエは、目を見開いた。

「だから、今度ちゃんと話してみなよ」

「お母様が・・・・・・・・。はい、そうですね」

リーリエは気が晴れた様子だ。うん、これで少しは力になれたかな？ また昔みたい
に仲良くなれるといいね。

「ところでユウキ」

「うん？」

「何故、お母様の寝室に？」

「………あつ」

「皆、気をつけて帰るんだぞ」

『お世話になりましたっ』

次の日の朝。お泊まり会は終わり、家の前で解散する。

「ユウキ。目の下の隈が凄いが、大丈夫か？」

「………大丈夫。途中まで皆を送って行くよ」

ククイ博士の心配を余所に、帰って行く皆を追いかける。

「またお泊まり会したいねー」

「今度は僕の家はどう？」

「いいねっ」

マオ達は楽しかったと話しているみたいだが、眠くて会話に参加できない。

昨日は何故かりーリエの機嫌が急に悪くなった為、暫く拘束されていた。しかも隣で、俺の肩を枕に寝始めたので動けなかったし。

一言りーリエに文句を言つてやろうと、隣を見るが、

「あれ？ りーリエ何処行つた？」

皆も周りを見るが、居ない。

「あ、ほしぐもも居ないぞっ」

なんだ、またテレポートに巻き込まれたのか。

そして、数秒経った頃にりーリエは戻つて来た。

「今度は何処行つてたんだ？」

「グラジオ、お兄様の所に……」

突然、膝を崩して座り込むりーリエ。

「そしたら、知らないポケモン、が」

知らない？ シルヴァデイの事か？

「コーン」

様子がおかしいりーリエを心配して、シロンは傍に寄るが、

「いやっー」

りーリエは、シロンを拒絶した。

トラウマを克服しよウツロイド

ポケモンスクールでの、いつもの朝。

だけどリーリエの様子は、いつもと違っていた。

「リーリエ……」

心配そうなマオはリーリエに声を掛けるが、

「ごめん、なさい」

口を開けば謝るだけ。

「焦らなくてもいいんだ」

もう見ていられなくて俺も声を掛けると、スイレン達もリーリエを慰める。

「そうそう。絶対また触れるよ」

「がんばりーリエ、だよー！」

「マオ、それ良いなっ」

『がんばりーリエっ』

サトシ達も声を揃えて言うとりーリエは微笑み、席を立った。

「そう、ですよ。そうですね。そうですね。シロン、試させてっ」

そう言ったリーリエは、腕を前に出して、シロンを受け入れる準備をする。

「コーンツ」

十分に助走をつけて、リーリエの胸に飛び込んだシロンだったが――。

「ひ、ひうつ」

やはりまだ駄目なのか、リーリエは硬直してしまった。

「まあでも、ナイスファイトだな」

胸に引つ付いたシロンを剥がして抱える。

「まだ諦めませんっ」

リーリエは放課後まで色んな方法でシロンにチャレンジを始めたのだった。

放課後、家に帰ろうと歩いているとリーリエを見かけた。

「あれ、車の迎えは来ないのか？」

リーリエは首を振り、隣を歩くシロンを見る。

「今日はシロンと散歩をしながら、歩いて帰ろうかと」

「そっか。俺も着いて行っつていいか？」

「もちろんです」

そうして一緒に歩いていると、リーリエは突然に、

「あの時見たポケモン……、やっぱり見た事あるような」

シルヴァアディか？ グラジオはリーリエの事を助けたと言っていたが、何かを思い出しているのだろうか。

「思い、出してみるか？」

「え？」

リーリエには酷な事だが、全てを思い出せばポケモンに触れない事を解決出来ると思う。

「もちろん、強制するつもりは無いよ。でも、このままだとシロンに触れない事が暫く続く」

心が痛むが、挑発するように言うどリーリエは俯いてしまった。

「あ、いやつ。その」

言い過ぎたかな？ 今の俺、すげー嫌な奴だ……。

「……………す」

「え？」

いや、怒らせてしまったか？

「思い出します」

俺の顔を見て、ハッキリと言う姿に少し驚いてしまった。

「知りたいんです。わたくしがポケモンに触れなくなった理由は、きっと何かあるっ」
「そ、そうか」

リーリエの覚悟を聞いて、リュックの中のこすもを起こす。

「こすも、頼みがあるんだが。ポケマメあげるから」

厳しい事を言ってしまった為、リーリエとの気まづい時間が苦しい。

「……………ユウキ」

「なんだ？」

こすもにリーリエの考えを読み取ってテレポートをして欲しいと頼んでいると、
「ありがとうございます」

テレポートで消える直前、笑顔でそう言われた。

目を開けると、浜辺に立っていた。

「此処は、お母様達とよく遊びに来ていた浜辺です」

懐かしそうにしながら海に目線を向けるリーリエ。

その目はきつと、楽しそうに遊ぶ子供の顔を思い描いてる。

『それそれーっ』

『おにいさま、ナマコブシをもってくるのやめてくださいっ』

「次に来たのは、少し埃被ったポケモン達の縫いぐるみが置いてある小さな部屋。私とお兄様の子供部屋だった所ですね」

リーリエは、置いてあるピッピの人形を抱いて微笑む。

『わたくし、そのピッピであそびたいです』

『じゃあ、ぼくはこのゲンガーにするよ』

「次は俺も事故で来た事がある、ルザミーネさんの部屋だった。——
「こんなに、写真が」

家族三人で、色んな場所に行ったと分かる写真が沢山飾つてある。

「お母様……」

写真立てを一つ取り上げるリーリエ。

ルザミーネさんの想いが少しでも伝わったのか、嬉しそうだ。

「どうだ、少しは思い出したか？」

「いえ、まだ……」

リーリエが首を振った時、またテレポートが発動する。

「ここは、エーテル財団？」

俺もリーリエも疑問になったが、見た事がある場所だった。

「何故、でしょうか。知っている気がします」

奥に進むと、異様な雰囲気を出す空間に出た。

「地下ってリーリエ、来た事あるのか？」

「ハッキリとは……でも確かに此処も知って――」

その時、俺の体が宙に浮き始める。

「なんだっ？ つ、グハッ」

戸惑っていると、壁に叩きつけられた。

「ユウキツ。離して、ザオボーッ」

「リーリエ嬢ちゃんは大人しく着いてきて下さいっ」

突然現れたザオボーは、リーリエを引き摺って行ってしまう。

「っ、待てー！」

動きが鈍くなった体を必死に動かして追いかけると、ザオボーはスリーパーをリーリエに差し向けていた。

「スリーパー、催眠術です。悪く思わない下さいよ。思い出されると困るんです」

なんだと。リーリエが忘れていたのは恐怖のせいじゃないのか？

「させるかつ。出てこい、バクフーンッ」

バクフーンにスリーパーを止めさせようとするが、

「甘いんですよ。フーデイン、サイコキネシス」

近くの物陰に隠れていたフリーディンに不意を突かれて、また宙に浮かされてしまう。
「しまつ、た。ぐうつ」

リーリエもフリーディンに浮かされ、固定されて動けなくなつた俺達。
その時――。

「いでよ、シルヴァアディツ」

グラジオとルザミーネさんが現れた。

「リーリエツ。ザオボー、貴方は一体何をしているのつ」

怒りを表すルザミーネさんの横で、グラジオはシルヴァアディンに指示を出す。

「リーリエを助けるんだつ」

「グルウツ………。シヴァアーツ」

シルヴァアディンは雄叫びを出すと、被っていた仮面を砕き割る。

そして、リーリエに向かって跳んで――。

「い、いやあーつ」

向かってくるシルヴァアディンに怯えて、叫ぶリーリエ。

しかしシルヴァアディンは行動を止める事無く、リーリエの後ろで捕らえていたフリーディンを吹き飛ばす。

「えつ、今のは………」

一瞬すれ違ったシルヴァアデイに既視感を感じたのか、リーリエは後ろを振り向く。

「思い出しました。あの時――」

シルヴァアデイもリーリエを見つめ返す。

「あの時も、こうして助けてくれた」

どうやらリーリエは過去の事を思い出したみたいだ。

「バクフーン、スリーパーに電光石火だっ」

フーデインがシルヴァアデイに倒されたお陰で、動けるようになったバクフーンに指示を出す。

「今ここに甦りし、聖獣シルヴァアデイ。ダークメモリーを受け入れ悪の魔獣となりて暴れよっ」

バクフーンの攻撃で隙が出来たスリーパーに対して、グラジオはシルヴァアデイに何かを投げつけた。

「マルチアアタックーツ」

あれは、シルヴァアデイの専用技か？

黒いオーラを纏ってスリーパーに突撃するシルヴァアデイ。

「な、なんですとおーっ」

どうやら効果抜群の悪タイプに変化させたみたいだ。

アルセウスみたいで面白いな。

「リーリエツ」

ザオボーのポケモン達が引つ込み、ルザミーネさんがリーリエに駆け寄る。

「ごめんね、リーリエ。ごめん、ごめんなさい……」

泣きながら謝るルザミーネさんに、リーリエは抱きしめて答える。

「いいんです、お母様。……わたくしも、謝らないと」

そう言ったリーリエは立ち上がり、シルヴァアデイと向き合う。

「忘れてしまって、ごめんなさい。あの時も、今も。助けてくれたのは、あなたでしたの
に」

シルヴァアデイに歩き寄ったリーリエは――。

「いいえ。謝るのでは無く……。ありがとう。ですよね、シルヴァアデイ」

シルヴァアデイの頭を撫でた。

「リーリエ、貴女っ」

ルザミーネさんは、そんなリーリエを驚き見る。

「えっ、わたくし……。シロンツ」

リーリエは今朝と同じく、両腕を開くと、

「良かった……。またシロンを抱きしめられたっ」

「コンッ」

そこで、こすもとバクフーンがリーリエに近寄った。

「大丈夫ですつ。小さな頃と同じく、ポケモンに触れます！」

こすも達を抱き寄せるリーリエ。

俺とグラジオは、そんなリーリエを見ると、嬉しくて笑い合った。

次の日、教室にてリーリエは皆のポケモン達の前に立っていた。

「リーリエ、本当に大丈夫なの？」

「少し心配」

マオ達が心配するが、リーリエは両手を突き出した。

「大丈夫です。おいでつ、アママイコにアシマリッ」

呼ばれたポケモン達はリーリエに恐る恐る近づき、

「かわいーっ」

思いつきり抱きしめられたアママイコ達は一瞬驚いたが、嬉しそうに抱きしめ返す。

「ニャビーも、お髭が気持ちいいーっ」

まだまだ足りないのか、教室を歩いていたニャビーを捕まえて頬ずりをするリーリエ。

「リーリエ。本当に大丈夫なんだ、良かったね」

「マーマネ達は嬉しそうに微笑み、カキもバクガメスを出した。」

「ほら、お前も行つてこい」

「バクガメスはリーリエに抱きしめられるが、

「バクガメスつて、大きくて堅いんですねーっ。あれ？」

「あつ、そこは——」

カキが気付き止めようとするが、時既に遅し。辺りは眩い光に包まれて——。

『……ゲホッ』

甲羅に触れてしまい、シエルトラップが発動してしまった。

「ふふつ、あはは」

真つ黒になった俺達だが、リーリエは嬉しそうだ。

「皆、アローラ。今日もスパークキングダムで痺れる授業を始めるぞー」

そこでククイ博士がやって来て、今日の授業が始まる。

『はーいっ』

昨日の事件で、ザオボーがいつの間にか消えてしまつて不安を感じる。

懲りていると思わない。きっと、また近いうちに現れるだろう。

次こそは、リーリエを危険な目に遭わせない。

「ふふっ。ピカチュウの毛並みサラサラ」
ポケモン達とはしゃぐりーリエを眺めながら、そう思った。

やっぱりシリリアス展開は嫌いダーテング

ククイ博士とカキが、縄のロープを持って回転させる。

「さあリーリエの番だぞ」

「はいっ。行くわよ、シロン」

今日の授業は、ポケモン達と一緒に縄跳びをするみたいだ。

「それっ」

リーリエとシロンは呼吸を合わせて飛び跳ねる。

「おおっ、リーリエやるーっ。俺の番だぜー！」

縄から抜けたリーリエの後にサトシが入る。

「へへーん、楽勝だぜっ。………わわっと」

サトシの奴、油断して足を引っかけたみたいだ。

「無念のサトシ、哀れ」

スイレンと一緒にサトシの元に行くと、膝を擦りむいているのに気付いた。

「お前、怪我してるじゃないか。絆創膏持つてくるから待つてろ」

リュックを取りに行くと、中にほしぐもとこすもが寝ていた。

「ほいほい。ちよつと退いてな」

こすもを持ち上げて絆創膏を取り出すと、こすもが起きる。

「せつかくだし、お前も縄跳びをやるか？」

「コツシユ」

了承したのか、こすもは俺の頭に乗る。

「ほしぐもは起きないのか」

空いた隙間に、近くにいたモクローをぶち込んで置いて縄跳びに戻る。

「ふう。僕もう疲れちゃったよ、お腹も空いたし」

「確かに、もうお昼だな」

大の字に寝つ転がったマーマネを見て、博士は授業を終了させるが、

「あれ？　なんかモクローが叫んでるよ」

少し離れた所でモクローが呼んでいるのに気付いたマオはサトシを訪ねる。

「なんだろう。……あぁーっ」

異変を感じたサトシがリュックの元に行くと、叫び出した。

「ほしぐもが居ないっ」

なんだって？ さっきまで、そのリュックの中で寝ていた筈だ。

「あつ。あれ見てください！」

その辺を散歩しているのか、と考えているとリーリエが指を指して注目を集めた。

「あれは、ザオボー？」

遠くでザオボーがほしぐもに接触してるのが見えた。

「リーリエの次は、ほしぐもかつ」

連れ戻そうと走るが――。

「っ、消えた？ テレポートをさせたのかっ」

くそっ。スクールの中に入り込んでいたなんて、油断したつ。

「ほしぐもと一緒に居たのって、ザオボーだよな？」

追いついてきたサトシの言葉に、

「ザオボーがどうかしたか？」

グラジオが現れて疑問を投げる。

「ザオボーがほしぐもとテレポートで何処かに行ったんだ」

「お兄様、心当たりはありませんか？」

グラジオは腕を組み、目線を下げる。

「恐らく、エーテルパラダイス」

場所が分かっているなら、まだ間に合う。

「ラジオ、こすものテレポートですぐに向かおう。俺とサトシも着いて行く」
「ああっ」

「分かった」

しかし、そこで待ったの聲が掛かる。

「わたくしも、わたくしも一緒にっ」

リーリエが真剣な目でラジオに訴えると、

「………勝手にしろ」

一瞬驚いたラジオだが、一言言つて視線を外す。

「無茶はするなよ」

『気をつけて!』

ククイ博士達に心配されながらも、サトシ達に視線を向ける。

「準備はいいか?」

頷いた所で、こすものテレポートが発動した。

着いた場所は、エーテルパラダイス内部。

地下に続くエレベーターに向かっていると、ルザミーネさんと出会った。

「貴方たち、どうして此処に?」

「ほしぐもを攫ったザオボーが此処に居るかもしれない」

突然現れた俺達に驚くルザミーネさんだったが、グラジオの発言に納得した様子を見せる。

「そう。地下施設で異変が起きたみたいだけど、そういう事」

ルザミーネさんを加えた俺達は、張り詰めた様子で地下へと降りていく。

地下に降りた俺達を待っていたのは、機械の檻にほしぐもを閉じ込めているザオボーだった。

「おお、代表。どうですか？ もうすぐ貴女の望みが叶い――」

「このっ、ほしぐもを返せっ」

ザオボーが高説を垂れている途中で、サトシが走りだす。

「ぐほっ。このガキ、何を」

サトシの体当たりで崩れ落ちたザオボー。

「今助けっ、うわあーっ」

ほしぐもを助けようと檻に触るが、周りに設置されている防衛装置の電撃がサトシを弾き飛ばす。

「ラティアスのサイコキネシスで、どうにか……」

ボールを取り出した時、檻の頭上で空間が歪み始める。

「来た、ウルトラホールっ」

「ザオボー、マシンを止めなさい！」

徐々に出て上がるウルトラホールを見て恍惚とするザオボーに、ルザミーネさんは怒鳴りつける。

「代表、何を言っているんです？ これこそ貴女が望んでいるモノでしょう」

「っ、望んで、なんかっ。またリーリエを危険な目に遭わせるの!？」

ザオボーと問答しているルザミーネさんの横で、俺とグラジオは指示を出す。

「ラテイアス、サイコキネシスであの檻を防衛装置から引き剥がせっ」

「ブレイククローで檻を壊せ！」

此方に引き寄せた檻を、シルヴァデイの攻撃で破壊を試みる。

「コッシュー」

無事に破壊された檻の中から、ほしぐもがフラフラと出て来た。

「なっ、ウルトラホールが……」

ほしぐもが解放されたからなのか、ウルトラホールが閉じていく。

「ほしぐもっ、怪我は無いか？」

「コーク、コッシュー」

サトシが心配そうに抱えると、ほしぐもが淡い光に包まれ、姿が、変わった？」

両手で収まるくらい、体が縮んでしまったほしぐも。

「進化なのか？」

寝ているのか、大人しくなったほしぐもを突っついてみると、閉じかけていたウルトラホールが一気に開く。

「何か出てくるぞっ」

周りに警戒を施すグラジオは、シルヴァデイをリーリエの前に出す。

「あれ、は……い、いやーっ」

「UBO1：パラサイト！」

恐怖で震え出すリーリエと、歓喜で身を震わすザオボー。

あの存在は、マズい。背中から冷や汗が流れるのを感じる。

「ルザミーネさんっ、急いでリーリエを連れて——」

この場から避難させようと振り向くが、

「ルザミーネ、さん？」

「……はっ。目を覚ましなさい、ザオボー」

「ルザミーネ代表。せつかく貴女の夢が叶ったのですよ？」

声を荒げるルザミーネさん。だけど、見間違いないじゃない。さっきの彼女は、惹かれていた。

「今日という日をどれほど待ちわび——ぐはあつ」

謎のウルトラビーストは白く透明な触手を伸ばし、近づいたザオボーを叩き飛ばす。

「ラティアス、目覚めるパワーッ」

「シルヴァデイ、エアスラッシュッ」

ラティアス達の攻撃が飛んで行き、命中する。

「やったか？」

土煙に包まれて、状況が分からないグラジオは額から汗を垂らした。

数秒経ち、煙が晴れると——。

「A h a r」

奇妙な鳴き声を鳴らしながら、無傷のウルトラビーストが姿を現した。

「何だかつ、ラティ——」

指示を与える暇を与えないつもりなのか、ウルトラビーストは虹色に煌めく光の束を放ってきた。

「ラティアスッ、ぐうっ」

俺は一撃で飛ばされたラティアスを受け止め、壁に激突してしまった。

「くっ、リーリエは俺が守る！」

意識を失ったラティアスを抱えてグラジオを見ると、シルヴァデイも吹き飛ばされたみたいだ。

「グラジオッ」

リーリエを抱きしめているルザミーネさんを守るように、手を広げて立ちはだかるグラジオは、後ろからの衝撃で倒れ込む。

「え？」

啞然とするグラジオと俺達が見た光景。

「母、さん？」

グラジオを突き飛ばしたのは、ルザミーネさんだった。

「良かった……」

グラジオとリーリエが安心だと分かり、儂げに微笑む。

「お母様……」

ウルトラビーストに連れ去られる母親を見て、リーリエは手を伸ばす。

「お母様ーっ」

そして、ルザミーネさんはウルトラホールの消滅と共に消え去った。

「ザオボー、何故勝手にマシンを使ったッ」

あの後、バーネット博士とビツケさんが駆けつけてきた。

「ルザ、ルザミーネ代表が悪いんですつ。私は悪くない！」

弁明するザオボーを見て、バンギラスを睨けたくなるが、それどころじゃない。

「……………お母様」

失意に陥ったリーリエだが、立ち上がってウルトラホールが消えた場所を睨む。

「わたくし、助けにいきます！」

「もちろん、俺も——」

リーリエの決意に、サトシも賛同すると、

「巻き込んですまなかつた。だが、この先は家族の問題だ」

グラジオが拒否するように声を遮る。

「バーネット博士。もう一度ウルトラホールを開く事は？」

「無理、ね。時間が掛かるし、直ったとしても開いたウルトラホールを安定させられるか

どうか分からない」

グラジオは口元を結び、拳を握りしめる。

「こすものテレポートでも、無理か」

どんな所に居るのか、イメージがとことん分からない。

「私達が方法を探すわ。だから、あなた達はもう帰った方がいいと思うの」

「ええ。今、あなた達にできることは何も無いわ。大事な時に備えて休んでちょうだい、リーリエ」

ビツケさんと博士がリーリエを説得していると、サトシが姿の変わったほしぐもをを抱き寄せる。

「それは？」

「ほしぐもです。急に小さくなっちゃって」

バーネット博士がほしぐもを見ると、何かを小さく呟いた。

「進化の兆し？」

「え？」

サトシは聞き取れなかったみたいだが、進化と言ったか？

「何でも無いわ。私でも分からないから、今は様子を見てあげて」

「はい……………」

そして皆が浮かない表情のまま、家に帰る事になった。

「この状況でよく暢気に寝てられるなあ」

ポケモン達が寝静まる深い夜。いびきをかいてるサトシに呆れて口元がヒクつく。

ウルトラホールの場所には、心当たりがある。

「行こうか、こすも」

日輪の祭壇。こすもと出会った場所。

「コツシュツ」

もう一度ウルトラホールが現れるかもしれない。

「次は失敗しない」

リーリエを危険な目に遭わせないと決めて、この結果だ。不甲斐ない結果を晒してしまった。

リーリエの身は無事だったが、きっと心は傷ついている。

「もう自重しない」

真正正銘の全力を出していれば、違う結果になっただろう。

大切な人達を守る為なら、自分の都合は気にしていられない。

「今回は、お前を頼りにしてるよ」

マスターボールを撫でた後、こすもにテレポートを頼む。

「まったく。俺はシリアス展開は嫌いなんだよ」

さっさと解決して、いつも通りのスクールライフを送りたい。

気を引き締めて、俺達は日輪の祭壇へと向かった。

ウルトラホールに突ニユーラ

日輪の祭壇。夜が明け、陽が照りつけるこの場所を、同じ髪色の兄妹が目指して歩いていた。

「この島の奥に、日輪の祭壇が……」

固唾の呑み込み、緊張した様子の少女に兄が目線を向けた。

「そうだ。そしてここでソルガレオに会えれば――」

「わたくし、覚悟は出来ています」

兄がポケモンボールを取り出して投げる。

「出てこいシルヴァデー」

呼び出されたポケモンに二人は乗り、奥へと駆けていく。

少女は普段、髪の毛をストレートにして帽子を被っている。

「絶対に助けます」

今の彼女は帽子を外し、長い髪の毛を一つに纏めていた。

決意を強くし、夜空に浮かぶ月を眺めていると、ノックの音が響いた。

「リーリエ、入るぞ」

「も、もう入ってるじゃないですか！」

リーリエと呼ばれた少女は驚き振り向くと、既に部屋に入ってきた男に文句を垂れる。

「何の様ですか？ グラジオお兄様。これから寝るところでしたのに」

兄のグラジオは、妹の姿を足から頭まで観察すると首を傾げた。

「その格好でか？」

いつも着ている白いワンピースでは無く、同じ色ながらも活発さが目立つパーカーにミニスカートを。明らかに寝る格好では無いリーリエは声を詰まらせる。

「これはパジャマですっ」

無理のある言い訳を、グラジオは聞き流すように話を続けた。

「ウルトラホールを探しに行くんだらう？」

口をもごつかせていたリーリエが、今度は罰の悪い表情を見せた。

「心当たりがある。だが、危険な場所だから一人で行く。それを伝えに来ただけだ」

もう言う事は無いと、背を向ける。

「待つて下さいっ。．．．．．私も行きます」

認めるまで部屋から出さないと、グラジオの前で手を広げるリーリエ。

「お母様の事を大切に想っているのは、お兄様だけじゃないんです」

しかしグラジオは、リーリエの言う事が分かっていたのかアツサリと、

「分かった」

「へ？」

予想と違う態度に、口を開けて呆けるリーリエ。

「何をしている。早く行くぞ」

そんな妹を置いて、部屋を出るグラジオだった。

「ま、待ってくださいーっ」

慌てたせいで、用意した荷物を持っていく事が出来なかったリーリエ。せめてコレだけでもと、ピッピ人形を一つ抱えて兄の背中を追いかける。

日輪の祭壇の入り口に着いたグラジオ達。

扉が閉まっている事に気付いたリーリエは、近くにある石像へと近づいた。

「ニャビーにモクロー、アシマリの石像」

石像の後ろには、タイプを現す模様が描いてある。

「なるほど！ 対応するタイプの所へ、ポケモンの石像を動かせばいいのですねっ」

答えは分かったと、石像を押し。だが重いのか石像はまったく動かずで、力んでいるリーリエの顔を真っ赤に染め上げる。

「何をしている」

妹の行動に肩眉を釣り上げたグラジオが問うと、膝に手を置いて呼吸を整えたりーリエ。

「何って、このパズルを解かないと扉が開かないのでは？」

行動の意味を理解したのか、グラジオは溜め息を吐いて扉の方へ歩き進む。

「へ、空いてる!？」

リーリエは、平然と扉を開けるグラジオに声をあげた。

「動かす方が問題なんだ。シルヴァデイ、その石像を押し」

ゆっくりと押ししていくと、突然飛び退くシルヴァデイ。

「ひいっ」

なんと、石像があつた所から大量の杭が飛び出てくる。

鋭く尖つた罫を見て、リーリエの顔から血の気が引いた。

「分かつたら怪しいモノに迂闊に触るなよ」

「はい」

腰を抜かしたりーリエを、シルヴァデイが拾い上げて先に進む。

進んだ先は、断崖絶壁。木の杭が立てられているが、肝心の橋が無い。

「分かりましたっ。此処には見えない透明の橋があるのですね！ 本で見た事ありますよっ」

次は自信があると、地面の砂を少量掴むリーリエ。

「サラサラと……あれ？」

しかし、こぼれ落ちる砂は途中で止まる事なく崖の下へと流れていった。

「……なにをしている」

「……見えない橋があるのでは？」

またもや溜め息を吐くグラジオ。

「乗れ」

シルヴァデイの背に乗った二人は、崖を飛び越えて向こう側へと着地する。

「以前この場所をエーテル財団の資料で調べた。謎なんて無い。橋はただ落ちただけだ」

すると、リーリエは顔を俯かせた。

「お兄様は何でも知っていますね。私は、足手まといです」

グラジオは妹の顔を見る事なく、シルヴァデイに進めと命じる。

「だったら、帰るのか？ 行動を起こさないと、母さんだって戻らないんだ」

「そう、ですよね」

兄の言葉に励まされたのか、リーリエは頬を叩いて表情を変えた。

もう揺らがない決意を持った兄妹は、祭壇へと近づいて行った。

暫く洞窟を歩いていたが、先から光が差し込んでくる。

「あの先が、日輪の祭壇！」

目的の場所が近づき、シルヴァデイから降りて光の方へと走るが、物陰から飛び込んでくる影があった。

「待て、リーリエっ」

影に気付いたグラジオが呼び止める。足を止めたリーリエの目の前には、影の正体、複数のポケモンが道を塞いだ。

「ジャラコにジャランゴ。何故こんなに――」

現れたポケモン達は、誰かを呼ぶかのように鳴き声をあげる。

「なんだっ」

地面が揺れ、一部の壁が崩れ落ちる。その中から出てきたのは巨大なポケモン。

「ジャラランガ……」。本で読んだサイズより、かなり大きいです」

「恐らく、ここがヌシなんだろう」

ジャラランガは、鋼のように堅い鱗を震わして金属音を響き渡らせる。「やる気か、いいだろう。見せてやる聖獣の力をつ」

シルヴァアデイを前に出すと、リーリエは少し離れながらもシロンをシルヴァアデイの隣に行かせる。

「わたくしもやります、こなゆきっ」

「ブレイククローツ」

二体の技が命中するが、ジャラランガは倒れない。

「思ったよりも堅いな」

舌打ちをして次の戦法を考えるグラジオ。そこでリーリエは閃いたように短く息を漏らした。

「フェアリーなら。お兄様、シルヴァアデイを！」

リーリエの意図が伝わり、懐に手を入れて道具を出した。

「シルヴァアデイ、竜を滅する妖精の――」

「ジャラツ」

フェアリーメモリをシルヴァアデイへと投げるが、グラジオの背後に忍び寄っていたジャラコに弾き落とされた。

「なっ、メモリが……」

弾かれたメモリは、ジャラランガの足下であり、迂闊に取りに行けない。

「どう、すれぽ」

グラジオが歯がみをなしていると、リーリエの元にジャラコ達が押し寄せる。

「しまったっ、リーリエッ」

「ひっ、シロンッ」

離れている所からシロンとシルヴァデイが駆けるが、間に合わない。

「リーリエーッ」

届かないと分かっているけど、手を伸ばさずグラジオ。

もう駄目と感じたリーリエは目を閉じた。

ジャラコ達がリーリエを押し潰したのか、砂煙が舞い上がる。

「リー、リエ……」。連れて来たのは、間違いだったのか」

目の前の惨状に、グラジオは膝を崩して後悔する。

その時――。

「あつぶねー。間一髪だな」

煙が晴れた場所には、兄妹以外の姿があった。

「リーリエ。大丈夫か？」

「ユウ、キ？」

ポケモンに触れるようになったとはいえ、怖かったんだろう。リーリエの手は震えていた。

「ん。怪我は無いみたいだな」

俺とリーリエの周りには、襲っていたジャラコ達が目を回して倒れていた。

まったく。またリーリエが触れなくなったら、どうしてくれるんだ。

「うおっ。どした、リーリエ」

既に瀕死になっているジャラコ達を睨んでいると、胸にリーリエが飛び込んでくる。

「ありがとうございます。わたくし覚悟して来たのに、怖くって……」

泣きそうな声で、掴んでいる俺のシャツを握り締めてくる。

「もう大丈夫だ。リーリエの事は俺が守る。もう怖い事は起きないから、前だけ見てな」

コクリと頷いたリーリエの頭を一撫でして、ジャラコ達を倒した仲間に飛び乗る。

「あのデカブツの所に走れ、ライコウツ」

「ライイツ」

俺を乗せたライコウはジャラランガの元に向かうが、周りのジャランゴが邪魔をす
る。

「シャドーボールを地面に打て！」

効果はいまひとつの技。だけど倒すのが目的じゃない。

「ジャ、ジャラ!?」

舞い上がった砂埃に隠れて突き進むが、

「ジャランガーツ」

同じく姿を隠して近づいて来たジャランガが腕を振りかぶる。

「まもるで耐えてくれッ」

ライコウから飛び降りて、ジャランガの股下を滑り抜ける。

「受け取れッ、グラジオ!」

落ちていたメモリを拾って投げ、グラジオに後を託した。

「ああッ。妖精の剣を刺し穿て、シルヴァアディ!」

「シヴァーツ」

フェアリータイプとなったシルヴァアディは、ジャランガに標準を定める。

「マルチアタックッ」

天敵の攻撃を受けたジャランガは倒れ、取り巻き達も退散していく。

「ふう。お疲れ、ライコウ」

撫でると気持ち良さそうに目を細めるライコウ。

「そのポケモンは……」

リーリエも撫でようとすると、

「おいっ、外に出てからにしろ！」

先ほどの戦闘で天井などの石が降ってくる。

「やべっ、リーリエ乗れ！」

「はいっ」

俺とリーリエを乗せたライコウは、ジグザグに走って障害物を避けていく。

「危なかったー。生き埋めになるとこだったな」

振り返ると、本格的に崩れていく洞窟。

『おーいっ』

その中から、多数の人影が此方に向かってくる。

「サトシ？ 皆も、どうして」

スクールの皆が集まると、グラジオがシルヴァアデイから降りてサトシの前に立つ。

「前にも言っただろう、これは家族の問題だ。ユウキも、さつきは助かったがこれ以上

は――」

「お兄様」

リーリエが言葉を遮ると、ライコウから降りる。

「これは、論理的結論ではありませんが……私、皆さんと行きたいです」

「遊びじゃないんだぞ」

グラジオの睨みに怯まず、落ち着いて説得する。

「皆さんと一緒に。そのほうが、お母様を助けられるような気がするんです。いえ、きつと助けられます！」

暫く睨み合いが続き、やがてグラジオが目を逸らした。

「……………分かった。よろしく頼む」

許可が出たところで、皆は拳を空に突き上げる。

『よし、行くぞーッ』

「……」が日輪の祭壇か……………」

グラジオが辺りを見ながら呟くと、

『カプーッ』

空から四体のポケモンが降りてくる。

「カプ・コケコ、カプ・テテフ！」

「カプ・レヒレにカプ・ブルルも居ますっ」

俺達の前に、アローラの守り神が集結した。

「ウルトラビーストに攫われた人がいる。助けに行きたくて此処に来たんだが」

馴染みのあるカプ・コケコの元に歩くと、リーリエとグラジオも駆け寄る。

「お母様がいるウルトラホールを探しているのですっ」

「そのためにはソルガレオの力が必要なんだろう？ 何処にいるんだっ」

カプ・コケコに詰め寄っていると、サトシのリュックが光りだし、ほしぐもが出てくる。

「カップウ」

カプ・コケコは、ほしぐもを浮かせると他のカプ達の元へ連れて行く。

「テツテテ、テテー」

「レヒーレー」

「ブルアッ」

カプ達がほしぐもの周りを舞い踊ると、日輪の祭壇が様々な色のオーラに包まれる。

「コレって、サイコフィールド？」

他にもミストフィールドなどが発動し、色とりどりに輝く。

「……………いい加減にしてくれっ。遊んでる暇は無いんだ！」

弾むように舞うカプ達に、グラジオが怒鳴り散らした。

「早く母さんを助けに——」

「カップ」

急かす態度にカプ・コケコが諫めているのか、グラジオの前で浮遊する。

「落ち着け、何か意味のある事なんだろ」

「そうですよ。島の守り神を信じましょう、お兄様」

俺達もグラジオの肩に手を置き説得すると、納得していない様子を見せながらも身を退いた。

それから十分程経つが、カプ達の行動は変わらない。

ククイ博士は近くに居るバーネット博士を迎えに行くと言つて離脱し、俺達は準備が整うまで情報を整理しながら雑談していた。

「ところでさ……ライコウ、だよね？」

マーマネが控えめに手を挙げて言うのと、皆も一斉にライコウを見る。

「島の守り神のインパクトに上書きされたけど、合流した時に聞きたかったんだよねー」

「本物？ メタモン、じゃないよね」

マオとスイレンが恐る恐る、ライコウを撫でる。

「ジョウト地方の伝説のポケモンですよね」

リーリエも撫でながら、俺の方へ目を向けた。

「ああ。ジョウトで旅をしていた時、ロケット団の事件に巻き込まれてな」

その時、サトシはまだ旅に出ていないから一人旅だったな。

「ロケット団って、あの三人組の？」

「いや、二人組」

その時に出会ったバクフーン使いの少年は元気にしてるかな。

「いや、ライコウにも驚いたが……」。ユウキは何でそんなにボロボロなんだ」

思い出に浸っていると、カキが若干引いた顔で見てきた。

「……ウルトラホールを探していたんだ」

日輪の祭壇に来たのはいいが、肝心のウルトラホールが見つからなかった。こすもに聞いても知らないって首を振るから他の場所を調べただけど……。

「探してたって、此処は罠などが沢山ありましたけど大丈夫でしたか？」

「……うん」

いや、死にかけたわ。ゲーム脳を見事に殺しに来てたわ。

「カッブーツ」

死にかけた恐怖に身を震わせていると、ほしぐもから眩い光が発されて日輪の祭壇を包む。

「ソルガレオが現れるのか!？」

必死に目を凝らして光の中心を見つめるグラジオ。

更に強い光が一瞬点滅すると、僅かに見えるほしぐもの影が徐々に大きくなる。

光が収まり、そこにほしぐもは居なかった。

「……………ソルガレオ？」

ほしぐもが消えた代わりに、ソルガレオが威風堂々たる姿で俺達を見下ろしていた。

「ほしぐも、なのか……………？」

語りかけるよう確認すると、ソルガレオはサトシの前へと進む。

「食べるか？」

サトシがほしぐもの好物である金平糖を取り出して見せるが、ソルガレオは見つめるだけ。

「やっぱ食べないか」

寂しそうな顔で金平糖を引っ込めると、

「あつ……………やつぱり、ほしぐもなんだなっ」

ソルガレオは差し出された金平糖を完食し、サトシの顔を大きな舌で一舐めした。

「ほしぐ、じゃなかった。ソルガレオ、俺達をウルトラホールの向こうへ連れて行つてくれないか？」

サトシの頼みに、リーリエがソルガレオの鼻に額を付けて懇願する。

「お母様を助けるお手伝い、していただけませんか？」

すると、ソルガレオはサトシの前にZクリスタルを差し出す。

「使えって事か? 入らない」

受け取ったサトシがZリングにハメ込もうとするが、クリスタルが大きくて入らない。
い。

「カップ!」

どうしようも無い事態に、サトシのリングを取り上げたカップ・コケコは――。

『え!?!』

食べるように殻の中へ取り込み、他のカップ達に投げ渡す。

「あれ、形と色が変わってる」

サトシに返されたZリングは黒くなり、クリスタルをハメ込む窪みが大きくなった。

「コレで行けるようになったのかつ、母さんの所へ!」

今まで黙って見ていたグラジオが我慢出来ずにソルガレオに問い詰めると、返事をす

るようにソルガレオは座り込む。

「乗れって言ってるみたいだ」

一番にサトシが背中に乗り込み、俺達もポケモンを戻してソルガレオに登る。

準備が出来ると、カップ・コケコが目の前に降りて来て、Z技を発動するための動きを

見せる。

「リーリエのママを助けにっ」

サトシだけで無く、俺達も動きを合わせて両手の拳をぶつける。

『サンシャインスマツシャーッ』

皆の全力がソルガレオに伝わり、ウルトラホールを出現させて駆けていく。

しかし、ほしぐもが伝説のウルトラビーストだったなんて。

もう一体、対をなす存在がいる。こすもは、もしかして……。

いや、今はルザミーネさんを助ける事だけを考えよう。

想いを一つに、俺達は未知の世界へ進んでいった――。

乗り越えろ！ 災難マイナンヒトデマン

時間の感覚が曖昧になる錯覚に陥るくらいに走っている中、出口が見えてくる。

「もうすぐ……」

グラジオが目線を細くしていると、ソルガレオがゲートを抜けた。

『出たーッ』

目に映るのは、宝石のように輝く岩の塊が所々に浮かんでいた。

「ここがウルトラビーストの世界？」

「綺麗……」

マオとスイレンが幻想的な場所に目を奪われていると、マーマネが怯えた様子でカキの後ろに隠れた。

「言ってる場合じゃないってっ。何か、いっぱい居るんですけどー？」

指を指した先には、ルザミーネさんを攫ったウルトラビーストと同じ種類が数え切れない程に宙を泳いでいた。

「こんなに居るとキリが無い。手分けして探すしか――」

グラジオの提案に皆は乗り気じゃなのか、芳しくない様子。

「少し、怖いな」

「未知の世界は、十分な準備が無いとね」

中でもマオとマーマネが不安な表情を見せていると、サトシが胸を叩く。

「大丈夫だって! 俺達にはこいつらが、ポケモンが居るんだ」

皆は顔を合わせる、一斉に頷いてボールを取り出した。

「そうだねっ。来て、アママイコ」

「アスマリツ」「トケデマル、デンジムシ!」

「来い、バクガメスにガラガラッ」

「力を貸して、シロン」「シルヴァデイ、ブラッキー、ルガルガン!」

「モクローとニャビーツ、ルガルガンも出て来いッ」

『いざとなったらボクも戦うロトーツ』

サトシ達が手持ちのポケモンを全員出し、俺も最後の切り札以外に呼びかける。

「頼む、バクフーン、マリルリ。バンギラスにライコウ……ラティアスは勝手に

出てくるなって」

仲間が揃い、これからどう動くか話し合っていると、遠くの方に黒いナニか見えて

くる。

「あれは……、母さんッ」

いち早く気付いたグラジオが走りだして、ルザミーネさんの元へ急ぐ。
「なんで黒くなってるんだ？」

前に見た時よりもウルトラビーストの体は肥大化しており、中に居るルザミーネさんの髪が墨汁に浸けられたように真っ黒だ。

「お母様ッ」

ルザミーネさんの表情がハッキリと分かる位に近づいたリーリエは、思い切り声を張り上げた。その時――。

「来ないで………、来ないでえっ」

苦しそうにもがきながらも、拒絶して去っていく。

「待って、お母様ッ」

「いやっ」

それでもなお手を差し伸べるリーリエだが、

「っ、リーリエー！」

ルザミーネさんが、傍の岩柱を破壊して破片を頭上に降らしてくる。間一髪で引く張って助け出せた、けど………。

「ユウキッ。そんな、どうすれば」

岩の破片が降り積もり、巨壁となったせいで皆と分担されてしまった。

「待つてろ、今ソルガレオ達で――」

「あつ、リーリエのお母さんが見えなくなるぞつ」

サトシが壁を破壊しようとするが、カキの声で中断する。

「……俺は大丈夫だから、追いかける」

「そんなつ、こんな所でユウキを一人に出来ないよつ」

マオが声を荒げるが、足音が一つ離れていくのが聞こえた。

「先に行つてるぞ……」

「なんで、お兄様つ」

納得していないリーリエに、俺は櫓を飛ばす。

「リーリエ、お前はルザミーネさんを助けに来たんだろう。早く行け」

グラジオはきつと俺を信じて行つたんだろう。……そうだよ。そう信じてるよ。

「ユウキ、せめてバクフーン達を此処に――」

スイレンが心配して、俺の手持ちを置いていくと言っているけど、俺としては皆の方が心配だ。

「ウルトラビーストがあんなに居るし、この先に何かあるか分からない。だから皆を頼んだぞ、バクフーン。ラティアス達もな」

俺のポケモン達は、無事を願うように鳴き声を一つあげてグラジオを追いかける。

「ほら、皆も行けて。後で必ず追いつくから」

「……………絶対ですよ」

信じてくれたのか、また一つ足音が遠ざかっていく。

「ちよつ、リーリエツ。もうつ、無事じゃなかったらマオちゃん料理食べさせてあげないんだから！」

「お気に入りの釣リスポットも教えてあげない」

「どんどん離れていくが、足音が一つ止まる。」

「ユウキ。アイツが居るなら、本当に大丈夫なんだよな？」

サトシは心配していないだろうが、確認をしてきたんだろう。

「ああ」

後ろを振り返ると、今までの騒ぎで集まったのか、ウルトラビースト達が押し寄せてくる。

「すぐに行くから、その間は頼んだぞ」

「分かった」

サトシの足音が消えていくのを聞き届けて、マスターボールを握り締める。

「さあ、出番だ」

サトシ達がソルガレオに乗りながら追いかけていると、ルザミーネが突然振り返る。「いやっ、来ないで! じゃないと怖い事するからっ」

そう言いながら投げたモンスターボールから、ポケモンが出てくる。

『ビビっ、エンニユート。洞窟の奥深くに棲み、フェロモンでメロメロにしたヤトウモリ達を待らせている。どく・ほのおタイプ』

現れたポケモンをロトムが解析していると、エンニユートがヘッドロウエーブを放つてくる。

「バクガメス、かえんほうしゃだっ」

迫り来る毒の霧を、バクガメスの攻撃で相殺する。

「ここは俺に任せろ」

カキがソルガレオから飛び降りると、エンニユートの相手をする伝える。

「………わかつたっ、また後でな!」

サトシ達が一瞬戸惑うも、直ぐにルザミーネを追いかける。

「バクガメス、ドラゴンテールッ。ガラガラはフレアドライブだ!」

二体の攻撃が飛んでいくが、エンニユートは俊敏な動きで避けていく。

「シャアッ」

「しまったつ、バクガメ――」

エンニュートのりゆうのはどうがバクガメスに当たり、ガラガラは猫だましで怯んでしまつて動けない。

トドメのヘドロウエーブが出され、絶体絶命。

その時、バクガメス達の炎では無い攻撃がヘドロウエーブをかき消した。

「お前、バクフーンツ。残つてくれたのか!？」

「バクフーンツ」

カキ達を守るよう構えていたのは、ユウキのバクフーン。

「ありがとう。力を貸してくれ！」

――毒の炎と三つの炎が対抗し、ぶつかり合う。

「もう帰つてつ、これはルザミーネのモノなんだから！」

「ルザミーネ？」

追いかけていると、子供のように痲癩をおこすルザミーネ。

「やつと会えたのつ。もう離さないんだからあつ」

「操られてる、のでしょうか？」

様子がおかしい母に対して、リーリエが苦しそうに自身の胸に手を置く。

「だろ。うな。だが、あれは本音だろう。母さんはずつとウルトラビーストに会いたいと願ひ、研究を続けてきた。その願ひは今、叶ったんだ」

「そんなんつ、取り込まれてるんだよ!?!」

マオの指摘に唇を噛むグラジオ。

「母さんはそう思つてないんだろう。俺達の事は、やつと手に入れた玩具を取り上げようとしてる嫌な奴らだと思つてる」

「嫌でも助けなきゃ」

そのスイレンの言葉を踏みにじるよう、ボールが三つ飛んでくる。

「ドレディアとミロカロス、それにムウマージ。どの子もお母様が大切にしていたポケモンです」

立ちほだかる三対のポケモンは、主の脅威を排除するためにそれぞれ技を放った。

「つ、アママイコ、マジカルリーフツ」

「アシマリ、バブル光線つ」

「ビリビリちくちくで受け止めて!」

エナジーボールは吹き飛び、ハイドロポンプは逸らされて十万ボルトはトケデマルに引き寄せられた。

「()は私達三人に任せてつ」

マオとスイレン、マーマネが離脱してこの場に残る。

「サトシ達は先に——あれ？」

「バンギラスにマリルリ、ライコウ?! 一緒に戦ってくれるの?」

驚くマーマネ達の前に立つ、ユウキのポケモン達。

「バンギラス達が居るなら大丈夫だろうけど、ニャビーとモクローも頼むっ」

『ボクも残ってサポートするロトトツ』

サトシ、グラジオ、リーリエの三人はマオ達に任せて去って行く。

「やるよっ、アママイコ。バンギラスもお願ひ!」

「アシマリ、マリルリ。頑張ろう」

「トケデマルとデンジムシ、頼んだよっ。……ライコウ達って何の技が使えるの

?」

『ボクにお任せロトツ』

——二人の少女と一人の少年が、歴戦のポケモン達と力を合わせて立ち向かう。

追われているルザミーネは、更にポケモンを繰り出す。

「どうして邪魔するのっ。嫌いっ、大っ嫌い!」

悲鳴を響かせながら出したポケモンに、グラジオがシルヴァディから飛び降りた。

「あのアブソルは……。サトシ、リーリエと先に行け」

アブソルがサイコカッターをソルガレオに飛ばすと、

「お前の相手は俺だつ。ブラッキー、悪の波動!」

ルガルガンとシルヴァデイが立ちはだかり、ブラッキーがサトシ達への攻撃を受け止める。

「ああつ、ここは任せるよ!」

サトシとリーリエを見送ったグラジオは、アブソルを睨み付ける。

「ブラッキーの良き特訓相手だったな、お前は。……正気に戻してやるつ」

——懐かしき再会は、火花を散らす。

「なんでまだ追いかけてくるの? もう……嫌」

ルザミーネの顔に悲痛の色が表れると、懐のボールからポケモンが飛び出して、サトシ達の前に立ちはだかる。

「ピクシー……」

立ち止まったソルガレオから、ゆっくりと降りたりーリエは持っているピッピ人形を抱きしめた。

「お母様のポケモンの中で、一番のお友達でした。だから、ここはわたくしに——」

ピクシーと向き合うリーリエに、ムーンフォースが当たりそうになるが、

「いいぞつ、ルガルガンにラティアス！ そのままリーリエを頼むっ」

「お母様をお願いします」

リーリエの想いを受け止めて、サトシとソルガレオは疾走していった。

「ピクシー、目を覚ましてっ」

しかしピクシーに声は届かず、返事はムーンフォースで返してくる。

「シロン、こなゆきっ」

カバーしきれなかった分は、ラティアスとルガルガンが受け止め、技が止まった瞬間にリーリエはピクシーへと歩み寄る。

近づかせないと、更にマジカルシャインが発動するが、ルガルガンの岩落として弾き、ムーンフォースはサイコキネシスのエスパ―同士で打ち合う。

「思い出してください、わたくしと……ピッピ人形と一緒に遊んだあの日々を」

ピクシーは、自分に近づくりーリエに何かを感じて一歩後ずさり睨む。

「わたくしがママになって、ピクシーはこのピッピ人形のお姉ちゃん。毎日家族になって遊んでいたんですよ」

触れ合える距離までに近づいたリーリエは、ピクシーに、温もりを伝えるよう抱きしめる。

「ピッピ人形に触れて、感じて、思い出してください。ウルトラビーストに囚われていても、私たちと一緒に過ごした日々は、あなたの心が、体が、決して忘れてはいないはずですよ」

リーリエの言葉を聞く度に、理解できない胸の痛みに襲われて、顔を歪ませるピクシー。

「もう離しません……あなたも、お母様も、ポケモン達も。わたくしは取り戻したいのです」

「ビクツ、シート」

身の回りの全てを破壊しようと、ムーンフォースのエネルギーを溜め始めるピクシー。

「……大好きよ。ピクシー」

たとえ自分に敵意を振り翳されても、微笑みを崩さないリーリエ。ピクシーから放たれる虹色のエネルギーが、辺り一帯を包み込んだ。

その時、リーリエを見守っているポケモン達、中でもシロンが光で姿が見えなくなったりリーリエを心配して鳴き声を上げる。

「コーンツ」

今すぐに駆けつけたいシロン。光が徐々に収まると、

「ピクシー…….?」

眩しくて瞑っていた目を開けたリーリエが、大人しくなったピクシーに声を掛けた。

「ピッ、ピクシッ」

剣呑な雰囲気は収まり、リーリエとの再会に喜ぶピクシーが抱きついた。

「思い出したんですね！ 良かったッ」

——再開を喜びながらも、少女達は家族を救う為に団結する。

——少年少女がそれぞれの戦いに身を投じる中、紫水晶に輝くこの宝石のような世界の宙に、一閃。

その一筋の光は、煌びやかな翠玉色だった。

ハッピーエンドで締めたイーブイ

「行け、ソルガレオ！」

「来ないでえっ！」

ウルトラビーストの世界で、サトシとソルガレオは取り込まれたルザミーネを追い詰めていた。

「なんだ!？」

逃げるルザミーネが止まり、足下から紫色の液体を噴出させる。

危険な臭いがする液体に足を止めるサトシ達。

「ピツカ? ……チャアツ」

「うえっ、毒なのか?」

液体の臭いを嗅いだピカチュウが鼻を抑えて一步下がる。

近づけさせないと、液体を更に広く拡大し始めるルザミーネ。

「くっ、どうすれば ……」

毒の沼を目の前にしたサトシは佇むが、諦める様子は無かった。

「バクガメス、ドラゴンテールツ。ガラガラ、つて勝手に動くな！ 援護を頼むバクフーンツ」

カキは慣れない複数のポケモンバトルに苦戦していた。

「俺達の炎技があまり効いてないみたいだ……どうするか」

手をこまねいていると、ガラガラがカキに突撃する。

「ガラアツ」

「うお、つおい、何するんだ！」

敵を無視して自分に攻撃するガラガラに訝しむが、操られた訳でも無く、その様子は弱気のパートナーを叱りつけているようだった。

「お前……そうだな、俺達の炎はアーカラ山の如く！」

ガラガラの真意を理解したカキが敵のエンニユートを睨み付ける。

「もつとデカい炎で攻める。いつも通りにっ」

エンニユートは危険を感じ取ったのか、様子見を止めてヘッドロウエーブを放った。

「ガラガラツ」

カキの呼び掛けに、ガラガラはフレアドライブで攻撃を止め、

「バクフーン、れんごくで閉じ込めてくれっ」

激しい炎の渦が、エンニユートを包んで身動きを取れなくすると、カキとバクガメス

は共に動く。

「行くぞつ、全身全霊……」

やけどを負いながらも抜け出したエンニユートに迫るのは、大火の暴力。

「ダイナミック、フル……フレイム！」

何処にも逃げられない程に巨大な炎。

為す術も無く、エンニユートは吞まれ――。

最も人数の多いこの場所では、有利にバトルが進んでいた、筈だった。

「もうつ、モクロー戻って来てよー」

ドレディアの甘い香りに誘われて、モクローはドレディアにベツタリと引っ付き、マオ達は安易に攻撃が出来ない状況に陥っていた。

「そうだつ、アママイコがドレディア以上に甘い香りを出せば戻ってくるんじゃない？」

マーマネの提案に頷いたマオは、アママイコに目を向ける。

「やってみる。アママイコ、甘い香りだよつ」

目に見える程にピンク色な甘い匂いが辺りに広がると、気付いたモクローが発生源であるアママイコにフラフラと飛び移る。

「やったつ。成功だ――」

「ドレーディーツ」

しかしドレーディアも自分の盾を取り返すように甘い香りを出してモクローを引き寄せる。

「ああつ、モクローがまたつ。アママイコ、負けないで！」

アママイコとドレーディアの間で往復するモクロー。

「罅が明かない」

止まった戦況に、スイレンはマリルリとアシマリを前に出させる。

「アシマリ、モクローをバルーンで包んでっ」

バルーンの中に閉じ込められたモクローは、匂いが遮断されて目を覚ました。

「マリルリ、アクアジェット！」

「ドレーディーツ」

効果は今ひとつなのに、ドレーディアはかなりのダメージを負った様子を見せる。

「ほらだいで威力を上げておいた」

ドヤ顔をしながら右手を挙げて敬礼するスイレンに、マオ達は『おおつ』と拍手喝采。

『ドレーディアがソーラービームの発射態勢に入ってるロトツ』

ロトムの警告に皆が慌てて指示を出すか、

「レーディーツ」

「うそっ、早くない!?!」

ウルトラビーストに影響されているせいなのか、個体や技の強化がされて、本来はただ時間の掛かるソーラービームが放たれる。

「間に合わ」

マオが恐怖で目を瞑る直前、巨体が立ち塞がるのが見えた。

「あれ、なんとも……バンギラスッ」

目を開けた皆は、自分たちを守ってくれたバンギラスに駆け寄る。

「バ、ン……グウツ」

いくら練度の高いユウキのポケモンと言えど、未知の力で強化された弱点の技を食らったバンギラスは膝をつく。

「バンギラス……ありがとう」

苦労よう撫でたマオは、皆と顔を合わせて頷き合う。

「アママイコ、マジカルリーフッ」

「アシマリ、マリルリ、ダブルアクアジェット!」

「トケデマル、びりびりちくちくッ」

しかしドレディアへの攻撃は、ムウマージとミロカロスにかき消される。

「まだまだっ。ライコウ、十万ボルト!」

マーマネの指示で飛ぶ電撃がミロカロスに当たると、瀕死になったのか目を回した。すかさずスイレンがアシマリと動きを合わせて、技を放つ。

「届け、水平線の彼方まで！ スーパークアトルネードッ」

放たれたZ技がドレディアを瀕死にさせ、残ったムウマージが向かってくる。

「お願い、パンギラスッ」

マオが自信満々に、迫るムウマージに指を指すと、

「かみくだくッ」

「ガアッ」

渾身の一撃。効果抜群。三対の敵ポケモンが倒れて、三人は笑顔でハイタッチを交わす。

「やったねっ」

「うんっ」

「僕達の勝ちだあ！」

勝利を喜ぶマオ達だが、ポケモン達はまだ警戒を解いていない。

「あれ、ニャビーどうしたの？」

目を回して倒れているドレディア達を、牙を剥き出しにして威嚇するニャビー。

その視線の先には――。

「速攻で片を付けるっ」

グラジオはメモリを取り出してシルヴァアデイに投げた。

「ファイトメモリを受け入れ、闘争心を滾らせろ！」

格闘タイプになったシルヴァアデイが、オーラを纏う。

「マルチアタックッ」

アブソルにとって天敵の格闘攻撃が当たり、後ろに吹き飛ぶ。

しかしまだ敵意を残して立っていた。

「強いな。ウルトラビーストの影響か？」

アブソルの角から刃状攻撃が飛ぶと、ブラッキーを前に出す。

「サイコカッターかつ。悪の波動で防げ！」

隙が出来た相手に、グラジオは大技を放つ準備を始めた。

「蒼き月の乙を浴びし岩塊が今、滅びゆく世界を封印する！」

ルガルガンは高く跳び上がると、右手を上に翳す。

「これで終わりだ！」

ルガルガンの手の上に岩の塊が積み重なり、グラジオ達を大きな影で覆い尽くす。

「ワールズエンドフォールツ」

アブソルは悪あがきで巨大な岩塊にサイコカッターをぶつけるが、ビクともしない。そのまま地面に衝突して土煙が起こると、グラジオは勝利を確信して母親の元へ急ごうとする。

「よし。シルヴァアデイ、行く——ストーンエッジ！」

その場を離れようとしたグラジオが、突如ルガルガンに攻撃を指示する。

「何故だ………。確実に倒した筈だッ」

煙が晴れると、アブソルは先ほどよりも目付きを鋭くさせて立っていた。

「なんで、倒したよね!？」

マオが叫ぶ。その理由は、

「今までの攻撃、効いてなかったのかな」

「いや、確実に効果抜群だったよっ」

ドレディア、ミロカロスにムウマージは、不気味に立ち上がりマオ達にゆつくりと迫る。

「本気の炎だぞ……。なんでまだ立っている」

エンニユートは素早く迫り、ドラゴンテールを振りかざす。

「躲せっ」

辛うじて躲したが、岩柱をも巻き込んだ攻撃に一步退く。

「俺達の炎は決して消えないっ。行くぞー！」

まるで不死身のポケモンが、カキ達に毒牙を向けた。

何度倒しても立ち上がるアブソルを見て、グラジオはルザミーネが逃げた方向を見つめる。

「そうか………。本体を倒さないと終わりは来ない、か」

シルヴァアデイに乗ったグラジオは、アブソルを無視して走り出す。

しかし、この場から逃がさないと、サイコカッターが放たれるが、

「ブラッキー、ルガルガン。此処は任せるー！」

了解したと、アブソルの攻撃を止めるブラッキー達。

「早く母さんの元へっ」

思いに応えたシルヴァアデイは、速度を上げて不安定な地面を駆けだす。

「リーリエのママー！ リーリエとグラジオは直ぐ近くまで来てるんだっ」

「もう帰ってってばー！」

毒の沼に立ち尽くすサトシはルザミーネに説得を試みるが、反応は変わらないどころか、更に毒をまき散らす。

「うおっ、とっ」と

毒にかかる所だったサトシを、ソルガレオは口で持ち上げて避難させる。

「ありがとう、ソルガレオ」

サトシを背に乗せたソルガレオは、毒の沼に入り駆けだしていく。

「えっ、平気なのか!?!」

ソルガレオは鋼タイプを持つてるので毒は効かない。それを知らないサトシが一瞬驚くも、直ぐに構える。

「いやあっ」

近づいてくるサトシ達に毒を飛ばすルザミーネ。

「行くぞピカチュウッ」

毒の沼を抜けて、ソルガレオから飛び降りたサトシはピカチュウと共にルザミーネへと走る。

「ピカチュウ、攻撃して引きつけてくれ。その間に俺がリーリエのママを引っ張り出す
！」

ピカチュウの十万ボルトが囀となり、その間にサトシがルザミーネを取り込んでいる

ウルトラビーストに飛びつく。

「ぐあつ」

しかしルザミーネは引つ張り出せず、触手で弾き落とされる。

「大丈夫だ。ピカチュウ、もう一度！」

心配して来たピカチュウに声を掛けて、同じ作戦で挑戦するサトシ。

きつとユウキは『やはりスーパーマサラ人か』と呟くが、普通に見たらトレーナーが直接戦うという有り得ない行動。

「はあ、はあ……もう一度」

「チャア……」

成功の望みは薄いが今はこれしか思いつかないと、サトシは立ち上がり、ピカチュウは止めるようにサトシの顔を見上げる。

「サトシッ」

と、そこで後ろから聞こえる声。

「リーリエ、グラジオ！」

シルヴァアデイに乗った二人に、ピクシー達がサトシの元へと近づいてくるのが見える。

「サトシ！ そのウルトラビーストを倒さないと母さんのポケモン達は何度も蘇るッ」

「えっ、このままじゃ戦っている皆が……」

サトシが焦って顔を難しくしていると、ソルガレオが引き返していく。

「行つてくれるのか!？」

チラリと一度サトシを見たソルガレオは、任せろと言わんばかりに速度を上げる。

「ルガルガン、ラティアスも一緒に頼むッ」

ソルガレオを追つて、ラティアス達も皆の救援へと向かう。

「お母様、今行きます!」

「待つてリーリエ、その沼は危ないッ」

警告を飛ばしたサトシに首を振ると、リーリエはピクシーに抱えられて毒の沼へと踏

み入る。

「大丈夫です。ピクシーの特性、マジックガードで平気ですから」

リーリエに続き、グラジオもシルヴァデイにメモリを渡して沼を渡る。

「俺達も行くぞ。鋼の獣となれ、シルヴァデイッ」

サトシの元へと着いたリーリエとグラジオは、浮かんでいる母親を見上げる。

「…………お母様」

「ウルトラピーストを倒すため、シルヴァデイを鍛えてきた。今こそ力を示す時!」

「シヴァアツ」

グラジオの宣言に同調して叫びを上げるシルヴァアディ。

しかし、ルザミーネは戦う意思は無いのか、触手の先から岩を創り上げて逃げる。

「またっ」

「逃げるのですかっ」

「あなた達が追いかけて来るからでしょうッ」

塔のように造り上げた岩の天辺から叫ぶルザミーネに、リーリエは表情を厳しくして歩く。

「お母様。逃げないでください」

「来ないでよッ」

岩の塔を登り始めたリーリエにサトシとグラジオは慌てて止めようとするが、

「わたくし、言いたい事があるんです。任せてくれませんか？」

自分を止めようとするサトシ達に頼むと、グラジオは溜め息を吐きながらも頷いた。

「危なくなったら止めるぞ」

「ああ」

ルザミーネへと近づくりーリエを心配しながらも、期待の視線を送るグラジオ。

塔を登り切ったリーリエだったが、岩肌で傷つき服がボロボロ。顔も土で汚れて、息が上がっていた。

「はあ、ふう……」

それでも、リーリエの表情は暗くなる事無く、自らの母親を睨み付けた。

「お母様なんて——大っ嫌い！」

「——っ！」

リーリエの罵倒に、ルザミーネの眉が一瞬だけピクリと動いた。

「いつもいつも、わたくしのことを赤ちゃん扱いするくせに。これではお母様の方がずっとわがままな赤ちゃんじゃありませんかっ」

今まで苦しい表情のルザミーネの顔に、戸惑いが生まれる。

「今のお母様は本当のお母様じゃない。長い間、ウルトラピーストの研究も続けてきた。

お母様はとても強い人……」

操られているルザミーネは、聴き入るよう顔を俯かせた。

「なのに今は、自分一人で動く事が出来ない操り人形。……お願い、出てきて」

姿が見えないが、下でリーリエの成功を信じているサトシ達は固唾を呑む。

「わたくしのお母様なら、自分の力で出てこられる筈です——」

一歩踏み出し、手を差し伸べたリーリエは、涙を浮かべながらも叫ぶ。

「論理的結論として！」

その時、虚ろだったルザミーネの目に光が戻る。

「リー、リエ………?」

自分の娘に手を伸ばすルザミーネ、だが――。

「お母様ッ」

正気を取り戻したルザミーネは、ウルトラビーストの触手で体の奥へと押し込まれて、姿が見えなくなった。

体を更に黒く肥大させたウルトラビーストは、触手をリーリエへと伸ばす。

「リーリエッ」

叫びを聞いたグラジオ達が触手で掴まれる寸前に、リーリエをシルヴァデイの背に乗せる。

「母さん………。クソっ、なんて奴だ」

ウルトラビーストは、またもや岩を創り上げると自分の周りを覆う。

『A h a r !』

「なんだっ?」

奇妙な鳴き声を上げたウルトラビーストに警戒するサトシ達。

その行動の意味は……。

「つて、なんかいつぱい来てる!」

「仲間を呼んだのかっ」

周りから沢山のウルトラビーストが、ふよふよと浮いて近づいてくる。
「そんな、きやつ」

大群が来る中、本体の黒いウルトラビーストが岩を飛ばし、自らを覆う岩に鋭い鉤爪を生やして要塞を造る。

「なんで閉じ籠もるんだ？」

「母さんを離したくないんだろう」

疑問に答えたグラジオに、サトシは視線を向ける。

「母さんが奴を知りたいと願ったように、奴も母さんを……いや、人間を知ろうとしているのかもしれない」

触れただけで傷つく要塞に、手出しが出来ず目付きを鋭くするグラジオ。

「そうだ、一緒に乙技を撃とう！」

サトシに提案にグラジオが首を振る。

「さつき使ってしまった。それに、あのウルトラビースト達をどうにかしなければ」

「そっか……。どうしよう」

三人はこの状況に頭を抱えるが、敵は待つてくれない。

「来ますっ」

「くっ、シルヴァデイツ」

「ピカチュウッ」

まずは津波のように押し寄せるウルトラビーストを倒そうとするが、
「数が……多すぎます」

押し潰されないよう遠距離から技を放つも、一向に減らない。

「こうなったらZ技で――」

せめてこの脅威だけでも、サトシがZリングに触れた時。

「まあ、待てよ。今はまだ取っとけ」

「えっ?」

サトシ達の後ろから声が聞こえて後ろを振り向くが、見えたのは翠玉色の残像のみ。

気のせいかと、前に顔を戻すと――。

「はかいこうせん」

其処には、エメラルドに輝く龍を従えたユウキが立っていた。

全てを破壊する光線を横に薙ぎ払い、ウルトラビーストの大群を吹き飛ばした。

ふう。これで一先ず安心だな。

「ユウキッ」

「おお、サトシ。とりあえず倒したが、どういう状況?」

「えーっと、リーリエのママが取り込まれて岩になって閉じ籠もって」
なるほど。わからん。

こめかみを抑えてグラジオ達を見ると、意図を汲んでくれたのか手短に話してくれ
た。

「あの要塞のような岩の中に、母さんがいる」

「でもZ技くらい威力じゃないと壊せないんです」

確かに、破壊光線を当てても崩れなかった。

「壊しても本体を倒さなければならぬ。．．．．俺はもうZ技を撃ってしまったん
だ」

そうか、今Z技を使えるのはサトシと、

「分かった。岩の破壊は任せろ」

「なに？」

訝しむグラジオの前に出て、少し離れながらもサトシの横に立つ。

「あつ、そうか。ユウキは」

サトシの言葉に頷き、Zリングを掲げる。

いつもと違い、そのリングは天色に輝くクリスタルを着けている。

「あれは、ドラゴンZかつ」

「ということとは……」

「グラジオとリーリエは、俺のポケモンを見上げる。

「やるぞ……」。レックウザ！」

「グルルツ」

「想いに同調し唸る、最後の切り札。

「俺達もだつ、ピカチュウ！」

「サトシの方をチラリと見ると、Zリングが光っていた。

「うわわっ。……クリスタルが変わった？ よしっ」

「え、何ソレ？ 電気Zじゃないの？」

「俺達の全力をぶつけようっ」

「ピッピカピッ」

「サトシとピカチュウがハイタッチを交わし、その衝撃で落ちた帽子をピカチュウが被る。」

「準備はいいか？ 行くぞッ」

「レックウザは俺を中心に蜷局を巻き、力を溜める。

「ドラゴンZの動きは分からない筈なのに、体が勝手に動く。」

「これが」

「俺達の――」

『超、全力……だあッ』

レックウザは天に昇るよう飛び上がり、ピカチュウは大量の電気を周りに帯電させる。

「アルティメットドラゴンバーン！」

「1000万ボルト！」

巨大な龍の幻影が岩の要塞を崩し、姿が露わになったウルトラビーストに、七色の電撃が降り注ぐ。

――ドオンッ。

一瞬の無音が過ぎ、爆音が響く。

いや、大丈夫？ 死んでない？

予想以上の攻撃に、取り込まれているルザミーネさんを心配していると、巨大な電撃の柱が消える。

「やったか？」

待て、それはフラグだ。とはならず、

「お母様ッ」

ウルトラビーストは地面に倒れ伏せ、ルザミーネさんの腕が飛び出しているのが見え

た。

「母さんっ、今引っ張りだす!」

俺も手伝って腕を引つ張ると、ズルリとルザミーネさんの体が出てきた。

「目を開けて、お母様!」

ルザミーネさんの顔に付着している黒い液体を拭って、体を抱えるリーリエ。

「大丈夫かな。リーリエのママ」

「まあ今は見守って——っ」

少し離れて後ろからサトシと共に無事を願っていると、ルザミーネさんを取り込んでいたウルトラビーストが起き上がる。

「レックウザッ」

警戒してレックウザをリーリエ達の傍に行かせるが、

「あれ、逃げてく」

サトシが呆気ないと言うよう目を見開く。

「どうするか」

追いかけて倒すべきか考えていると、リーリエ達の様子が変わった。

「お母様? お母様ッ」

「リー、リエ……」

「母さん！」

弱々しく目を開けたルザミーネさんが立ち上がるようにするが、体勢を崩して転びそうになる。

「つ、ふう。無理はするな」

すかさずグラジオが肩を組み支えると、反対側にリーリエも立つ。

「……………悪い、夢を見ていたようだったわ。でも」

俯かせていた顔を上げたルザミーネさんは、微笑を浮かべる。

「あなた達の声が聞こえたの。……………ありがとう。リーリエ、グラジオ」

「お母、様……………」

ここまで色々な感情を溜めていたリーリエは、堪えきれずに涙を流す。グラジオも泣いているのか、顔を背けた。

『おーい！』

やっと終わったと、大きくグツと背を伸ばしていたら、遠くから皆が走ってくるのが見えた。

「ふう。突然ドレディア達の動きが止まったから驚いたよ」

「エンニユートがすっかり怯えてるんだが、どうすればいい」

「てかレックウザがいるんですけど何事？」

「どうせユウキのポケモン。もう驚かない」

親子の感動ムードが一瞬で消え失せ、和気あいあいとした空気が流れる。

「じゃあ、帰るとするか」

集合した皆にそう声を掛けると、全員片手を上に突き出して、

『おーっ！』

まるで疲れを感じさせない声で、返事を返してくれた。

さらば、また会う日までオキシス

ウルトラビーストの世界から帰ってきて一週間ほど経った。

それも色々あった一週間だ。まず、ルザミーネさんについて。

ルザミーネさんは、療養に付き添ってスクールを休んでいたリーリエによると元気になっけてきていると聞いた。

久しぶりに見たリーリエの笑顔を見てホッとしている。

それで暫くは何も無いと思っていたのだが、驚愕の事件が起きた。

ククイ博士とバーネット博士の結婚だ。

いや、まあ。いずれそうなると思っていたけど、急な話だったもので俺とサトシは大変驚いた。

次の日にスクールで報告した時、女子達も予想してたみただけどスイレンは『意外と早かった』と言つて驚きは少なかつた。

マオとリーリエの『次は……』という呟きに何故か寒気を感じたのは内緒だ。

しかし、結婚式はしないらしいと伝えるとガツカリしていたな。

そこで、俺達はサプライズで結婚式を準備しようと企画した。

オーキド校長やマオのお父さん、他にも知り合いに声を掛けて人を集めた。

準備は滞りなく進み、結婚式はいよいよ明日。

だけど、少し気掛かりな事がある。

ソルガレオとこすもの事。

あの後、日輪の祭壇から帰る直前に背負っていたリユックから重みが消えたのを感じた。

同時にサトシがソルガレオが居ないと叫んでいたな。

こすものは、ソルガレオと一緒に帰ったのだろうか？

………挨拶くらい、したかったんだけど。

「――では、指輪の交換を」

結婚式当日。

立会人であるオーキド校長の合図で、緊張に固まったサトシが小さい箱に入っている指輪を持ってくる。

新郎新婦は指輪を取り出し、お互いの手を取ると、

「これからもよろしくね、ククイ君」

「ああ。(こちらこそ)」

指輪が填められて、俺達の拍手や祝す声が飛び交った。

ちなみに誓いのキスは、間に入ってきたゴンベとクワイ博士が行った。なんでやねん。

式も終わり、会場の片付けをしていると参加していたルザミーネさんに呼び出された。

まあ、結婚式に参加していいのか疑問な人物も居たがな。

「ほんつとーに、申し訳ありませんでした！」

そう言い、皆の前で頭を下げる男。

「ザオボーは、ビッケの部下として一からやり直す事にしたの」

ルザミーネさんの言葉で更に頭を深く下げたが、本当に反省しているのだろうか？

皆の反応を見ると、許しているみたいだが……。

「リーリエ嬢ちゃんやグラジオ坊ちゃんにした事を考えれば、寛大な処置。感謝しかありませんっ」

「顔を上げてください、ザオボー。今回の事でわたくし達は色々な事を経験し、成長したと思っています。なので、もう気にしていませんよ」

「リーリエ……」

サトシ達も頷いて同意している。皆の気持ちに絆されたのか、ザオボーはもう土下座の勢いだ。

「暖かい言葉つ、感謝の極みですう」

地面に頭を擦り付けようとするザオボーを止めたルザミーネさんは、改まった様子で前に出てくる。

「ユウキ君、皆。あなた達にお願いがあるの」

「お願い？」

首を傾げて聞くと、

「今度ウルトラビーストがやってきたら是非、私達に協力してほしいの。あなた達は、ウツロイドを相手に戦った貴重な存在だもの」

ウツロイド、と聞いた事無い言葉に疑問を抱いていると、ビツケさんがルザミーネさんの隣に並び、

「ウルトラビーストに名前を付ける事にしましたんです。その方がなにかと便利ですから」

答えてくれたビツケさんは、ザオボーに目を向けて指示をする。

「ザオボー、例のモノを見せて」

「はい、ここに！」

俊敏な動きでタブレットを操作したザオボーは、ウツロイドや変なスーツが映った画

面を見せてきた。

『ウルトラガーディアンズ?』

「ええ。皆にはこのウルトラガーディアンズのメンバーとして、ウルトラビーストが現れた時、彼らを捕獲する手伝いをしてほしいの」

画面に映っているウルトラガーディアンズ専用スーツという、ちよつと着たくないモノに顔を引きつらせていると、カキがルザミーネさんに怪訝な目を向けた。

「捕獲とは、どういう事ですか?」

「アローラ地方はウルトラホールが開きやすくなっているから、今まで目撃されたウルトラビーストの中には、偶然迷い込んできたものも多いのではないかと私たちは考えているの」

「もし迷い込んできたら、また彼らの世界に帰す。皆さんには、そのためのお手伝いをしていただきたいのです」

ルザミーネさんとビツケさんはそう言うが、ウルトラホールガバガバすぎん? アローラ地方ヤバくない?

「俺達、協力しますっ。なっ?」

『もちろん!』

真つ先に声を上げたサトシに続いて皆も賛同するが、一人だけ顔を俯かせていた。

「リーリエ？」

ルザミーネさんが心配そうな声で呼び掛ける。

やはり、ウルトラビーストには関わりたくないのだろうか？

「お母様は今回、大変な目に遭いました。けれど、それでも前向きに進む所……大好きです！ だから、協力しますっ」

決意に満ちたリーリエに思わず皆が顔を綻ばせた。

「あ、あれ！」

突然、空に向かって指さしたマーマネの視線を追うと、

「ソルガレオッ」

空を駆ける伝説のウルトラビーストに、

「あつ、ソルガレオの背中にこすもが乗ってるよっ」

マオの言葉に驚いた俺は、よく目を凝らしてソルガレオを見る。

「……………。短い間だったが、元気だな」

周りに聞こえないくらいにポツリと呟くと、遠くに居るこすもと目が合った気がした。

ソルガレオがサヨナラだと言うように、雄叫びを響き渡らせると、背を向けて走りだす。

「また、会えるかな？」

姿を消したソルガレオ達に、サトシが寂しそうな様子を見せた。

「……やっぱり、別れてのは慣れないよな。」

「会えるよ。きつとまた会える。絶対な」

慰めるのは兄貴の役目。サトシの肩に手を置くと、

「ああっ」

元気よく、澆刺と。だけど、涙が出そうなの。

そんな笑顔だった。

ここはアローラ地方の何処か。誰も居ない森の深く。

——空間が裂けた。

そこから現れたのは、未知の生命体。

新たな物語が、動き出す。

To Be Continued

設定3 *本編後推奨

・バクフーン

技構成

ふんか

れんごく

電光石火

きあいだま

・マリルリ

技構成

アクアジェット

はらだいこ

すてみタツクル

・バンギラス

技構成

ストーンエッジ

かみくだく

りゆうのまい

・ライコウ

技構成

十万ボルト

シャドーボール

めいそう

まもる

・ラティアス

技構成

目覚めるパワー（炎）

サイコキネシス

りゆうせいぐん

・レックウザ

技構成

はかいこうせん

りゆうせいぐん（ドラゴンZ

ついに明かされたユウキの全手持ちポケモン。

レックウザは最後の切り札。出した時、相手は死ぬ。

おまけ

『さあつ、いよいよです！ シンオウリーグ決勝戦つ。この試合の勝者はどっちなんだーッ』

実況が何か言っている中、俺は目の前の人間を睨み付ける。

「ユウキ君。君はサトシ君のお兄さんらしいね。楽しませてくれるかな？」

コイツだけは許せん。絶対に潰す。

『ここまでは、ほぼダークライ一体で進んできたタクト選手にユウキ選手はどう立ち向かうのか？』

そう、コイツはあろう事か伝説のポケモンを恥ずかしげもなく出して無双した。別に、伝説や幻のポケモンを使うのは反則じゃない。

ただ、やり方が汚い。

「ふふっ。ボクのダークライは最強だよ」

「言ってる」

マスターボールを真上に投げて、指の骨をポキポキと鳴らす。

『なんとつ、ユウキ選手はレックウザを出してきたーっ。今までマリルリにバクフーン、バンギラスしか出してなかったのに、ここで伝説のポケモンを繰り出してきたぞーっ』

伝説厨には伝説で潰してやる。

「ほう。君も伝説ポケモンを使うのかい。だけど、ボク達には敵わない」

「……………」

余裕をかましてる様だが。その表情、絶望に変えてやるよ。

『試合、開始！』

「ダークライ、ダークホールツ」

これだ。サトシは、この技で三タテされた。

伝説厨で催眠厨。これは許されない。

今までサトシと旅をして、努力しているのを隣で見てきた。

その努力をアツサリと……。

あくまで個人的な感情。だけど、兄として。

「覚悟しろよ。はかいこうせん」

レックウザに迫る黒い球体を呑み込み、真っ直ぐとダークライに飛んでいく光線。

『ダ、ダークライ……。戦闘不能！』

「……。え？」

審判の言葉に理解が追いついてないようだな。

「一撃、だつてツ？ くつ、ラティオス！」

「はかいこうせん」

出てきたラティオスにすかさず攻撃。

アニポケでは、はかいこうせんを連続で撃てるのは当たり前でよくある事だから。気

にしてはいけない（戒め）

「また一撃で!? 次はエンティだつ」

「はいはい。はかいこうせんつと」

鼻をほじるような気軽さでレックウザにはかいこうせんを撃たせる。こんな戦い方

は普段絶対にしてない、が。

今回は激おこぶんぶん丸だから。ムカ着火ファイアーだから。

「なんだっ。そのレックウザは、いったい何なんだッ」

その後に出てきたフリーザーとヒードランを倒し、最後の一体。

「……………君は、強いな」

最初の態度とは一変して、表情に影が差し込んだタクト。

「ここまで追い込まれたのは久しぶりだ。最後の勝負、行くよ！」

モンスターボールから飛び出てきたのは、

「ジャローダ？」

……………までずっと伝説だったのに、いきなり変わったな。

「このジャローダは、最初のポケモン。ツタージャから育ててきた」

……………このジャローダは、雰囲気が違う。

「伝説以外、持ってたんだな」

「最初から伝説を連れたトレーナーなんて居ないよ」

そう苦笑するタクトに、思わず俺は目を逸らしてしまった。

「じゃあ、決着を付けよう」

「ああ」

伝説厨で催眠厨。

だけど、プライドを全て捨てた訳じゃなかったか。

「ジャローダ、リーフストーム！」

「レックウザ、りゆうせいぐん！」

お互いの技が激しくぶつかり――。

『もうっ、聞いてるの!?!』

「え? ごめん。考え事してた」

懐かしい少女とポケモンセンターのパソコンで通話していたら、ふと昔を思い出していた。そのせいで怒られているのだが。

『まったく。シンオウリーグが終わって直ぐに別の地方に行っちゃうなんて。』

もう少しだけ一緒に――』

「ん、よく聞こえないんだが何て?」

『なんでもない!』

ええ。なんで怒ってるのお。

「ところで、そっちは順調か?」

『うーん。次のコンテストは、ホウエンの舞姫が出るみたいで』

ああ、アイツか。

『 応援してくれるよね?』

「あ、ああ」

正直、どちらも仲いいので甲乙付けがたいのだが、ここは領いた方がいい気がするツ。

『やった！ じゃあ待ってるからねツ』

「え？ 待ってるって？ 直接会場に来てって事？」

テレビ観戦じゃ駄目ですか？ あっ、そうですか。

『よし。ポツチャマ、特訓に行くわよ！』

「ちよ、待って——」

一方的に切られた通話画面に、口をポカンと開けた間抜けな俺の顔が写る。

「はあ。まあ、その日は予定無いし。行くか」

溜め息を吐き、スケジュールを確認していると、またパソコンに着信が入る。

「誰だ？ ……はあ」

着信画面の名前に、溜め息が更に深くなった。

『久しぶりかもっ』

やっぱり、テレビ観戦にしとこうかなあ……。

大きな声でアローラな日常編

おまたせ、きのみジュースしかなかったけどいいかな？

「えー、という事で、環境によってポケモンは姿形が変わる事も——うん？」

慌ただしい非日常が終わってから数日。

欠伸をかみ殺しながらいつも通りの授業を聞いていると、時間を知らせる鐘がカンカンと響く。

「なんだ騒がしいな」

鐘に引っ付いているネットコアラは、普段そんなに鳴らさないが………。なにかあったのだろうか。

「ウルトラガーディアンの諸君！ 出動準備ダークライー！」

荒ぶるネットコアラを眺めていたら、教室にオーキド校長が入ってきた。

「ルザミーネさんから連絡があつたんですね？」

真剣な顔をしたククイ博士が校長に問いかける。頷いた校長は、

「うむ。新たなウルトラビーストの目撃情報が入ったそうだ。そこでいよいよ、君たちウルトラガーディアンの出番ということダーテング！」

モノマネをしている校長を置いて、ククイ博士は黒板を上には押し上げた。
「つて、ええっ」

黒板の下には何やらハイテクな機械があり、真ん中の大きなスイッチを博士が押すと。
「ええ………どういいう仕組みなんだよ」

教室の壁が回転し、俺達が入れるような大きさの空間が出来た。

「エーテル財団が教室に改造を施したんだ。直ぐに出勤できるようにね」

ククイ博士はそう言うが、すげえ金が掛かってそんな出来だ。

「それじゃ皆、位置についでくれ」

「俺いっちばーんっ」

サトシが最初に入り、俺も続く。全員が中に揃うと扉が閉まり、床が降下し始めた。

「おっととっ」

グングンと下がる中、足下から噛んだ後のガムのようなモノが首から下に纏わり付いた。
た。

「なんだ!?! うわっ、やめっ、やめろおっ。流行らせコラー!」

俺の体に吸い付くようピツタリと着用されたソレは、白を基調にしたスーツだった。

「こんな、戦隊スーツみたいなのッ」

恥ずかしっ。なんで着なきやいけないんだ！ 脱ぎたい。

だが周りの反応を見ると、カツコイイとか言ってる。

「カキ、そのスーツ気に入ったのか？」

「ん、おう。似合うだろ？」

「………ああ」

なんでもかんでもカツコイイというサトシは置いといて、年が比較的近いカキに聞くが、味方はいなかった。

ガクリと項垂れていると、降下が止まった。

「着いたのか？」

シユンツ、と扉が開くと、近未来のような秘密基地と言い表す感じの部屋に出た。

「あれ、ピクシーじゃないか」

「ピクシッ」

その部屋にはピクシーがいて、俺達の方へ歩いてくる。

『アローラ、ウルトラガーディアنزの皆！』

その時、部屋の中央からホログラムが浮かび、ルザミーネさんが映った。

「あ、お母様。何故ここにピクシーが？」

『ピクシーは、今日からウルトラガーディアنزの一員として補佐につく事になったの』

と、そこでホログラム映像が切り替わる。

『これを見てちょうだい』

映ったのは、「アローラ探偵ラキ」というドラマ番組の収録風景。

『犯人はあなたロトツ』

再放送も欠かさず見ているロトムのテンションが上がるが、見るべき所はそこじゃない。

「おい、後ろの方を見てみる」

空にウルトラホールが現れ、ウツロイドとは別のウルトラビーストが出てくる。

『私達は、このウルトラビーストをマッシブーンと名付ける事にしました』

更に場面は代わり、通報されたのかジュンサーさん達が出したカイリキーに囲まれていた。

「おいおい、あんな強そうなカイリキーを軽々と投げているぞ」

「はえ、くすつごいムキムキ、カツコイイ」

俺は、マッシブーンの力に驚いてるカキの横で呟いたスイレンの趣向に驚いた。

『それじゃあ、このウルトラビーストの情報はロトムに転送するわ』

『了解ロトーツ』

ホログラムを映し出している機械とロトムが繋がると、ロトム凶鑑が更新されたみた

いだ。

『ピピッツ。マツシブーン、ぼうちようポケモン——』

「えっ、ポケモン!？」

ウルトラビーストではなく、ポケモンとして凶鑑に登録された事に驚いたマオ。

『研究の結果、ウルトラビーストをポケモンとして定義づける事にしたの』

ルザミーネさんの隣に控えてるバーネット博士はそう言うが、あの得体の知れない……いや、デオキシスとかいるし今差だよな。

『マツシブーン。むし・かくとうタイプ。一発のパンチで、ダンプカーを粉碎する程のパワーの持ち主』

一発って、規格外だなあ。でも俺のバンギラスなら出来そうだ。

『マツシブーンは今、知らない世界に放り出され、戸惑ってる故の行動で暴れているだけだと思おうの。だから一度捕獲して、元の世界に戻すのを協力してちょうだい』

しかし、この世界のモンスターボールで捕まえられるのか？

そう思っていると、ピクシーが見た事無いボールがたんまり入った箱を持ってきた。

『それはウルトラビースト専用として開発した、ウルトラボールです』

『といっても、モンスターボールを参考にしたからバトルで疲れさせてからの方が有効』

ビツケさんとルザミーネさんがそう言うのと、一通りの説明は終わったみたいだ。

『それでは、ウルトラガーディアンズ。出動よ!』

『はいッ』

回復アイテムの箱も受けとり、気合いを入れて返事をしたのだが……。

『あつ。そこは、「ウルト、ラジャー」でお願い』

「お、お母様ったら」

ええ。このスーツといい、ルザミーネさんって特撮が好きなのかな。そんなの俺には

出来ないよ。

「かっけーッ」

サトシは安定だけどな。

『それじゃ、もう一度。皆、出動よ!』

『ウルトラ、ジャーッ』

「………ラジャー」

ああ。顔が熱い。

位置につくと、一人につきライドポケモンが用意されていた。

サトシはガブリアス、マオはフライゴンといった具合だ。

「それじゃ、よろしくな」

俺が乗らせて貰うのは、ボーマンダ。紅い翼がカッコイイぜ。ずっしりとした巨体に乗り込み、飛び上がる。

「ユウキ、行きまーす！」

皆に聞かれないよう、最後に飛んで眩く。

一度言ってみたかったんだ。ルザミーネさんの事を悪く言えんな。

『あら、ユウキ君もそういうの好きなのね』

「……通信繋がってるんですか？」

『ええ。スーツの機能で、腕の所から映像と音声が一』

——ブチッ。

ふう、これで安心だ。

「さあ、ボーマンダ。思いつきり飛んでくれ」

顔の火照りを冷ますくらいにな。

新たに入った情報によると、この辺でマッシュブーンがポケモンを襲っているという
が……。

「あれじゃないか!？」

先頭を飛んでいたカキが真つ先に気付き、マツシブーンの元へと降りる。

「コラー、止めろーッ」

そこにはマツシブーンとカビゴンが居たのだが、カビゴンは襲われて自慢の巨体が縮んでいた。

「吸血かなにかで吸われたのか？ とりあえず、きのみを食わせよう」

マツシブーンは、尖った口をしている。恐らくそこから吸ったのだろう。

「とうか、まんま蚊だな。」

「まてーッ」

逃げたマツシブーンをサトシが追いかけるが、一人じゃ危険だ。

「俺もマツシブーンを追いかける。此処は頼んだ」

カビゴンの事はマオ達に任せて、カキと共に走りだす。

少し先に居たが、既にサトシがバトルしているようだ。

「ぐっ。ピカチュウ、電光石火だッ」

「マブシ、マブシッ」

「おいおい、ピカチュウの電光石火と並行してるぞ。」

「マブシ！」

「ピーカーピーッ」

更にピカチュウを空高く、アツパーで打ち上げた。

なんてパワーとスピードだ。

「加勢するツ。行け、バンギラス！」

「マブシ？」

バンギラスに気付いたマツシブーンは、ジリジリと距離を詰めて、

『……………』

——ドゴオンツ。

同時に飛び出し、互いの腕を掴み合う。

「バンギラスとの力比べで負けないとは。あの筋肉は見かけ倒しじゃあねえのか」

マツシブーンとバンギラスはお互い動かず、いや、動けずにいた。二体からは、ゴゴ

ゴというオーラまで見える気がする。

「この勝負、どう動くツ」

カキがそう言うのと、マツシブーンは聞こえたのか、カキの方へと顔を向けた。

その時、

「うわあッ。な、なんだ!?!」

バンギラスとの組み合わせを止め、カキの目の前に移動してきた。

「……………」

マツシブーンはカキの体を上から下まで舐めるように見ると、数歩下がりに「マブシ！」

ポーズをとった。うん？

「いったい何だ？」

「さあ？」

俺とカキは顔を合わせてハテナを浮かべるが、マツシブーンは変わらずポージングを決める。

「ンマツシツ。マシツ」

「やれって事じゃない？」

「俺がか!？」

だってカキを見てからやったんだもの。そうじゃない？ スーツの色が赤で似てるし、そうだよ（便乗）。

「マ、マブシ！」

少し照れた様子のカキは、両腕を上げてガッツポーズを取った。ふむ、ダブルバイセツプスか。

それを見たマツシブーンは横を向き、胸を強調するよう立つ。あれは、サイドチェストかッ。

「お、なんか楽しそうだな！ マブシッ」

ピカチュウを回収したサトシも参加してくる。

「おいおいサトシ。バックダブルバイセップスならこうだぞ」

「え、こう？」

「ああ、見とけよ見とけよー。こう、後ろを向いて・・・マブシッ」

『マブシッ』

やべ、なんか楽しくなってきた。

皆でボディビル大会。いいゾ〜コレ。

「あっ」

後ろを向いた事により、気付いた事があった。

「・・・いつからおったん？」

『バンギラスと戦ってた所から』

既にカビゴンを治療し終わったマオ達がそこにいた。

「これは、別に遊んでた訳じゃ。そうッ、全ては油断させるためなんだ！」

『へー』

くっ、生暖かい目が辛いッ。

「オラッ、てめえら。いつまで遊んでんだ！ ゲットのチャンスだろ！ ゴラアッ」

恥を捨て去るようにウルトラボールをマッシブーンに投げる。

「マッシ。——マッシ!？」

俺の真似をして、後ろを向いてポーズをしていたマッシブーンにボールを当てるのは簡単な事。

見事に入り、ぐらぐらとボールは揺れる。

『ゴクリッ』

一回、二回……。三回と揺れ、

——キラッ。

『やったー!』

マッシブーン、ウルトラゲットだぜツ。

「この辺りみたいね。よし、ウルトラホールを開けるわよ」

マッシブーンが初めて現れた場所、メレメレの花園に移動し、バーネット博士達が帰らせる為の準備を始める。

「二度ウルトラホールが開いた所は開きやすくなってるの。うん、セット完了」

空にはウルトラホールが現れ、後はマッシブーンを出すだけだ。

「出て来い、マッシブーン」

「マブシッ。マ、マブシ?!」

辺りを見回したマツシブーンは、帰り道が分かったみたいだ。

「ほら、お前の世界に帰りな」

コクリと頷いたマツシブーンは、ゆっくりとウルトラホールに飛んでいく。

「マツシブーン!」

「マブシ?」

直前にサトシがマツシブーンを呼び止め、

『マブシ!』

今度は俺達全員でポーズを決める。

「………マツシブーン!」

今日一番キレのあるポーズのまま、マツシブーンはウルトラホールの向こうへと消えて行った。

こうして、ウルトラガーディアンズの最初の任務は見事成功で終わった。

めでたしめでたし。

「ところでユウキ、さっきのポーズの事なんだけど」

「あと、お母様から聞きました。意外と子供っぽいのが好きなんですってね」

「可愛い」

フアツ!?

「行け、ボーマンダ！ 高く舞い上がれえッ」

ニヤニヤと迫る女子達を躲し、俺はボーマンダと共にメレメレの花園から逃げだした。

今日の事は忘れて下さい、オナシヤス！

ガチムチパンプジンレスリング

『さあ今回の挑戦者はーッ、怒濤の勢いで頭角を現している新星……バン・ギライガーだーッ』

——ウオオッ！

ロイヤルドーム。今日、このリングに新たな伝説が——。

「バトルロイヤル？」

「ああ、アローラ地方伝統の四体同時バトルなんだ。ユウキもやってみないか？」

夕飯の後、休憩にコーヒを飲んでいたらクイ博士が面白そうな話を持ってきた。

「リングの上で繰り広げられる、オーバーヒートよりも熱いバトルだ！」

なにやら燃えてる博士だが、

「でも何で急に？」

すると、博士はゴホンと咳払いして俺を見た。

「ロイヤルマスクは知っているか？」

「知らない」

「……そうか」

えっ、なんでガツカリしてんの。

「いや、なに。ロイヤルマスクというのはロイヤルドームが開設されて以来、負け無しの連勝トレーナーなんだ。正体不明でかつこいいいマスクを着けていてね。更にパートナーのガオガエンも凄く強くて――」

「ふうん。なんで博士が自慢げなの？　もしかして」

「――ッ」

「ファンなの？」

そこまで熱心に語るとは、よほどの古参ファンと見たね。

「あつ、ああ。そうなんだよ。もう大ファン！」

「汗が凄いよ？」

ダラダラと垂れる汗を拭った博士は仕切り直すよう、また咳払いした。

「そのロイヤルマスクが今、挑戦者を募集していてね。最近マンネリ気味だから新しい刺激が欲しいんだよ……って聞、聞いてね！」

「へー。それで俺に出てみたら、と」

「そうそうっ。ユウキならロイヤルマスクも満足するだろうからね！」

なるほど。確かに四体同時のバトルロイヤルは面白そうだ。

「ただロイヤルマスクに挑むには、勝ち抜いて挑戦券を得なきゃいけないんだけど。ユウキには問題ないかな」

「勝ち抜きか……うん、分かった」

しかしロイヤル『マスク』か。ふむふむ。良い事思いついたぞ。

「ユウキ？ いきなりニヤついてどうした？」

「何でも無い」

「こうしちゃいられない。今すぐに取り掛からなくては。」

「緑の生地に、黒いのも欲しいな……」

「ユウキー、風呂空いた——て、あれ？」

半裸のサトシに声を掛けられた気がするが、返事をしていいる余裕は無い。

「博士、ユウキの奴どうしたんだ？」

「ふっ。どうやら火をつけてしまったようだ」

「？」

『勝者、バン・ギライガーッ。またもや一発で他の三体を吹き飛ばしたーッ。もうコイツらを止められるのは居ないのか!?!』

バンギラスを横したマスクを被った青年。しなやかで歪みねえ筋肉を惜しみなく披

露している謎のトレーナー。

その正体は、

「600族居ますかーッ？ 600族が居れば何でも出来る！」

「出たーッ。バン・ギライガーの決め台詞！」

ユウキこと、俺です！

『勝ち抜き戦を制したのは、バン・ギライガー！ そして同時に、ロイヤルマスクへの挑戦権をもぎ取ったぞーッ』

ふふ、待っているロイヤルマスク。連勝を止め、そのマスクの下、公の元に晒してやる！

うん？ 何故って？ 特に恨みも何もない。

ただの好奇心だ。

『さあつ。ロイヤルマスクとのバトルは明日——なんと、これは!?』

迷惑極まりない思考をしていたら、反対側のゲートから煙が吹き出し、人影が現れる。
『エーンジョイッ』

あれは、ロイヤルマスクにガオガエン!?

試合は明日だが、何故だ？

『なんとッ、サプライズ登場だー！ まさかまさかのバトルなのか!?』

ロープを潜り、此方に歩いてくるロイヤルマスクとガオガエン。

「やあ、ユウ——バン・ギライガー。凄く強いな、驚いたよ」

うん？　しゃくれた声だが、何処かで聞いたような。

「どうも。何故、此処に？」

「バトルは明日だが、あまりの強さに疼いてしまつてね。どうだい？　今、直ぐに」

とても挑戦的な目付き。いいだろう、受けて立つ。

「ふっ。やる気満々でなによりだ」

互いに背を向け、位置につく。

『なんとという事だーッ。ロイヤルマスクとの決戦が今日になってしまつたー！　余熱も

冷めぬ内の嬉しいサブライズ！』

リングの中で、バンギラスとガオガエンが睨み合い、開始のゴングを待つ。

『今回限りの特別ルールで、シングルバトルとなっております！　さあ、会場も今か今かと待ち構えるッ。始まりの鐘が、今！』

——カアンツ！

『始まつたー！　バンギラスとガオガエン、掴み合うッ。力は互角か!?』

いや、僅かにバンギラスが勝っている。コイツと互角とか、そうそう居てたまるか。

しかし、ガオガエンも経験の賜なのか、上手く力を逸らしているな。

『さすがガオガエン。ロイヤルマスクのパートナーは伊達では無い！ 今まで一度の攻撃で勝ち進んで来たバンギラスを止めているーッ』

「バンギラス、ブレーンバスター！」（注 ただのストーンエッジ）」

「そ、そんな技あったか!? ガオガエン、躲して地獄突きッ」

くつ、跳んで躲したか！ だが甘いッ。

「ギライガー・スープレックスだ！（注 ただの噛み砕く）」

「なにいッ」

地獄突きを脇で抑え、ガオガエンの肩に攻撃する。

「下がれ、ガオガエン！」

この絶好のチャンス、逃しはしない！

「攻めろッ。ブレーンバスター！」（注 ただの以下略）」

「諦めるな、リベンジするんだ！」

迫る岩石の刃に、ガオガエンは腰のベルトを燃え上がらせ、受け止める。

やったか!?

『ガオガエン、倒れたか!? ……いや、立っているぞーッ。重い攻撃を受けとめ、

反撃の狼煙をあげるー!』

満身創痍ながらも、先程の攻撃を二倍にしてバンギラスに返すガオガエン。

マズい、リベンジは確か格闘タイプ。なら、バンギラスは――。

「ふッ。このバトル、ブラストバーンより熱いじゃないか」

バンギラスは辛うじて立っているが、四倍弱点はさすがに効いたようだ。

恐らく、もってあと一発。

「次で決まるな」

「はい。でも勝つのは俺達です」

会場も決着の雰囲気を感じ取ったのか、シンツと静まりかえっている。

「いくぞ、ガオガエン！」

「迎え討て、バンギラス！」

二体は走りだし、リングの中央で腕を振りかぶり――。

『ちよつと待ったーッ！』

ピタリと止まった。

「誰だ、あんた」

大事な所を邪魔され、思わず低い声が出てしまった。

「うん？ 君は確か、リベンジャーズの」

ロイヤルマスクの知り合いのようだ。

金髪のモヒカン。更にピンクのスカーフで顔を半分隠して、まるで世紀末覇者物語に

出てきそうな悪者だ。絶対ロクな奴じゃねえ。

「今回のバトル、なんでもロイヤルドーム最強を決める戦いだそうだな？俺も参加させてもらうぜ」

は？ コイツ、邪魔したかと思えば、いきなり何を言っている。

「バン・ギライガーは挑戦権を得て、この場に居る。君に資格は無い筈だ」

ロイヤルマスクもそう言うが、モヒカンは引き下がる様子を見せない。「うるせえつ。最強はこのマッドブーバー様だ！」

喚きほざいたモヒカンは、勝手にブーバーンをリング内に出してきた。

「……………っけんなよ」

「どうした？ バン・ギライガー」

俯いた俺を心配してくれたのか、ロイヤルマスクは声をかけてくるが、この胸に渦巻く黒い炎は止まらない。

「はっはー！ ブーバーン、火炎放射で焼き尽くせえ！」

ブチッ。

「ぞっけんな！ 良いところを邪魔しやがって、ぶっ殺してやる！」

「ぶっ！?! ちょ、ユウ——バン・ギライガー!?!」

バンギラスと呼吸を合わせ、腕を突き出す。

「全てを破壊し、蹂躪しろ！ メガシンカツ」

四倍弱点をくらいフラフラだったが、今の俺達にそんな蠟燭の火よりも弱い出力じゃビクともしない。

「ギライガー・チョップ！（注 ただの地震）」

「チョップじゃねえ！」

モヒカンが何か言ってるが、一撃で葬りさるぜ。

目を回して倒れ伏せるブーバーン。

「くそつ、覚えてやがれ！」

ブーバーンを戻し、やっと姿を消したモヒカン。

だが、まだ気は収まらない。あのモヒカン、次に会ったらどうしてくれようか。

「バ、バン・ギライガー？ まだ怒ってるのか？」

おっと、いかな。これ以上は無粋。

落ち着いて深呼吸だ。

「いや、キレてないっすよ」

「そ、そうか」

「さて、思わぬゲストが帰った所で……どうする？」

そう、だなあ。今、決着をつけてもいいが、勿体ないかな。

「やっぱり、最初から最後まで全力でやりたい。だから」

「ふっ、そうか。では別の機会、という事だな」

そう言い、手を出してくるロイヤルマスク。

「次は余裕で勝ちますよ」

「望むところさ」

握手をかわし、今日の健闘を讃え合う。そして、俺は腕を引つ張り耳元で、

「精々マスクを洗って待ってるよ？ ククイ博士」

「ッ」

なにがブラストバーンよりも熱い、だ。そこで俺は気付いたぞ。

『白熱したバトルッ。今回、最強は決まらなかったが……ロイヤルマスクにライ

バル誕生だー！』

会場が震える程の歓声に手を振り、リングを出る。

『バンギ、バンギ、ライガー！』

背に浴びる応援のエールが、とても心地よかった。

ロイヤルドームを出た後、火照った体を冷まそうと森に来た。

「ふむ。森林浴でもしようかと、来たんだけど……」

問題が一つ発生した。

『ベベツ。ベツベベ！』

こいつ絶対ウルトラビーストですわ。

「なあ。俺の頭で遊ぶの止めてくれない？」

大事な髪を引つ張り、俺をハゲにしようかと企む謎のウルトラビースト。

体は紫色で、頭の天辺が尖っている。それで刺されたら痛そうだな。

「……って痛ててっ、痛いッ、やめろお！」

俺の頭の上でぐるぐると回転し、ブレイクダンスし始めた生物を掴んで止める。

「貴様、俺の頭蓋骨に穴を開ける気か？」

『ベベー？』

駄目だ。何言ってるか分からん。いや、普通のポケモンの鳴き声も分からんけど。

「仕方ない。ルザミーネさんに連絡しよ」

ウルトラガーディアンズの皆が基地に集合し、本題に入る。

『検証の結果、その子はウルトラビーストと結論つけたわ。名前はベベノム。どくぱりポケモンね』

えっ、どくばり？ さっき俺の頭で遊んでやがったけど大丈夫か？

「ちっちゃくて可愛いねー」

「鳴き声も可愛いです！」

「あつ、見てダンスしてる」

気をつける。そのダンスは頭の上でやられたらとても痛い。

『出現したウルトラホールが分かるまでパートナーになつて欲しいのだけれど……』

ユウキ君』

「俺ですか？」

『発見者だもの』

うーん、手持ちはいっぱいなんだけど。

まあ。ピカチュウみたいな連れ歩き枠だと考えればいいか。

「分かりました。おい、ベベノム」

よびかけると、俺の前までフヨフヨと飛んでくる。

「短い間かもしれないが、よろしく頼むな」

ピクシーが運んでくれたウルトラボールを手に取り、ベベノムに投げる。

『べ？ ベッ！』

「おい」

コイツ避けたぞ。

「……………よろしくな」

『ベツ!』

……………。

『ベベツ』

「ユウキ、落ち着いて! それはウルトラボールじゃないよッ」

投げつけようとした金の玉をマオに取られてしまった。

『うーん、見たところユウキ君に懐いているようだったのに。何故かしら?』

懐いてたら俺の頭でダンスっちまわらないぜ。

「もしかして、遊んでると勘違いしてるのでは?」

「どういう事だ?」

何かに気付いた様子のリーリエだが、よく分からん。

「ボールに入る、という事が分からないのかもしれないかも」

なるほど。じゃあ、いっちょやってみつか。

「出てこい、バンギラス」

「バアン」

「戻れ」

「バ!？」

再びウルトラボールを手に取り、ベベノムに向ける。

「いいか? お前、これ触る。入る。オーケー?」

『ベベツ』

すると、投げるまでもなくボールのスイッチに触るベベノム。

「お、おおん。あつさり」と

『それじゃ、ユウキ君。頼んだわよ』

「はい」

『うん?』

「……ウルト、ラジャー」

せめてもの反抗に小声で言ったが、意味なかったようだ。

その夜、ボールから出てきたベベノムは、

「おいこらベベノム。俺のベッドが紫色に染まっているのはなんでかな?」

『ベベー?』

コイツは尖ってる頭の先端から、ペンキのようなものを吹き出す。

てかソレ毒じゃね?

それで落書きして遊んだりするのだが――。

「俺の寝床がベトベトなんだが？」

『ベベ？』

「ベベ？　じゃねえ！　てめえつ、大人しくボールに戻れツ」

ボールを握り締め、逃げるベベノムを追いかける。

「うーん。ベベノムは鬼ごっこで遊んでると思ってるね」

というか、ククイ博士は家に落書きされて怒らないのか。

「ははっ、鬼ごっこか。……いいだろう。ただし捕まった時が貴様の命日だ！」

「程々になー」

本物の鬼神となり、悪戯ポケモンをサーチアンドデスだ。

『ベツベー！』

新たな仲間、ベベノムが加わった。

少し、いや。かなり騒がしくなったが、仲間が増えるのは素直に嬉しい。

楽しそうに逃げるベベノムの姿を見て、少し怒気が削がれるのを感じてそう思った。

ここがあの女のポケモンハウスね

スクールが休みの休日。

「ふぁー。今頃サトシは何してるのかねー」

欠伸で出た涙を拭いながら、別の島に行った弟を思う。

サトシは大試練の為にウラウラ島で頑張っているだろうか。

「ユウキ。休日だからってだらけるなよー。外出でもしたらどうだ？」

ソファでゴロゴロしていたら、ククイ博士に苦言を呈されてしまった。

「うーん。別に行きたい所なんて無いしなー」

今日は惰眠を貪ると決めたんだ。さて、もう一眠り――。

「ちよ、引つ張るなッ。ラテイ、あがッ」

勝手に出てきたラテイアスに襟を掴まれて、ソファから落とされてしまった。

「はぁ。なんだ？」

せつかくの眠気が吹っ飛んでしまったぞ。

「フウン！」

ラティアスは体全体を使って何か伝えようとしてるが、はて。なにか約束でもしたっけ？

「お前、何を言おうと……。ああ、そういえば」

確か前に、買い物でも連れて行こうと言ったんだっけ。

「わかった、わかった。好きなモノ買ってやるってやつだろ」

そう言うのと、正解なのかラティアスは嬉しさを現すように飛び回った。

「んじゃ、行くか」

こうしてゆっくり買い物に出掛けるのは、久しぶりな気がするな。

「ほら、ラティアス。準備しろって」

真つ昼間から幻のポケモンを連れ歩く訳にいかないからな、キッチンと準備しなきゃ。

こんにちは、リーリエです。

今日はマオとスイレンと一緒に、お買い物に来ています。

「ねー、こっちのアクセサリーも可愛くない？」

「マオちゃん似合う」

夜には女子会という事で、お菓子などを買う予定でしたが、煌びやかなアクセサリー ショップにつられて入ってしまいました。

あら。こっちのリボンはシロンに似合いそうですね。

「あつ、ハートのうろこを使ったアクセサリーもいいなー」

「サニーゴの枝を使ったこのアクセも——あれ？」

突然スイレンがお店の外を見ましたが、何か珍しいポケモンでもいたのでしょうか？

「ユウキだ」

—— シュバツ！

不思議な事に、わたくし達の動きがシンクロしました。

急いで持っていたアクセサリーを戻し、ユウキの元、へ………。

「あの女の子。誰、かなあ。かなあ？」

濁りきった目でユウキを見るマオですが、わたくしも同じ目をしているでしょうね。

ユウキの隣を歩き、あまつさえ腕を組んでいるとは。

「尾行する」

スイレンの提案に頷き今日の予定は、コツソリと泥棒ニヤースな女の子の後をつける事に変更しました。

「はっ、殺気!?!」

ん？ おかしいな。確かに今、体中の穴という穴が開ききる程の恐怖感が………。

「フウン?」

「ああ、いや。なんでもない」

俺の顔を心配そうに覗き込んでくる美少女。

まあ。鳴き声で分かるように、正体はラティアスなんだが。

茶髪のセミロングで、白いベレー帽を被った女の子に擬態している。

黙っていれば只の美少女。買い物をする時は、こうして目立たないように対策している。

「おつとと。好きなどこ連れて行くから、引つ張るなつて」

さてさて。今日はこのお転婆美少女に振り回される事にするか……はっ、や

はり殺気!?

まったく、なんなのさ。ユウキつてば鼻の下伸ばしちやつて。

「スクールでも見た事ない子ですね。ナンパでもしたのでしょうか?」

確かにリリーエの言う通り、見た事無い。家の店でも無いし、ナンパなのかな。だとしたら、フィラの実が沢山入った新作のマオちゃんスペシャルを食べさせなきや(使命感)。

「パフェを買い食いしてる」

スイレンの目線を辿ると、ユウキが女の子にパフェを買い与えて——ああつ、アーンなんて羨ましい!

私も料理を作つてあげて、あ、あーんを………。

「ブティックに入った。マオちゃん行くよ」

そしてあんな事やこんな事を………にゆふツ。

「これなんか似合うんじゃないか?」

適当な服を手に取り、ラティアスに渡すが、

「フウンツ」

「分かつたつて、ちゃんと選ぶから怒るなつて。興奮したら擬態が解けるだろうが」

まったく。俺はコーデイナーでも無いし、女性の好みなんか知らんぞ。

「あれ、ラティアス何処行つた?」

辺りを見回すと、試着室から着飾つたラティアスが出てきた。

「ふーん。似合うじゃん」

緑色のカットソーに、白のプリーツミニスカート。

活発なラティアスには驚くほどピツタリな衣装だ。

「せっかくだから買おうか。えーと、値段は………」

……布のくせに高くない？

え、今の服ってこんなにするの？ 俺が今着てる服なんてこんなにしないぞ。

「大変お似合いですよー。お客様ー」

出たなツ、話しかけてくる店員！

「あらあら。こちらのアクセサリーもつけければ、この後のデートも楽しくなりますよー」

「いや、いいです。そんなんじゃないんで」

これ以上、値段を釣り上げられてたまるか。ラティアスが着てる服の分だけ買って店を出よう。

「おい。そんな目で見ても駄目だ。買うのは服だけな」

俺は、店員に渡されたネックレスを物欲しげに見てるラティアスを無視して会計に向かった。

お店に入るとバレそうだから、外で待機してたけど。

「むむっ。あの子の服装が変わってる！」

妄想の世界から抜け出したマオちゃんが目線を鋭くして見たその先に、さつきよりお酒落した女の子が出てきた。

「わたくしだってユウキとショッピングしたいですう」

シロンに負けないくらい冷氣を出してるリーリエだけど、少し引つ込めて欲しい。寒い。

「次は何処に行くのかな？」

「もうすぐお昼。なら、ランチですね」

「ずつと尾行してて、私もお腹空いたな。お昼ご飯は海鮮丼が食べたい。」

「移動するみたいですよ、行きましよう！」

ユウキ達が向かっているのは……マラサダシヨップだ。

うん、マラサダも悪くない。お昼ご飯は大きいマラサダにしよつと。

俺とラティアスは、マラサダを買って近くのベンチで食べる事にした。

「美味しいか？ お前は辛いのが好きだもんなあ」

俺は辛いのが食べられないので、少し甘い感じのを買った。うん、美味しい。

「ほら、口元ついてんぞ」

「フウン」

女の子つつうか、メスなんだし、もう少し落ち着いて食べて欲しいもんだ。

ラティアスの口に付いてるソースをハンカチで拭いた時、知っているような悪寒が襲ってきたが、気のせいだろう。

「もう食べたのか？　って、仕方ねえなあ」

俺のマラサダをジツと見ている、食いしん坊なラティアスに思わず苦笑してしまつた。

甘い味も好きなんだっけ。ラティアスが食べやすい位置まで持っていていき、

「ほら、口開ける。あ」

「いい加減にしとけやツ」

「あたいらの前でイチャコラしてんじやないよ！」

「そうっすそうっす！」

あん？　誰だ、コイツら。

「おい『誰だ、コイツら』みたいな顔してんじやねえ！　こちとら恨みを忘れてねーぞコラツ」

「いやホント誰？」

こんなダサい服でダサいバイクに乗ってる連中知らないぞ。

「俺らは！」

「あたいらは！」

「泣く子も黙るツ」

『スカル団ッ！』『ツス』

．．．．．あー、はいはい。居た居たッ。

「確かポケモンスクールの前で、無様に負けた連中だよな」

「うるせえ！」

まったく。食事中に邪魔しやがって．．．．．あれ、俺のマラサダが無い。

「あつ、てめツ！ 全部食べやがったなッ」

そっぽ向いて知らんぷりしてるが、

「その口元に付いてるのは、何かな？ うん？」

ラティアスの両頬を引っ張り弄っていると、スカなんちやら達が煩くなってきた。

「だからっ、イチャついてんじゃねーぞ！」

バイクを吹かして威嚇してくるが、どうするかね。

別に蹴散らしてもいいけど、そんな気分じゃないし。

と、思っていた時――。

「そこまてだよっ」

「見苦しいですね、あなた達」

「嫉妬は醜い」

．．．．．なんだろう。色々と突っ込みたい。

「なんで居るの?」

「愚問だよっ」

「ユウキの居るところに」

「わたくし達ありです!」

なにそれ怖い。

「くっ、女子を侍らしやがって。あてつけかコラッ」

なんだかよく分からない状況になってるな。

「いけ、ヤトウモリ! あいつらを毒まみれにしろっ」

「あたいらもやるよ!」

「いくッス!」

おっと、ヤトウモリが三体出てきた。面倒くさいが、やるしかないか。

「アママイコっ」

「シロン!」

「アシマリ」

いや、俺の出る幕は無いみたいだ。ここはマオ達に任せよう。なんたって、

『三位一体!』

この三人が揃うと、何故か俺も敵わないような力を發揮するからな。

「なにッ、俺達のヤトウモリを一撃で!? クソッ、覚えてろよ!」
スタコラサツサと、バイクに乗るスなんちやら団。

「いつか潰すッ、覚えとけ!」

「徹底的にねッ」

「兄貴の言う通りッスから!」

そう言つて勢いよくバイクで去つていく、なんちやら――。

「ゲホッ、普通に帰れよな」

勢いのせいか、バイクの廃棄煙と砂埃が襲つてきた。

「はあ。やつと静かに――ラティアス?」

隣のラティアスを見ると、俯いて震えていた。

「お、落ち着け。なっ?」

買ったばかりの服が汚れていて、なんて声をかけたらいいか分からない。

「・・・・・・フウンッ!!!」

『ラティアス!?!』

擬態が解けてマオ達は驚いているが、説明している暇は無い。

ラティアスは、まだ姿が見えるアイツらを追つて飛んでいった。

「まてまて! 町中でそんな技を出したらッ」

流星群。幸い他に人は居ないが、後に騒ぎになる。

「あ、もう駄目」

ボールに戻そうか考えていたが、もう技は放たれていた。

『「な、なん、ギャアーツ」

とりあえず人気の無い公園に移動したが、

「だからなんで居るの」

「愚問だ」

「それも面白いから」

シユンと落ち込んでいるマオを放つて置いて、一番落ち込んでいるラティアスを見る。

「ほら、その汚れは洗濯すれば落ちるし、落ち込むこと無いだろう」

ラティアスは、擬態した姿に戻って膝を抱えていた。

「きつと違いますよ」

「ユウキは乙女心が分からない」

はあ、やれやれ、と。首を振っているリーリエ達にイラツとするのは間違っているだろうか。

「この服を着て、まだユウキと遊びたかったんだよね？ ラティアス」
「……………」

マオの言葉に、黙ってコクリと頷いたラティアス。

別に、遊びくらい違う日に——て、言ったらまた何か言われるし、黙ってよう。

「落ち込むなつての。……………ほら」

ポケットから洒落てる小包みを取り出し、中身を見せる。

「フウ、ン……………」

ふっ。驚いてるみたいだな。

「欲しがってたアクセサリー。やるから」

首に着けてやると、ラティアスはギョツとネックレスを握り締めて、嬉しそうに微笑んだ。

「似合ってるぞ」

夕方の光に照らされたネックレスは、ハメ込まれているルビーの色と相まって綺麗な紅で輝いていた。

「さて、帰る——」

——ガシィッ！

「ねえ、ユウキ」

「わたくし達、行きたい所があるんですが」

「拒否権は無い」

「……………どうやら俺の休日は、まだ終わらないようだ。」

アセロラさえいればいい。

「ユウキ。サトシを迎えに行つてくれないか？」

テレビを見ていたら、ククイ博士が申し訳なさそうに言つてきた。

「うん？ フェリーで帰つてくるんじゃないの？」

確か、明日の夕方には帰つてくる予定だったな。

「実は、その船が急に出られなくなつてね。復旧するのを待っていると、明後日になるんだ」

ほーん。明後日か。その日は皆と花火大会に行く約束があつたな。

「分かつた。じゃ、明日の朝に行つてくるよ」

「悪いね。多分マリエシテイに行けば、サトシと会えると思うから」

といつても、ラテイアスに乗って行くと目立つしなあ。あつ、そうだ。借りればいいか。

「お疲れ、ボーマンダ。休んでてくれ」

ルザミーネさんに頼み、ライドポケモンを借りてウラウラ島までやってきた。

ボーマンダをボールに戻して、降り立った街を見渡す。

「マリエシテイに来れば会えるって言ってたけど……何処に居るんだ？」

広い街だし、探し歩くのは疲れそうだなあ。詳しい居場所を聞けばよかった。

「つうかサトシは大試練をやってるんだよな？ この街の人に聞けば何か分かるかも」

とりあえず、目の前の図書館に入って聞いてみよう。

「すみません。ちよつといいですか」

「はい、何か本をお探しでしょうか？」

入り口近くで作業をしていた司書っぽい人を呼び止める。

「この島の大試練について聞きたいんですけど。島キングとか」

すると、近くの机で読書をしていた子供が寄ってきて、俺の袖を引っ張った。

「それなら、アセロラ姉ちゃんに聞くといいよ」

「アセロラ？」

子供の視線に合わせてしゃがむと、コクリと頷いた子は指を図書館の外へと向けた。

「アセロラ姉ちゃんと島キングは仲良しだから。今、少し離れた交番に居るはずだよ」

そう言うと、その子は元いた机に戻って読書を再開した。

「そっか。ありがとう」

情報も得たし、早速行ってみるか。

司書っぽい人に地図を貰い、交番を目指して歩いていると、近くの茂みから黒い物体が横切った。

「ちよつとーッ。早いよラプー！ 降ろしてつてばッ」

よく見るとゲンガーか。つて、乗ってる女の子が危ないッ。

「マリルリ、アクアジェットー！」

マリルリを呼び出して、飛び回ってるゲンガーに攻撃するが、避けられてしまった。

「待って待ってッ、やめてー！」

「え？！」

もう一度攻撃を指示しようとしたら、ゲンガーに襲われていた女の子が慌てて叫んで止めてきた。

「ふう。お兄さん、急になんなの？」

ゲンガーから降りた女の子は、腕を組んで頬をプックリと膨らませた。

「えつと、君が襲われて困ってると思って……」

怒っている様子を見ると、どうやら違ったみたいだ。

「まあ。確かに困ってたけど、別に襲われてた訳じゃないよ」

女の子はゲンガーを撫でると、俺に紹介した。

「このゲンガーは欲しがりラプーっていつて、アセロラのお友達なの」

「そうか。ゲンガー、さっきはごめんな。君も、友達を攻撃してごめん」

アセロラ？ いや、それより勘違いで申し訳ない事をしてしまった。

深く頭を下げると、女の子は慌てて手を振った。

「あ、いや。別にいいよ。お兄さん、アセロラを助けようとしてただけみたいだし」

「本当にごめんな」

「もういいってばー」

頭を上げて女の子を見ると、困った顔をしているしこの辺にしておこう。

「ところでお兄さん。この辺りに何か用事？ この先は危ない街じゃないよ」

街？ 結構暗い雰囲気でも居ない道路だし、何も無いと思ってたんだが。

「えっと、島キングに話があつて交番を探してるんだ」

すると女の子は納得したかのように頷いた。

「なんだ。クチナシおじさんに用事かー。試練を受けに来たの？」

「いや。ちよつと人探しをな」

女の子は「ふーん」と言つてゲンガーと共に歩き出した。

「じゃあ案内してあげるよ。アセロラ、場所知ってるから」

「助かるよ」

マリルリを戻して、先を歩く女の子の後を追う。

「あつ、ここだね。おじさん居るみたい」

暫く歩いて、無事に交番に着いたが、

「ニヤースがいつぱいおる……」

扉を開けたら、アローラニヤースで埋め尽くされているんだが。人なんて居ないぞ。

「あん？ 客か？」

本当に居たのか。

奥から怠そうに人が現れたが、人相悪っ。

「島キングのクチナシさんに用事があるんですが、貴方ですか？」

「……ちげーよ。島キングは今、修行に出てるから居ないぞ」

だよな。この見るからに悪そうな人が島キングな訳、

「もうっ、また嘘ついてー。駄目だよ、おじさん！」

俺の背中に隠れるよう立っていた女の子が、ひよっこりと顔を出したが……も
しかして島キングなの？

「ちっ。バラすなよ、アセロラ」

「さつきから気になってたんだけど。もしかして、図書館の子が言ってたアセロラ姉ちゃんって、君かな？」

驚いてアセロラを見ると、きよとんとしていた。

「そうだけど。お兄さん、アセロラの事を知ってたの？」

「図書館で、島キングの事を聞くなら君に言ってた子がいてね」

「そうなんだー」

まさか偶然会った子が探し人とは。おかげで交番にもついたらし後は、

「ちよつと島キングに聞きたい事が」

「はあー、試練ならやらんぞ。やったばっかで怠いからな」

本当に怠そうに首をまわしてるなー。

「つて、やった？ もしかして、サトシとですか？」

「おう。なんだ、あんちゃん知り合いか？」

知り合いもなにも、

「サトシは俺の弟です」

「ええッ。サトシの!？」

「なんでアセロラが驚いてんの」

「ほーん。それでアセロラが立会人をやったと」

「うん。試練自体は昨日無事に終わったよ」

そのまま交番で話を聞いていると、サトシは大試練を突破した事が分かったが、

「それでサトシは何処に？ 帰りの船が無くなったって聞いて、迎えに来たんですが」

「あんちゃん弟なら、さつき帰ったぞ？」

「なんだって？」

猫じゃらしでニヤースと戯れているクチナシさんは、欠伸をして変な事を言い出した。

「いやいやいや。ククイ博士に頼まれて、わざわざ来たんですよ？ まだウラウラ島に

いるんじゃない」

「つつても、俺とアセロラは見送ったしなあ」

「うん。確かに船に乗って帰ったよ」

「なるほど」

つまり、博士の勘違い。

サトシとは入れ違いに、俺は来たのか。

「ちよつと電話を借りますね」

「好きにしな」

えーっと。博士の家の電話番号はつと………。

『はい。ククイです』

「ロイヤルマスキの正体をバラす」

『えっ、なに!? 誰!?!』

ククイ博士から謝罪を受けとり、お詫びにウラウラ島で宿を取ってくれた。少し脅迫
じみていたが、気のせいだろう。

「せっかく来たし、観光でもするか」

「なら、アセロラがガイドしてあげるよ。お兄さん」

応接間のソファで寛いでいたアセロラが顔を出して、空を飛ぶミミツキユを抱きしめ
た。

「いいのか?」

「うんっ。丁度ひまだし、遊びたいなーって」

そういえば、近くに街があるって言ってたよな。

「アセロラ、この先にある街ってどういうのだ?」

「行くのはやめとけ、あんちゃん」

アセロラが答える前に、クチナシさんが忠告してきた。

怠そうな感じだったのが、妙に真剣だな。

「……………それより、このアセロラちゃんが無ラウラ島の楽しい所を案内してあげるっ」
「ああ。頼むな」

気になるが、危ないと言ったしやめとくか。

「アセロラちゃん。楽しい所って、何処なのかなあ？」

俺は今、アセロラちゃんガイドでウラウラ島をまわっているのだが……………。

「ここはね、よくミミさんと遊ぶ場所なんだよっ」

「キュキュッ」

アセロラの空を飛ぶミミッキュが同意するよう鳴くが、そうじゃない。

「いやね？ 楽しい所って言ったじゃん？ それがここなの？」

外見はボロボロ。中に入ると、スーパらしいのが分かるけどボロボロ。

商品も彼方此方に飛び散り、なんかこう、出そう。アレが。

「ところで、ミミッキュって飛んだりするんだな。色も違うし、アセロラのミミッキュが

特別なのか？」

ロケット団のミミッキュは見た事あるが、飛んだりしないしなあ。

「ミミさんは幽霊だからね」

「今すぐここから出よう」

自分でも驚く程に素早い動きで振り向き、出口へと向かう。

しかし、ミミたんに回り込まれたっ。

「ひえっ」

幽霊とかマジ無理。一番怖いのは人間とか言われてるけど、人間は物理効くじゃん。こいつら物理効かないんだぜ？ 恐怖しかないわ。

「ふふっ。変な声出さなくても大丈夫だよ。ミミたんは悪い子じゃないから」

「本当に？」

「本当に」

「俺、死なない？」

「死なない」

ふう。そこまで言うなら信じよう。

全部が悪霊って訳じゃないよね。噂では、六畳間に住んでる幽霊は可愛いらしいし、そういう目線で見たらミミたんが可愛く見えてきた。

「あれ、なんか買ひ物カゴが浮いてるな。ははっ、ミミたんめ。悪戯はやめなさい」

「ミミたんは何もしてないよ？」

「やっぱり出よう。すぐに」

まったく。酷い目にあつたぞ。

カゴの他に色んな商品が飛んでくるとか、暫くは夜にトイレ行けないじゃないか。もうつ、マリルリやめてよー。あははっ、冷たいー」

マリエシテイの奥にある庭園に來た俺達は、水辺で遊んでいるが……。

「アセロラ、あんまり濡れると風邪引くぞ」

「平気だよーっ」

はしゃぐアセロラを見ていると、妹と遊んでいる感じになるな。

「前世含めて妹なんて居ないけどな。俺」

「うん？ お兄さん、なにか言つた？」

「なんでもない」

ほら、俺の事を「お兄さん」なんて呼ぶから。

サトシは弟だけど、アイツ呼び捨てにしてくるから。

一度も兄と呼ばれていないんだ。それで年下の子にお兄さんなんて呼ばれると、何かこう、胸の奥から知らない感情が……。

「きやつ」

ブーツとしていると、アセロラが転んだのか、倒れている姿が見えた。

「大丈夫か？ おい、膝怪我してるぞ」

「平気だよつ。ほらこの通り、ピヨーンつと——痛たた」

心配させたくないのか、アセロラはジャンプするけど、

「ほら、手当するから。大人しくしてな」

リュックからティッシュや傷薬などを取り出して、アセロラの膝を丁寧に治療する。

「ありがと。あんつ、痛い。もう少し優しくしてくれと……」

「我慢してくれ」

サトシは昔からやんちゃだったからな。こうした応急手当は慣れたもんだ。

「これでよし。女の子なんだから、はしゃいであまり傷をつくるなよ」

「うん。……お兄さんつて、本当にお兄さんみたいだね」

「どういうことだ？」

突然寂しそうな顔をしたアセロラが、ポツリと呟いた。

「家族みたいな存在つて、クチナシおじさんしか居ないから。その、お兄さんみたい

な……」

……詳しい事はよく分からないが、察する事は出来る。聞くのはやめておこ

う。

「そういえば、お兄さんの名前なんていうの？」

俯かせた顔を上げたアセロラは、首を傾げて聞いてきたけど、今更だなあ。

「ユウキだよ」

「ふーん。そっかあ」

素っ気ない返事と同時に、アセロラは背を向けた。

えー。名乗ったのにその反応は傷つくな・・・。

しかし、くるりと回って俺の顔を見たアセロラは、

「じゃあ、ユウキお兄ちゃんだっ」

——この日、俺の中の何かが崩れ落ちた。

「なんだ、また来たのか」

報告の為、アセロラと共に交番へと戻った俺は、クチナシさんに大事な事を伝える。

「お義父さん。今日から俺はアセロラの兄となりました」

「おう。逮捕な」

おかしい。なにか勘違いされている。

「手錠もって近づくのはやめてください」

「どこからどう見ても事案じゃねえか」

失礼な。俺を犯罪者扱いするなんて。妹と手を繋いでるだけなのにつ。

「クチナシおじさん！ ユウキお兄ちゃんは悪い人じゃないよっ」

「だが目付きが、こう……危ない感じがするんだが」

「気のせいですよ、お義父さん。俺の目をよく見てください」

「濁ってるな。つうかその呼び方やめろ」

馬鹿なツ。この澄み切った目に向かつて何をツ。

「はあ。アセロラが認めたなら、いいけどよ」

溜め息を吐いたクチナシさんは、アセロラに聞こえないよう俺の耳元で囁いた。

「いいか？ アセロラに何かしたら、逮捕だからな」

さすがアセロラの親代わりのような存在だ。凄くドスが効いている。

俺は、それに力強く頷くと、クチナシさんは引き下がった。

「ね、ユウキお兄ちゃん。アセロラ、もう少し遊びたいな」

「任せろ。たとえ火の中水の中、アセロラの為なら——」

「じゃあミニたんと一緒に、さっきのスーパ―跡地に」

「アセロラの為なら、為、なら……」

くつ、妹のお願いが聞けずになにが兄かツ。

「つしや、行くぞオラアツ」

「わーいつ。お兄ちゃん大好きーツ」

足が震えるのを抑え、いざ往かんツ。

次の日。

恐怖体験を終えて宿に帰った俺は、夜を震えて過ごした。気付いたら朝だったのは、ご愛嬌という事で。

「ねえ。もう帰っちゃおうの?」

帰りはククイ博士に取らせた船で帰る。

「寂しいが、俺の今の家はメレメレ島だからね。仕方ないんだ。分かっておくれ」

ギョツと俺の袖を掴むアセロラたん。はあ。辛い。

もういつそウラウラ島に住もうかな。

「ポケモンスクールに通ってるんだっけ」

「.....ああ。友達も居て、毎日が楽しいんだ」

でも、そこにはアセロラたんが居ない。つらたん。

「アセロラ、遊びに行くからッ。絶対!」

「うん、待つてるよ。今度は俺がメレメレ島を案内する」

「約束だからね!」

名残惜しいけど船に乗らなきや。

アセロラさんと指切りを交わして、船に向かう。

「たった一日だけど、妹ができて楽しかったよ。じゃあ、またな」

ああ……、足が重いなあ。帰りたくないなあ。

「ユウキお兄ちゃん！」

振り向くと、笑顔で手を振るアセロラたんが目に入る。

「ユウキお兄ちゃんは、ずっとアセロラのお兄ちゃんだからっ、忘れないでね！」

「またな、アセロラ」

我が妹の見送りを背に、ユウキお兄ちゃんはクールに去るぜ。

「お客様、船内に鼻血を垂らさないでください」

「お帰り、ユウキ。今回はすまなかったね」

家に帰ると、ククイ博士が出迎えてくれた。申し訳なさそうにしてるが、別にいいんだ。
だ。

「家族が増えるって、いいですね」

「いきなり何を言ってるんだい？」

ククイ博士はバーネット博士と結婚したばかりだし、俺の言いたい事は分かるだろうに。

「あつ、ユウキ遅かったな！　じゃーんつ、ルガルガンZ！　ウラウラ島の大試練を突破したぜツ」

「シャワーを浴びたのか、サトシは半裸で出迎えてくれたが、
「……………やっぱり、弟より妹かなあ」

「ルガルガルの奴、凄かったんだぜつ。バーンッてなつてドーンッて——」
何か喋っているサトシの横を通つて、一言。

「はあ。アセロラさんに会いたい」

「ユウキ。ウラウラ島で何をしてきたんだい？」

「リビングのソファに座ると紫の物体が飛んできて、俺の腹を強打した。」

『ベベツ』

「ただいま、ベベノム。吐きそうだからやめてくれ」

「いつもならここでキレている所だが、今日の俺は違う。」

「まったく、駄目だろ。人に突進なんかしちや」

「アセロラさんと触れ合つてパワーアップした、この兄オーラ。」

「悪戯ツ子なベベノムもこれで大人しく——。」

『ベツベツ！』

「顔に飛んできた液体を拭い、ゆつくりとベベノムを掴む。」

「覚悟しろよオラアッ！」

——アセロラたん。早くまた会いたいです。

「むむっ。なにか嫌な予感が」

「ライバル出現でしょうか」

「また増えた？」

続くとしたら、続く？

打ち上げ花火、皆と見るか？青色と見るか？

アセロラシツクから翌日。

発作が治まった俺は、家で大人しく読書をしていた。

「ユウキ、なに読んでるの？」

ニヤヒートと遊んでいたサトシは、俺の持つてる本が気になったのか目の前までやってきた。

「ウラウラ島の図書館で借りた本。なんか気になってな」

メレメレ島に帰る直前、図書館で見かけたこの本の表紙に惹かれて持つてきてしまった。

「ふーん。描いてあるソレってポケモンなの？」

サトシが指さすのは、表紙に描かれているポケモン。

「かがやき様って言うらしい。ポケモンってよりかは——」

一通り読んでみると、このかがやき様はアローラ地方が出来たばかりの頃に現れたらしいポケモン。だが、その立ち位置はディアルガやパルキアなどの神話に近い。

「ウルトラビースト、なんだろうな」

ページの中には、ソルガレオとルナアールも一緒に描かれているし、恐らくそうなんだろう。

「へーっ、会ってみたいなー!」

かがやき様の姿を想像して鼻息荒く興奮するサトシ。

「ま、お前ならそのうち会えるんじゃないか?」

サトシさんは伝説との遭遇率が半端じゃねーからな。

「つて、そろそろ待ち合わせの時間じゃんつ。急がなきゃ!」

「うん? ああもう時間か。着替えるから先に行つてくれ」

今日は花火大会があり、皆と見る約束をしている。

せっかくだし、甚平に着替えてから行くかね。

「じゃ、先に行つてるぜ! ユウキも早く来いよなっ」

「おう」

慌ただしく出掛けるサトシを、ヒラヒラと右手を振つて見送り立ち上がる。

「さて、着替え」

『ベベッ』

.....。

お風呂も入らなくちや。

「時間、間に合うかなあ」

『ベーブツ』

「お前はハウスな」

ペンキを飛ばしてきた奴をボールに戻し、急いで風呂場に向かう。

「あー、ギリギリだよ。くっそ、お前のせいだからなっ」

『ベーブツ、ベツ』

「つぶねっ、飛ばしてくるな！」

約束の時間まであと少し。走っても間に合うかどうかなのにはベベノムは併走しながらペンキを飛ばしてくる。

「おまつ、これ遊びじゃないからっ。やめろお！」

楽しそうにしているが、わりかしマジでやめてほしいッ。

「ん？ どうしたベベノム」

すると、急に動きを止めたベベノム。

『ベベー』

「待ってっ！ ちょっと、時間が、ああもうっ」

スーッと何処かに飛んでいくベベノムを追いかけるが、こりや遅刻確定だ。

花火大会の会場が近いのか観光客も多くなり、屋台もちらほら見える。

人混みを避けながら追いかけると、少し先でベベノムが止まっていた。

「やつと捕まえた。いきなり飛びやがって」

ベベノムの角の部分をつまみ、立ち止まった場所を見る。

「こんな所に一体なにがあるってんだ」

そこは、縁日に必ずある、うさにくさいアクセサリーなどがぼつたくり価格で置いてある店だった。

『ベツベ!』

ベベノムが訴える先には、稲妻の形が彩られたネックレス。

「.....欲しいのか?」

『ベベ!』

そういや、何でかコイツはピカチュウに懐いてるんだよな。

これを見てピカチュウを思ったんだろうか。

「悪戯を控えたらな」

『.....ベベ!』

返事が怪しいが、まあいいか。この前ラティアスにアクセ買ったばかりなんだけど

なあ。

「仕方ない。すいません、それ下さい」

「あいよ。一万円ね」

「高ツ!?!」

『べつべ、ベーツ』

首にネックレスをぶら下げたベベノムは、ご機嫌な様子。

「だけど、皆は不機嫌になってるんだろうな」

もう約束の時間は過ぎてている。急いで行って土下座せねば。

「うーん。ここら辺よね」

さて、早く皆の元に行かねば。

「おつかしーわねー」

．．．．．早く皆の元に。

「この辺——」

「だあつ、さつきから何だよ!?!」

わざとらしく俺の後ろを着いてきてブツブツ言いやがつて。

「女の子が困ってるのよ? 助けなさいよ」

あつ、苦手なタイプの女だわ。

見た目は茶髪のロングで、スタイルはいい。が、

「すまない、急いでるんだ」

「ここは穩便に断つて——。」

「それでね、ここに行きたいんだけど」

「聞けよっ」

俺を無視して地図を広げる女。

クソっ。乳が少しデカいからって調子乗りやがって!

「花火を見る予定があるんだ。急いでるから他をあたってくれ」

「花火? 通りで人が多いと思つたわ」

よし、これで——。

「じゃあアタシも花火を見るから、よく見える所に連れて行きなさい」

「は?」

「この女の頭の中にラフレシアでもいるのか?」

「あんだ、さつきは何処かに行きたいとか言つてたろ」

「今は花火の気分なの」

厄介な女に目を付けられたな……。

「ほら、早く案内しなさい」

このまま皆の元に連れて行くと、何故か俺の死体が出来上がる気がする。

「ちっ、仕方ないか」

女の格好を見たところ、どうやらアローラ地方に観光してきた客みたいだし、無下に
するのみな。

「はあ……」

「溜め息を吐く男はモテないわよ？」

本当に苦手な女だ。

「それで、あんたは何処から来たんだ？」

澁々ながら女を連れて、皆とは別のスポットを俺は目指していた。

「カントーよ」

「へ？」

まさかの地元が出てきて、女を驚き見る。

「俺もカントー出身なんだけど、あんたを見た事ないな」

「アタシはあんたの事知ってるけどね。ユウキ」

まあ、カントーの出なら知ってるだろうな。

自慢じゃないが、俺はポケモンリーグでの有名人だし。

「てことは、俺を知ってて話掛けたのか」

「そこは偶然よ。というか、あんたじゃなくて名前前で呼びなさい」

いや、名前知らんし。

「アタシ、ブルーっていうの」

めっちゃ知ってた。凄く有名人だった。

「ああ、そう」

「なによ、そっけないわね」

混乱してるからなっ。

最近忘れてるが、俺は転生者だ。

転生する前の世界では、ポケスぺも読んでいたし当然『ブルー』という名前の女の子を知っている。

しかし、マサラタウンに生まれ、この世界で旅をしていてそんな名前を聞く事は無かったから居ないと思っていた。

え、なに? てことはレッドやグリーンもいるの!?

「ちよつと、聞いてるの?」

「ああ、もちろん」

適当に会話しながら脳内整理をしていると、目的地の近くまで来たようだ。

「ここからだ」と花火がよく見える。とっておきの場所だ」

花火大会の会場から少し離れているが、人も居ないし静かに楽しめる。

「ふうん。で、花火は？」

「もう少しだ」

近くに設置されているベンチに座り、ブルーも隣に座ってくる。

「ところで、さつきから気になってたんだけどさ。その子見た事無いんだけど」

ブルーが見てるのは、俺の肩にとまっているベベノム。

「ベベノムって言うんだ。ペンキを飛ばしてくるから気をつけろよ」

「アタシの服を汚したら許さないからね」

面倒事を避けたいのでベベノムをボールに戻して、空を仰ぎ見る。

「やっぱり、強いトレーナーって珍しいポケモンを連れてるのね……」

すると、ブルーが足を組んで俺を見た。

「ね、さつきのポケモン。頂戴よ」

「駄目に決まってるんだろ」

あんな悪戯ポケモンだが、他人に譲る訳にいかない。

「それなら、ユウキごとゲット……しちやおつかな」

一指し指でツツツ、と俺の肩を妖艶に撫でるブルー。
決して「よろこんでっ」なんて考えてない。

「……………ぶふっ。冗談よ」

俺の耐える顔が面白かったのか、ブルーが吹き出す。本当に苦手なタイプだ。
「あっ」

そこで花火が打ち上がり、ブルーが声を漏らした。

「悪くないじゃない」

どうやらお気に召したようだ。

モクローやピカチュウなどの顔を模した花火を楽しんでいると、視線に気付いた。

「なんだよ」

「別に」

俺から視線を外したブルーは、また花火を見上げて口を開いた。

「ユウキはさ、兄弟って居る?」

「弟なら居るな」

「そっか。弟……………」

なんだ? ブルーの表情が一瞬だけ暗くなったような。

「うんうんっ。弟は大事にしなきゃねっ」

……ポケスベを読んでいたと言ったけど、金銀までだ。それ以降ブルーに何があつたか分からない。

いや、この世界にいるブルーはポケスベと違う人生を歩んできたかもしれない。この世界つてアニポケ基準だしね。

「あつ、終わつたみたい」

考え込んでいると、いつの間にか花火は終わり。

夜空は静かに輝いていた。

「さて、アタシは帰るとするわ。ユウキ、ありがとね」

そう言つてブルーは手を振り、この場から去つて行く。

さっきの会話でブルーに何か悩みがあるのは分かつた。

けど、多分それはブルー達の問題。

きつとレッドやグリーン、イエロー達がこの世界の何処かに居るんだろう。

それならば、その問題は彼らのもの。

俺とは違う物語を――。

『ユウキ』

なんて、厨二な感じに浸っていたら、

「約束、破りましたね」

「待ってたのなー」

「絶許」

やっべ。完全に忘れてた。てかなんで居るの。

「カ、カキ・・・・・・・・」

「俺は知らんぞ」

「マーマネ・・・・・・・・」

「僕もしーらない」

「サト——」

「ピカチュウ、これ食べるか?」

『・・・・・・・・ユウキ』

「ひいっ」

その日、俺は汚い花火となった。

進撃のポケモン

今日も楽しいポケモンスクールの授業……ではない。

「なあ、サトシ。これからどうすんだ？」

「おーいつ、ユウキも乗れよーっ！」

「やっぱり子供はポケベースが出来るくらいでしょうか？」

駄目だ、コイツら聞いてねえ。

「ホント、どうしよう……」

周りにいる野生のポケモン達を見上げて、溜め息が出てしまう。

どうしてこうなつたと、今朝のポケモンスクールを思い返す。

「アツ、ローラー！」

今日はスクールに特別講師が来ると聞いてたけど、

「なんでザオボーなんだよ」

コイツのやらかした事を皆は許したとはいえ、まだ油断できない。

「本日は皆さんに科学の素晴らしさを伝えるに来ました！ ザオボー先生と呼んでくださいー！」

「はい、ザオボー先生ー科学ってなんですかー？」

サトシが元氣よく質問するが、お前……科学にめっちゃ詳しい仲間と旅してただろうが。

「ええ、お見せしましょうっ」

ザオボーが大きめの機械を台車でガラガラと運んできた。

「これは？」

「皆さんが普段何気なく使ってる、モンスターボール。これは凄い発明だと理解していませんかな？」

確かに、明らかボールより大きいポケモンもスッポリだもんな。

「そこでモンスターボールをヒントにして、この発明品を作ったのですっ。それがこのスーパーシマウンデザオボードXです！」

スーパーシマ、なんだって？

「このマシンはどんな巨大なモノでもカプセルに収めることが出来ますので、家を小さくして楽々引っ越しなんて事もできちゃうのです！」

まあ、そりゃ凄いな。

「では早速、この黒板を小さくしてみせましょう」

ザオボーがスイッチを押すと、モンスターボールにポケモンを入れる時のような光線が出た。

黒板に光線が当たると、

「ん？ 何も起きないじゃないか」

もう一度押しても、変化なし。

「失敗作か？」

「そんなつ、実験段階では成功したのに！」

何度もスイッチを押すザオボーに、皆の疑惑の視線が突き刺さる。

「一度、再起動しては？」

「そ、そうですねっ」

ククイ博士の助言に喜々としてやり直すザオボー。

そして、

「コレなら！」

スイッチが押され、光線が出る。

だが、黒板に向かわず彼方此方に教室内を跳ね始めた。

「ちよっ、壊れた!？」

「そんな筈は——」

マオの指摘を否定するザオボーだけど、完全に壊れてんだろ!?
「危なッ。急いで机の下とかに避難しろ!」

光線を避けながら叫ぶと、皆は散り散りに隠れるが——。

「ちよっ、リーリエっ、ここも入れないって! 狭いッ」

「一番近かったんです!」

俺とサトシで窮屈なのに、同じ教卓の下に入って来やがった。

「あっ」

「どうしたサト——」

「クンクン、ユウキのいい匂——」

気が付いたら目の前には光線が迫っていて——。

「あれ、なんともない?」

光線は確かに命中した筈なのに、体は痛くもなんともない。

「やはり失敗作だったんでしようか?」

「ピカチュウ?」

何やらサトシは天井を見て呟いているが、ピカチュウはそんな所に居ないだろ——あ
?

「ピツカア」

「……………デカチユウ。」

「いやいや、え？」

まさかと思い、辺りを見回すと、

「俺達、小さくなってる!？」

「あ、ユウキ達が小さくなってる」

俺達に気付いたスイレンに上げてもらい、教卓の上でザオボーを睨み付ける。

「それで？ これは？ どういう事なんだ？」

事態は深刻な筈なのに、ザオボーは慌ててない様子だ。

「ご安心ください。付属品のカプセルを使えば問題ありませんよ」

そう言われて、透明なモンスターボールのようなカプセルの中に入れられた俺達。

「こうして、ポケモンを出すのと同じ原理で……………ポチツとな」

スイッチと同時にカプセルが開くと、

「ほーん、で？」

変わらず小さな姿でザオボーを睨むと、今度は慌てだした。

「そんな筈は!？」

「ザオボーさんっ」

「失敗部長」

皆が辛辣な言葉を吐いてると、離れた所からサトシの声が聞こえてくる。

「ひゃっほーっ、ライドピカチュウ楽しい！」

「偶にお前のポジティブさが欲しいと思うわ」

そこから数分後。

修理が終わり、マシンの前に立つ。

「今度こそ、ほんとーにつ大丈夫です！」

次に失敗したらしばくぞ。

「さあつ、スイッチオ、スイッチ……」

なんだろう。この嫌な予感。

「スイッチ——オンツブツシヤアツ！」

突然発生した突風。気付いたら、俺達は空を舞っていた。

「はっ！」

まったく。飛ばされた先に偶然ツツケラが居たから良かったものの、危うくペチャンコになるところだったぞ。

「ツツケラから振り落とされてこんな場所に来たが、どこだここ？」

小さいせいか、知らない場所に見える。

「ポケモンスクールから遠い場所なのは確かですね」

リーリエと一緒に現在の場所を特定しようとする。

「ユ、ユウキ……」

「あー、サトシ。ちよつと待っていてくれ、いま」

「後ろ……」

「あん？」

サトシの固い声音に振り向くと、コラツタが俺達を見ていた。

その目は獲物を見る目で、涎をポタポタと垂らしている。

「サトシ、リーリエ」

俺の呼び掛けに、二人は頷き、

「逃げろんだよお！」

一斉に駆けだした。

「はあ、はあつ、駄目です追いつかれます！」

くっ、この姿じゃ逃げ切れないかッ」

「こうなったら俺がッ」

いくらサトシでも無茶だッ！

何か手を……ハッ、モンスターボール!

腰に付けているボールを手に取り、バクフーンを呼び出す、
「出て来ない!」

小さくなつた影響か!?

「きやあーッ」

「うわあッ」

マズいッ、リーリエ達が——あれは!

一か八か、目についたモノを蹴り上げるッ。

「あ、あら?」

蹴り上げたモノが、リーリエ達を食べようとしたコラツタの口内に入ると、

「ヂュウーッ」

俺達の反対方向へと走りだした。

「助かったー、サンキューユウキ!」

「ふう。ありがとうございます」

コラツタに食わせたのは、フィラの実。

辛いのが苦手なポケモンが食べると混乱するから、一か八かの賭けだった。

「決めました!」

突然、髪をポニーテールに縛ったリーリエ。

「何をだ？」

ふんすつ、と気合いを入れたリーリエは宣言する。

「この姿で生きていく事をです！」

「考え直せ」

ふむ。リーリエはさっきのフィラの実を食べてしまったのか？

「サトシ、お前もリーリエに無理っていつてくれよ」

「ってあれ？ サトシ何処行った？」

隣に居たサトシがいつの間にか消えてる。と思つたら、

「ひゃっほーッ、デデンネライド楽しいー！」

偶にお前のポジティブさがイラツとくるよ。

「そうですね。この姿は大変ですから、まずは人手が欲しいですね。ここはわたくしとユウキで——」

ぶつぶつと独り言を呟いているリーリエから離れ、サトシの元へ向かう。

そして今に至る、が。

「本当にどうすんだよ」

さすがにこのサイズで生きていく自信は無い。

「とりあえず、この野生ポケモンだらけの所から離れよう。スクールに帰るんだ」

「ですが、どうやって?」

正常に戻ったリーリエと悩むが、手段が思いつかない。

まず此処が何処か分からないし、分かっても徒歩じゃどれくらい時間が掛かるか……。

その時、上空からサトシの声が聞こえ——え?

「おーいッ、ユウキーツ、リーリエーツ」

サトシはキュワワーに掴まって空を飛んでいた。

「ちよっ、おまつ!」

「わたくし達もやりましょう!」

急いで、まだ低い位置に居るキュワワーに掴まる。

「リーリエ、別と同じキュワワーに掴まらなくても」

「一番近かったんです!」

「あ、そう」

上空から見る景色で、スクールからそんなに遠くない事が分かった。

「あ、意外と近かったんですね」

「俺達縮んでるからなー、知ってる場所でも大冒険だな」

そうして暫く空中で佇んでいると、黒い物体が近づいてくるのが見えた。

「ユウキ、ヤミカラスですね」

「そうだな。ヤミカラスだな」

その目は獲物を――。

「つてマズい！ キュワワーツ、逃げてくれ！」

しかし逃走は間に合わず、ヤミカラスに突かれたキュワワーは飛ばされ、その反動で振り落とされてしまった。

「くっ、リーリエー！」

せめてリーリエをと抱き寄せ、衝突に備える。

――ポヨンツ。

「あれ？」

閉じた目を開くと、無事が確認できた。店のテントに着地したみたいだ。

「ユウキーー！」

サトシも無事みたいだ。下から手を振ってくる。

「この店つて、スクールから直ぐの所だったよな」

着地した場所を確かめ、今日中に帰れる事に安堵する。

「さて、スクールに向かうか」

路地に降りた俺達は疲れている足を動かさず、

「ん？」

ふと影が被さるのに気付く。

「……ペルシアン？」

次から次へと！ 帰ったら絶対にザオボーをしぼくツ。

「あそこに逃げようツ」

サトシが指した路地裏に逃げ込むが、

「行き止まり、か」

まさに袋のコラツタ。

こうなったらスーパーマサラ人の俺とサトシでどうにか――。

「アマージョツ、お願い！」

その時、ペルシアンの後ろからマジカルリーフが飛んできた。

「マオツ」

ウルトラガーディアンズの制服を着たマオとアマージョが窮地を救ってくれた。

「やっちゃって！」

アマージョは跳び、トロピカルキックを放つ。

「ペルシヤアツ」

「まともに食らったが、ペルシアンはまだ諦めていないようだ。」

「ふみつけ！」

「ふみつけたアマージョはペルシアンを見下していた。」

「少し前にアママイコから進化したけど、すっかり変わったなあ。まるで女王様だ。」

「そこでようやくペルシアンが逃げて、マオと追いついた他の皆が走ってくる。」

「皆さん、何故わたくし達の場所が？」

「探してた途中にサトシのピカチュウが野生のデデンネと話しててね。ここまで来て、ペルシアンが小さいユウキ達を追いかけてるのが見えたの」

「何はともあれ、これでもうやく——。」

「いや、元の大きさに戻るまで安心出来ないな」

「ここまで散々だったんだ。また何か起きるかもしれない。」

「まあ戻らなかつたら戻らないで、わたくしはユウキと一緒に生きていきますよ」

「そっか。リーリエはそのままが良いんだね。わかつた。じゃ、ユウキは私の手に乗って」

「出来心です冗談です置いていかないでッ」

「さて、どうしてくれようか」

元の姿に戻り、俺に詰め寄せられたザオボーは冷や汗を流して目を逸らす。

「そ、その前にマシンの力をお見せしましょう!」

コイツ、まだ懲りてないのか!?

「ポチツとな」

「ちよっ、待て!」

慌ててマシンを止めようとするが、

「……なんだ、何も起きないじゃないか」

やはり欠陥品か。スイッチ押ししても反応が無い。

「ふむ。このマシンは諸悪の根源だ。破壊しよう」

「ま、待つて下さいッ」

マシンに手を掛けた俺を、ザオボーが止めてくる。

「ええいッ、離せ! 今すぐ壊してやる」

「そうではなくッ、無理矢理動かすと——」

その時、光線が俺に当たり……………。

「え? え?」

サトシ達がどんどん小さくなってる!?

「お前ら縮んでるぞ!？」

光線を受けたのは俺なのに、何故――。

「つて、ユウキが大きくなってるんだよ!？」

え、俺? マオの指摘に上を見ると、直ぐ目の前に天井が。

「あッ」

そのまま突き破り、首から上はポケモンスクールの外に出た。

「ユウキ、おっきい」

「たくましいですね」

「つて言ってる場合じゃないよ!？」

やっぱり今日は散々じゃないか。

ユウキの華麗なる一日

ポケモンマスターに最も近い男の朝は早い。

AM05:00

「んごっ！ ベベノム……その起こし方は止めるっての」

ユウキの朝は、顔に付いたベベノムの液体——もとい、ペンキを拭き取る所から始まる。

Q 朝、早いですね？

「ははっ、体調管理は大事ですからね。それに、この時間じゃないとコイツらの特訓が出来ませんから」

ユウキは外に出ると、手持ちのポケモン達を全員出してバトルロイヤルを開始させた。

「俺なんかが強いつて言われてるのは、コイツらの支えがあつてこそですから。しっかりとスキンシップしませんと」

バトルロイヤルから脱落していくポケモンを、介抱しながら語るユウキの眼は何よりも真剣だ。

やはり、一切の妥協は無い。ユウキの誇りは、其処にあるという。そこから一時間程経ったところで、ユウキはポケモン達を戻した。

Q 特訓は終わりですか？

「いえ、ああ、コイツらのは終わりですよ」

苦笑したユウキは軽く準備運動をして、突然走りだした。

慌てて併走し、いきなりどうしたと問う。

「トレーナーも特訓しないとイケませんから。案外大切なんですよ？」

そこで速度を上げたユウキには着いて行けず、家の前で待機する事にした。

AM07:00

ジョギングから帰ってきたユウキは、朝ご飯の準備を開始した。

お湯を沸かし、サラダやハムを細かく切る。

今日の主食はトーストラしい。

スクールがある日は、このような献立だという。

「効率の面もありますけど、これを食べないと朝を迎えたと感じがないですよ」

木のポウルにサラダを盛り付け、テーブルに並べる。

きつちり四人分並べたユウキは、他の住人を起こしに向かった。

AM07:30

食事を終えたユウキは、身支度をして玄関に向かう。

Q もう登校ですか？

「シッ。静かに」

私を静めるユウキ。

「耳を澄ましてください。声がほら、きた。きたきた」

確かに、遠くからうめき声のようなモノが聞こえる。

「モンスターの鳴き声です」

どうやら、別の島に居るはずの未婚女性の声らしい。

「ほら、バーネット博士とか近い年齢の人がドンドン結婚しているでしょう？ 彼女、

それで焦ってるらしくて、男をみたら襲ってくるんです」

ユウキは、「島クイーンなのに、何故モテないのか？」と呟いて息を潜めた。

AM07:50

「ふう。もう行つたかな」

沈黙を破つたのは、ユウキであった。

「これ以上は遅刻しちやいますからね。見極めが肝心なんです」

タイミングを間違えると、向こうに引きずり込まれる。

ユウキの貞操が無くなるかもしれない、危険な作業なのだ。

AM 9 : 30

ポケモンマスターに最も近いとはいえ、ユウキは勉強を怠らない。

「じゃあ、この問題は……ユウキ」

「はい。この卵のグループを合わせると——」

ブリーダー顔負けの知識を、ペラペラと答える。

その姿は、本職のポケモンブリーダーの様であった。

Q 何故、そこまでの知識を身につけるのですか？

「本当に強いトレーナーは、ポケモンの事を深く知る必要があるんです。強さを求めるのなら、配合知識は基礎ですからね」

そう語るユウキの表情は、何処か遠い所を見ているようだ。

「まあ、俺の場合は単なる趣味です」

そう締めくくり、ユウキは黒板へと目線を向けた。

「そー、授業中だから静かになー」

PM 12 : 00

昼休み。皆の机を並べて、弁当を広げる。

「あつ、ユウキの弁当美味そう」

級友であるマーマネの視線は、ユウキの弁当に釘付けだ。

「相変わらず凄いよねー。サトシの分も作ってるし——て、なんで今日はお弁当箱の中身が三人とも同じなの？」

Q 毎日お弁当を作るのは、大変でしょう？

「まあ、そうですね。でも、昼ご飯は大事ですから。それに、サトシは俺の弁当を食べないと午後は瀕死なんですよ」

苦笑するユウキに反応して、サトシはブンブンと首を縦に振る。

「ねえ。何で弁当同じなの？ ねえ、聞いてる？」

PM16:00

授業が終わり、放課後になった。

Q 帰宅ですか？

「うーん。今日はちよつと買い食いでも、と」

そう言った彼に着いて行き、街に繰り出す。

「ほら、お前はこれな」

ユウキはマラサダを二つ買うと、片方を肩に乗っているベベノムに与えた。

偶にこうしてベベノムに構わないと、次の日の朝が辛くなるという。

ベンチに座って、仲良くマラサダを食べる彼らの姿は、長年連れ添ったパートナーの様に見える。

「コイツは悪戯さえしなければ、良い奴ですから」

笑みを溢すユウキの背中へ、ペンキで塗れていた。

PM18:00

今日の夕食当番は、ククイ博士らしい。

ユウキは時間まで地下の研究室で作業をするみたいだ。

パソコンと向きあうと、まずはメールチェックを始めた。

「ほーん。アイツ、またコンテスト優勝したのか」

カタカタと凄い速さでタイピング音が鳴り響く。

Q 誰ですか？

「ん？ 昔、共に旅をした仲間ですよ」

Q 女ですか？

「え？ え、ええ。はい」

Q 誰ですか？

「いや、だから、ちよつ、近ツ、やめツ——」

PM20:30

疲弊していたユウキは、夕食を食べて回復したようだ。

コーヒートを啜り、テレビに映るニュース番組を眺める。

『少し前に現れたニューヒーロー、バンギライガー。彼の連勝記録は何処まで伸びるのかッ!』

Q バンギライガーとユウキ。どちらが強いんでしょうか？

「ヘッ!?! あー、うん。彼と俺は、実力が拮抗している、感じがするなあ」

視線を泳がして言うユウキは、何処か焦っているように見えた。

やはり、実力が近い者が居ると焦ってしまうのだろうか？

P M 2 1 : 3 0

今日の汗を流すため、ユウキは風呂に向かう。

Q 先に洗うのは、頭ですか？ 体ですか？

「ちよつ、何で着いて来てんの!?! 博士ーッ、ククイ博士ー!」

P M 2 2 : 0 0

ユウキはこれから寝るといふ。

Q 随分早いですね。

「そうかな？ まあ、明日も朝から特訓だしね」

Q 毎日続けるのは、辛くないですか？

「そりゃあ、始めは辛かったよ。このまま強さを求めて、何処に行くのかってね。でも、トレーナーとしてコイツらの事を考えた時、何か吹っ切れたんだ」

枕元に置いたモンスターボールを、ユウキは指で突いて転がす。

Q いずれは、ポケモンマスター。ですか？

「それも考えたけど、それは主人公の……サトシの夢さ。俺は気ままに旅ができればいい。今は、とりあえずスクールを卒業、かな」

主人公とはよく分らないが、天井を見つめるユウキの瞳に迷いは無い。

PM22:30

消灯し、部屋は闇に包まれた。

彼の寝顔は穏やかで、いい夢を見ているようだ。

明日の朝、ユウキの一日はまた、特訓から始まる。

——End。

「おいコラ」

「起きていたようだ」

「何しれつと布団に潜りこんでんだ、スイレン」

注意をしても、悪びれてねえし。

「寝ているかと思った」

「不穏な気配を感じたんだ。てか、いつまでその変な喋り方してんの？」

昨日、スイレンは俺に取材がしたいと言ってきた。

別に断る理由が無いから受けたんだが、

「結局この取材はなんだったんだ？」

「この前テレビでやってたから、やってみたいと思って」

特に深い理由は無かったみたいだ。

「てか、何で今日も泊まりに来てんだよ。夕方で終わりの筈だろうが」

「興が乗った」

「とりあえず出てけ」

強引に布団から摘まみ出し、「あふんツ」と聞こえる声を無視して寝返りをうつ。

「明日のお弁当は、おにぎりがいい」

「………またマオに睨まれるなあ」

もう取材はこりこりだと溜め息を吐いて、目を閉じる。

その夜の夢は、金髪と緑髪の般若に追いかけられる夢だった。

行くしかない、あのビッグウェーブビーチに

ああ………、景色が歪んでいる。憎いほどに青い空がユラユラと。目を閉じて、耳を澄ます。

——命の鼓動が聞こえた。

やはり『母なる海』と言うように、このまま還りたくなる心地よさだ。鼻から、ぶくぶくと水泡が飛んでいく。

もう息が続かないと、肺が酸素を求めてる。

我が儘な器官に応えるよう、足をバタつかせて上昇を始めた。

「ブはあッ！」

海面に出た俺は、とりあえず深く息を吸ってから、

「サーフィンとかクソゲーだろ」

据わった目で呟いた。

「マントインサーフ？」

いつものように夕食後の珈琲を堪能していると、ククイ博士が面白そうな話題を振ってきた。

「知らないか？ 海のライドポケモンなんだけど、移動テクニクでスコアを競いあつたりする競技でもあるんだ」

ほーん、サーフィンか。

要は、海の上でやるスケボーだろ？ それをボードじゃなくてマウンティンでやるだけ。け。

「簡単そうじゃまいか」

「じゃまいかって……… 舐めてると痛い目見るよ？」

博士は、やれやれと首を振るが、

「はんツ。かつては『スケボーの上で逆立ちしながらラーメン食べる男』と崇められた俺だぞ？ 楽勝だつて」

「………それって馬鹿にされ——いや、とにかくやるなら溺れないようにね」

そう言つて、博士は自室へと向かった。

まったく。泳げる俺が溺れるわけないだろうに。

早速明日行つて、サクツとハイスコアを更新してやろう。

寝て過ごす予定だった休日に、楽しそうな行事が加わった事で鼻歌が自然と出てしま

う。

『ベッー!』

そんな俺を気持ち悪そうに、ペンキを飛ばしてくるベベノム。

風呂上がりの髪に付くが、今の俺には些細な事だ。

さて、寝不足で本当に濡れたら洒落にならないからな、そろそろ寝るか。

格好良くキメるテクニクを脳内でシミュレーションしながら、俺は意識を深く沈めた。

そしてやってきたビーチ、だが。

「ヴェツホオツー!」

俺は濡れそうになっていた。

激しく酸素を求めながら、砂浜へと流れ着く。

「………アカン、舐めてたわ」

そう。サーフインはゲキムズだった。

「スケボーと感覚が違うじゃあねーか。誰だよ、サーフインはスケボーみたいなモノって言ったの。出て来いよ、メガトンパンチしてやるから」

でも、サーフインの練習ならスケボーがいいって聞いた事あったんだけどなあ。

やっぱり、あくまで練習。本番とは違うってか？

「いや、そもそもマンタインとボードの感覚が違うわ」

ボードは無機物だ。そしてマンタインは生き物。

乱暴に扱えば振り落とされたり、揺れる事もある。

「あーあ。一気につまらなくなっちゃわー」

俺は、大人げなく大の字になってふて腐れた。

「あら？ お客様、どうされました？」

そこに、ビーチの係員らしきお姉さんに声を掛けられた。

「いや、その……乗れなくて」

最初は意気込んでこのビーチにやってきたから、乗れないと話すのは恥ずかしかった。

「あ、初めてやるんですか？ なら仕方ないですよ」

本当に仕方ない事なのか、慰めてくれているのか分からないが、今の俺にそんな言葉はいらないんだ。

「初心者だった人達も、この先のウラウラ島まで行けてますから、きちんと練習すれば大丈夫ですよ」

ウラウラ……島？

「この先ってウラウラ島、なんですか？」

「え？ はい。マンタインサーフなら、船よりも速く着きますよ？」

「ツシャオラ！ 行くぞ、ニル〇アーシユ！」

ちなみに、ニ〇ヴァーシユとはマンタインに付けたニックネームだ。

「お、お客様?! 勝手に私達のマンタインに名前を付けないで下さい！」

今すぐ、カットバックドロップターンで行くからよお！

結論。駄目だった。

「ぐぞうツ。なんて、タ、メ、だっだ！」

鼻から海水が入りまくってクソ痛い。

元いたビーチにとんぼ返りだ。このままじゃ、ウラウラ島にたどり着けないツ。

アセロラさんに、会えないツ。

なんたる絶望。なんたる悲劇。

俺は、こんなにも渴望しているのにツ！

「あの、お客様？ シリアス顔されてる所、申し訳ないのですが」

「なんだツ!？」

「ひえッ。今日はもう閉場の時間になります」

なに？

「おい。おいおいおい。馬鹿言っちゃいけないーぜ？ 夜でもマウンティンサーフをしていると聞いている」

昨日、博士も言ってたし間違いない。

「あの、それは、ちゃんと乗れる人限定で……」

「ああん!？」

「ひいーッ。夜の海は危険なのでッ、乗れる人じゃないと駄目なんですーッ」

係員はそう言っつて、走り去ってしまった。

「くそッ。なんて不甲斐ないんだ！」

チラリと海を見る。

「俺はまた明日来る！ 待っている、ニルヴァ○シユ！」

『勘弁してくれ』なんて目を無視して、走る。

「絶対ッ、乗つてやるーッ！」

悔しさに溢れる涙なんて、無い。これはきつと髪から滴った海水だ。

——その日から、俺の特訓は始まった。

「もつとだッ、もつとやれ、マリルリ！」

——ある日は、顔面から思いつきり落ちてもいいように、アクアジェットを受けたり。

——またある日は、踏ん張る力を鍛える為に、バンギラスとぶつかり稽古をした。

『努力の方向性が間違つてないか？』

とククイ博士は言っていたが、きつと間違つてない。

よし、イケる。この調子ならきつと。

え？ アセロラさんに会いたいだけなら、船か泳いだらどうかって？

今の俺が……アセロラさんに胸を張つて会える訳、ないだろうが。

「ククイ博士、ユウキはなんで泣いてるんだ？」

「今のユウキは見ちゃ駄目だよ、サトシ」

一週間後。

「……準備はいいか？ ニルヴオーシユ」

ふつ、目を見なくても分かる。きつと俺を信じてくれているんだろう？

「ひいーッ。またあの客来てますーッ」

どうやら、あの係員も応援してくれているようだ。

防具を着けて、いざッ。

「とおッ！」

——シユタツ。

華麗なる前回転ジャンプを決めて、ニルヴァーシ〇に乗る。

「特訓の成果、でてるみたいだな」

「こんな綺麗な着地、今までは出来なかった。

「さあ、行くんだニルヴァーシユ！ 愛しのマイシスターの元へ！」

合図の瞬間、動き出す。

そして俺は、

「乗れてる………乗れてるぞお！」

荒く踊る波にも負けずに、水面を滑っている！

「出来るッ、俺は出来るぞ！」

その時、横から俺達を覆う大きさの波が発生した。

「来たッ、行くぞユウキ、行くぞ俺ッ」

波を上り、下る。その繰り返しで、徐々に加速をつけていく。

既に髪が逆立つ速さだ。このままの勢いでッ、

「アイ・キャン・フラァーッイ!!」

飛んだ。飛び上がった。

波の天辺から、空へとあがった。

サーフインは分らない事だらけ。

でも、今こうして海の上から世界を見ている事。

それが真実なのは、確かな気がしたんだ。

そして、不意に足下の浮遊感に気付いた俺の顔は、海よりも真っ青だった。

——ドボンッ！

「ブはあッ。．．．．サーフィンとかクソゲーだろ」

そんなこんなで漂流した、ウラウラ島。

「そんなッ。せっかく来たんだぞ！ 一目でいいから会わせてくれよホ○ンドッ」

「ホラ○ドって誰だッ、俺はクチナシだ！ ．．．．．だあッ、しつこいぞ！ アセロ

ラは留守だつて言つてんだろ！」

あまりの事実に、ガクリと膝が崩れ落ちていく。

「あ、あ、あ．．．．．うわあーッ」

受け止められない現実。

俺は、向き合う事ができず逃避した。

「ちよ、まてつ。なんか伝言あるなら——つて、もう行っちゃまったか」

この溢れ出るモノは海水では無いッ。涙だ！

残酷な結果で滝のように流れていく涙を、俺自身とめる事が出来なかった。

「博士、ユウキはなんで帰ってすぐ泣いてるんだ？」

「見ちゃいけないんだよ、サトシ」

アイナ・食堂く幸せのパンく

今日、俺達はアイナ食堂に来るようマオから招集をかけられていた。

メンバーはいつものメンツ。カキは妹と買い物に行くという用事を優先して、此処にはいない。

まったく、あのシスコンめ。

「……どうした？ スイレン」

「いや。なんか激しく突っ込みたい気分になって」

俺の事をジッと見ていたスイレンに首を傾げていると、前から咳払いが聞こえた。

「えー、今から皆さんには、新メニューを考えてもらいます」

まるでバトルロワイアルが始まるかのような口ぶりで軽く言ったマオに、リーリエが手を挙げて疑問をぶつけた。

「えっと……それは構いませんが、何故ですか？」

すると、今まで無表情に近かったマオの表情が崩れた。

「——の」

「え？ なんだって？」

下を向いてボソツと言ったマオに聞き返すと、勢いよく俺に迫って肩を掴んできた。

「売り上げが伸びないの！ むしろ下がってるの！ お父さんと相談したら、最近新規のお客さん来ないし、新メニューでもどうかって……だからお願い手伝ってーっ、このままじゃマンネリに入ってお店潰れちゃうよおっ！」

「いや、潰れるって、大げさっ、とりあえず、揺らすのは、うぶっ」
涙目でグワングワン揺らすのは止めてほしい。

店じゃなくて俺が潰れてしまう。

「分かりましたっ。不肖ながらこのリーリエ、お手伝いしますよ！」

「ああつ、俺も協力するぜ！ 面白そうだし、なっピカチュウ！」

「食べ物的事なら僕も協力するよっ」

「無論、私も」

皆、やる気満々意気投合なのは結構だ。だが、

「あ、り、か、どーっ。」

とりあえず、この緑を止めてくれ。

「さて、なにか意見ある人は？」

場所は移り、厨房。

マオの言葉に、マーマネが挙手する。

「ここは食堂で、ちゃんとした料理がいっぱいあるよね？ でも、他の店と比べて軽食が少ないんだ。だから、パンとかはどうかな？」

さすがマーマネ。ここら一带の店はリポート済みか。

「むっ、確かに……。よしっ、パンを作ろう！」

とりあえずの目標が出来た所で、準備にとりかかる。

ふむ。パンの中身は何にしようか。

「ん？ スイレン、なに持つてるんだ？」

「なについて……見ての通り、海鮮物」

……パンを作るんだよな？ あっ、そうか、フィッシュバーガーみたいのを作るのかな。きつとそうだ。

目を逸らした先には、栄養剤が入った瓶を持ったリーリエ。

「……リーリエは何を作る気なんだ？」

「へ？ 健康的なパンですよ？ こうしてパンの中に錠剤を入れれば生地に溶けて、豊富な栄養を採れるんです。そう、わたくしの計算では——」

ブツブツ独り言を言うリーリエから離れて、マオの肩を掴む。

「マオ、諦めろ」

「まだ始まってないのに!？」

おかしい。俺の記憶では、お泊まり会の時にはバーネット博士と一緒にキッチンと料理をしていた筈だ。

その場にはリーリエとスイレンも居て……あれ？ その時は素材を切ってただけ……味付けなどはマオと博士が……あつ（察し）

希望をマオ達に託して、俺もパン作りに取り掛かる。

材料を混ぜ、出来た生地をこねくり回す。

「んっ、ふう。パン作りって体力使いますね」

まあ確かに、ずつと腕を力強く動かすから疲れてくるな。

「ほっ、やつ、はっ」

「マオは流石だな。パン作り慣れてるのか？」

「一通りの料理を学んだからねっ。これくらい楽勝だよっ」

ポーツと生地をこねていると、感触が変わってくる。

ちよつと固さが入って良い具合だ。

……パン生地の柔らかさきつて、あの部分に近い程美味しくなるって聞いた事があつたな。

「ん？ どしたの、ユウキ？」 「どうしました？ ユウキ？」

「あつ、いや。なんでもない」

マオ達を見ながら手を動かしていたら、首を傾げられた。

いかんいかん。集中せねば。

——バシンツ、バシンツ！

「ちよつ、どしたのスイレン!?!」

「……別に、生地をこねてるだけ」

俺は、叩きつけるように生地をこねているスイレンから目を逸らし、パン生地を寝かせにいく。

それから一時間後。

ぷっくりと膨らんだ生地をちぎり、形を整える。

無難に丸くでいいか。

一つ一つちぎって、中身のソーセージを包むように丸く作っていく。

ソーセージの両端がはみ出ているが、これもデザインの内だと納得し、オーブンに突っ込んだ。

「ん？ サトシ、なんの形にしてるんだ？」

見たところ、何かのポケモンの様だが……。

「あつ、分かつたぞ。ミミツキ——」

「へへっ。そう、ピカチュウだぜ！ よく分かつたなつ」

「えっ、あつ、うん」

どう見てもミミツキユなんだが。ここは温かい目でスルーしよう。

ほら、サトシの肩に乗ってるピカチュウも納得——してませんね。そりやそうか。

「中身は何だ？ ……ふーん、イチゴジャムか。サトシにしては無難だな」

「へへっ。ピカチュウパンなら、何でも美味いに決まつてるからな！」

ピカチュウに対する信頼度は流石だな。

肩に乗ってるピカチュウも嬉しそうにしてる。

形を整え終わったサトシは、オーブンに向かい、

「今からピカチュウを焼くぜ！」

「言い方な」

ほら、ピカチュウが逃げてつたぞ。

更に一時間後。それぞれのパンが焼き上がり、テーブルに並べて試食会になった。

「じゃあ、まずはあたし。マオちゃんからだよつ」

マオが自信満々に差し出してきたパンからは良い匂いがする。

『いただきます』

一斉に嚙り、咀嚼する。

『……………美味しい!』

見た目はプレーンだが、ほのかに木の実の香りを感じる。

「むむっ。蕩ける甘さを感じたと思ったのに、今度は柑橘類の酸味……………この様々に変化する味、オレンの実だね!」

「正解だよつ、マーマネ」

ふむ。オレンの実のエキスをふんだんに混ぜたのか。

「結構美味しいと思うが、偶に苦い雑味を感じる。そこが問題だな」

俺の指摘に、タハハと頭を掻くマオ。

「そうなんだよねー。でもオレンの実の特性だし、どうにもね」

改善の余地があるかもしれないと、採用は保留。

お次は、

「僕だねっ。ふふーん、自信作だよ!」

そう言って出したのは、食パン。

「今回発明した、この『デリシヤスセンサー』を使えば、どんな素材を混ぜれば美味しくなるか測定出来るんだ!」

百聞は一見にしかず、食パンを嚙る。

『美味しい……』

「ま、まーねっ」

褒められて嬉しいのか、マーマネは顔を赤くしている。

「けど……ねえ？」

「ああ、はい」

美味しいと言ったのに、皆の表情は微妙だ。

「なんか、暖かさを感じないってどうか……」

「え!? いや、焼きたてだよ!」

追加の評価に、マーマネは慌て始めた。

「ああ、そうじゃなくて。ほら、料理は愛情。なら、機械に頼りきった味は、美味しいけど美味しくないとってどうか……」

まあ、マオの言いたい事は分かる。

どんな素材を使って作るのか、どんな味になるのか。

そうして試行錯誤した料理は、美味しいからな。

「ちえっ。美味しい筈なのになあ」

微妙に納得していないマーマネを置いて、次の番。

「じゃあ次はユウキだね」

マオに促され、パンを皆の前に出す。

「これは、ソーセージパン……でしようか？」

「よくある奴」

スイレンの言葉に少しダメージを受けながら、皆の評価をゴクリと待つ。

「まあ、美味しい、よ？」

「ええ。ちゃんと温もりを感じますし。でも——」

「地味」

うるせえつ。というかスイレンは手加減してくれ。

心の涙を流しながら、次の番であるサトシのパンを見る。

「へへっ。どうだ、ピカチュウパンー！」

そのパンを見た俺達の表情は、引きつっていた。

「えつと、どうみてもミミツ——」

「食ってみてくれ！」

サトシのキラキラした目に、マオ達は何も言えず、パンを囓る。

「美味しいけど……うわあ」

「ちよつとこれは……出せないと思います」

「ホラー」

そう。ピカチュウパンはジャムの入れすぎで、少し嚙っただけで目や鼻から飛び出してくる。

「そっかあ………。まあ美味しく出来たしいや！」

さて、残りは誰が――。

「後はわたくしとスイレンですね」

「ん。持ってくる」

ハッ、いけない！

「わたくしは、このパーフェクトパンです。これ一つで一日の栄養を補給できる、まさに完璧なパンです」

「私はこれ、オーシャンパン。名前の通り、海の幸を詰め込んだ」

……パンから不穏なオーラが見えるが、気のせいだろうか。きつと気のせいだ。

「召し上がれ」

そう言われても、俺達の食指は伸びない。

誰が好き好んで地獄の片道切符を掴むかつ。

もう嫌だつ。俺は帰らせてもらおう！

「あつ、あたしは自分のパンを処理しないとイケないからつ」

「僕も自分のを全部食べないとな」

くっ、裏切ったな！

「そうだ、サト——」

「ハグハグっ。ピカチユウパンうめえ！ あっ、ユウキのも美味いぜ？」

「この野郎っ！ それ以上腹を膨らませるなっ、目の前のダークマターを食えっ——ハッ!？」

「誰のパンが……」

「ダークマター、なんででしょうか？」

ケヒツ、と笑い声を上げながらジリジリと近づいてくる二人。

「違うんだ。そうじゃない。話を聞いてく——ムグッ」

何かが俺の口に突っ込まれた。

……どろどろして、ぐちゃぐちゃと俺の口内を蹂躪していくナニか。

生臭い固形物が喉を通り、次に栄養ドリンクの匂いが鼻から抜ける。

パン生地はアツサリとしていた筈なのに、口の周りはベトベトだ。

命をかけた、最後の咀嚼。今までの暴力とは違い、優しい無味。

おれは、めのまえがまっくらになった。

「ハッ、所持金がゼロに!? っつて、マオ?」

目が覚めると知らない天井ではなく、マオがいた。

というか膝枕だった。

「あつ、ユウキ。今日はごめんね」

「別に気にする必要は無い」

もう少し堪能していたかったが、外を見ると夕焼けだったので起き上がる。

「皆は?」

「もう帰ったよ」

ちっ。サトシのやつ、置いて行きやがって。

「新メニューはどうなったんだ?」

固まった背骨を鳴らしながら聞くと、顎肘ついて厨房を見ていたマオが俺に振り返った。

「うーん、保留かな。 よく考えたら新メニューだけで売り上げあがる訳ないし」

「ええー。じゃあ今日の頑張りは?」

「だから今日はごめんねって。まあ、色々と参考になったし無駄じゃないよ」

無駄になったら俺の死が無駄になるから怒るぞ。

いや、死んでないけど。

「しっかし、なんで最近は客足が遠のいてるのかね。こんな可愛い看板娘が居るのに」
「もうっ、からかわないでよー」

やれやれと呆れているが、その顔は赤かった。

そつちに夕日が差し込んでいるのだろうか？

そろそろ帰ろうかと出口に向かうと、マオに呼び止められた。

「そういえば、前に言ったっけ？ このアイナ食堂をアローラーにするって」

「あー、言っような気がする」

「気がするって……」

臆気な記憶に、マオは口を尖らせ不機嫌な様子で近づいてくる。

「それは今でも変わらないうし、諦めない。んでねっ、もし本当にお店が潰れそうになった時は、一緒に盛り上げてくれる？」

そう聞いてくるマオは笑顔だが、何処か悲しさを感じる。

そよ風で吹き飛ばしてしまうような姿を見ていられず、吹き飛ばされないように、マオの頭に優しく手を乗せる。

「だから潰れるとか大げさだったの。まあ、その時は手伝うよ」

「……うん」

マオの様子はまだ戻らない。

だから俺は、からかうように軽口を叩く。

「あつ、そうだ。飯に潰れちやつたりしたら、二人で新しく店を開くか？ アイナ食堂二号店。あつ、名前はもつとちゃんと考えるか」

「もうつ、大事なお店は潰させないよっ！」

そう怒るように俺の両頬を引つ張るマオだが、元気は戻ったようだ。

「まったくもう。．．．でもそれもいいかもね」

「なんだって？」

「なんでもないよ」

ボソツと言うマオの言葉を聞き取れず、背中を押されて店の外に出される。

「ユウキ、ありがとねっ」

「ん？ ああ」

訳の分からない礼を受け取り、帰り道を歩く。
チラリと振り向くと、マオが手を振っていた。

俺の姿が見えなくなるまで、ずっと。

それから数日後。

売り上げが伸びないと喚いていたマオだが、アイナ食堂は客で溢れかえっていた。

マオに聞くと、どうやら偶々客が来なかつただけで、シーズン中は変わらず満員御礼になると、マオのお父さんが言っていたそうだ。

なんだかくだらなオチに気が抜ける。

更に、最近何故かりーリエとスイレンが鬼気迫る表情で追いかけて来る。

逃げながら訳を聞くと、

『——将来はマオとお店を建てるんですか？ 看板娘ならぬ看板夫婦ですか？』

『——怨気満腹、怨敵退散』

りーリエは仄暗い目で訳分からん事いうし、スイレンに至っては怖いの一言しか出ない。

マオに助けを求めても、顔を赤く染めてイヤンイヤンと体をくねらせるだけ。

それを見たりーリエ達が更に追いかけて来る悪循環だ。

そんな生活を強いられる俺だが、最近ハマった事がある。

「よし、出来た。ベベノムパンだ」

そう、パン作り。

あれから毎日のようにパンを作る程にハマってしまった。

「どうだ、ベベノムーお前そっくりだろう？ ブルーベリーで色付け——ベベノム？」

そして最近、困った事も出来てしまった。

『・・・・・・・・ベベ』

ベベノムの元気がない。

寝起きには必ずベベノムのペンキが飛んで来るが・・・・・・・・それも無い程、何故か落ち込んでいる。

「ほら、これ食って元気だせって。美味いぞー？」

ジツとパンを見たベベノムは、受け取って食べる。

「美味いだろ？」

そう聞いても、黙々と食べるベベノム。

「・・・・・・・・はあ。まだあるから、おかわりは好きにな」

使った食器を片付けようと、キッチンに向かう。

『ベベツ』

その時、食べ終わったベベノムが、天井にナニかをペンキで描き始めた。

「ちよつ、落書きすんな——ん？ これ、どつかで見たな」

天井に描かれたのは、複数の翼を大きく広げた鳥の様な生き物。

「あつ、確かウラウラ島の図書館で借りた本の・・・・・・・・」

前に家で見えた本に書いてあったポケモンだ。

確か、名前は……。

「かがやき様？」

……なんだかまた、俺の嫌いな雰囲気を訪れそうだ。

輝け、かがやき様！編 闇の襲来

——ピ、ピピピッ！

けたたましい音が聞こえてくる……。

「う、ん……」

意識が覚醒し、目覚まし時計の音だと理解した。

目を閉じたまま腕を動かして、時計のアラームを止める。

「……はあ。ベベノム」

前まではベベノムのペンキで起こされていたので、なんだか物足りないというか……。

それに正直、煩いアラーム音よりもベベノムに起こされた方が苛つきが少ないのである。

問題のベベノムは、うなされている。

『ベベ、ベ、ベベベッ』

最近はいつもこうだ。まるで何かに怯えているように。

だから俺は、ベベノムの悪夢を取り払うよう頭を軽く撫でる。すると、安心したのか寝息が穏やかになっていく。

「ホント、手の掛かる悪戯っ子だ」

まだ起きないベベノムを抱きかかえて、いつもの特訓に向かう――。

「うおッ!! ——痛てッ!」

玄関に向かう途中で何かに躓いてしまった。

「まったく。サトシの奴が何か散らかして——え?」

俺が躓いた原因は物ではなく、者。

「ぐう。……うーん?」

バーネット博士だった。

「つて、なんで此処で寝てるんだよ!?!」

「ふわあ。なんか部屋に行くのも面倒くさくて……ぐう」

そう言つて、また寝てしまった。

バーネット博士はこの時間、彼方此方ポケモンの観察しに行くのに、家に居るのは珍しい。

「だいぶ空が明るくなってきたな．．．．．よし、ラストだ！」

特訓開始から一時間。これ以上は人目に付く可能性があるので、最後の仕上げ。

「いくぞ、レックウザ！ アルティメットドラゴンバーンツ！」

リングを輝かせ、海の方こうへZ技を放つ！

「．．．．．うん？ おかしいな」

技自体は出たが、

「パワーがしょぼい．．．．．」

いつもの半分以下の威力だ。

「うーん？ 調子悪いのか？ レックウザ」

しかしレックウザは首を振る。確かに、Z技以外はいつも通りだったしな。

「とりあえず、今日の特訓はここまでにしておくか．．．．．うん？ ベベノム、何し

てるんだ？」

『ベベツ、ベツ』

帰ろうとすると、突然ベベノムが砂浜に何かを描いた。

「これは、何だ？ かがやき様ではないよな。何かのマークか？」

一見、Zリングにハメ込む石に似ている。

「うーん、わかんね。とりあえず帰るぞー」

レックウザを戻して家に帰ると、サトシが勢いよく跳んできた。

「ユウキツ、大変だ！ 博士達がっ」

「あー、バーネット博士な。今日はなんか変だよな。つて、博士達？」

サトシの後ろを見ると、ククイ博士が起きてきてる、が。

「ういーつす」

いつも通りの半裸に白衣ではなく、シャツを着てピツタリと前も閉めている。

「……ククイ博士、風邪？」

「うん？ いや、別に。さみいし」

なん……だと……？ 雪国ですら半裸の博士が寒いだと？

怠そうにしてるし、やつぱり風邪じゃないか？

「というかバーネット博士、なんか鳴ってるけど？」

「うーん？ ルザミーネからの呼び出しね。……めんどうくさい」

「行けよッ！ あーもうっ、ちやちやっと朝ご飯作るから、皆は支度しろッ」

朝ご飯を食べ終わっても、ぐうたらしている博士夫婦を外に叩き出してスクールに向かう。

「博士達、今日はなんか変だよな」

「やっぱり体調が悪いんじゃないか？」

サトシと雑談しながら教室に入ると、マーマネがグツタリしていた。

「アローラ。どうしたんだ？」

「ううっ。アロー、ラ。珍しくママが寝坊したんだ。それで朝ご飯を食べ損ねちゃって」

「ほーん。珍しい事もあるもんだな」

気の毒に感じたからオレンの実を一つマーマネにあげていたら、他の皆も登校してきた。

「おっ、アローラ」

『………アローラ』

挨拶しても、反応が薄い。どうしたんだ？

「ねえ聞いてよっ。お父さんったら、やる気が出ないとか言つて朝の仕込みを手伝ってくれなかったんだよっ」

「俺もだ。配達前に必死でポケモン達の世話をしてきた」

「おいおい。マオとカキの所は働かないとマズいだろうに。」

「一緒。お父さんも漁に出ないでゴロゴロしてた」

「ジェイムズの様子もおかしかったです」

スイレンとリーリエもか。流石に何かおかしい。

そこで、ククイ博士が白衣のポケットに手を入れて、猫背のまま怠そうに入ってきた。「ちーっす」

あんたは何処の不良だ。スカル団にでも入ったのか？

「ククイ博士？ えっと、アローラ……」

ほら、マオが引いてるぞ。

「あー、そだな。えーっと。今日は明後日の皆既日食の日に行われる、マナーロ祭りについて授業を……」と思つたが、各自話合つてくれ。んじや、後よろしくー」

そう言つて、博士は出て行つてしまった。

清々しい程の職務放棄だ。仕事しろ。

「マナーロ祭りって何だ？」

サトシの疑問に答えるように、カキが立ち上がつて黒板の前に立つ。

「仕方ない。マナーロ祭りについては、俺が説明しよう」

カキは、ごほんつと咳払いをしてゆっくりと説明していく。

「アローラで21年ぶりに見られる皆既日食。この日はアローラの4つの島の島キング・島クイーンがそれぞれの遺跡に集まつて、アローラ創造神話に語られる伝説のポケモンへ感謝の祈りを捧げるんだ！」

「マナーロって、どういう意味なんだ？」

「昔の言葉で『あなたとわたしは共に生きていきます』だな」

マナー口って、何かに似てるんだよなあ。あつ、

「なあカキ。マナー口とアローラって似てるけど、関係あるのか？」

「ああ。アローラには『分かち合う』って意味があるんだ。そして、二つ合わせると」

——分かち合って、共に生きていく。

へえ、アローラにはそういう意味もあつたんだな。

あれ、意外と授業してない？ もうククイ博士いらないんじゃない？ もうカキ先生でいいよ。

「はい、質問です。先程、話しに出てきたアローラ創造神話に語られる伝説のポケモンとは？」

ククイ博士のクビについて考えていると、リーリエが手を挙げていた。

「もしかして、かがやき様か？」

「なんだ、ユウキは知ってたのか？」

「少し前に、図書館で神話の本を借りて読んでな」

『これが、かがやき様口ト』

なんだか久々に見たような感じがするロトム画面には、本……そしてベベノムが描いたのと同じ絵が映し出された。

「かがやき様かー。どんなポケモンなんだろう」

サトシの呟きに、リーリエが反応する。

「あつ、そういえば。お母様が幼い頃、寝る前にお爺様がよく語っていたのが、かがやき様の伝説だったそうですよ。そして、同じようにわたくしやお兄様にも聞かせてくれました」

「へえーつ、どういう伝説なんだ?」

気になるのか、サトシは話を聞きたがっていた。

「えつとですね——」

——かがやき様。この地に現れ、溢れる光で世界を満たした。

光は不思議な力を持ち、我らがアローラは誕生した。

しかし、光を出し尽くしたかがやき様は、黒くなり果て深く永い眠りについた。

そこで太陽と月の化身が現れ、光を分け与えた。

眠りから覚めたかがやき様は再び光り輝き、空の果てへと飛んでいった。

「——以上です」

リーリエの語りに拍手喝采の中、サトシが何かに気付く。

「もしかして、太陽と月の化身ってソルロックとルナトーンかな!」

「いや、ソルガレオとルナアーラだろ」

なんで伝説のかがやき様にソルロックとルナトーンが並んでるんだよ。．．．．いや、宇宙から落ちてきたポケモンと言われているしワンチャン．．．．ないか。

「その話だと今もウルトラホールの先に、かがやき様がいるかもしれないのか？」
「おとぎ話でなければ、そうかもしれないですね」

それなら一度見てみたいな。まあ、アルセウスと同じような創造神話のポケモンだし、難しいだろうな！

．．．．いやアルセウスと会った事あるわ。もはやフラグにしか聞こえない。

お昼になり、机を囲むが、マーマネはグツタリしたままだ。

「マーマネ、まさか弁当無いのか？」

「うん。おしまいだよ、僕の人生」

生きるのを諦めないでっ。これを期にダイエットでもしたらどうだろうか、なんては言えないな。

「困った時はお互いさマツギョ、マンキー、マンタイン！」

悲報。俺の弟がおかしくなった件について。

「は？　なにそれ。余計にお腹が空くんですけど」

ほら、マーマネに真顔で返されてるぞ。恥ずかしくないの？

「サトシまでおかしくなったの？」

皆にまでジト目で指摘されて、流石のサトシも顔が真っ赤。

あれ？ サトシの照れ顔って何気にレアだな。嬉しくないけど。

「違うって！ アローラだよ、分かち合いつ」

そう言つてサトシは、サンドイッチを一つ、マーマネの机に置いた。

「んじや、俺も」

「あつ、あたしも！」

皆も一つずつオカズを置いていき、気付けば俺達の弁当よりも豪華だ。

「ううつ。皆、あ、り、か、どー」

後ろを見ると、トケデマルもピカチユウやベベノムに持たせておいた木の実を分けて

貰っていた。

『いただきます！』

皆が食べながら雑談している中、俺は外の様子が気になっていた。

「なあ。少し前から天気がおかしくないか？」

昼前から黒い雲が空を覆つて、今にも雨が降りそうな天気だ。

「確かに、どんどん暗くなつていきますね」

「嵐の前ぶれ」

スイレンが不穏な事を呟いた時、鐘が鳴った。

「ウルトラガーディアンズ出動要請!」

しかし、いつも号令を掛ける博士は居ない。

そこでサトシが黒板を動かした。

「俺がやるぜ!」

ゲートが反応し、基地への道が開いた。

ククイ博士じゃなくても起動出来るんだな……。

いつもの変身バンクという辱めを受け、基地へと到着。

しかし、モニターに映ったルザミーネさんの姿は衝撃だった。

『ああ、アローラ。ガーディアンズの皆……準備はいい?』

キリツとしているルザミーネさんは何処に行ったのか、今の姿は髪がボサボサのダメ

ウーマン。

「お、お母様! 人前では身嗜みをキチンとして下さいッ」

リリーエは恥ずかしそうだ。そりゃ、自分の親がだらしない所を皆に見られると恥ず

かしいよな。

『んー。至急、日輪の祭壇に行ってちょうだい。詳しい話はそこで合流してから……』

じゃ、後で」

——ズコーツ。

決め台詞を言わないという、予想外の事で皆は転けてしまった。

ラツキー！ 今日日は台詞を言わなくても——。

「ラツキー！ 俺やりたかつたんだッ。ウルトラガーディアンズ、ただちに出勤せよ！」

『ウルトラジャー！』

おのれサトシイ！

ライドポケモンを飛ばして、日輪の祭壇に到着。

「あつ、バーネット博士も来てる」

サトシの視線を辿ると、博士の他にもザオボーやビツケさんも来ていた。

「大人組は怠そうだな」

全員集合と思ったが、ルザミーネさんはあと一人来ると言う。

ルザミーネさんやビツケさんのボサ髪を眺めていたら、突然強風が吹いてきた。

「待たせたな」

上から降りて来たのは、オンバーンに乗ったグラジオ。

「お兄様!?! どうして?」

「シルヴァデイが怯えている。その原因がウルトラビーストだとしたら、相当に危険な奴だ」

リーリエとの会話中、グラジオの視線は俺の肩に止まった。

「まさか、ソイツはウルトラビーストか？」

「ああ。ベベノムって言うんだ」

グラジオの視線が鋭いな。シルヴァデイの怯えの原因かと思っているのか？

「ベベノムは危険か？」

「ああ、危険だな」

「っ、やはり！」

「飛ばしてくるペンキで勝手に落書きしたりするからな！」

まあ、最近はしないんだけど。

「………そうか」

あれ？ グラジオの視線が呆れに変わってる。

「お母様、今回のミッシェンは？」

「順を追って話すわ。………バーネットが」

仕事しろ。

「えーっと………昨日から、アローラ地方のウルトラオーラの数値が減少を続けて

いてね」

「そのせいかモグツ、私たちのやる気もはぐつ、急速にモグモグ……減少しているんです」

ビツケさんはビスケット食べながら説明すな！

そこで、ルザミーネさんがやつと口を開いた。

「でも、何故か子供とポケモンには影響が出ていないの」

なるほど。だから今日はククイ博士達がおかしいのか。

「調査の結果、ウルトラオーラ減少の原因はこの近くに開いた、小さなウルトラホールだと分かったわ」

「そこにもぐつ、ウルトラオーラがモグモグ、吸い込まれたんですねー」

ビツケはいい加減にしろ。

「もしかしたら、そういう性質を持ったウルトラビーストが、向こう側に居るのかもしれない。という訳で、ウルトラホールの位置を特定したいのだけど……」

「ザオボーのマシンで……ザオボー！」

端っここで携帯ゲームをしていたザオボーを、ビツケさんが怒鳴って命令した。……

ビツケさん恐れ。

「えつと。この空を覆っている雲が邪魔でして……そこで私が開発した雲粉碎マ

シンの出番ですね」

確かに、黒い雲が邪魔で太陽も月も見えない。

「今回のミツシヨンは、皆さんのZワザでこのマシンを起動させ、雲を取り払うことです」

Z技か………。

「今日の朝、特訓でZ技を放ったけど、威力が落ちてたんだけど」

バーネット博士は、持っているタブレットと動かし、画面を見せてくる。

「なるほどね。最近の研究では、Zパワーは、ウルトラオーラと密接な関係があると思われるわ」

それで上手くいかなかったのか。でも、それだと今回のミツシヨンは失敗か？

「んー。例えばZパワーが不足していても、五人くらいのZワザが集約すれば、マシンは起動しますよ。多分」

多分かよ。Z技が使えるのは、俺とサトシ。グラジオにカキとスイレンか。丁度五人だな。

それぞれマシンの前に立ち、Z技を発動させる。

「やるぜ！ スパーキングギガボルト！」

「墜ちろッ、ワールドエンドフォール！」

「燃え上がれッ、ダイナミックフルフレイムッ」

「スーパードラゴンアトルネード！」

「アルティメットドラゴンバーンッ！」

一つのZ技の威力は弱いが、五人分のエネルギーが束になって、絶大威力のZ技がマシンにぶつかった。

技を受け止めたマシンは、激しく揺れた後、エネルギーを空へと放出する。

「作戦、成功ね」

黒い雲が取り除かれ、夕日が顔を出した。

「じゃ、ウルトラホールの位置を調べるわね」

バーネット博士が離れた後、ルザミーネさんが遺跡の中へと俺達を手招く。

「調べている間、皆には見て欲しいモノがあるの」

遺跡内を進みながら、ルザミーネさんが説明する。

「つい最近、この日輪の祭壇の奥に新たな遺跡が発見されたのよ……これね」

奥へと進んだ先には、壁画があつた。

「かがやき様!？」

その両隣にはソルガレオとルナアラ。その下には、今朝ベベノムが描いたマークがあつた。

「この周りに書いてあるのは、古代文字よ。この文章を解明することで、伝説の謎が解けるかもしれないの」

他の壁画も眺めていると、スーツに付いている通信機が響いた。

『皆、今すぐ来て!』

急いで遺跡から出て、バーネット博士達の元に行くと、異様な雰囲気だった。

「どうしたの!？」

「ウルトラホールの位置が特定できたんだけど、穴がどんどん大きくなってるの」

「ウルトラホールが!? 位置は!？」

ルザミーネさんが戸惑い、バーネット博士が指さした先は、

「月?！」

ウルトラホールなんて無い——いや、開いてる!

「シルヴァアデイ!」

「レックウザ!」

ウルトラビーストに備え、グラジオがシルヴァアデイを出し、俺もレックウザを呼び出す。

すると、月の真ん中から広がりがだしたウルトラホールの中から、一体出てきた。あれ

は——、

『ルナアール!?』

皆がソルガレオに続いて、伝説のポケモンに会えた事に嬉しさと騒いでいるが、俺は不安の胸騒ぎが止まらない。

「あのルナアールが、ウルトラオーラを吸い取っていたという事でしょうか？」
違う。まだナニか、来るッ。

「なんだ、あれは……」

ルナアールが出た後、ウルトラホールを更に裂いて出てきたのは、黒いナニか。

『ベベツ……』

戦慄が走る叫びで飛ぶ黒いソイツを見て、ベベノムはギユツと俺の背中にしがみついた。

襲来する黒い塊。

それは——闇そのものだった。

再び・・・。

突然現れた漆黒のウルトラビースト。

ルナアールと争っている姿を眺めていると、バーネット博士が持っている電子機器から情報が判明する。

「どうやら、アローラ地方のウルトラオーラを吸い取っていたのは、あのウルトラビーストみたいね。今も吸い続けているわ」

戦いの中、ルナアールが劣勢に持ち込まれていた。

「原因がああ黒いウルトラビーストなら、ルナアールと一緒に戦ってちょうだい。ウルトラガーディアンズ、出動よ」

『ウルトラジャーツー!』

ライドポケモンのボーマンダに乗り、皆と一緒に戦場へと飛んでいく。

だが、二体のバトルは激しくて近づけないッ。

「仕方ない、ここから支援しよう。ボーマンダ、流星群!」

「ガブリアス、りゅうのほうはどう!」

「オンバーン、ぼくおんぼツ」

俺とサトシとグラジオの連携で、ウルトラビーストに攻撃を放つ。

「なにツ、避けられた!? 何処に逃げ——皆、後ろだツ」

警告が間に合わず、俺達はウルトラビーストの攻撃を受けてしまった……………。

「ぐツ、皆大丈夫か?」

「ああ平気——!? リーリエツ!」

グラジオの視線の先には、ライドポケモンのチルタリスから落下している姿があった。

俺もグラジオも、すぐに駆けつけようとするが……………間に合わ——。

「キヤーツ——え? ……ルナアーラ?」

悲鳴を上げて落下していたリーリエを、ルナアーラが受け止めてくれた。

「ルナアーラ、ありがとう……………」

ルナアーラを一撫でしたリーリエは、無事にチルタリスへと飛び移る。

「ありがとう、ルナアーラ!」

うん? ルナアーラの俺を見る目……………何処かで見たような。

「——!? また襲ってくるぞツ」

突進してきたウルトラビーストを避けて、スイレンを見る。

「動きを止めてくれ！」

「わかった。ハクリュー、冷凍ビームッ」

運良く凍らせる事が出来たが……すぐに動きだしてしまった。

「あれ？ ユウキ、あのウルトラビーストの後ろ姿、遺跡で見たマークに似てない？」

「なんだって？」

サトシが指さした所を見ると、確かに遺跡に……ベベノムが描いたマークに似ていた。

「かがやき様と何か関係あるのか？」

考えていると、ルナアールがウルトラビーストに掴まれてしまった。

「なんだ!? ルナアールから何か吸い取っているぞッ」

『ウルトラオーラロト！ ピピッ、それだけじゃなくて——ルナアールごと取り込むつもりロトーツ！』

取り込む……前のルザミーネさんみたいな事か。

「させないッ、ばくおんぱ！」

「待てッ、下手に攻撃するとルナアールがッ」

グラジオも俺と同じ事を思い出したのか、突撃する。

「クソッ、また避けられたッ」

「グラジオ危ないッ」

ウルトラビーストのターゲットになったのか、攻撃がグラジオへと迫る。

「ユウキ!」

攻撃して止めると余波で危ない。だから、グラジオの前へと咄嗟に飛び出る。

紫色の鋭利なエネルギーが迫り、思わず目を閉じ――。

「あれ? 攻撃が――ルナアラー!」

離れた所にいた筈のルナアラーが、俺の前に居た。

恐らく、先程の戦いで使っていた『ゴーストドライブ』だろう。

攻撃が当たった瞬間、ルナアラーは俺へと振り返った。

その目は、やっぱり既視感があった。

瞬間――攻撃が当たり、ルナアラーは飛ばされていく。

「ルナアラーッ!」

飛ばされたルナアラーは、再びウルトラビーストに掴まれた。

そして、ウルトラビーストの体はバラバラになっていき、鎧のようにルナアラーへと

取り憑いていく。

「取り込まれてしまったのか・・・? どうすれば――なんだ!」

ウルトラビーストと合体したルナアラーは、雄叫びを上げて俺達を威嚇する。

どうやってルナアーラを解放するか思考していると、突如空から電磁ネットが降ってきた。

くそッ、次から次へと何なんだ！

電磁ネットはルナアーラを捕まえ、引き上げられていく。

その先には、さっきまで無かった飛行船が見えた。

「ルナアーラが連れていかれる！　いくぞガブリアスッ」

「サトシ待て！」

その時、捕らわれてたルナアーラは自力でネットを破った。

だが、破られたネットは助けに向かったサトシへと落ちていく。

「ガブリアスッ、避け——」

強磁場が発生しているネットから、サトシを守ろうとするが、視線の端にウルトラ

ホールが開くのが見えた。

「あれは——」

「ソルガレオ！」

サトシを守ったのは、駆けつけたソルガレオだった。

「ソルガレオッ、会いたかったぞお！」

電磁ネットを破壊したソルガレオに、サトシは近づいて頬を擦り寄せた。

「今まで何処に行つてたんだ——おっとつと」

ソルガレオとサトシに、ルナアークの攻撃が飛ばされた。

「ルナアークを助けるのに協力してくれ、ソルガレオ」

サトシの言葉に、ソルガレオは舌で舐める事で承を示す。

ルナアークとソルガレオが対面し、同時に攻撃を放った。

お互いの技は相殺されたが、ソルガレオがすかさず『メテオドライブ』で突進していく。

まともに受けたのか、ルナアークから黒いウルトラビーストが剥がれていった。

「やったぜソルガレオ！」

「ああ。だが、ルナアークが……………」

ルナアークは撃墜され、下の浜辺に衝突した。

「黒いウルトラビーストは何処に行つたんでしようか？」

「バラバラになって海に落ちた」

「とりあえず、落とされたルナアークの様子を見に行こう」

先に行つたソルガレオを追つて、俺達も向かう。

「あれ、飛行船がまた出てきたよ」

マオの言葉に振り返ると、消えた筈の飛行船が姿を現した。

「——つて、また電磁ネット飛ばした！」

飛んでいったネットはソルガレオとルナアールを纏めて捕まえた。

「しつこい奴らだなッ。ボーマンダ、流星群！」

ネットを狙うとソルガレオ達に被弾する恐れがあるので、飛行船そのものを狙う。命中した飛行船は激しく揺れて、電磁ネットを落とした。

もう一度当てようとするが、飛行船が徐々に消えていく。光学迷彩か？

「また出てくるだろう。油断は出来ない——」

「黒いウルトラビーストです！」

海から飛沫が上がり、バラバラになった筈のウルトラビーストがソルガレオへと迫った。

「まさか、今度はソルガレオをッ」

予想通り、ソルガレオを黒い鎧で包んだ。

そして、ウルトラホールを出現させて、この場から去って行く。

「ソルガレオを返せーッ！」

サトシが追うが、間に合わずウルトラホールが閉じてしまった。

「ソルガレオ……」

「……サトシ、今はルナアールを」

「ああ・・・・・・・・・・」

ソルガレオはきつと無事だろう。

そう信じて、ルナアールの元へ降りていく。

「ルナアールは？」

「あつ、お母様。回復の薬を与えているのですが、ぐったりしたままで・・・・・・・・・・」

ルナアールの介抱をしていると、身嗜みをキチンとしているルザミーネさん達がヘリ

コプターでやってきた。

「そう。緊急搬送が必要ね」

「一番近いのは、ポケモンスクールの地下施設よ」

バーネット博士の指示で、ルナアールはヘリコプターで丁重に運ばれていく。

ポケモンスクールの地下に運ばれたルナアールは、精密機械に繋がれて治療されていた。

静寂な部屋の中、機械の音だけがなる空間で、俺達は固唾を呑んでルナアールを見守る。

「・・・・・・・・母さん、あの黒いウルトラビーストは一体なんだ？」

「分からない。とりあえず私達は『UB・BLACK』と名付けたわ」

UB・BLACK。伝説のポケモンを取り込む、黒いウルトラビースト。何故ソルガレオとルナアールを取り込んだんだ？

その時、新たに人が部屋に入ってきた。

「よお、みんな。怪我は無いか？」

「ククイ博士！」

あれ？ 半裸の白衣に戻ってる。

「ククイ博士、元に戻ったの？」

「ああ。どんより曇っていた心が、日本晴れのように晴れやかだぜ！」

「そういえば、お母様達も」

「皮肉な話、UB・BLACKがソルガレオのウルトラオーラを吸収しているおかげで大丈夫になったみたいなの」

会話をしていると、治療が終わったのかバーネット博士が歩いて来る。

「ルナアールは？」

俺の切羽詰まった顔を見て、安心させようとしたのか、ニツコリと笑って言った。

「大丈夫。あとは体力の回復を待つだけよ」

それを聞いて、俺達は安堵の息を漏らした。

「ルザミーネさん。遺跡にあった壁画にUB:BLACKと似ているマークがありましたよね」

「そうね。きつとかがやき様と深い関係があるんでしょうね」

「ただ、疑問がある。」

「実は、その壁画と同じ絵をベベノムが描いた事があるんです」

「なんですって?」

「皆の視線は俺の肩に乗っているベベノムに集まった。」

「ベベノムはコクリと頷くと、俺達の前へ浮いて、」

『ベベツ、ベベツ。ベベベベ!』

「説明しているんだろうが、何言ってるのか分からん……。」

「体全体を使って何か言ってるベベノムを眺めていると、ザオボーがやってきた。」

「あの怪しい飛行船のデータが照合出来ました。正体は、カントーを中心に活動している『ロケット団』その精鋭部隊である『マトリ・マトリックス』です」

「マトリ・マトリックス? いつも三人組じゃないのか。」

「そう。では、UB:BLACKなども含めて対策を考えましょう」

「そう言つて、ルザミーネさん達は部屋を出て行った。」

「ユウキ? 難しい顔して、どうしたんですか?」

「ん、いや。ちよつと気になる事がな」

ルナアールが元気になったら確かめたい事がある。

だから、確かめる為の『モノ』をポケットに入れておこう。

「ルナアール、早く元気にならないかなあ。それにソルガレオ、大丈夫かなあ」

ふと、サトシが不安な表情で呟いた。

呟きを聞いたグラジオが、サトシに顔を向ける。

「ソルガレオは、前に母さんを助けてくれた。ルナアールもリーリエを助けてくれた。

だから、今度は俺が助ける」

「俺達、な。グラジオ」

「……そうだな」

俺とグラジオの会話で元気が出たのか、サトシは腕を振り上げた。

「ああッ、絶対助ける！俺達の全力で！」

『おーッ！』

俺達も腕を突き上げて、気合を入れる。

すると、Zリングが淡く光った。

「なんだ!？」

俺だけじゃなくて、リングを付けている全員のも光っていた。

「ルナアーラの元に光が・・・。」

太陽のような淡いオレンジの光がルナアーラへ降り注ぐ。

そして、眠っていたルナアーラが目を覚ました。

「起き上がりました！」

ルナアーラは元気になったのか、翼を大きく広げて鳴き声を上げた。

その声は、治療室のガラスを激しく揺さぶり――。

「やばッ、皆さがれ！」

瞬間、ガラスをぶち破った。あつぶなッ！

「・・・・・・ルナアーラ?」

治療室から出てきたルナアーラは俺の前へと飛んできて、何かをねだるように顔を寄せた。

「これか・・・・・・?」

ポケットから差し出したのは、ポケマメ。

「美味しそうに食べてますね。・・・・・・あれ、何処かで?」

食べている表情を見て、リーリエも既視感を覚えたみたいだ。

そう、このルナアーラは――。

「やっぱり・・・・・・こすも、なのか?」

『え!?!』

あの時、ソルガレオと一緒に消えたこすも。

面影は見えないが、微かなナニかを感じているんだ。

疑問形で問うたが、俺は確信を持ってルナアールを見つめる。

そして——ルナアールは顔を擦り寄せてきて、答えを示した。

「サヨナラくらい言っても良かっただろう、コイツめ」

俺は、久しぶりの再開にルナアールの頭をキツく抱きしめて、あの時の不満をぶつけた。